

公開 令和 2 年 4 月 1 日  
更新 令和 2 年 8 月 31 日



---

# 教員研究業績

---

芦屋大学



臨床教育学部

教育学科

比嘉 悟	学長 教授	1
杉島 威一郎	学部長 教授	7
青木 敦英	教授 学科主任	8
大石 徹	教授	22
三羽 光彦	教授	29
三浦 正樹	教授	38
伊藤 武徳	准教授	42
金 相煥	准教授	43
西光 哲治	准教授	45
石川 峻	講師	48
本橋 香	講師	55
武田 光平	助教	63
別當 和香	助教	64

臨床教育学部

児童教育学科

林 知代	教授	66
渡 康彦	教授	72
石田 愛子	准教授 学科主任	75
大江 まゆ子	准教授	79
大谷 彰子	准教授	91
竹安 知枝	准教授	100
丹下 秀夫	准教授	117
中村 整七	准教授	121
福山 恵美子	准教授	124
安藝 雅美	講師	128

経営教育学部  
経営教育学科

西光 晴彦	副学長 教授	130
藤本 光司	教授 学部長	135
齋藤 治	教授	144
瀧 巖	教授	146
中村 宏敏	教授	148
森下 博行	教授	152
盛谷 亨	教授	154
池田 聡	准教授	158
井上 徹	准教授	163
成瀬 優享	講師	166
林 泰子	講師	169
若杉 祥太	講師	174
井村 薫子	助教	223

① 教育研究業績書				
教育研究業績書				
氏名 比嘉 悟				
研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
<b>【著書】</b> 1 優しいスポーツ医学の基礎知識	共	平成28年6月	嵯峨野書院	スポーツ選手、トレーナー、コーチなどに分かりやすく解釈できるスポーツの医学の基礎知識で高校生でも使用できる。
2 人間力を育てる～スポーツと教育を貫く芯	単	平成28年7月	学校法人日本体育大学	筆者がスポーツと教育で学んだことを、体験談を中心に若い人向けにまとめた本。 指導者と選手が生き生き活動できるために心を中心にまとめたトレーニング方法
3 指導者と生徒が光り輝く心のトレーニング	単	平成26年11月	株式会社 ERP	将来、体育教員、スポーツ指導を目指す学生や現役の若い指導者に向けた指導書。内容は、大阪府の公立高校で19年間、体育教員、部活動指導者の経験をベースに全国的に活躍した指導者や研修で学んだことを紹介。
<b>【講演】</b> 1「学校生活が10倍向上する心のトレーニング」		平成27年4月	あべの翔学高等学校	勉強だけでなく、学校行事、部活動などを通して、人間性を磨くことが学校生活を楽しくさせる秘訣である。他者を認め支え合い協力して生きることによって人生が楽しくなることを高校生向けに分かりやすくトレーニングと称して紹介する。
2「芦屋大学のスポーツ実践について」		成27年5月	大阪弁護士会館	芦屋大学「スポーツ教育センター室長」としての経験をまとめ、スポーツを通して取り組んだ学生募集活動や教職員の意識改革についてまとめた。
3「競技力が10倍向上する心のトレーニング」		平成27年6月	大阪府立摂津高等学校	スポーツ選手や体育教員を目指す体育科の生徒約80名に講演。夢を実現する方法を有名スポーツ選手などの事例を交え、分かりやすく解説。体調や生活面を整え、精神を鍛えていくことの重要性を伝える。
4「指導者も生徒も光り輝く心のトレーニング」		平成27年6月	堺市教員研修会	46年間の教育実践を中心に解説。自身の教育哲学を持つこと、人間力を磨く事の重要性、またそ

5「指導力が10倍向上する心のトレーニング」	平成 27 年 7 月	日本体育大学東京都同窓会	の向上方法について実体験をもとに説明する。
6「65歳で学んだこと」	平成 27 年 8 月	大阪府立和泉鳥取高等学校	保健体育教員時代にバスケットボール部を19年間指導した実践を中心に説明。指導方法はもとより指導者自身が研鑽を積み人間性を向上させることの重要性を伝える。
7「部活動は人を育て、人をつなぎ、絆を深める」	平成 28 年 1 月	石川県教育委員会研修会	(4と同様のため省略)
8「学校生活が光り輝く心のトレーニング」	平成 28 年 4 月	大阪府立北千里高等学校	スポーツは人を育てる宝庫である。学校教育の一環と位置づけられている「部活動」を通して、学生たちが得る楽しさや喜びだけでなく、社会へ出ていく準備として必要な人間関係の形成など、多くを学ぶ。人間力の基礎を固める活動であることを自身の経験を交え紹介する指導者に向けた講演。
9「魅力あるリーダーになるための心のトレーニング」	平成 28 年 5 月	松原市教育委員会校長研修	(1と同様のため省略)
10「魅力あるリーダーになるための心のトレーニング」	平成 28 年 8 月	金光藤桐蔭高等学校	自身の校長時代の経験を交え、学校づくりの実践方法を紹介。教員として重要な、必要な資質についてまとめる。自身の教育哲学を持つこと、人間力を磨く事の重要性、またその向上方法について実体験をもとに説明する。
11「スポーツは人を育て、人をつなぎ、人の絆を深める」	平成 28 年 9 月	大阪府スポーツ推進委員研修	(9と同様のため省略)
2「魅力あるリーダーになるための心のトレーニング」	成 28 年 10 月	和歌山県校長研究協議会	スポーツは人を育てる宝庫である。「スポーツ」を通して、社会へ出ていく準備として必要な人間関係の形成など、多くを学ぶ。人間力の基礎を固める活動であることを自身の部活動指導経験などを交え紹介する指導者に向けた講演。
13「人を育てる。謙虚に心を磨け」	平成 28 年 12 月	大阪府西成高等学校フェスタ	(9と同様のため省略)
14「競技力が10倍向上する心のトレーニング」	平成 29 年 6 月	大阪府立摂津高等学校	自身の著書「謙虚に、常に心を磨く」という1冊の本にまとめたものを中心に講演を展開。指導者や教員としての人間力向上や教養を身につける方法などを具体的に紹介する。
			(3と同様のため省略)

15「学生が光輝くための心のトレーニング」	平成 29 年 6 月	大阪歯科大学衛生士研修会	46 年間の教育実践を中心に解説。教員としての原点を教えてくれた恩師との出会いや、教員となり、変革になった 3 つの出来事を紹介。見える学力・見えない学力とし、見えない学力(コミュニケーション能力、協調性など)向上の重要性、そのための自身の人間力や教育方法のブラッシュアップなどを細かく解説。
16「66 歳で学んだこと」	平成 29 年 7 月	大阪市立天王寺商業高等学校同窓会	これまで、スポーツと教育に携わってきた自身の教員生活を振り返る。その中での、人間力の重要性とスポーツ活動をする中で得た気づき、大きく影響を受けたエピソードなどをまとめ講演する。
17「未来を切り開く人間力を育てるースポーツと教育を貫く芯ー」	平成 29 年 10 月	日本教育情報学会	これまで、スポーツと教育に携わってきた自身の教員生活を振り返る。その中での、人間力の重要性とスポーツ活動をする中で得た気づき、大きく影響を受けたエピソードなどをまとめ講演する。学長という立場からスポーツの活性化を通して得たことなどを伝える。
18「魅力あるリーダーになるための心のトレーニング」	平成 29 年 10 月	大阪府公立小中学校生徒指導協議会	(9 と同様のため省略)
19「魅力あるリーダーになるための心のトレーニング」	平成 29 年 12 月	和歌山県校長会	(9 と同様のため省略)
20「素敵な先生になるための心のトレーニング」	平成 30 年 5 月	大阪府小中高校・支援学校 10 年目研修	(9 と同様のため省略)
21「生徒指導上の課題について、生徒支援の在り方から生徒と先生が光り輝く 心のトレーニング」	平成 30 年 8 月	大阪府生徒指導部長研修会	(4 と同様のため省略)
22「素敵なリーダーになるための心のトレーニング」	平成 30 年 12 月	大阪府校長・教頭研修会	(9 と同様のため省略)
23「素敵な先生になるための心のトレーニング」	平成 31 年 1 月	大阪府立泉尾・大正柏陵高等学校研修会	(9 と同様のため省略)
24「部活動は人を育て、人をつなぎ、人の絆を深める」	平成 31 年 2 月	全国なぎなた連盟指導者講習会	(7 と同様のため省略)
25「今求められる人間力とは」	令和元年 6 月	芦屋市芦友会小例会	人間力の定義、内閣府「人間力戦略研究会」や経済産業省「社会人基礎力」などについての見解を示した。また大学においての人間力形成について、その実践方法などを説明。人間力の重要性を伝える。

26「学校生活が光輝く心のトレーニング」	令和元年 6 月	大阪府立摂津高等学校	(3と同様のため省略)
27「魅力あるリーダーになるための心のトレーニング」	令和元年 9 月	関西金光学園	(9と同様のため省略)
28「学校生活が10倍楽しくなる心のトレーニング」	令和元年 10 月	大阪府立久米田高等学校	(1と同様のため省略)
29「学校生活が10倍楽しくなる心のトレーニング」	令和元年 10 月	大阪府立長吉高等学校	(1と同様のため省略)
30「素敵先生になるための心のトレーニング」	令和元年 10 月	大阪府立懐風館高等学校	(9と同様のため省略)
31「魅力あるリーダーになるための心のトレーニング」	令和元年 10 月	大阪府校長教頭研修会	(9と同様のため省略)
<b>【雑誌・専門誌掲載】</b>			
1「スポーツは人を育てる宝庫」	平成 27 年 9 月	教育 PRO	教育専門雑誌「教育 PRO」にて「スポーツと教育」コラム連載を担当。人間力やスポーツの観点から教育への関わり方、また人間力を磨くことによる教育的成果などを自身の経験を踏まえ独自の切り口にて解説している。
2「部活動で生徒から学んだこと」	平成 27 年 11 月	教育 PRO	
3「1冊の本で人生観が変わった T 君」	平成 28 年 1 月	教育 PRO	
4「一流指導者は教育者である」	平成 28 年 5 月	教育 PRO	
5「超一流の指導者井村雅代先生」～今日本で一番輝いている指導者」	平成 28 年 7 月	教育 PRO	
6「宇宙のシンクロコーチ井村先生」ありがとうございました	平成 28 年 9 月	教育 PRO	
7「部活動は、日本の教育を底辺から支えている文化遺産」	平成 28 年 11 月	教育 PRO	
8「やればできる小さな投手、軟式野球からプロ巨人軍へ」	平成 29 年 1 月	教育 PRO	
9「キャプテン会議で人間力を磨く」	平成 29 年 4 月	教育 PRO	
10「指導者は選手の眠っている才能を引き出して育てることが必要」	平成 29 年 6 月	教育 PRO	

11「部活動の指導者は、教員としての資質を磨く一助となる	平成 29 年 10 月	教育 PRO	教育専門雑誌「教育 PRO」にて「スポーツと教育」コラム連載を担当。人間力やスポーツの観点から教育への関わり方、また人間力を磨くことによる教育的成果などを自身の経験を踏まえ独自の切り口にて解説している。	
12「スポーツ指導者は、西宮ストークスのコーチに学べ」	平成 29 年 12 月	教育 PRO		
13「本物のスポーツドクターと出会って学んでいること」	平成 30 年 2 月	教育 PRO		
14「読書がスポーツの向上につながることをおぼろげながら掴んだ高校時代」	平成 30 年 4 月	教育 PRO		
15「恩返しを超える使命～網走番外地に込められたもの」	平成 30 年 6 月	教育 PRO		
16「私に、命と平和の尊さを教えてくれた、1冊の本」	平成 30 年 6 月	教育 PRO		
17「私の人生の危機を救ってくれた、読書」	平成 30 年 8 月	教育 PRO		
18「本当の部活動とは？」	平成 30 年 10 月	教育 PRO		
19「部活動で人間力養成を実証してくれる卒業生たち」	平成 30 年 12 月	教育 PRO		
20「スポーツを通じて知った言葉の深い意味」	平成 31 年 2 月	教育 PRO		
21「部活動を続けるメリットとその成果」	平成 31 年 4 月	教育 PRO		
22「言葉のいらないコミュニケーション」	令和元年 6 月	教育 PRO		
23「スポーツの持つ大きな力」	令和元年 8 月	教育 PRO		
24「最近のバスケットボールの界人気の裏側に迫る」	令和元年 10 月	教育 PRO		
25「広がる日本人スポーツ選手の台頭」	令和元年 12 月	教育 PRO		
26「麗しき師弟愛」	令和 2 年 2 月	教育 PRO		
27「部活動改革の鍵は？」	令和 2 年 2 月	教育 PRO		
1「部活動は、人を育て、人をつなぎ、人との絆を深める宝庫	平成 27 年 10 月	コンパスマガジン		3回にわたり人間学コラムに連載 これまでの教員人生を通し、自らの考えを変えるような、また、それらを通して確固となった教育論についてをまとめた

<p>2「私の人生観・バスケットボール観を変えた、ある指導者の一言」</p>		<p>平成 28 年 1 月</p>	<p>コンパスマガジン</p>	<p>3回にわたり人間学コラムに連載 これまでの教員人生を通し、自らの考えを変えるような、また、それらを通して確固となった教育論についてをまとめた</p>
<p>3「一人の生徒の出逢いが、私の指導方法を変えさせてくれた」</p>		<p>平成 28 年 7 月</p>	<p>コンパスマガジン</p>	
<p>「ぶれない心」</p>		<p>平成元年 7 月</p>	<p>月間武道</p>	<p>「心技体、人を育てる」をテーマにした専門誌。自らの座右の銘を掲げ人間力を磨く方法や体験談をまとめた。</p>
<p>「教員の資質、不祥事を憂う」</p>		<p>令和元年 12 月</p>	<p>月間私学経営</p>	<p>教員の資質などを問う不祥事が目立つ昨今の状況を取り上げ、本質的な「人間力」の重要性と磨き方、教員養成の必要性などをまとめた。</p>

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 杉島 威一郎						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ページ 数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
日本史概論 I 日本文化 史研究 宗教学 社会概論	【著書】 1.和田神社と和田岬	単	平成27年7月	和田神社	131ページ	本書は和田神社小史、和田岬の歴史と信仰、和田岬を訪れた人々の3章からなる。和田神社小史では和田神社が鎮座した年の推定、江戸時代の氏子論争、近代における神社の変容について考察した。和田岬の歴史と信仰と和田岬を訪れた人々では一般読者にわかりやすく郷土の歴史を紹介した。
日本史概論 I 日本文化 史研究 宗教学 社会概論	2(歴史コラム) 神戸市における市民祭の成立と展開	単	平成25年3月	都市政策	2ページ	公益財団法人神戸都市問題研究所に依頼を受け、研究所の季刊誌である『都市政策』に毎号連載されている歴史コラムに神戸市の市民祭について執筆した。昭和八年に誕生した神戸市の市民祭が戦前、戦中、戦後とどのような変遷を辿ってきたか要点をまとめた。

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
【その他(講演や発表)】 1 講演 「みなとの祭」について	単	平成25年9月	都市問題研究所	都市問題研究所が行っている定例の歴史研究会で、「みなとの祭」を中心に神戸市の市民祭や博覧会について時代背景を踏まえつつ、研究発表を行った。特に戦前の郷土意識の高まりと市民祭の誕生が密接な関係を持つことについて、指摘した。
2【研究発表】 神道にみられる渡来文化の影響～シルクロードの終着点、日本の視点から～	単	平成29年11月	関西学院大学シルクロード研究センター 国際シンポジウム	古代の神道において、主にシルクロードを経由して伝えられた文化に着目し発表した。日本独自の宗教と考えられる神道が成立期において外来文化の影響を受けていたことを指摘した。

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 青木 敦英					
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	概 要
中等教科教育 法Ⅰ【保健体 育】	(学術論文) 1. 保健体育科教 育実習生の不 安と教育実習 前後の教員志 望の変化につ いて	単	平成29年1月	芦屋大学論叢 (No.66, 1-6)	芦屋大学の保健体育科での教育実習生の不安について調査するとともに、教育実習が教員志望に与える影響について調査し、体育教員養成課程での課題について検討した。その結果、「授業実践力」が最も大きな不安因子であり、授業内容に関する不安が多数を占めた。また、教育実習前後の教員志望の変化では実習後に有意に高くなっており、66.7%の学生の教員志望率が増加していた。今後の学内での指導において、教育実習生の不安を出来るだけ早期に払拭できる指導を行うとともに、「授業実践力」を高めるための指導を充実させ、教職の意欲の高い学生を教育実習に参加させることが、教員採用試験の合格者を輩出するために必要であることを論じた。
	2. 保健体育科での教育実習の経験が教師の資質・能力と教員志望度に及ぼす影響	単	令和1年7月	芦屋大学論叢 (No.71, 1-8)	本研究は、芦屋大学の保健体育科で教育実習を経験した学生を対象に、教師に必要な資質・能力に関する自信尺度の自己評価アンケート(自己評価得点)と、教育実習前後の教員志望の度合いの変化について調査し、教育実習の経験が教師の資質・能力の自己評価と教員志望にどのように影響を及ぼしているか検討を行った。その結果、教育実習前後の教員志望度の変化について明らかな変化はみられなかった。しかし自己評価得点と教育実習の前後で教員志望度が変化した割合(変化率)には、有意な正の相関関係が認められた。教育実習前後で志望度が維持または向上した学生と、教育実習前後で志望度が低下した学生では、教育実習で身につけた教員としての資質・能力に違いがあることが示唆された。

	3. 大学の特徴を生かした教員の就職支援に関する一考察 — 芦屋大学での教員採用試験対策をもとに —	共	令和1年7月	芦屋大学論叢 (No.71, 21-30)	本研究においては、小規模な教員養成系大学における教採受験学生の傾向・実態を踏まえ、受験に向けた効果的な支援方策の在り方に着目した。①受験生が集える年間通した受験対策講座の設定、②講座を継続受講できるための有効な支援方策、③講座受講生の力を高める講師団編成の在り方について、それぞれ仮説を立て3年間にわたって実践研究し、年度ごとの受験結果を踏まえて考察した。受験生との協議をもとに、ニーズを踏まえて各対策講座を設定し実施してきたことや、本学の少人数教育の成果を生かした受験生ごとに対応する指導・支援の継続、学内教員を核にした講師団編成等が受験対策に有用であるという重要な手掛かりを得ることができた。 (共著者 笠原清次, 竹安知枝, 盛谷亨, 青木敦英, 若杉祥太, 石川峻, 辻尚士, 雄倉春来) (※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能)
中等教科教育 法Ⅲ【保健体育】	(学術論文) 1. 保健体育科教育実習生の不安と教育実習前後の教員志望の変化について  2. 保健体育科での教育実習の経験が教師の資質・能力と教員志望度に及ぼす影響  3. 大学の特徴を生かした教員の就職支援に関する一考察 — 芦屋大学での教員採用試験対策をもとに —	単  単  共	平成29年1月  令和1年7月  令和1年7月	芦屋大学論叢 (No.66, 1-6)  芦屋大学論叢 (No.71, 1-8)  芦屋大学論叢 (No.71, 21-30)	(再掲のため、略)  (再掲のため、略)  (再掲のため、略)
運動生理学	(学術論文) 1. 肘屈曲運動における力—速度関係からみた両側性および	共	平成24年12月	日本運動・スポーツ科学学会 運動とスポーツの科学	本研究は、これまで筋力を中心にみられた両側性機能低下(Bilateral deficit: BLD)と呼ばれる現象が、力—速度関係および力—パワー関係についても出現

	び一側性の筋 パワー特性			(No.18, 9- 15)	<p>するか否かについて、一般男子大学生 13 名を対象に検討した。その結果、力-速度曲線および力-パワー曲線において、一側条件が両側条件よりも高い値を示し、とくに軽い負荷条件において速度に有意な差が認められ、力-速度-パワー関係においても BLD が出現することが確認された。</p> <p>(共著者 <u>青木敦英</u>, 荒木香織, 田路秀樹)</p> <p>(※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能)</p>
2.	女子中学生における音響的骨評価値による骨密度と運動習慣との関連について	単	平成 27 年 1 月	芦屋大学論叢 (No.62, 1-7)	<p>女子中学生を対象に、安全かつ簡易に行える音響的骨評価値 (OSI) を用いて、思春期における運動習慣および運動内容が骨の形成に与える影響について検討を行った。その結果、OSI は学年が進むにつれ大きくなる傾向を示し、2 年生と 3 年生で運動部に所属している生徒が運動部に所属していない生徒よりも OSI は有意に高値を示した。また、運動種目と OSI の関係については、跳躍運動を主体とした群において体育以外で運動を行わない群よりも有意に高い OSI を示し、跳躍運動を主体としたスポーツが骨形成に好影響を与えている可能性が示唆された。</p>
3.	中学生陸上競技選手の指導に関する一考察：無酸素パワーと脚筋力の分析から	共	平成 27 年 3 月	兵庫県立大環境人間学部研究報告 (No.17, 57-67)	<p>中学生陸上競技選手を対象に競技力向上を図るための有効な指導のあり方を検討することを目的に、無酸素パワーと脚筋力の分析を行った。体重当たり等速性筋力については女子の伸展が高校生のトップクラスに近い値を示したが、屈曲は低く、男子は伸展、屈曲ともに高校生のトップクラスより低いことが明らかになり、今後の指導の方向性について示唆することができた。</p> <p>(共著者 田路秀樹, <u>青木敦英</u>, 福田厚治)</p> <p>(※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能)</p>
4.	高齢者の肘屈曲運動による力-速度-パワー関係からみた両側性機能低下	共	平成 27 年 8 月	兵庫県体育スポーツ科学学会 体育・スポーツ科学 (No.24, 11-17)	<p>本研究は、荷重法を用いた力-速度-パワー関係から、高齢者の両側性機能低下 (BLD) について検討を行った。その結果、力-速度曲線および力-パワー曲線のいずれも一側条件が</p>

	<p>5. 肘屈曲運動における一側性と両側性の筋力トレーニングが力-速度-パワー関係に及ぼす影響</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 4 月</p>	<p>トレーニング科学(No.29 第3巻, 255-265)</p>	<p>両側条件よりも高い値を示し、とくに速い収縮速度条件において顕著であった。また、筋パワーにおいてとくに BLD が大きくなることから、高齢者においても明らかな BLD が出現することを明らかにした。 (共著者 青木敦英, 田路秀樹) (※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能)</p> <p>本研究は、肘関節屈曲を対象として一側性と両側性の筋力トレーニングを課し、力-速度-パワー関係からトレーニング効果について検討した。被験者は男子大学生 13 名である。トレーニングは一側群 (n=6) がダンベル・カールを、両側群 (n=7) がバーベル・カールを用い、負荷は最大挙上重量の 80% で、できるだけ速い収縮で 1 日 10 回 3 セット、週 3 日の頻度で 8 週間行わせた。その結果、一側性トレーニングにより一側の最大筋力 (Fmax) と最大パワーが、両側性トレーニングにより両側の Fmax が有意に増加した。また、一側性トレーニングの一側にのみ肘関節屈曲速度に有意な増加がみられた。以上から、一側性のパワー改善という点から片側ずつの一側性トレーニングの方が、両側性のトレーニングよりも効果的であることが示唆された。 (共著者 青木敦英, 田路秀樹) (※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能)</p>
	<p>6. ジュニアバレーボール選手の栄養素等摂取状況について</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 10 月</p>	<p>芦屋大学論叢 (No.70, 51-56)</p>	<p>本研究は兵庫県内の小学校 5 年生から中学校 1 年生までのバレーボールクラブチームに所属する女子選手 15 名を対象として、簡易自記式食事歴法質問票 (BDHQ15y) を用いて、栄養素等の摂取量について調査を行い、今後の栄養指導の課題を模索した。その結果、BDHQ15y から得られた栄養素の 1 日当たりの摂取状況を、平成 27 年国民健康・栄養調査結果の栄養素等摂取量 7-14 歳 (女性) の平均値 (全国値) と比較したところ、1 項目 (ビタミン B1) を除いて全国値を上回っており、栄養摂取状況は比較的良好であった。しかし、バレーボールの競技特性や活動量からみると、栄養素摂取</p>

	7. 男性高齢者における肘関節屈曲運動の一側性と両側性のトレーニングが力-速度-パワー関係に及ぼす影響	共	令和1年6月	教育医学 (No.64, 283-292)	<p>状況は必ずしも適正な摂取量とはいえない可能性が示唆された。 (共著者 青木敦英, 鈴木麻希) (※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能)</p> <p>本研究は、高齢者を対象にトレーニング条件の違いが肘関節屈曲運動のパワー特性に与える効果について明らかにすることを目的に、ダンベル・カールで片側ずつ交互にトレーニングを行う群(一側群:n=4)と、バーベル・カールで両側同時にトレーニングを行う群(両側群:n=5)の2群に、80%1RM(最大挙上重量)の負荷で7~10回の肘関節屈曲運動を1日3セット、週3日の頻度で8週間トレーニングを実施させた。その結果、1RM や力-速度関係からみたパワー発揮において一側群が両側群と比較して高いトレーニング効果が認められ、高齢者にとって一側条件でトレーニングを行うことが筋力および筋パワーを高めるのに効果的であることが示唆された。 (共著者 青木敦英, 田路秀樹) (※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能)</p>
	8. 異なる動作速度の組み合わせによる等速性膝伸展トレーニングの効果と性差	共	令和1年12月	体育学研究 (No.64, 603-612)	<p>本研究は、異なる動作速度の組み合わせによる等速性膝伸展トレーニングを、特別なトレーニングを行っていない男女大学生に行わせ、トレーニング効果の性差について検討を行った。その結果、体重当たりの最大トルクの増加率については男女で有意な差は認められなかったが、女性では中高速でトレーニングを行った群において最大トルクの増加率が有意に高かった。これらのことから、女子においては高速度を組み合わせたトレーニングが有効であるという性差がみられることが示唆された。 (共著者 田路秀樹, 溝畑潤, 青木敦英, 福田厚治) (※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能)</p>

体力測定と評価	(学術論文)				
	1. 肘屈曲運動における力ー速度関係からみた両側性および一側性の筋パワー特性	共	平成 24 年 12 月	日本運動・スポーツ科学学会 運動とスポーツの科学 (No.18, 9-15)	(再掲のため、略)
	2. 女子中学生における音響的骨評価値による骨密度と運動習慣との関連について	単	平成 27 年 1 月	芦屋大学論叢 (No.62, 1-7)	(再掲のため、略)
	3. 中学生陸上競技選手の指導に関する一考察：無酸素パワーと脚筋力の分析から	共	平成 27 年 3 月	兵庫県立大環境人間学部研究報告 (No.17, 57-67)	(再掲のため、略)
	4. 高齢者の肘屈曲運動による力ー速度ーパワー関係からみた両側性機能低下	共	平成 27 年 8 月	兵庫県体育スポーツ科学学会 体育・スポーツ科学(No.24, 11-17)	(再掲のため、略)
	5. 肘屈曲運動における一側性と両側性の筋力トレーニングが力ー速度ーパワー関係に及ぼす影響	共	平成 30 年 4 月	トレーニング科学(No.29 第3巻, 255-265)	(再掲のため、略)
	6. ジュニアバレーボール選手の栄養素等摂取状況について	共	平成 30 年 10 月	芦屋大学論叢 (No.70, 51-56)	(再掲のため、略)
7. 日本プロバスケットボール選手の誕生月分布に関する相対的年齢効果についてー2018-19 シーズンの場合ー	共	令和 1 年 7 月	芦屋大学論叢 (No.71, 57-63)	本研究では、Bリーグ選手の誕生月分布に関する相対的年齢効果(RAE)について調査し、今後の選手育成を検討するための基礎的資料を収集することを目的とした。対象は2018-2019シーズン開幕前から登録されていた日本人選手、B1 および B2リーグの 322 人である。調査の結果、4-6 月生まれの選手が多くなっており、誕生月と選手数には有意な相関関係があった。過去の全国出生数から推計される期待度数と Bリーグ選手の観測度数には有意な差が認められ	

					た。以上のことから、Bリーグ所属選手には RAE が認められた。今後、とくに成長期の育成に関わる指導者が RAE について理解し、早生まれの選手だけでなく、将来的な可能性を持った晩熟型の選手を見逃さないこと、さらに早生まれの選手をドロップアウトさせない仕組みの構築が必要であることが示唆された。 (共著者 石川峻, 青木敦英) (※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能)
	8. 異なる動作速度の組み合わせによる等速性膝伸展トレーニングの効果と性差	共	令和1年12月	体育学研究 (No.64, 603-612)	(再掲のため、略)
トレーニング演習	(学術論文) 1. 肘屈曲運動における一側性と両側性の筋力トレーニングが力-速度-パワー関係に及ぼす影響	共	平成30年4月	トレーニング科学(No.29 第3巻, 255-265)	(再掲のため、略)
	2. 異なる動作速度の組み合わせによる等速性膝伸展トレーニングの効果と性差	共	令和1年12月	体育学研究 (No.64, 603-612)	(再掲のため、略)

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
【学術論文】 1. 女子中学生における音響的骨評価値による骨密度と運動習慣との関連について	単	平成27年1月	芦屋大学論叢(No.62, 1-7)	女子中学生を対象に、安全かつ簡易に行える音響的骨評価値(OSI)を用いて、思春期における運動習慣および運動内容が骨の形成に与える影響について検討を行った。その結果、OSIは学年が進むにつれ大きくなる傾向を示し、2年生と3年生で運動部に所属している生徒が運動部に所属していない生徒よりもOSIは有意に高値を示した。また、運動種目とOSIの関係については、跳躍運動を主体とした群において体育以外で運動を行わない群よりも

<p>2. 中学生陸上競技選手の指導に関する一考察 : 無酸素パワーと脚筋力の分析から</p>	<p>共</p>	<p>平成 27 年 3 月</p>	<p>兵庫県立大環境人間学部研究報告(No.17, 57-67)</p>	<p>有意に高い OSI を示し、跳躍運動を主体としたスポーツが骨形成に好影響を与えている可能性が示唆された。</p> <p>中学生陸上競技選手を対象に競技力向上を図るための有効な指導のあり方を検討することを目的に、無酸素パワーと脚筋力の分析を行った。体重当たり等速性筋力については女子の伸展が高校生のトップクラスに近い値を示したが、屈曲は低く、男子は伸展、屈曲ともに高校生のトップクラスより低いことが明らかになり、今後の指導の方向性について示唆することができた。</p> <p>(共著者 田路秀樹, 青木敦英, 福田厚治)</p>
<p>3. 高齢者の肘屈曲運動による力-速度-パワー関係からみた両側性機能低下</p>	<p>共</p>	<p>平成 27 年 8 月</p>	<p>兵庫県体育スポーツ科学学会 体育・スポーツ科学 (No.24, 11-17)</p>	<p>本研究は、荷重法を用いた力-速度-パワー関係から、高齢者の両側性機能低下(BLD)について検討を行った。その結果、力-速度曲線および力-パワー曲線のいずれも一側条件が両側条件よりも高い値を示し、とくに速い収縮速度条件において顕著であった。また、筋パワーにおいてとくに BLD が大きくなることから、高齢者においても明らかな BLD が出現することを明らかにした。</p> <p>(共著者 青木敦英, 田路秀樹)</p>
<p>4. 保健体育科教育実習生の不安と教育実習前後の教員志望の変化について</p>	<p>単</p>	<p>平成 29 年 1 月</p>	<p>芦屋大学論叢(No.66, 1-6)</p>	<p>芦屋大学の保健体育科での教育実習生の不安について調査するとともに、教育実習が教員志望に与える影響について調査し、体育教員養成課程での課題について検討した。その結果、「授業実践力」が最も大きな不安因子であり、授業内容に関する不安が多数を占めた。また、教育実習前後の教員志望の変化では実習後に有意に高くなっており、66.7%の学生の教員志望率が増加していた。今後の学内での指導において、教育実習生の不安を出来るだけ早期に払拭できる指導を行うとともに、「授業実践力」を高めるための指導を充実させ、教職の意欲の高い学生を教育実習に参加させることが、教員採用試験の合格者を輩出するために必要であることを論じた。</p>
<p>5. バスケットボールにおけるポジション別にみたり</p>	<p>共</p>	<p>平成 29 年 12 月</p>	<p>芦屋大学論叢(No.68, 1-8)</p>	<p>芦屋大学バスケットボール部を対象に、公式試合の BOX SCORE</p>

<p>バウンド獲得状況と勝敗との関係</p>				<p>からポジション別のリバウンド獲得状況を明らかにすると共に、勝敗との関係を分析したところ、ポジション別ではインサイドプレイヤーのリバウンド獲得が高いこと、ディフェンスリバウンド(DR)の獲得が勝敗に影響すること、特にインサイドプレイヤーのDR獲得数が影響すること、そしてインサイドプレイヤーのDR獲得数が15本以上だと勝率が上がることが明らかになった。このことから、インサイドプレイヤーがしっかり仕事をし、DRを獲得することが勝利につながることを示唆された。また、インサイドプレイヤーがリバウンドを獲得できない場合は、他のプレイヤーが獲得する必要があり、特にガードのリバウンドが有効ではないかと考えられた。 (共著者 石川峻, 青木敦英)</p>
<p>6. バasketボールにおける個人のパフォーマンス評価に関する研究- Offensive Efficiency 算出の試み-</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>芦屋大学論叢(No.69, 11-18)</p>	<p>バスケットボールにおける個人のパフォーマンスを評価できる Offensive Efficiency(OE) を用いて芦屋大学バスケットボール部のオフェンスの個人パフォーマンス並びに勝敗別の分析を行ったところ、平均得点ではみえてこないオフェンスの個人パフォーマンスの評価やチーム貢献度の分析をおこなうことができ、これはコーチと選手の共通理解や、チーム戦術の重要性の理解を深めることができる可能性がうかがえるものであった。 (共著者 石川峻, 青木敦英, 別當和香)</p>
<p>7. 肘屈曲運動における一側性と両側性の筋力トレーニングが力-速度-パワー関係に及ぼす影響</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 4 月</p>	<p>トレーニング科学 (No.29 第 3 巻, 255-265)</p>	<p>本研究は、肘関節屈曲を対象として一側性と両側性の筋力トレーニングを課し、力-速度-パワー関係からトレーニング効果について検討した。被験者は男子大学生 13 名とし、トレーニング前後に腕エルゴメーターを用いて一側性・両側性による等尺性最大筋力(Fmax)および0%—60% Fmaxでの肘関節屈曲速度を測定し、パワーを算出した。トレーニングは一側群(n=6)がダンベル・カールを、両側群(n=7)がバーベル・カールを用い、負荷は最大挙上重量の80%で、できるだけ速い収縮で1日10回3セット、週3日の頻度で8週間行わせた。その結果、一側性トレーニングにより一側のFmaxと最大パワー</p>

<p>8. ジュニアバレーボール選手の栄養素等摂取状況について</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 10 月</p>	<p>芦屋大学論叢(No.70, 51-56)</p>	<p>が、両側性トレーニングにより両側の Fmax が有意に増加した。また、一側性トレーニングの一側にのみ肘関節屈曲速度に有意な増加がみられた。以上から、一側性のパワー改善という点から片側ずつの一側性トレーニングの方が、両側性のトレーニングよりも効果的であることが示唆された。 (共著者 <u>青木敦英</u>, 田路秀樹)</p> <p>本研究は兵庫県内の小学校 5 年生から中学校 1 年生までのバレーボールクラブチームに所属する女子選手 15 名を対象として、簡易自記式食事歴法質問票(BDHQ15y)を用いて、栄養素等の摂取量について調査を行い、今後の栄養指導の課題を模索した。その結果、BDHQ15y から得られた栄養素の1日当たりの摂取状況を、平成 27 年国民健康・栄養調査結果の栄養素等摂取量 7-14 歳(女性)の平均値(全国値)と比較したところ、1 項目(ビタミン B1)を除いて全国値を上回っており、栄養摂取状況は比較的良好であった。しかし、バレーボールの競技特性や活動量からみると、栄養素摂取状況は必ずしも適正な摂取量とはいえない可能性が示唆された。 (共著者 <u>青木敦英</u>, 鈴木麻希)</p>
<p>9. 中学生女子バレーボール選手の身体特性と体力がスパイク速度に及ぼす影響</p>	<p>共</p>	<p>平成 31 年 3 月</p>	<p>スポーツサイエンスフォーラム スポーツサイエンス(No.13, 17-32)</p>	<p>本研究では中学生女子バレーボール選手を対象に、スパイク速度と身体特性や体力の測定を行い、身体特性や体力がスパイク速度にどのような影響を及ぼしているのかについて検討を行った。その結果、身体特性とスパイク速度との関係について、体重および BMI とスパイク速度との間に有意な相関が認められた。また、体力とスパイク速度との関係について、立ち幅跳びとスパイク速度との間に有意な相関が認められた。さらにスパイク速度に影響を及ぼす体力因子の影響の度合いを探るために、スパイク速度を従属変数、体力測定 6 項目を独立変数として、重回帰分析(ステップワイズ法)を行ったところ、立ち幅跳びと垂直跳びの 2 項目が抽出された。以上のことから、中学生女子バレーボール選手において、立ち幅跳びがスパイク速度に影響を及ぼす重要な体力因子で</p>

<p>10. 男性高齢者における肘関節屈曲運動の一側性と両側性のトレーニングが力ー速度ーパワー関係に及ぼす影響</p>	<p>共</p>	<p>令和1年6月</p>	<p>教育医学(No.64, 283-292)</p>	<p>あることが示唆された。 (共著者 青木敦英, 石川峻, 竹安知枝)</p> <p>本研究は、高齢者を対象にトレーニング条件の違いが肘関節屈曲運動のパワー特性に与える効果について明らかにすることを目的に、ダンベル・カールで片側ずつ交互にトレーニングを行う群(U群:n=4)と、バーベル・カールで両側同時にトレーニングを行う群(B群:n=5)の2群に、80%1RMの負荷で7~10回の肘関節屈曲運動を1日3セット、週3日の頻度で8週間トレーニングを実施させた。その結果、最大挙上重量(1RM)や力ー速度関係からみたパワー発揮においてU群がB群と比較して高いトレーニング効果が認められ、高齢者にとって一側条件でトレーニングを行うことが筋力および筋パワーを高めるのに効果的であることが示唆された。 (共著者 青木敦英, 田路秀樹)</p>
<p>11. 保健体育科での教育実習の経験が教師の資質・能力と教員志望度に及ぼす影響</p>	<p>単</p>	<p>令和1年7月</p>	<p>芦屋大学論叢(No.71, 1-8)</p>	<p>本研究は、芦屋大学の保健体育科で教育実習を経験した学生を対象に、教師に必要な資質・能力に関する自信尺度の自己評価アンケート(自己評価得点)と、教育実習前後の教員志望の度合いの変化について調査し、教育実習の経験が教師の資質・能力の自己評価と教員志望にどのように影響を及ぼしているか検討を行った。その結果、教育実習前後の教員志望度の変化について明らかに変化はみられなかった。しかし自己評価得点と教育実習の前後で教員志望度が変化した割合(変化率)には、有意な正の相関関係が認められた。教育実習前後で志望度が維持または向上した学生と、教育実習前後で志望度が低下した学生では、教育実習で身につけた教員としての資質・能力に違いがあることが示唆された。</p>
<p>12. 大学の特徴を生かした教員の就職支援に関する一考察ー芦屋大学での教員採用試験対策をもとにー</p>	<p>共</p>	<p>令和1年7月</p>	<p>芦屋大学論叢(No.71, 21-30)</p>	<p>本研究においては、小規模な教員養成系大学における教採受験学生の傾向・実態を踏まえ、受験に向けた効果的な支援方策の在り方に着目した。①受験生が集える年間通した受験対策講座の設定、②講座を継続受講できるた</p>

<p>13. 日本プロバスケットボール選手の誕生月分布に関する相対的年齢効果について—2018-19シーズンの場合—</p>	共	令和1年7月	芦屋大学論叢(No.71, 57-63)	<p>めの有効な支援方策、③講座受講生の力を高める講師団編成の在り方について、それぞれ仮説を立て3年間にわたって実践研究し、年度ごとの受験結果を踏まえて考察した。受験生との協議をもとに、ニーズを踏まえて各対策講座を設定し実施してきたことや、本学の少人数教育の成果を生かした受験生ごとに対応する指導・支援の継続、学内教員を核にした講師団編成等が受験対策に有用であるという重要な手掛かりを得ることができた。 (共著者 笠原清次, 竹安知枝, 盛谷亨, 青木敦英, 若杉祥太, 石川峻, 辻尚士, 雄倉春来)</p> <p>本研究では、Bリーグ選手の誕生月分布に関する相対的年齢効果(RAE)について調査し、今後の選手育成を検討するための基礎的資料を収集することを目的とした。対象は2018-2019シーズン開幕前から登録されていた日本人選手、B1およびB2リーグの322人である。調査の結果、4-6月生まれの選手が多くなっており、誕生月と選手数には有意な相関関係があった。過去の全国出生数から推計される期待度数とBリーグ選手の観測度数には有意な差が認められた。以上のことから、Bリーグ所属選手にはRAEが認められた。今後、とくに成長期の育成に関わる指導者がRAEについて理解し、早生まれの選手だけでなく、将来的な可能性を持った晩熟型の選手を見逃さないこと、さらに早生まれの選手をドロップアウトさせない仕組みの構築が必要であることが示唆された。 (共著者 石川峻, 青木敦英)</p>
<p>14. 異なる動作速度の組み合わせによる等速性膝伸展トレーニングの効果と性差</p>	共	令和1年12月	体育学研究(No.64, 603-612)	<p>本研究は、異なる動作速度の組み合わせによる等速性膝伸展トレーニングを、特別なトレーニングを行っていない男女大学生に行わせ、トレーニング効果の性差について検討を行った。その結果、体重当たりの最大トルクの増加率については男女で有意な差は認められなかったが、女性では中高速でトレーニングを行った群において最大トルクの増加率が有意に高かった。これらのことから、女子においては高速度を組</p>

<p>15. 大学生男子バスケットボール競技におけるゲーム分析-本学における関西学生バスケットボール2部リーグからの検討-</p>	共	令和2年3月	芦屋大学論叢(No.72, 57-64)	<p>み合わせたトレーニングが有効であるという性差が示唆された。 (共著者 田路秀樹, 溝畑潤, 青木敦英, 福田厚治)</p> <p>本研究では過去3年間の2部リーグ戦での戦いにおいて、BOX SCORE から算出できる各スタッツについて勝ち試合と負け試合で比較を行い、勝利するために重要と思われる客観的な視点について検討を行った。その結果、①80点以上の得点と80点未満の失点が勝利するための目安、②3P シュートを確率よく決めること、③チームとして高確率のショットを狙えるシチュエーションについて今後検討する必要があること、④リバウンドについては獲得率で相手を上回ること勝利につながる可能性が高いことが明らかになった。本研究から得られた客観的なデータを今後有効活用し練習に取り組んでいくとともに、ゲーム中における修正点の1つの視点とすることで、より勝利の可能性を高めることが期待できる。 (共著者 石川峻, 青木敦英)</p>
<p>16. ミニテニスのイメージに関する調査-大学生を対象に-</p>	共	令和2年3月	芦屋大学論叢(No.72, 57-64)	<p>本研究では、生涯スポーツであるミニテニスに着目し、このスポーツの今後の普及・活性化に向けての手がかりを得ることを目的に、大学生(兵庫県内の大学に通う教育学部所属の男女1~4年生)103名を対象に、ミニテニスの認知度とイメージに関するアンケート調査を実施した。その結果、ミニテニスの認知度に関しては、低い結果(全く知らなかった人の割合が85.4%)であったが、このスポーツに関して肯定的なイメージ(「健康に良さそう」「楽しそう」「安全なスポーツ」等のイメージ)ととらえた学生の割合が多いことがわかった。また、「健康的」「楽しい」「ルールが簡単」の3つのキーワードがミニテニスの普及につながる可能性があるポイントと考えられた。今後、ミニテニス在国内で広く認知されていくことで、このスポーツが普及・活性化していく可能性があると考えられた。 (共著者 竹安知枝, 青木敦英, 臼井達矢)</p>

【その他(講演や発表)】				
1. バスケットボールにおけるポジション別にみたりバウンド獲得状況と勝敗との関係(学会発表)	共	平成 29 年 9 月	日本体育学会第 68 回大会	(共同発表者 石川峻, <u>青木敦英</u> )
2. 中学生バレーボール選手のスパイク速度に及ぼす体格と体力の影響(学会発表)	共	平成 30 年 8 月	日本体育学会第 69 回大会	(共同発表者 <u>青木敦英</u> , 石川峻)
3. 等速性膝伸展運動における複合トレーニングの効果-男子大学生を対象として-(学会発表)	共	平成 30 年 8 月	日本体育学会第 69 回大会	(共同発表者 田路秀樹, 溝畑潤, <u>青木敦英</u> , 福田厚治)
4. 児童期における外遊びの多寡がその後の運動に対する主観的評価に与える影響(学会発表)	共	平成 30 年 9 月	日本体力医学会第 73 回大会	(共同発表者 竹安知枝, <u>青木敦英</u> , 臼井達矢, 織田恵輔, 辻慎太郎, 松尾貴司)
5. バスケットボールにおけるクォーターごとの得点と勝敗の関係-関西学生バスケットボールリーグを対象として-(学会発表)	共	令和 1 年 9 月	日本体育学会第 70 回大会	(共同発表者 <u>青木敦英</u> , 石川峻, 竹安知枝)
6. 障がい者のスポーツイベントに関する一考察(学会発表)	共	令和 1 年 9 月	日本体育学会第 70 回大会	(共同発表者 竹安知枝, <u>青木敦英</u> , 石川峻)
7. 等速性膝伸展運動における複合トレーニングの効果-女子大学生を対象として-(学会発表)	共	令和 1 年 9 月	日本体育学会第 70 回大会	(共同発表者 田路秀樹, 溝畑潤, <u>青木敦英</u> , 福田厚治)
8. ミニテニスの普及に関する一考察(学会発表)	共	令和 1 年 9 月	日本体力医学会第 74 回大会	(共同発表者 竹安知枝, <u>青木敦英</u> , 臼井達矢, 織田恵輔, 辻慎太郎, 松尾貴司)
9. 片脚と両脚のプライオメトリックトレーニングが跳躍能力に及ぼす影響-大学バレーボール選手を対象として-(学会発表)	共	令和 2 年 6 月	兵庫体育・スポーツ科学学会第 31 回大会	(共同発表者 <u>青木敦英</u> , 石川峻, 竹安知枝)
10. ミニテニスに対する意識調査-経験者を対象に-(学会発表)	共	令和 2 年 6 月	兵庫体育・スポーツ科学学会第 31 回大会	(共同発表者 竹安知枝, <u>青木敦英</u> , 石川峻)

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 大石 徹						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ペー ジ数)	概 要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合 は執筆箇所を詳述)
社 会 学 概 論 I II	(著書) 1. 「使い捨てら れる若者たち」は 格差社会の象徴 か——低賃金で 働く若者たちの学 力と構造	共	平成 21 年 5 月	ミネルヴァ書 房	43 (251)	この論考は、原清治と山内乾史のインタ ビューに答える形式のものである。日本 や米国やカナダやフランスの若い低賃 金労働者の状況について、さまざまな 点に着目して検討した。 <u>その着目点と は、グローバル化、産業構造の変化、 文化資本(この三つは「社会学概論」の トピック)、社会階層、学びからの逃走、 アルバイト、職業教育、学歴、進路選択 (この7つは「教育社会学」と「情報化社 会と仕事の世界」のトピック)などであ る。</u> (執筆担当部分:日本版「使い捨てられ る若者たち」——大石徹先生(芦屋大 学准教授)へのインタビュー) 著者:原清治、山内乾史、 <u>大石徹</u> 、植 田みどり
	2. 大阪社会労働 運動史 第9巻 世紀の交差	共	平成 21 年 11 月	有斐閣	12 (784)	一般飲食店(料亭やバーやキャバレー や酒場などの遊興飲食店ではない飲 食店)のチェーン店や小売のチェーン 店(コンビニやスーパー)が 1990 年代 まで大阪府において事業を展開してき た状況を分析した。「社会学概論」のト ピック( <u>グローバル化、産業構造やライ フスタイルの変化</u> )、「教育社会学」のト ピック( <u>アルバイト、進路選択</u> )、「情報化 社会と仕事の世界」のトピック( <u>仕事の 規格化、非正規雇用、業務評価、過 労、転職</u> )も検討している。 (執筆担当部分:九〇年代大阪の一般 飲食店と小売業——チェーン店を中心 に(査読付)) 主要な著者:玉井金五、宇仁宏幸、高 松亨、服部良子、久本憲夫、明石芳 彦、廣田義人、 <u>大石徹</u> 、駒川智子、新 納克広、富田安信、山田和代、熊沢 誠、伊田久美子、神原文子、木村涼 子、西村智、森詩恵、居神浩、樋口明 彦、弘本由香里、吉村臨兵 著者の合計人数 40 名

3. ひとが優しい博物館:ユニバーサル・ミュージアムの新展開	共	平成 28 年 8 月	青弓社	16 (307)	株式会社セガが開発したお化け屋敷「マダーロッジ」では、暗闇のなか、視覚を遮断された入場者の聴覚や皮膚感覚が刺激される。この画期的な体感アトラクションはまた、視覚障害者も楽しめた。このような「マダーロッジ」の仕組みはユニバーサル・ミュージアム(誰もが楽しめるミュージアム)の設備にも応用できる。 <u>「社会学概論」と「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる感覚情報や知的な楽しみについても論じている。</u> (執筆担当部分:娯楽・余暇の幅を広げる——見えない恐怖を共遊する「マダーロッジ」の衝撃) 主要な著者:広瀬浩二郎、相良啓子、大高幸、篠原聡、黒澤浩、石塚裕子、大石徹、堀江典子、小山修三 著者の合計人数 23 名
(学術論文) 1. 大阪(日本)流のおもてなしは国境を越える——上海万博大阪館の接客	単	平成 24 年 3 月	『上海万博の経営人類学的研究(研究課題番号 21242035 平成 21 年度～23 年度 科学研究費補助金 基盤研究 A) 研究成果報告書』(国立民族学博物館発行)	11 (317)	上海万博の大阪館について、どのように館のスタッフが接客したりトラブルに対処したりしていたのか、そして館のスタッフや中国人客が大阪流の「おもてなし」をどう受けとめていたのかを検討した。 <u>「社会学概論」のトピック(グローバル化、グローバル化、ライフスタイルの変化)や「教育社会学」のトピック(進路選択)や「情報化社会と仕事の世界」のトピック(組織論、接客業、非正規雇用、転職)も扱っている。</u> 主要な著者:中牧弘允、市川文彦、秦兆雄、陳天璽、飯笹佐代子、大石徹、日置弘一郎、王英燕、広瀬浩二郎、竹内恵行、三井泉、周佐喜和、橋爪紳也 著者の合計人数 22 名
2. 映画の副音声をめぐって——創造的観念を通して	単	平成 30 年 11 月	『芦屋大学論叢』(芦屋大学発行)70 号	12	<u>「社会学概論」と「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる情報化社会や感覚情報、「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる特別支援教育に関連する論考である。</u> 副音声は、映像の主音声を聴くだけではわかりにくい情報を視覚障害者に伝えるものである。この論考では、映画の副音声について、その先行研究・普及・作成手順を検討したのち、映画の主音声および副音声に対する批評の必要性を主張した。
(その他)	単	平成 30 年 4 月	『月刊みんなく』(国立民族	1 (20)	<u>「社会学概論」と「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる情</u>

	1. 娯楽のユニバーサル化——映画の副音声			学博物館発行)487号		<u>報化社会や感覚情報、「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる特別支援教育に関連している論考である。</u> この論考では、映画の副音声の普及・媒体・作成手順を紹介したのち、副音声作成と学問的フィールドワークの間には、副音声の作成者やフィールドワークの調査者が情報を選択し、それを解釈しながら、言葉に翻訳しているという共通点があることを指摘した。
教育社会学	(著書) 1. 「使い捨てられる若者たち」は格差社会の象徴か——低賃金で働く若者たちの学力と構造	共	平成 21 年 5 月	ミネルヴァ書房	43 (251)	再掲のため、略。
	2. 大阪社会労働運動史 第9巻 世紀の交差	共	平成 21 年 11 月	有斐閣	12 (784)	再掲のため、略。
	3. ひとが優しい博物館——ユニバーサル・ミュージアムの新展開	共	平成 28 年 8 月	青弓社	16 (307)	再掲のため、略。
	(学術論文) 1. 大阪(日本)流のおもてなしは国境を越える——上海万博大阪館の接客	単	平成 24 年 3 月	『上海万博の経営人類学的研究(研究課題番号 21242035 平成 21 年度～23 年度 科学研究費補助金 基盤研究 A) 研究成果報告書』(国立民族学博物館発行)	11 (317)	再掲のため、略。
	2. 映画の副音声をめぐる一考察——創造的観念を通して	単	平成 30 年 11 月	『芦屋大学論叢』(芦屋大学発行)70号	12	再掲のため、略。
(その他) 1. 娯楽のユニバーサル化——映画の副音声	単	平成 30 年 4 月	『月刊みんぱく』(国立民族学博物館発行)487号	1 (20)	再掲のため、略。	

情報化社会と仕事の世界ⅠⅡ	(著書) 1. 「使い捨てられる若者たち」は格差社会の象徴か——低賃金で働く若者たちの学力と構造	共	平成 21 年 5 月	ミネルヴァ書房	43 (251)	再掲のため、略。
	2. 大阪社会労働運動史 第9巻 世紀の交差	共	平成 21 年 11 月	有斐閣	12 (784)	再掲のため、略。
	3. ひとが優しい博物館——ユニバーサル・ミュージアムの新展開	共	平成 28 年 8 月	青弓社	16 (307)	再掲のため、略。
	(学術論文) 1. 大阪(日本)流のおもてなしは国境を越える——上海万博大阪館の接客	単	平成 24 年 3 月	『上海万博の経営人類学的研究(研究課題番号 21242035 平成 21 年度～23 年度 科学研究費補助金 基盤研究 A) 研究成果報告書』(国立民族学博物館発行)	11 (317)	再掲のため、略。
	2. 映画の副音声をめぐる一考察——創造的観念を通して	単	平成 30 年 11 月	『芦屋大学論叢』(芦屋大学発行)70 号	12	再掲のため、略。
(その他) 1. 娯楽のユニバーサル化——映画の副音声	単	平成 30 年 4 月	『月刊みんぱく』(国立民族学博物館発行)487 号	1 (20)	再掲のため、略。	

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
<b>【著書】</b> 1. ひとが優しい博物館——ユニバーサル・ミュージアムの新展開	共	平成 28 年 8 月	青弓社(307 頁)	株式会社セガが開発したお化け屋敷「マードーロッジ」では、暗闇のなか、視覚を遮断された入場者の聴覚や皮膚感覚が刺激される。この画期的な体感アトラクションはまた、視覚障害者

				<p>も楽しめた。このような「マードロージ」の仕組みはユニバーサル・ミュージアム(誰もが楽しめるミュージアム)の設備にも応用できる。「社会学概論」と「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる感覚情報や知的な楽しみについても論じている。</p> <p>(執筆担当部分: 娯楽・余暇の幅を広げる——見えない恐怖を共遊する「マードロージ」の衝撃: pp.261～276)</p> <p>主要な著者: 広瀬浩二郎、相良啓子、大高幸、篠原聰、黒澤浩、石塚裕子、大石徹、堀江典子、小山修三</p> <p>著者の合計人数 23 名</p>
<p><b>【学術論文】</b></p> <p>1. 娯楽のユニバーサル化——映画の副音声</p>	単	平成 30 年 4 月	『月刊みんぱく』(国立民族学博物館発行) 487 号(20 頁)	<p>「社会学概論」と「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる情報化社会や感覚情報、「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる特別支援教育に関連している論考である。この論考では、映画の副音声の普及・媒体・作成手順を紹介したのち、副音声作成と学問的フィールドワークとの間には、副音声の作成者やフィールドワークの調査者が情報を選択し、それを解釈しながら、言葉に翻訳しているという共通点があることを指摘した。(p.6)</p>
<p>2. 映画の副音声をめぐる一考察——創造的観念を通して</p>	単	平成 30 年 11 月	『芦屋大学論叢』(芦屋大学発行)70 号	<p>「社会学概論」と「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる情報化社会や感覚情報、「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる特別支援教育に関連する論考である。副音声は、映像の主音声を聴くだけではわかりにくい情報を視覚障害者に伝えるものである。この論考では、映画の副音声について、その先行研究・普及・作成手順を検討したのち、映画の主音声および副音声に対する批評の必要性を主張した。(pp.1～12)</p>

<p>【その他(講演や発表)】</p> <p>1. 研究発表「触常者も見常者も満喫できる音響娯楽施設——マダーロッジの事例」</p>	<p>単</p>	<p>平成 27 年 3 月</p>	<p>国立民族学博物館共同研究会「触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築」(於:国際基督教大学)</p>	<p>株式会社セガが開発したお化け屋敷「マダーロッジ」では、暗闇のなか、視覚を遮断された入場者の聴覚や皮膚感覚が刺激される。この体感アトラクションはまた、視覚障害者も楽しめる。「マダーロッジ」の仕組みはユニバーサル・ミュージアム(誰もが楽しめるミュージアム)の設備にも応用できる。この発表では、「<u>社会学概論</u>」と「<u>教育社会学</u>」と「<u>情報化社会と仕事の世界</u>」で取り上げる情報化社会や知的な楽しみや感覚情報についても論じた。</p>
<p>2. 講演「娯楽・余暇の幅を拓げる——見えない恐怖を共遊する『マダーロッジ』の衝撃」</p>	<p>単</p>	<p>平成 27 年11月</p>	<p>国立民族学博物館の公開シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアム論の新展開——展示・教育から観光・まちづくりまで」(於:国立民族学博物館)</p>	<p>娯楽施設は、娯楽や余暇や芸術表現の幅を拓げる可能性も秘めている。そのような施設の例として、株式会社セガのお化け屋敷のマダーロッジを紹介した。この施設は、日本社会にユニバーサル・ミュージアムやダイアログ・イン・ザ・ダークや暗闇体験ワークショップが普及する前に成功した。言わば聴覚や闇の復権の先駆けだ。この講演は、「<u>社会学概論</u>」と「<u>教育社会学</u>」と「<u>情報化社会と仕事の世界</u>」で取り上げる情報化社会や知的な楽しみや感覚情報にも触れている。</p>
<p>3. 講演「娯楽から人生を考える——お化け屋敷の音響の場合」</p>	<p>単</p>	<p>平成 30 年 2 月</p>	<p>芦屋大学公開講座(於:芦屋市民センター)</p>	<p>臨場感が表現されるようなタイプの娯楽は、現実の人生を捉えられるし、臨場感があるおかげで鑑賞者の人生の一部分になれると言えよう。そういうタイプの娯楽の例として、お化け屋敷の音響を取り上げ、そのような音響を応用することによって人生を表現したり実感したりできる可能性について考えた。「<u>社会学概論</u>」や「<u>教育社会学</u>」や「<u>情報化社会と仕事の世界</u>」で取り上げる情報化社会や知的な楽しみや感覚情報についても論じている。</p>
<p>4. 研究発表「大切なのは考え抜くこと——映画の副音声を作るために」</p>	<p>単</p>	<p>平成 30 年 7 月</p>	<p>国立民族学博物館共同研究会「『障害』概念の再検討——触文化論に基づく『合理的配慮』の提案に向けて」</p>	<p>映画の主音声には出演者の声、背景音、BGM などの聴覚情報が含まれ、それらの情報は映画に立体感も与える。視覚障害者は、映画の主音声を補足</p>

			<p>(於:国立民族学博物館)</p>	<p>する副音声を聴きながら、主音声の聴覚情報を組み合わせて画面を想像している。そして副音声を作るとき、いちばん大切なのは、どのような副音声をどこに入れるのかを考え抜くことなのだ。この発表では、「<u>社会学概論</u>」と「<u>教育社会学</u>」と「<u>情報化社会と仕事の世界</u>」で取り上げる<u>情報化社会</u>や<u>感覚情報</u>についても論じた。</p>
--	--	--	---------------------	--

## ③教育研究業績書

教育研究業績書				
氏名 三 羽 光 彦				
著書、学術論文等の名称 (著書)	単著 共著 の別	発行又は 発表の年 月	発行所、発表雜 誌又は 発表学会等の 名称	概 要
『教育行政研究』第3号 戦後日本の教育行政改革	共著	昭和57年8月	名古屋大学教育学部教育行政及び制度研究室	「CIEの教育分権化政策の成立」を分担執筆。占領文書を主要史料として、CIE(民間情報教育局)の教育分権化政策、とりわけ教育委員会制度構想の形成過程を解明し、CIEと文部省の議論の論点を整理した。共著者：鈴木英一・井深雄二・大橋基博・小野田正利・伊藤良高。(12ページ)
文部省戦後教科書一解説一	共著	昭和59年5月	大空社	戦前の高等小学校・国民学校高等科・戦後直後の国民学校高等科として新制中学校の農業と工業の教科書、特に戦後直後の「暫定教科書」の内容分析を行い、戦前から戦後の農業と工業の小学校教科課程上の性格および特徴を歴史的に考察した。共著者：佐々木享(11ページ)
教育改革読本	共著	昭和61年8月	教育開発研究所	「新日本建設の教育方針」および「新教育指針」を分担執筆。「新日本建設の教育方針」は来るべき戦後教育改革で占領軍の関与を最小限におさえるために先取的になされたものであったことを論じた。また「新教育指針」は戦後民主主義の手引き書として占領軍の示唆のもとにされた優れた啓蒙書であったことを論じた。共著者：新井郁男他25名。(4ページ)
図表でみる愛知の学校教育	共著	昭和62年10月	東海自治体問題研究所	「教育委員会と学校の役割」および「職員会議と校長の役割」を分担執筆。「教育委員会と学校の役割」では地方教育行政法のもと学校管理規則による教育委員会による学校への画一的管理が進んだが、他方では住民の意思を反映するシステムが模索されていることを論じた。「職員会議と校長の役割」では調査をもとに教職員の力量形成に校長の民主的リーダーシップが関係していることを論じた。共著者：坪井由実・川口彰義・榊達雄・近藤正春。(4ページ)
占領期日本教育に関する在米史料の調査研究	共著	昭和63年3月	国立教育研究所	文部省科学研究費補助金 海外学術調査の報告書。昭和60年・61年度の在米調査で確認・収集した占領期日本教育に関する公文書・個人文書・面接結果等の史料を整理・解説した。このうちマッカーサー・メモリアルの史料の解説を分担執筆。研究代表者：佐藤秀夫。共著者：鈴木英一・寺崎昌男・片上宗二・土持法一・星健一・大橋基博。(3ページ)
むらおこし・まちづくりの検証	共著	平成2年3月	東海自治体問題研究所	「11章 山村留学で町に新しい波を―藤原町立田地区(三重県)―」を分担執筆。三重県藤原町立田地区で昭和62年度から取り組まれた「山村留学」が、学校教育を前面におしだした地域ぐるみの村おこしとして推進されている点を明らかにし、教育を軸とした地方自治の一つの姿である点を指摘した。編者：東海自治体問題研究所。共著者：野原敏雄・岡田知弘ら11名と共著。(8ページ)
県内産業振興策としての人材確保の問題	共著	平成2年3月	財団法人岐阜県シンクタンク	「5-2 職業観」を分担執筆。80年代後半の労働市場および青年の意識の変化の中で、今後の若年労働力確保の方策を検討した。分担箇所では、アンケート調査を基礎に高校生・大学生の職業観の変化を考察した。共著者：池永輝之・岡田知弘・黒田恒蔵・北村俊之。(28ページ)
新教育学大事典	共著	平成2年7月	第一法規出版	全8巻の本大事典は、激動する新しい時代を背景にして、今日の学会の最先端の知見を網羅したものである。「高等小学校」および「認定講習」の項目を分担執筆し、学会の水準を整理した。編集代表：細谷俊夫・奥田真丈・河野重男・今野喜清。(2ページ)
高齢者雇用の現状と展望(岐阜県高齢者雇用開発事業調査研究)実業補習学校制度に関する歴史的研究	共著	平成3年3月	岐阜県商工労働部・財団法人岐阜県シンクタンク	「6 高齢者の就業意識」を分担執筆。高齢者雇用促進のために、55歳以上の高齢者にアンケートをとり、高齢者の就業意欲を調査・分析した。その結果、高い就業意欲と共に、勤務条件への要望もみられた。これにもとづき、勤務条件を改善しつつ65歳定年制の実現を提言した。共著者：池永輝之・黒川博・石原健一。(47ページ)
米国対日教育使節団に関する総合的研究	共著	平成3年3月	国立教育研究所	「7 初等および中等段階の教育行政」を分担執筆。共同研究で発見した新しい史料等をもとに、米国教育使節団報告書(第1次・第2次)を新たに翻訳し、その内容を詳細に検討した。分担箇所では第1次報告書の教育行政に関する部分を考察した。研究代表者：佐藤秀夫。共著者：鈴木英一・寺崎昌男・土持法一・片上宗二・古野博明・明神勲・羽田貴史・大橋基博・小野雅昭章。(13ページ)

教育法学辞典	共著	平成4年4月	学陽書房	本辞典は、今日的視点から、教育と法の学際的問題を整理することを目的として刊行された。「大学設置基準」の項目を分担執筆し、戦後の大学設置基準の沿革と大綱化に向かう状況を解説した。編集：日本教育法学会。(1ページ)
教育と教育行政	共著	平成4年5月	勁草書房	「第8章 学校制度改革と教育行政」分担執筆。80年代以降の新しい時代状況をふまえて、日本の教育と教育行政の展開をまとめた。分担箇所では、戦後の学校制度改革の意義を整理し、高校入試や中等教育の多様化など今日の学校制度改革の状況を検討した。編者：鈴木英一・川口彰義・近藤正春。共著者：榊達雄・坪井由実・井深雄二・大橋基博ら30名。(12ページ)
高等小学校制度史研究(岐阜経済大学叢書5)・博士学位論文	単著	平成5年3月	法律文化社	近代日本教育史の基礎的・実証的研究として、これまで盲点となっていた高等小学校制度史を明らかにした。中等教育の代替機能を有した明治前半期、高等小学校の大衆化が進んだ明治後半以降、実業科が導入され単置制が期待された昭和戦前期の3期を特徴づけ、実証的・総合的に考察した。岐阜経済大学出版助成制度により出版。平成6年2月本書により博士学位取得。平成6年10月日本教育行政学会奨励賞受賞。(310ページ)
教育改革と教育行政	共著	平成7年3月	勁草書房	「戦後日本の六・三・三制の成立…『学校再編成委員会』と千葉県の調査…」の部分を執筆。占領軍史料等を利用して、文部省内の「学校再編成委員会」が六・三制実施のために積極的に活動したこと、および占領軍CI&E教育課との交渉過程を明らかにし、米国教育使節団報告書以降の六・三・三制成立の政策立案過程の不明な部分を解明・考察した。編者：鈴木英一。(20ページ)
技術教育・職業教育の諸相	共著	平成8年3月	大空社	「第三章 戦間期実業補習学校改革に関する一考察…農村部と都市部の比較を通して…」の部分を執筆。実業補習学校史を第1期「形成期」第2期「発展期」第3期「再編期」に区分し、第3期に注目し、大衆社会成立との関係で実業補習学校が都市部では職業技術教育機関として、農村部では中等教育の代替物としてそれぞれ発展する過程を明らかにした。編者：佐々木享。(23ページ)
現代学校教育大事典	共著	平成10年3月	ぎょうせい	第4巻「尋常小学校」(260頁)および第3巻「高等小学校」(105～106頁)を部分執筆。1886年の第一次小学校令から1941年の国民学校令までの小学校制度において、その前半と後半をなす尋常小学校と高等小学校の制度上の特徴と法制を概説した。尋常小学校は小学校のうちの義務教育課程として学校制度の基礎段階に位置づけられ、高等小学校は義務教育後の中等教育諸学校と並列する位置に置かれた。そのことが、近代日本の複線型学校体系の基本的要因となったことを論じた。監修：奥田真丈・河野重男。全7巻。
実業補習学校制度に関する歴史的研究	単著	平成10年3月	平成7～9年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)の研究報告書。論文「実業補習学校史の諸相」(1998.3)所収	本書は平成7～9年度の文部省科学研究費補助金研究「実業補習学校制度に関する歴史的研究」の報告書である。当該補助金研究に関わる論文「実業補習学校史の諸相」を収めている。同論文の構成は、第1章実業補習学校史の時期区分とその特徴、第2章戦間期の実業補習学校改革、第3章都市教育と実業補習学校論である。また、実業補習学校に関する資料の翻刻を掲載した。(総ページ数188ページ)
教育刷新委員会教育刷新審議会会議録(全13巻)	共著	平成7年10月～平成10年10月	岩波書店	日本近代教育史料研究会(国立教育研究所内設置、代表菱村幸彦国立教育研究所長)の一員として、編集(佐藤秀夫日本大学教授編集代表)に加わる。戦後日本の教育改革を構想するため、昭和21年8月に内閣に設置された教育刷新委員会の議事速記録およびその周辺史料を校訂・編集し、基礎資料文献として刊行。
六・三・三制の成立(岐阜経済大学叢書9)	単著	平成11年3月	法律文化社	戦後日本の六・三・三制の成立過程を、戦前にまでさかのぼり、また占領文書にあたりながら実証的に明らかにした。特に、文部省とCIEとが共同して作成した六・三・三制への転換計画、学校教育法の成立経緯、中学校・高等学校の教育課程およびその性格、内容の決定過程を事実に基づいて解明した。結論として、六・三・三制が未完で終わった部分が多いことを明らかにしたが、学校制度改革の今日的課題はこの未完に終わった部分を再構築する点にあることを論じた。岐阜経済大学出版助成制度により出版。(総ページ数430ページ)

岩波 日本史辞典	共著	平成11年10月	岩波書店	永原慶二監修、石上栄一・加藤哲郎他編、日本史研究の今日的水準をふまえて多方面にわたる事象を歴史的視点から幅広く立項した辞典。青空教室、旭丘中学事件、教科書裁判、いじめ、憂うべき教科書問題、おちこぼれ、塾、学習指導要領、学力テスト、学校給食、学校教育法、学校主任制、家庭科、帰国子女、義務教育、義務教育費国庫負担法、教科書、教科書検定、教職追放、勤務評定、くこのあゆみ、校内暴力、社会科、社会教育、唱歌、小学校、男女共学、定時制、登校拒否、日教組、PTA、偏差値、文部省、夜間中学、やまびこ学校、6・3制の36項目を分担執筆。
岐阜県教育史 史料編(近代4)	監修	平成11年10月	岐阜県教育委員会編	岐阜県教育委員会の企画による、『岐阜県教育史』(史料編17巻、通史編11巻、別編2巻の計30巻)の一部。昭和元年から昭和11年までにおける教育関係資料を収載した史料編。内容構成、収載史料の選定、解説、脚注等について、校閲・監修を行なう。(総ページ901ページ)
いま、読む『新制中学校 新制高等学校 望ましい運営の指針』	共著	平成14年8月	民主教育研究所	文部省が戦後初期に示した中等教育改革の基本指針を内容とする文書を復刻し、その今日的意義を解説した。堀尾輝久との分担執筆。この指針が、中等学校の設置・運営の自由と、学校教育の公共性と水準維持の保障を二つの柱としていることを指摘し、中等教育の学校評価制度の一試案とになすことができることを論じた。『『新制中学校 新制高等学校 望ましい運営の指針』の今日的意義』の部分執筆。(1~15ページ)
岐阜県史 通史編 続現代	共著	平成15年3月	岐阜県	戦後から平成12年(2000年)までの岐阜県の通史を概説した。本書の、教育・文化関係部分(第1部第4章、第2部第4章の箇所)を分担執筆。岐阜県下の戦後教育改革、高度成長下の教育の諸矛盾を中央の政策、県の教育方針、県民世論、教育界の動向などをふまえ多角的に考察して岐阜県戦後教育史のイメージを再構成した。(128~215および689~796ページ分担)
いま、読む『小学校経営の手引』	共著	平成15年8月	民主教育研究所	文部省が戦後初期に示した小学校の学校経営の原理・原則の指針を内容とする文書を復刻し、その今日的意義を解説した。堀尾輝久との分担執筆。この指針が、学校教育法体制下の小学校の管理・経営のあり方、学校運営の組織と校長の役割などを明らかにしたもので、現在においても学校づくりの参考として意義深い内容を持っていることを明らかにした。『『小学校経営の手引』の今日的意義』の部分執筆。(13~29ページ)
戦後日本における中等教育と高等教育の接続関係に関する研究	単著	平成15年3月	平成12~14年度 文部省科学研究費補助金「戦後日本における中等教育と高等教育の接続関係研究」の報告書である。当該補助金研究に関わる論文「戦後日本における中等教育と高等教育の接続関係」を収めている。同論文は、学校教育法制定当初から1970年代に至る、高等学校と大学との接続の在り方の議論の整理と、入学試験科目の変遷および高校教育課程の実態上の変化を追跡したものである。(総ページ数225ページ)	
岐阜県教育史 通史編(近代4)	共著(執筆代表)	平成16年3月	岐阜県教育委員会編	岐阜県教育委員会の企画による、『岐阜県教育史』(史料編17巻、通史編11巻、別編2巻の計30巻)の一部。昭和元年から昭和21年までの岐阜県教育史を記述。本巻執筆代表者として、総説、第1章教育行財政、第2章初等教育(前半)、第3章中等教育(前半)、第4章高等教育(後半)、第7章教員養成、第9章戦争と教育(後半)部分を執筆。(全350ページ執筆)
新修彦根市史 史料編(近代二・現代)	共著	平成18年3月	彦根市史編集委員会編、彦根市発行	彦根市の企画による、『新修彦根市史』(史料編5巻、通史編4巻、別編3巻・計12巻)の一部。現代史部会長上野輝将のもと専門委員として資料調査を行い。昭和20年から現在までの滋賀県彦根市の現代史料を翻刻・編集した。上野輝将・岡田知弘・小松秀雄・高木和美・野田公夫と共著。全934ページ。うち教育関係部分762-836ページを分担。
教育刷新委員会教育刷新審議会会議録(全13巻)重版	共著	平成16年10月~平成19年10月	岩波書店	日本近代教育史料研究会(国立教育研究所内設置、代表菱村幸彦国立教育研究所長)の一員として、編集(佐藤秀夫日本大学教授編集代表)に加わる。戦後日本の教育改革を構想するため、昭和21年8月に内閣に設置された教育刷新委員会の議事速記録およびその周辺史料を校訂・編集し、基礎資料文献として刊行。その重版を平成16年から19年にかけて、寺崎昌男らとともに校訂・編修し刊行した。
新修 彦根市史 第4巻 通史編 現代	共著	平成27年1月	彦根市発行	上野輝将・岡田知弘・小松秀雄・高木和美・野田公夫・井伊岳夫と共著。第2次大戦終結後から平成21年までの滋賀県彦根市域の歴史を叙述した自治体史、総ページ699。教育関係分野：第1章第6節(「教育の民主化と新教育」149-195ページ)、第2章第6節(「教育政策の変容と教育問題」405-431ページ)、第3章第6節(「社会構造の変化と教育改革」621-640ページ)、コラム(167ページ・640ページ)を担当した。

三重県史 通史編 近現代1	共著	平成27年3月	三重県発行	原始から現代にわたる三重県の自治体史通史編6巻のうち1巻。編集委員・執筆委員として参加。本書は明治から大正前期前半までを対象とする。この第3編「近代三重の教育・文化・生活と社会」のうち、第1章の第2節「中等諸学校と専門学校」(537-546ページ)と第3節「若者組から青年団へ」(570-580ページ)、第3章第2節「近代化と青年団体」(693-695ページ)を執筆した。
近代日本における農本的地域教育実践に関する研究	単著	平成27年3月	平成22～25年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)の研究報告書。	2008年度から2014年度までに作成した論文・資料のうち、農村教育の歴史に関連したものを取り上げて本論集に掲載した。これらは、学術振興会科研費研究・基盤研究(C)「近代日本における農本的地域教育実践に関する調査研究」(研究代表者:三羽光彦・2010年度～2013年度・課題番号:22530838)の成果である。これらの諸論稿は、全体として、戦前農村における地域教育実践のなかに、民衆的・自治的な性格を見だし、それらを新たに教育史の文脈に位置づけ、近代日本教育史を再構成することをめざしたものである。
教育と教育行政	共著	平成27年10月	勁草書房	本書は大学のテキストとして使用する目的で作成した。「第9章 学校制度の歴史と原理」を分担執筆。近代学校の成り立ちから複線型学校体系、戦後日本の学校制度改革の特質、6・3・3性の意義、2007年学校教育法改正の問題点を論じた。編者:井深雄二・大橋基博・中嶋哲彦・川口洋豊。(執筆箇所115-127ページ)
(論文)				
教育審議会における初等教育と中等教育の接続関係に関する論議の一考察	単著	昭和54年8月	名古屋大学大学院教育学研究科『教育論叢』第22号	中等教育の国民教育化の観点から、戦前昭和期の教育審議会の中等教育改革構想を、初等教育と中等教育の接続関係の変容という観点から考察し、そこでだされた3年制中学校の歴史的意義を論じた。(11ページ)
大正期における高等小学校の制度史的検討	単著	昭和54年8月	名古屋大学教育学部教育行政及び制度研究室『教育行政研究』第2号	高等小学校教育の拡大につれて、高等小学校における実業科や手工科の設置、尋常・高等併置校の増大などの現象がみられた。こうしたなかで、高等小学校が大衆化し国民教育の上部段階として定着したことを、統計資料および審議会議事録をもとに論じた。(37ページ)
高等小学校制度の歴史的研究	単著	昭和55年1月	名古屋大学大学院教育学研究科修士論文	義務教育の6年への延長後の高等小学校の大衆化を明らかにし、大正期以降の高等小学校改革論がこうした実態を背景とし、中等教育大衆化の要求と密接に関連しながら展開されたこと、そうした議論やその結果実施された1926年の改革は高等小学校教育のなかで大衆的中等教育の原型とでもいうべき性格を形成したことを明らかにした。(400字780枚)
大正期高等小学校改革に関する考察	単著	昭和56年3月	『名古屋大学教育学部紀要—教育学科—』第27巻	大正期の高等小学校改革論の多くが、高等小学校の単独設置、実業科の必修化、三年制高等小学校の増設、英語科の設置等を要求している。これは中等教育の大衆化要求にほかならないこと、こうした要望を背景として1926年の改革が実施されたことなどを論じた。(11ページ)
現代教育法学論争の検討	共著	昭和56年3月	名古屋大学大学院教育学研究科『教育論叢』第24号	「第7章 法による教育目的・目標規定をめぐる論争」を分担執筆。一部で、法に教育目的等を掲げることを疑問視する見解がみられるが、戦後改革では、法に教育目的を掲げることと教育の民主化は不可分の関係にあったことを明らかにし、こうした見解を批判した。共著者:井深雄二・大橋基博・小野田正利。(10ページ)
1920～30年代における高等小学校改革に関する考察—都市部の単置制高等小学校を中心に—	単著	昭和56年10月	教育史学会紀要『日本の教育史学』第24集、講談社	1930年代の都市部では、高等小学校を尋常科から離して単置制とする改革を進める傾向があった。こうしたなかで、教科担任制・実業科目の必修化・職業指導の導入などが効果的に行われ、神戸・東京などでは高等小学校教育において大衆的中等教育のいくつかの性格が形成されていたことを明らかにした。(12ページ)
戦後日本の中等学校制度改革に関する研究(2)—設置基準設定をめぐる議論を中心として—	単著	平成2年12月	岐阜経済大学学会編『岐阜経済大学論集』第24巻第3号	「新制高等学校実施の手引」「新制中学校・新制高等学校 望ましい運営の指針」「新しい中学校の手引」のそれぞれの作成過程を検討し、それらは、新しい中等教育の望ましい基準を示すものとして出されたもので、中学校・高等学校の設置基準に準ずる性格をもつものであったことを明らかにした。(38ページ)
日本教育史研究の視座と時代(時期)区分—いわゆる『School System』論に関連して—	単著	平成4年8月	日本教育史研究会『日本教育史研究』第11号	近代日本教育史研究の現状と課題を整理し、前近代や諸外国との比較、学校教育と社会教育の両方を複眼的にみる必要などがあることを指摘。さらに全国的・有機的な学校制度の発展を教育における近代の指標のひとつと考えるべきことを論じ、学校制度と教育構造との区別と統一の視点が重要なことを明らかにした。(12ページ)

揺籃期の商業学校—大垣商業学校の場合	単著	平成6年3月	岐阜県歴史資料館編『岐阜県歴史資料館報』第17号	岐阜県大垣商業学校の創設に関する住民の議論を整理し、ついで中等段階への昇格に関する経緯と、それにとともなう商業教育の内容改善について論じた。特に、実践的な「行商」の教育的意義が重視されていた点を、戦前の商業教育の特徴として位置づけた。(4ページ)
戦後教育改革における新学制実施準備協議会の意義と役割	単著	平成7年6月	岐阜県教育史研究会編『岐阜県教育史研究』第2号岐	占領軍史料を利用して、戦後初期の「新学制実施準備協議会」(市町村・郡・県に設置)の構想を解明し、実際の設置運営過程については岐阜県の実態を考察した。その結果、同協議会は六・三・三制の実施主体として、住民の意思を教育に反映させることをめざした点が注目されることを論じた。(17ページ)
現代日本の社会と学校教育—社会と教育の関連認識の視角—	単著	平成7年9月	東海教育自治研究会編『教育自治研究』第8号	現代の教育問題を戦後教育史の流れのなかに位置づけるために、その前提として、教育と社会の関連構造の視角について、近年の研究者の諸説を吟味し、社会経済の構造的な変動の従属変数として教育の諸問題を位置づける必要があることを論じた。(9ページ)
六・三・三制の概念と中等教育の一貫性	単著	平成9年4月	中等教育史研究会編『中等教育史研究』第5号	六・三・三制の概念および六・三・三制の成立事情を検討し、六・三・三制の基本的な制度原則として中学校と高等学校とを連続的にみる中等教育の一貫性の原理があったことを明らかにした。ただし、この原則は、単線型学校体系を前提とする原理であって、1998年に実施された中高一貫教育の一部導入の制度改革とは方向性を異にしたものであることを論じた。(17～32ページ)
戦間期日本の都市教育行政に関する一考察	単著	平成9年6月	岐阜経済大学学会編『岐阜経済大学論集』第31巻第1号	日本においては都市教育に対する関心は第一次大戦後にみられるようになった。こうした都市教育の独自性の自覚、都市教育行政の対象や課題などの議論、とりわけ川本宇之介の1920年代から30年代にかけての東京市政調査会における都市教育論を素材にして、戦間期の都市教育行政の特質について考察を加え、日本の教育行政史における戦間期都市教育行政の意義について検討した。(99～124ページ)
六・三・三制の原点と中高一貫教育	単著	平成9年7月	東海教育自治研究会『教育自治研究』第10号	準義務教育としての高等学校の理念など、戦後初期の中学校と高等学校の接続関係の理念を明らかにし、1960年代の高等学校入学者選抜の「適格者主義」への転換を批判的に論じた。さらに、中高一貫制度の一部導入など、今日の中央教育審議会の中等教育複線化への指向は、こうした高校教育問題を解決するものではなく、問題をより深刻なものとしざるをえないことを指摘した。(65～73ページ)
教育の機会均等と六・三・三制五〇年	単著	平成10年3月	日本教育法学会編『教育基本法五〇年…その総括と展望…日本教育法学会年報』第27号	戦後日本の六・三・三制を学校制度の体系的な構造としてとらえ、その理念の二つの柱を、教育の機会均等と教育の分権化として位置づけた。そして、こうした当初構想されたような制度として実現しなかった点にこそ、六・三・三制が画一的教育を蔓延させたといわれる要因があったことを論じた。そこで、制度改革の方向性としては、六・三・三制の原点に立ち戻る必要があることを論じた。(62～71ページ)
日本経済の構造改革と現代の教育政策	単著	平成10年3月	東海教育自治研究会『教育自治研究』第11号	心の教育の充実、個性に応じた多様な学校制度の実現、地方教育行政の改革、大学教育の充実と研究の振興など、今日の教育政策の動向を、経済活動全般に関する規制緩和政策と自由競争原理の強化、日本型雇用慣行の廃止、公共サービスの地方分権化などの日本経済の構造転換に由来する経済諸政策との関連で考察し、そこにおけるいくつかの問題点を指摘した。(95～103ページ)
戦後教育史における「個」と「集団」	単著	平成12年3月	国立歴史民族博物館編『歴博』第99号	個の開放のように見えた戦後の教育改革も、実は国家的契機は強く、集団を梃子にした学級経営にみられるように、小集団づくりを基礎にして、地域や課程の教育力を支えながら教育実践は展開した。その典型が「地域に根ざす教育」であった。社会経済的な変容の中で、地域と家庭の教育力が脆弱化している現在、こと集団の緊張感を社会的リアリズムをもとにして追及することは、教育の重要な課題となっているが、その条件はますます弱まっている。以上の点を論じた。(16～19ページ)
教育危機の本質——その史的考察	単著	平成14年3月	岐阜県歴史資料館編『岐阜県歴史資料館報』第25号	近代ヨーロッパ文明の根幹には、ギリシア・ローマ以来の伝統的な教養とキリスト教的な絶対的規範が存在する。これに対してわが国の歴史においても、知の伝統と学びのエートスは存在したが、明治以降の近代化と第二次大戦以降の高度成長下の共同体の変容の中で、そうした伝統はついでに失われている。今日の教育危機の本質はこうした教養と規範の喪失に求めるべきであることを論じた。(2～4ページ)

地域社会と六・三・三制-----その理論的諸問題-----	単著	平成18年5月	全国地方教育史学会『地方教育史研究』(全国地方教育史学会紀要)第27号	近代日本の地域と中等教育について、歴史的・理論的な問題について論じた。戦後日本の六・三・三制を、中等教育一元化と教育の地方自治を二つの要素とする学校制度として理解すべきこと、しかしながら、近代日本の中等教育は、歴史的・本質的な固有の概念を持たず、また確固とした中等教育内容(バカロレア資格を形成するような)を有していなかった点に特徴および問題の本質があることなどを論じた(27～31ページ)
地方教育委員会設置に先行する戦後初期地域教育自治の試み -----岐阜・三重両県の事例を中心に-----	単著	平成19年12月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』第47号	本論文では、地方教育委員会の役割に関する問題と可能性を考察することを目的として、岐阜県と三重県を取り上げ、地方教育委員会制度に先行する戦後直後の様々な地域教育自治のシステムを、地域からの教育(教育実践、教育課程、教育内容)創造という観点から検討した。(11-22ページ)
1930年代における農本的全村教育の思想と実践(1) -----民衆教育の視座からの理論的検討-----	単著	平成20年6月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』第48号	民衆教育の視座から「全村教育」などの農本的教育を再評価すべきことを論じた。すなわち、1930年代に日本各地でみられた「全村教育」名で呼ばれた地域に根ざした教育計画・教育実践に関し、その教育の思想と実践は、農本思想に基づくものであるが、そこで見られる農本思想は、ファシズムの温床となった前近代的な思想ではなく、在地的・民衆的な思想であり、近代公教育に対する重要なアンチテーゼとしての意味を持っていたことを指摘した。(31-42ページ)
1930年代における農本的全村教育の思想と実践(2) -----三重県矢持村奥鹿野の事例-----	単著	平成20年12月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』第50号	農村恐慌を契機とした農山漁村更正計画の一環として全国的に展開される農本主義的な全村教育(地域教育計画)に関して、三重県伊賀地方の矢持村奥鹿野で1930年代に実践された高等公民学校(青年学校)を中心とする村落自治の思想と実践を事例として、その歴史的意義を考察した。(21～32ページ)
近代日本思想史における教育刷新委員会-----いわゆる自由主義的知識人の国家観・社会観に関連して-----	単著	平成21年3月	岐阜経済大学紀要『岐阜経済大学論集』第42巻第3号	戦後教育改革を構想した最も主要な担い手であった教育刷新委員会は、委員長の高橋繁をはじめとして自由主義的知識人が重要な位置を占めていたといわれているが、そのいわゆる自由主義的といわれる思想の内実を再検討し、刷新委員会を全体として日本の近代思想史のうねりに位置付けることを目指した。その結果、刷新委員会は強い国家主義的な傾向が見られ、地域自治の中から教育の発展を考えるという考え方が弱いことが明らかとなった。よって自由主義的という評価には疑問があることを論じた。(73-91ページ)
日本における中等教育の基本問題に関する史的考察-----2007年学校教育法改正に関連して-----	単著	平成21年4月	中等教育史研究会編『中等教育史研究』第16号	2007年の学校教育法改正においては、小学校と中学校を義務教育として一体のものにとらえたことにより、中学校と高等学校の間のギャップをより広げることになり、両者の中等教育としての意義や機能を希薄なものにしたと考えられる。こうした、日本の中等教育に特徴的な脆弱性の背景・要因を、歴史的に考察した。
1930年代における農本的全村教育の思想と実践(3) -----岐阜県恵那郡蛭川村の「興村教育」-----	単著	平成21年6月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』第51号	1930年代の農本的全村教育の事例として、岐阜県恵那郡蛭川村で実施された「興村教育」を取り上げて考察した。「興村教育」は西尾彦朗を中心として蛭川村の全村教育として実施されたもので、労作教育・郷土教育を内容とする独自の教育で、地域共同体を基礎にした農本主義的な思想に立脚している。ただしそれは一概に全体主義的・非民主主義的と決め付けることはできない。むしろ戦後の恵那の地域に根ざす民主教育の源流となったと考えることができる。以上を論じた。(17～28ページ)
陸軍特別大演習と教育-----1917年滋賀県の事例-----	単著	平成22年6月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』第53号	陸軍特別大演習の学校教育に与えた影響について、第一次大戦末期の1917(大正6)年11月に実施された滋賀県地域における陸軍特別大演習を事例として、滋賀県湖東地域、なかんずく彦根中学校など彦根市内の小・中学校の教育との関係で考察した。(35～46ページ)
戦後改革における二つの中等教育論-----教育刷新委員会における天野貞祐と牛山栄治-----	単著	平成22年9月	芦屋女子短期大学『芦屋女子短期大学研究紀要』第36号	戦後の中等教育成立期の構想を対象として、それまでの中等教育の歴史的遺産の何を否定し何を継承しようとしたのかという視点から、その改革論の論点を整理した。旧制高等学校校長としての経験から、旧制高校にみられた教養教育の長所を残すことを強く求めた天野貞祐と、青年学校校長としての経験から、勤労青年教育の義務制を主張した牛山栄治に焦点をあて、教育刷新委員会における中等教育改革の議論を考察した。(19～30ページ)
近代日本の学校教育形成過程における仏教系僧侶養成機関の位置と役割-----真宗高田派の眞練教校・勸学院の場合-----	単著	平成22年12月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』第54号	真宗高田派によって設立された真宗勸学院は全国でいち早く近代学校として組織された僧侶養成機関であったが、当初から一般民衆にも開かれ、近代学校の形成を牽引する性格をもっていた。そうしたなかで、宗教教育と普通教育が、より密接でより広く豊かな結びつきを形作る可能性を持っていたことを論じた。(35-46ページ)

宗教教育禁止訓令後の仏教系教育機関の対応に関する一考察——真宗高田派の勸学院(高田中学・高田専門学校)の場合——	単著	平成23年6月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』第55号	真宗高田派によって設立された勸学院(高田中学・高田専門学校)を対象として、宗教教育禁止訓令に対する対応を考察した。勸学院では仏教教育を中等教育から専門学校へ移し、進学資格や徴兵猶予、官吏任用資格等を得ることとなった。こうしたなかで中等教育は極めて「世俗性」の強いものとなっていったことを論じた。(35-46ページ)
12、戦前昭和期の農村における塾風教育の教育史的意義に関する一考察——福岡県農士学校を事例として——	単著	平成24年1月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』56号	昭和戦前期に一世を風靡した塾風教育について、福岡県農士学校を事例としてその教育史的意義を検討した。結論的には、塾風教育は日本の伝統に依拠しながらラディカルに近代公教育を批判したものであり、時代錯誤的なもの、ファシズムの温床となったものと評価するのは間違いであることを論じた。(1-13ページ)
戦前昭和期における松本学の全村学校論に関する一考察	単著	平成25年1月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』58号	戦前の有力な内務官僚である松本学は、「全村学校連盟」を組織し、全国的に「全村学校」を広めようとした。しかし、それは教育という前に行政であり、政治であり統治の手段であった。いわば、国家の「基礎細胞」を教化するための官治的な上からの運動であった。その点、地域自治の観点から取り組まれた「全村教育」とは本質的に異なるものであったことを明らかにした。(1-12ページ)
戦前昭和期の地域計画と教育自治に関する一考察(1)——秋田県由利郡西目村の事例——	単著	平成26年1月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』60号	戦前昭和期・農山漁村経済更生運動に先立ち秋田県由利郡西目村で実施された村ぐるみの「全村教育」の実態を、佐々木孝一郎村長、米山重助小学校長の教育思想、年番制などの部落自治、夜学会と青年指導の在り方などから実証的に明らかにした。下記論文の前編。(11-21ページ)
戦後初期奄美地域における新制高等学校創設に関する一考察——青年学校の町村立実業高等学校への改革に着目して——	単著	平成26年4月	中等教育史研究会編『中等教育史研究』第21号	戦後直後の奄美地域では、戦前からの鹿児島県による青年学校の充実という遺産を背景として、高等女学校や実業学校を設置し、これら中等教育機関や青年学校を母体として、本土に先駆けて実業高等学校を設置することとなった。こうしたプロセスを自生的な中等教育創出の営みとして論じた。(41-64ページ)
戦前昭和期の地域計画と教育自治に関する一考察(2)——秋田県由利郡西目村の事例——	単著	平成26年7月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』61号	前期論文の後編。秋田県由利郡西目村の「全村教育」を、近代公教育への批判、農村共同体の伝統的な自己形成の営みの活性化、独自の理念・制度・内容をもつ地域教育創造の志向が内在していたことを実証し、それが戦前日本における地域教育自治の一つの試みであったことを論じた。(15-26ページ)
近代日本における教育自治の一形態(1)——鳥取県日野郡山上村の「全村教育」を事例として——	単著	平成27年1月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』62号	鳥取県日野郡山上村において、個性ある教師・内藤岩雄が大正期に取り組んだ全村教育の実態を明らかにし、その意義を考察した論文の前編。内藤は妹尾村長との二人三脚によって山上村の近代化に取り組むとともに、村の発展の基礎として全村的教育を組織し、塾風教育を推進した。そこには、日本の伝統的な教育方法を尊重すると同時に、近代的な教育の在り方も積極的に取り入れるという複眼的視野があったことを論じた。(19-30ページ)
1920年代における信濃教育会の実業補習学校論——地域に根ざした青年期の「人格教育」——	単著	平成26年4月	中等教育史研究会編『中等教育史研究』第22号	長野県の実業補習学校の普及や充実を果たした信濃教育会の役割に焦点を当て、信濃教育会の実業補習学校改革論の特質を考察した。1920年代の信濃教育会では人格的陶冶をめざす教養教育として理想主義的な青年教育を、実業補習学校で行おうとする考え方が色濃くうかがえること。それは在来的・自生的な青年教育を目指すものでもあったことを論じた。(1-22ページ)
近代日本における教育自治の一形態(2)——鳥取県日野郡山上村の「全村教育」を事例として——	単著	平成27年7月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』63号	鳥取県日野郡山上村における内藤岩雄の全村教育は、昭和期になっても木村正義や山形正春らによって継承された。この山上村で1910年代から1940年代にかけて展開された全村教育は、近代日本において追求された地域教育計画であり、地域民たちの自己形成の組織化であったことを論証した。(1-13ページ)
現代日本の高等学校における地域教育実践の歴史的意義——地域に根ざす青年期教育として——	単著	平成28年1月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』64号	著者の研究室で実施した鳥取県立智頭農林高校、島根県立島前高校、岐阜県立可児高校、伊丹市立伊丹高校の教育実践をもとに、今日展開されているキャリア教育の地域教育実践を、戦前の地域社会学校、戦後の地域教育計画、学習指導要領などの歴史的な視角から、その実践の意義を考察した。(9-19ページ)
戦後初期滋賀県における無争学園中等部の教育に関する一考察——新学制発足に先行する私塾の中等教育創造の試み——	単著	平成28年4月	中等教育史研究会編『中等教育史研究』第23号	1946年滋賀県愛知郡西押立村に皇文郁によって設立された無争学園中等部について考察した。この学園は、少人数・師弟同行・寄宿舎生活・自学自習を重視した私塾的な学校で、生活・労働・教育を一体化した地域に根ざす学校であったこと、それは戦後の新たな中等教育創造への下からの一つの動きであったことを論じた。(29-51ページ)

戦後初期長野県上郷農工技術学校の生産教育に関する一考察——地域自治的青年教育創造の視点から——	単著	平成28年5月	佐々木享先生追悼編集委員会編『人間いたるところに青山あり』大空社	1946年長野県下伊那郡上郷村で、新学制以前に村立青年学校を青年学校令の枠内で上郷農工技術学校と改称・改組して生産と教育を結合し、地域に即した青年教育を実施した。これは、地域が求める青年教育を生産教育という形で、自治的に創造することによって、地域からの中等教育創造への下からの一つの動きであったことを論じた。(87-120ページ)
岡山県における実業補習学校の発展と邑久土曜学校	単著	平成28年7月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』65号	主に農村部の実業補習学校の類型として、岡山県を取り上げ、明治から昭和初期にかけて、裁縫を重視した女子実業補習学校に特色があることなど実業補習学校の発展のプロセスを明らかにした。またその岡山県の実業補習学校の事例として、当時個性的な実業補習学校として全国に知られていた「邑久土曜学校」について、その設立趣旨や教育の特質、実態などを詳しく考察することとした。(29-41ページ)
戦前昭和期長野県の農村部における実業補習学改革に関する一考察——下條実科中等学校を事例として	単著	平成29年1月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』66号	全国的に見て実業補習学校が最も普及発展していた長野県では、農村部においても村単独で中等教育レベルの学校へと改革していたところがあった。ここで取り上げた下條村の実科中等学校はその典型である。高等小学校、高等女学校などと組織的に連携しながら、地域に根ざした青年期教育創りあげている。規模は小さいがかえって私塾的な教育実践をおこなっている。いわば地域からの中等教育創造の事例といえることができる。長野県の実業補習学校政策の動向とともにその点を明らかにした。(7-18ページ)
報告・書評・図書紹介・解説・新聞記事・その他				
報告・職業指導(進路指導)制度の国際比較研究——日本とフランスを中心に——	共著	昭和62年7月	『財団法人カシオ科学振興財団昭和61年度『年報』	カシオ科学振興財団研究助成金による共同研究。日本の職業指導の問題点を広い視野から検討するため諸外国との比較を計画、まず日本での紹介や研究の少ないフランスをとりあげ、日仏両国の職業指導制度を比較検討した。研究代表者：佐々木享。共著者：夏目達也。(2ページ)
カリキュラム改革のキーワード	単著	平成5年7月	東海高等教育研究所編『大学と教育』第8号	現在進行中の大学改革に関するキーワードを解説。「教育課程」の項目を分担。1991年の大学設置基準の改正から、大学においても初等中等教育と同様に「教育課程」という用語が使われるようになったことを指摘し、これが大学のカリキュラム観の変化を象徴していることを論じた。(2ページ)
大学を読むキーワード1…「大学」	単著	平成5年9月	東海高等教育研究所編『大学と教育』第9号	「大学」という名称が近代日本で用いられた復古的・儒教的背景と、それを近代中国が逆輸入したことを論じ、日本の大学がヨーロッパのそれと出自を異にしていることを指摘した。(2ページ)
学会奨励賞 受賞者による著書紹介『高等学校制度史研究』	単著	平成7年10月	日本教育行政学会編『日本教育行政学会年報』第21号	平成6年10月に日本教育行政学会奨励賞を受賞した『高等学校制度史研究』(法律文化社、平成5年)の内容を著者として紹介。本研究の特徴、研究の概要、今後の課題からなる
書評：岡村達雄著『日本近代公教育の支配装置——教員処分体制の形成と展開をめぐって』	単著	平成15年10月	日本教育行政学会編『日本教育行政学会年報』第29号	本書が、教員処分をめぐる視点から公教育の形成と展開を論じたものとして特徴があること、公教育形成に教員処分法制という視点を投じたことが評価できるところ、また、植民地における教員処分法制はこれまでの研究でみられない新たな研究であることなどを論じた。
書評：三上敦史『近代日本の夜間中学』を読んで	単著	平成18年7月	日本教育史研究会編『日本教育史研究』第25号	本書が、戦前の夜間中学に関するはじめてともいえる体系的・実証的な研究であり、植民地まで含めた全国にわたる克明な調査を基礎に完成させたことを評価した。なお、中等教育概念や中等教育史上の夜間中学の位置などについて疑問を呈した。
日本教育史の研究動向(近現代)	単著	平成22年9月	教育史学会紀要『日本の教育史学』第53集	教育史学会の編集委員会に依頼され、2009年1月～12月に刊行された著書・論文などを渉猟し、論評を加えながら、1年間の日本教育史研究の近現代分野の各領域の研究動向を論じた。(6-19ページ)
書評：湯田拓史『都市の学校設置過程の研究——阪神間文教地区の成立』を読んで	単著	平成23年8月	日本教育史研究会『日本教育史研究』30号	湯田拓史『都市の学校設置過程の研究——阪神間文教地区の成立』(平成22年刊)について、数少ない都市教育行政市の研究書で阪神間の都市形成期における学区や学校設置のありかたが変容したことを実証的に考察した点で意義があること、ただし、研究課題に掲げられた都市教育行政の系統的な分析には至っていないことを批判した。(164-172ページ)
図書紹介：米田俊彦編著『近代日本教育関係法令体系』	単著	平成23年10月	教育史学会紀要『日本の教育史学』54号	米田俊彦編著『近代日本教育関係法令体系』(平成21年刊)について、各法令の制定から廃止までを系統的に収録した本格的な教育法令集として、教育学研究者にとっては待ち焦がれていた資料集で、画期的な労作であること、補注なども貴重な研究成果を盛り込み、今後、研究者の座右の書とすべきことなどを論評した。(256-258ページ)

図書紹介:石岡 学著『「教育」としての職業指導の成立』	単著	平成24年10月	教育史学会紀要『日本の教育史学』55号	石岡学著『「教育」としての職業指導の成立』(平成23年刊)について、これまでにない戦前の職業指導の成立過程を扱った本格的な研究書であることを評価した上で、職業指導については学校の教育活動全体を通した職業教育のあり方と関連づけながら考察する必要がある点を指摘し、職業指導の特設をめぐる論争(職業指導の領域論と機能論)を再検討することが必要であることを論じた。(181-183ページ)
書評:田中智子『近代日本高等教育体制の黎明:交錯する地域と国とキリスト教界』	単著	平成25年4月	中等教育史研究会編『中等教育史研究』第20号	田中智子著『近代日本高等教育体制の黎明:交錯する地域と国とキリスト教界』(平成24年刊)について、内外の一次史料や地方新聞などを縦横に活用し、幅広い視野から多くの興味深い事実を明らかにしていることを評価した上で、アメリカ医学の導入が高等教育の形成に寄与した本質的な点が明らかになっていないこと、高等学校及びその前身をアブリオリに高等教育機関として位置づけていることなどを、教育制度史の観点から批判した。(33-37ページ)
記事:御真影と教育勅語	単著	平成26年5月	滋賀彦根新聞(平成26年5月31日)	戦後直後、教育勅語の否定に伴って、教育勅語謄本と御真影の処分について、彦根市域ではどのような状況であったかを、新修彦根市史の成果を踏まえて考察した。
記事:米軍政官ジョージ・カワグチと彦根	単著	平成26年6月	滋賀彦根新聞(平成26年6月4日)	占領軍の地方組織・滋賀軍政部には、彦根市出身の「ジョージ・カワグチ」がいた。彼の地方占領政策とのかかわりについて、新修彦根市史の成果を踏まえて考察した。
資料:精道尋常高等小学校文集『青空』	共著	平成26年7月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』61号	若林 伸和との共著。兵庫県芦屋市の精道小学校の戦前の学校文集の総目次を作成し、資料として提供すると共に、奈良女子高等師範学校から数学者を校長として招聘するなど、当時の精道小学校の学校経営の発展を素描して解説とした。(107-112ページ・共同研究により抽出不可能)
書評:大谷奨著『戦前北海道における中等教育制度整備政策の研究――北海道庁立学校と北海道会』	単著	平成27年10月	日本教育行政学会編『日本教育行政学会年報』第41号	この書が戦前の北海道会の審議内容を通覧し、時もと新聞や行政資料を丹念に渉猟した実証的な研究で、北海道に関しては初の研究であることを評価した。しかしながら、なぜ地方の事例研究として北海道を取り上げたのかが明確でないこと、地方での中等教育の発展過程のダイナミズムが十分に論究されてないことなどを批判した。(224-225ページ)
書評:高橋裕子著『明治期地域学校衛生史研究――中津川興風学校の学校衛生活動』	単著	平成28年5月	全国地方教育史学会編『地方教育史研究』第37号	この書は、「学校現場の視点から明治期の学校衛生の実態」を明らかにすることを目的とした研究書である。早くから学校医を設置した岐阜県の中津川興風学校を事例とした丹念な実証研究であり、明治期における地方の学校での学校衛生の問題点や、自由民権と学校衛生との関係など興味深い論点を抽出しており、研究史に大きな礎石を築いたものとして評価した。(25-30ページ)
図書紹介:新修彦根市史編纂委員会編『新修 彦根市史 第4巻 通史編 現代』	単著	平成28年5月	全国地方教育史学会編『地方教育史研究』第37号	三羽を含む6名が執筆した『新修 彦根市史 第4巻 通史編 現代』を紹介すると共に、その発刊停止問題について考察した。市史内容への市長の介入が学問の自由の侵害になること、現代史の軽視や否定の傾向が見られること、住民運動の力によって発行できるようになったことなどを論じ、住民と共につくる自治体史の在り方について検討した。(45-50ページ)
書評:大島菜穂子著『戦後日本の教育委員会――指揮監督権はどこにあったか』	単著	平成28年10月	日本教育行政学会編『日本教育行政学会年報』第42号	この書が、「合議制執行機関の意志決定構造の定式化」という行政組織論を基礎にして、合議制執行機関としての教育委員会の形骸化という現象を、教育委員会の教育長への指揮監督権の有り様を検討しながら考察したもので、重要な論点と実態を明らかにした研究であることを論評した。(266-269ページ)

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 三浦(前川) 正樹						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ペー ジ数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
教育 心理 学 I	(著書) 1. 発達と教育の心 理学	共	平成 26 年 3 月	八千代出版 (193頁)	44 (193)	教育心理学の中の、特に発達と学習分 野を中心にまとめた教科書。教職課程 履修者を意識し心理学の初学者にも理 解できるように、また教育現場に資する ように編集された。発達や学習の過程に ついて記述するとともに、心身の障害に ついて特特別支援教育の章を独立 してもうけ記述した。第1章「教育心理学 とは何か」pp. 1-16、第10章「学習意 欲」pp. 137-151 第11章「学習の諸相」 pp. 153-165 担当。(編著者、三浦正樹、 共同執筆、高木典子、三溝雄史、石王 敦子)
	2. 心理学概論	共	平成 23 年 4 月	ナカニシヤ出 版 (201頁)	11 (201)	新しい授業形式である協同学習を意識 し、協同学習に対応できるように編集さ れた心理学の概論的教科書。第8章「感 情と動機づけ」pp. 86-96 担当。動機づ け研究の基礎、動機づけ研究の新しい 流れ、情動研究の基礎、情動研究の新 しい流れ、情動と動機づけ研究の応用 についてまとめた。(編著者、小野寺孝 義、小川俊樹、磯崎 三喜年、共同執 筆、鈴木由起生、櫻井研三、大藤弘典、 石崎千景、高木典子、北川歳昭、並川 努、三浦正樹、岡林春雄、古澤照幸、伊 藤宗親、石川幹人、相川充)
	(学術論文等) 1. 発達特性質問 紙の信頼性・妥当 性の検討	共	令和元年7月	芦屋大学論 叢、第71号 pp. 45-56	6 (12)	発達特性質問紙は、発達障害の4領 域(注意欠陥障害、多動性障害、自閉 症スペクトラム障害、学習障害)の重複 およびスペクトラムを見る質問紙であ る。これまでに、臨床場面や教育場面 で使用してきたが、今回、質問紙とし ての信頼性、妥当性について検討し た。因子分析の結果、4因子構造が確 認された。また信頼性も十分なもので あった。論文ではいくつかの事例につ いて検討した。ただし、項目として妥 当でないものも見られたため、今後いく

<p>2. 感情の言語化についての心理学的考察(4)－神経心理学の視点から－</p>	<p>単</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>芦屋大学論叢、第69号 pp. 77-88</p>	<p>12 (12)</p>	<p><u>つかの項目を見直し、改訂版を作ることが課題となった。(林知代、三浦正樹)</u></p> <p><u>これまで感情の言語化のメカニズム、その効用、個人差について検討してきたが、それらについてみる際、神経心理学的視点が必要になってくる。感情の理論はジェームズのはじめから生物学的色彩が濃かったが、近年の脳科学の発展により、かなり詳細なことがわかってきている。感情処理の神経メカニズム、あるいは感情と言語の相互作用のメカニズムについてみた。次に、言語化そのものの神経学的メカニズム解明のため、失語症を手がかりに言語化についてまとめた。さらに、左右半球機能差と言語・感情の関係について神経心理学的にみた。これらを通じて情動処理の認知モデルと神経心理学モデルを関係させながら、感情の言語化について考察した。</u></p>
<p>3. 感情の言語化についての心理学的考察(3)－再び感情心理学の視点から－</p>	<p>単</p>	<p>平成 29 年 7 月</p>	<p>芦屋大学論叢、第67号 pp. 35-46</p>	<p>12 (12)</p>	<p><u>本稿では、感情の言語化について、感情の理論、感情についての著作、最近の感情心理学のトピックから考察した。感情の言語化には、認知的側面から見た情動の情報処理モデル(情動処理モデル)がそのメカニズムの、感情制御研究がその機能・効果の解明に直接関わると思われる。感情の言語化の障害であるアレキシサイミアの神経心理学的仮説として、左右半球の連絡不全説がある。バックの総合理論でも、感情の認知的評価とラベルづけ過程の統合には 2 つの半球の統合が必要であると述べている。感情の言語化についての説明には「情動処理モデル」「神経心理学的感情理論」「左右半球の連絡モデル」が必要になってくるであろう。</u></p>
<p>4. 半球間相互作用の個人差に関する実験研究－両視野提示課題を用いて－</p>	<p>単</p>	<p>平成 28 年 1 月</p>	<p>芦屋大学論叢、第64号 pp. 49-60</p>	<p>12 (12)</p>	<p><u>本論文では、半球間相互作用の個人差をみるために、両側提示課題を用いて、個別実験と集団実験を行った。その結果、性差は認められなかったが、キメラ課題との関連が示され、左半球覚醒者の方が全体として成績が良くなるという相関が見られた。アレキシサイミア傾向との関連もみられ、とくに下位因子である感情伝達困難が高くなるほど両側提示条件の成績が悪くなるという相関が示された。これらのことから、半球間相互作用の個人差研</u></p>

	<p>5. 感情の言語化についての心理学的考察(2)－感情心理学の視点から－</p>	<p>単</p>	<p>平成 23 年 6 月</p>	<p>芦屋大学論叢、第55号 pp. 97-106</p>	<p>10 (10)</p>	<p>究において両側提示課題というパラダイムが有効であることが示された。性差も含め、さまざまな個人差指標との関連が予想されることから、今後このパラダイムを用いてさらに研究を進める必要がある。</p> <p>感情の言語化の問題を考察するにあたって、感情心理学の視点からその前提条件を探った。感情表出のタイプでは内在化と外在化の概念が示され、これが今後言語化を考察する際参考になると思われた。感情の分類にはさまざまなものがあるが、ルイスによる 1 次的感情/2 次的感情の区別が有効である。2 次感情とは内省あるいは自己言及という要素が関与し自己意識的感情とよばれている。2 次感情の方がより言語的関与が大きいと思われる。ここで、2 次感情と感情の個人間調節機能の対応が議論された。感情の理論ではジェームズ以前のデカルト、スピノザに遡りみた。彼らは感情を心身問題としてとらえており、その現代的意義が示された。今後の課題として引き続き感情の理論、自己意識感情について、あるいは新たに感情制御の問題について検討する必要がある。</p>
	<p>6. 感情の言語化についての心理学的考察</p>	<p>単</p>	<p>平成 21 年 6 月</p>	<p>芦屋大学論叢、第51号 pp. 43-52</p>	<p>10 (10)</p>	<p>気持ちや感情を上手く言葉に表せない子どもや大人が増えている。本論文では感情の言語化についてどのようなことが課題になっているか、教育・臨床・発達の側面からまとめた。教育の場ではコミュニケーション能力や思考能力の形成のために言葉の力を育てることが重要であるとの認識から、「言語活動の充実」が求められている。特に感性・情緒の基盤として言語活動が重要視されている点が注目された。臨床場面では、感情のコントロールと言語化の関係が示され、また感情の社会化という概念が示された。発達場面では、言語はそもそも感情を基盤に発達してくるため、感情の言語化について研究する場合、発達の視点が欠かせないことが示された。今後、初期情動発達と言語化の関係についても調べていく必要があるだろう。</p>

	<p>(その他) 1. 自閉症児・者のための米国ノースカロライナ TEACCH プログラム視察研修</p>	<p>単</p>	<p>平成 22 年 3 月</p>	<p>芦屋市教育委員会と連携した小中学校における特別支援教育の補助講師養成プログラム pp. 23-43</p>	<p>21 (21)</p>	<p>平成 21 年度文部科学省委託「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム委託業務成果報告書(1109 芦屋大学)」において、<u>自閉症児・者のための米国ノースカロライナ TEACCH プログラム視察研修について報告した。</u>また、報告書では第 2 部として米国における特別支援教育体制、支援員の活用状況、米国の自閉症協会についてまとめ、<u>日米の特別支援教育について総合的に考察した。</u></p>
--	---	----------	--------------------	--	--------------------	---

① 教育研究業績書
教 育 研 究 業 績 書
氏 名 伊 藤 武 徳

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【その他(講演や発表)】 1 剣道の打突向上について ～振り上げ動作の意識に関する指 導法の一考察～	単	2019年5月	日本産業科学学会	剣道における指導法の一考察と して、打突向上における意識付 けを大きさの異なるボールを用い て行う。

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 金 相 煥					
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	概 要
体育実技 C サッカー	(研究ノート) 1. 育成年代における監督の一考察	単	平成 24 年 3 月	芦屋大学 論叢 56 号	育成年代の高校生と中学生のデータをとり、理想像の違いを研究した。 中学生も高校生も理想の指導者像で最低限必要な要素はサッカーの知識と指導のわかりやすさであり、それに加えて中学生年代には楽しみの要素を多く含み、高校生年代は選手をコントロールするモチベーションが不可欠であることがわかった。
スポーツ演習 II (フットサル・ サッカー指導 法)	(教育実践報告) 1. 二部昇格への軌跡(チームアプローチ)	単	平成 25 年 7 月	芦屋大学 論叢 59 号	芦屋大学サッカー部が創部 48 年目、監督に就任してから 3 年目での 2 部昇格を果たした経緯と実践してきた活動を報告した。
	2. スペインのサッカーコーチにみる指導法についての一考察	単	平成 26 年 7 月	芦屋大学 論叢 61 号	世界でも有数のサッカー王国スペインから 2 名の指導者を招聘し、クリニックを行った活動を報告。スペインのサッカー観と指導方法に着目して考察した
	(論文) 3. 大学におけるスポーツ教育に関する一試論～課外クラブ活動を積極的に意味付ける A 大学の事例を通して～	単	令 1 年 8 月	兵庫教育大学	教育の 3 本柱である体育におけるスポーツ教育のあり方を問いただし、いかに学生に教養と実践を追求した大学カリキュラム(課外活動も含め)を実践するべきかを考察する。
スポーツ社会学	(実践報告) 1. 地域密着型サッカークラブ設立について～三宮フットボールクラブジュニアユース	単	平成 25 年 1 月	芦屋大学 論叢 58 号	日本サッカー界はめまぐるしい発展を遂げているが、都市部においては十分なサッカー環境が与えられていない生徒が存在する。その生徒たちにサッカー環境を与え、サッカークラ

	<p>の機能と役割 ～</p> <p>2. 地域密着型サッカークラブについて ～三宮フットボールクラブジュニアユースの発展と課題～</p> <p>3. 芦屋学園サッカースクール設立について ～芦屋学園の地域貢献事業～</p>	<p>単</p> <p>単</p>	<p>平成 27 年 7 月</p> <p>平成 30 年</p>	<p>芦屋大学 論叢 63 号</p> <p>芦屋大学 論叢 70 号</p>	<p>ブとして活動する場を提供した実践活動報告。</p> <p>3年間で85名の選手にサッカー活動環境を与えた「三宮フットボールクラブジュニアユース」を設立して、今年で10年を経過した。5年目以降からの生徒たちのサッカークラブへのニーズの変化に対応し、サッカー一面と学習面において新たな発展を試みたクラブの実践報告である。</p> <p>芦屋学園の地域貢献事業として立ち上げた芦屋学園サッカースクールの設立経緯や趣旨を報告する。芦屋地域の子供たちのスポーツ活動の現状をより豊かにする目的がある。</p>
--	--	-------------------	-----------------------------------	---	---

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
<p>【その他(講演や発表)】</p> <p>1 サッカーにおけるコオディネーショントレーニングの実践と効果</p> <p>2</p>	<p>共</p>	<p>2013年12月</p>	<p>ユーハイムスポーツ フォーラム</p>	<p>サッカーは様々なプレッシャー環境下の中での動きが要求される。コオディネーショントレーニングは、ジュニア期の選手に必要な基礎的な運動能力を効果的に身につけることが出来、潜在能力を高める効果があることを立証した</p>

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 西光 哲治					
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	概 要
スポーツ演習Ⅳ (護身術・スポーツ チャンバラ)	(学術論文) 格技・日本拳法の指導技術研究論(その1)「初心者に対する指導法と物理学的見地から考察した技術解説(拳突技を中心に)」	共	平成26年8月	日本産業科学学会全国大会	格技は近世に入り欧米ではスポーツとして確立し身体能力を科学的に研究するという分野に着目し指導法と技術開発が成されてきた。しかし、我が国の格技は武道という精神文化が先行し、根性論や各指導者経験値から判断されてきた。そこで本研究は格技の技術の中で最初に指導される『撃ち技』で、『拳の撃ち出し速度』を生むために技術研究してきたことを実験検証のもと科学的論証行うことで今後のスポーツ演習Ⅳ及び拳法(部活)指導の役立つ知見を得ることを目的とした。
	(学術論文) 格技・日本拳法の指導技術研究論(その2)「拳突技の撃ち出し速度を未経験者と経験者と比較し指導方法と技術解説の確立	共	平成27年8月	日本産業科学学会全国大会	前号(その1)で「拳の撃ち出し速度」を上げるための技術について考察・検証し、指導方法を確立するための研究であった。我々が考察した指導方法を格技未経験者対象に検証を行った所、予想以上に拳の速さを生み出す結果が得られた。そこで本稿では、格技(ボクシング・空手・日本拳法)を対象として未経験者と同様の検証を行い、どのような結果が得られるかを知ることにより今後のスポーツ演習Ⅳ及び拳法(部活)指導の役立つ知見を得ることを目的とした。
水泳実習(前期)及び スキー実習(後期)	(学術論文) 1. 芦屋大学新入生の体力特性および全国平均との比較について	共	平成29年7月	芦屋大学論叢第67号	近年、4年間の学生生活で全く運動・スポーツを行わずに卒業する学生が多く、厚生労働省の国民健康・栄養調査結果(H27年度)からも年齢階級別で20歳代の運動習慣が最も低い割合となっており大学生の体力低下が確認でき、大学現場での学生の

					健康づくりの方策・効果的な健康教育の実践が必要であると言える。現在、芦屋大学では一年次に「体育の実技と講義」の授業を開講しており、運動不足の解消と体力の維持・増進、自己の健康状態の把握や改善、心身の健康づくりなど、獲得することを目的として授業展開している。また実技の授業では現状の大学1年生の体力状況を把握することを目的に体力測定を継続的に実施している。そこで本研究は2011年から2014年の新体力テストの結果を用い、全国平均データとの比較から体力水準の検討を行い、本学生の体力特性を明らかにすることで、今後の「水泳実習・スキー実習」の授業内容改善に役立つ知見を得ることを目的とした。
--	--	--	--	--	---

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【学術論文】 1 格技・日本拳法の指導技術研究論(その1)「初心者に対する指導法と物理学的見地から考察した技術解説(拳突技を中心に)」	共著	平成26年3月	日本産業科学学会関西西部会	格技は近世に入り欧米ではスポーツとして確立し身体能力を科学的に研究するという分野に着目し指導法と技術開発が成されてきた。しかし、我が国の格技は武道という精神文化が先行し、根性論や各指導者経験値から判断されてきた。そこで本研究は格技の技術の中で最初に指導される『撃ち技』で、『拳の撃ち出し速度』を生むために技術研究してきたことを実験検証のもと科学的論証を行った。
【学術論文】 2 格技・日本拳法の指導技術研究論(その1)「初心者に対する指導法と物理学的見地から考察した技術解説(拳突技を中心に)」	共著	平成26年8月	日本産業科学学会全国大会	上記1と同じ
【学術論文】 3 格技・日本拳法の指導技術研究論(その2)「拳突技の撃ち出し速度を未経験者と経験者で比較し指導方法と技術解	共著	平成27年5月	日本産業科学学会関西西部会	前号(その1)で「拳の撃ち出し速度」を上げるための技術について考察・検証し、指導方法を確立するための研究であった。我々が考察した指導方法を格

<p>説の確立</p> <p>【学術論文】</p> <p>4 格技・日本拳法の指導技術研究論(その2)「拳突技の撃ち出し速度を未経験者と経験者と比較し指導方法と技術解説の確立</p> <p>【学術論文】</p> <p>5 芦屋大学新入生の体力特性および全国平均との比較について</p>	<p>共著</p> <p>共著</p>	<p>平成 27 年 8 月</p> <p>平成 29 年 7 月</p>	<p>日本産業科学学会全国大会</p> <p>芦屋大学論叢 第 67 号</p>	<p>技未経験者対象に検証を行った所、予想以上に拳の速さを生み出す結果が得られた。そこで本稿では、格技(ボクシング・空手・日本拳法)を対象として未経験者と同様の検証を行い、どのような結果が得られるかを知ることにより拳法の指導方法の確立を目指す。</p> <p>上記 3 と同じ</p> <p>近年、大学での体育の授業が選択制となり4年間の学生生活で全く運動・スポーツを行わずに卒業する学生が多く、厚生労働省の国民健康・栄養調査結果(H27年度)からも年齢階級別で20歳代の運動習慣が最も低い割合となっていることから、大学生の体力低下が確認でき、大学現場での学生の健康づくりの方策・効果的な健康教育の実践が必要であると言える。現在、芦屋大学(本学)では一年次に「体育の実技と講義」の授業を開講しており、実技では運動不足の解消と体力の維持・増進、講義では自己の健康状態の把握や改善、心身の健康づくりなど、獲得することを目的として授業展開している。また実技の授業では現状の大学1年生の体力状況を把握することを目的に体力測定を継続的に実施している。そこで本研究は2011年から2014年の新体力テストの結果を用い、全国平均データとの比較から体力水準の検討を行い、本学生の体力特性を明らかにすることで、今後の「体育実技」実技項目改善及び1年次後期に開講される「体育講義」の授業内容改善に役立つ知見を得ることを目的とした。</p>
--	---------------------	---------------------------------------	--	---

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 石川 峻						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ペー ジ数)	概 要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
地域 とス ポー ツ	(学術論文) 1. わが国のバス ケットボールに おける競技者 育成システム 構築のための 基礎的研究- 地域クラブと学 校運動部の二 重登録に焦点 を当てて-	単	平成 30 年 3 月	広島体育学研 究 第 44 号	(29～ 36 ペ ージ)	本研究の目的は、愛知ジュニアバスケットボール連盟の事例から、今後の競技者育成システムを構築する上での課題を得ることである。本研究の成果は次の通りである。クラブ員は指導者や仲間から自由にクラブを選択している。登録制度に関しては、今後も二重登録を望むクラブ員が多く、連盟理事もメリットと考えている。しかし、二重登録が故のトラブルも多い。さらに、出場できる大会が少なく、この状況に不満な者もいる。今後のシステムを構築する上で、二重登録や出場できる大会数などの問題を解決することが考えられる。
コー チン グ法 演習 2	(学術論文) 1. バスケットボ ールにおけるポ ジション別にみ たリバウンド獲 得状況と勝敗と の関係	共	平成 29 年 10 月	芦屋大学論叢 第 68 号	(1～8 ペー ジ)	本研究では、公式試合の BOX SCORE からポジション別のリバウンド獲得状況を調査し、勝ち試合と負け試合の差について分析を行い、今後の指導の一助となることを目的とした。ビッグマンがインサイドプレイヤーの仕事である DR の獲得をすることが勝利につながると示唆された。また、ビッグマンがリバウンドを獲得できない場合は、他のプレイヤーが獲得する必要があると考えられる。 (執筆担当分:全体について) 著者:石川峻・青木敦英
	2. バスケットボ ールにおける個 人のパフォー マンス評価に 関する研究- Offensive Efficiency 算出 の試み-	共	平成 30 年 3 月	芦屋大学論叢 第 69 号	(11～ 18 ペ ージ)	本研究では、OE を活用しての個人パフォーマンスの評価と分析を勝敗別に試みた。その結果、以下の知見が明らかになった。 1)本学のウイングは得点源となっているが、より良い判断をして、確率の高いシュートを打つこと、オフェンスリバウンドの獲得に積極的に参加することが必要である。 2)効率の良いプレーを安定して発揮できる選手を育成していく必要がある。 3)選手全員の OE の平均では、勝ち試合が有意に高く、勝ち試合の方が効率良くオフェンスできていることが推察され

						るとともに、OE が有効評価指標となり得ることがわかった。 (執筆担当分:全体について) 著者:石川峻・青木敦英・別當和香
中等 教科 教育 法Ⅱ (保 健体 育)	(学術論文) 1. 教員養成課程の模擬授業における学生のリフレクションに関する一考察-体育実技科目「バスケットボール」を対象として-	共	令和2年9月 (予定)	芦屋大学論叢 第73号		今日は体育実技の授業であっても、単に各スポーツ種目の技能や知識を習得するだけでなく、より一層教科指導に関する側面もカリキュラムに含んでいくことが重要であると考えられている。そのような中で、教員養成課程で実施されている体育実技のバスケットボールの授業を対象に、授業内で模擬授業を含んだカリキュラムを計画、実施し、模擬授業後のリフレクションシートの分析から、学生のリフレクションの実態について明らかにした上で、今後の授業改善への示唆を得た。 (執筆担当分:全体について) 著者:石川峻・川口諒・上田毅
	2. 大学の特徴を生かした教員の就職支援に関する一考察-芦屋大学での教員採用試験対策をもとに-	共	令和元年8月	芦屋大学論叢 第71号	(21～ 30 ペ ージ)	本研究では、小規模な教員養成系大学における教採受験学生の傾向・実態を踏まえ、効果的な支援の在り方に着目した。①年間通した受験対策講座の設定、②講座を継続受講できるための有効な支援方策、③講座受講生の力を高める講師団編成の在り方について、それぞれ仮説を立て3年間にわたって実践研究し、考察した。受験生との協議をもとに、ニーズを踏まえた対策講座の設定や、少人数教育の成果を生かした指導・支援の継続、学内教員を核にした講師団編成等が受験対策に有用であることが示唆された。 (執筆担当分:考察について) 著者:笠原清次・竹安知枝・盛谷亨・青木敦英・若杉祥太・石川峻・辻尚士・雄倉春来
健康 スポ ーツ 科学 実習	(学術論文) 1. 中学生女子バレーボール選手の身体特性と体力がスパイク速度に及ぼす影響	共	平成31年2月	スポーツサイ エンス第13巻 第1号	(17～ 32 ペ ージ)	本研究では、中学生女子バレーボール選手11名を対象に体格データ7項目(身長、体重、BMI、体脂肪率、指極、比指極、指尖高)と体力測定データ6項目(垂直跳び、最高到達地点、立ち幅跳び、背筋力、握力、全身反応時間)とスパイク速度との関係について検討を行った。中学生においてはスパイク速度に体格や体力が影響を及ぼしており、とくに体力ではジャンプ力がスパイクの速度に影響を与えていることが示唆された。 (執筆担当分:考察について) 著者:青木敦英・石川峻・竹安知枝

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
<b>【学術論文】</b>				
1. 中学生年代のバスケットボールにおける地域クラブ化に関する研究(学位論文)	単	平成 28 年 3 月	広島大学大学院修士論文	本研究では、学校運動部にかかわる団体とは別に、地域において組織されている愛知ジュニア連盟に着目し、連盟の概要や実態、連盟所属部員の実態などを明らかにし、今後のバスケットボールにおける競技者育成システムのあり方について検討していくことを目的とした。今後の競技者育成システムとして、学校運動部主体から地域クラブへと移行し、登録制度を整備すること、地域クラブが参加できる試合を増やすことを提唱した。
2. バスケットボールにおけるポジション別にみたリバウンド獲得状況と勝敗との関係	共	平成 30 年 10 月	芦屋大学論叢第 68 号	本研究では、公式試合の BOX SCORE からポジション別のリバウンド獲得状況を調査し、勝ち試合と負け試合の差について分析を行い、今後の指導の一助となることを目的とした。ビッグマンがインサイドプレイヤーの仕事である DR の獲得をすることが勝利につながると示唆された。また、ビッグマンがリバウンドを獲得できない場合は、他のプレイヤーが獲得する必要があると考えられる。
3. わが国のバスケットボールにおける競技者育成システム構築のための基礎的研究-地域クラブと学校運動部の二重登録に焦点を当てて-	単	平成 30 年 3 月	広島体育学研究第 44 号	本研究の目的は、愛知ジュニアバスケットボール連盟の事例から、今後の競技者育成システムを構築する上での課題を得ることである。本研究の成果は次の通りである。クラブ員は指導者や仲間から自由にクラブを選択している。登録制度に関しては、今後も二重登録を望むクラブ員が多く、連盟理事もメリットと考えている。しかし、二重登録が故のトラブルも多い。さらに、出場できる大会が少なく、この状況に不満な者もいる。今後のシステムを構築する上で、二重登録や出場できる大会数などの問題を解決することが考えられる。
4. バスケットボールにおける個人のパフォーマンス評価に関する研究- Offensive Efficiency 算出の試み-	共	平成 30 年 3 月	芦屋大学論叢第 69 号	本研究では、OE を活用しての個人パフォーマンスの評価と分析を勝敗別に試みた。その結果、以下の知見が明らかになった。

<p>5. わが国のバスケットボールにおける競技者育成システムの動向に関する一考察</p>	<p>単</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>芦屋大学論叢第 70 号</p>	<p>1)本学のウイングは得点源となっているが、より良い判断をして、確率の高いシュートを打つこと、オフェンスリバウンドの獲得に積極的に参加することが必要である。 2)効率の良いプレイを安定して発揮できる選手を育成していく必要がある。 3)選手全員の OE の平均では、勝ち試合が有意に高く、勝ち試合の方が効率良くオフェンスできていることが推察されるとともに、OE が有効評価指標となり得ることがわかった。</p> <p>これまでの研究、報告から諸外国と従来の日本の選手育成システムを比較すると共に、今後の日本のバスケットボールにおける選手育成システムについて考察することを目的とした。諸外国では地域クラブで普及、強化されており、様々なメリットがある。日本では学校運動部が中心であったが、地域クラブが増え、B クラブ U-15 チームの活動も活発になってきた。今後は諸外国の良い部分を取り入れながら、ルール of 創意工夫も含めた日本ならではの選手育成システムの構築を期待したい。</p>
<p>6. 中学生女子バレーボール選手の身体特性と体力がスパイク速度に及ぼす影響</p>	<p>共</p>	<p>平成 31 年 2 月</p>	<p>スポーツサイエンス第 13 巻第 1 号</p>	<p>本研究では、中学生女子バレーボール選手 11 名を対象に体格データ7項目(身長、体重、BMI、体脂肪率、指極、比指極、指尖高)と体力測定データ6項目(垂直跳び、最高到達地点、立ち幅跳び、背筋力、握力、全身反応時間)とスパイク速度との関係について検討を行った。 中学生においてはスパイク速度に体格や体力が影響を及ぼしており、とくに体力ではジャンプ力がスパイクの速度に影響を与えていることが示唆された。</p>
<p>7. 日本プロバスケットボール選手の誕生月分布に関する相対的年齢効果について-2018-19 シーズンの場合-</p>	<p>共</p>	<p>令和元年 8 月</p>	<p>芦屋大学論叢第 71 号</p>	<p>本研究では、2018-19 シーズン B リーグ選手の誕生月分布に関する RAE について調査し、今後の選手育成を検討するための基礎的資料を収集することを目的とした。B リーグ選手には RAE が認められた。今後、とくに成長期の育成に関わる指導者が RAE について理解し、早生まれの選手だけでなく、将来的な可能性を持った晩熟型の選手を見逃さないこと、</p>

8. 大学の特徴を生かした教員の就職支援に関する一考察-芦屋大学での教員採用試験対策をもとに-	共	令和元年 8月	芦屋大学論叢第 71 号	<p>さらに早生まれの選手をドロップアウトさせない仕組みの構築が必要であることが示唆された。</p> <p>本研究では、小規模な教員養成系大学における教採受験学生の傾向・実態を踏まえ、効果的な支援の在り方に着目した。①年間通した受験対策講座の設定、②講座を継続受講できるための有効な支援方策、③講座受講生の力を高める講師団編成の在り方について、それぞれ仮説を立て3年間にわたって実践研究し、考察した。受験生との協議をもとに、ニーズを踏まえた対策講座の設定や、少人数教育の成果を生かした指導・支援の継続、学内教員を核にした講師団編成等が受験対策に有用であることが示唆された。</p>
9. 大学生男子バスケットボール競技におけるゲーム分析-本学における関西学生バスケットボール2部リーグ戦からの検討-	共	令和2年 3月	芦屋大学論叢第 72 号	<p>本研究では過去3年間の2部リーグ戦での戦いにおいて、BOX SCORE から算出できる各スタッツについて勝ち試合と負け試合で比較を行い、勝利するために重要と思われる客観的な視点について検討を行った。その結果、①80点以上の得点と80点未満の失点が勝利するための目安、②3Pシュートを確率よく決めること、③チームとして高確率のショットを狙えるシチュエーションについて今後検討する必要があること、④リバウンドについては獲得率で相手を上回ること勝利につながる可能性が高いことが明らかになった。</p>
10. 教員養成課程の模擬授業における学生のリフレクションに関する一考察-体育実技科目「バスケットボール」を対象として-	共	令和2年 9月 (発刊予定)	芦屋大学論叢第 73 号	<p>今日は体育実技の授業であっても、単に各スポーツ種目の技能や知識を習得するだけでなく、より一層教科指導に関する側面もカリキュラムに含んでいくことが重要であると考えられている。そのような中で、教員養成課程で実施されている体育実技のバスケットボールの授業を対象に、授業内で模擬授業を含んだカリキュラムを計画、実施し、模擬授業後のリフレクションシートの分析から、学生のリフレクションの実態について明らかにした上で、今後の授業改善への示唆を得た。</p>
11. バスケットボール競技におけるクォーターごとの	共	令和2年 9月	芦屋大学論叢第 73 号	<p>本研究は平成30年度関西学生バスケットボールリーグの1部リー</p>

得点傾向と勝敗との関係—関西学生バスケットボールリーグを対象として—		(発刊予定)		グおよび2部リーグの173試合を対象として、バスケットボールの4つのクォーターの得点傾向について、勝敗別およびリーグ(競技レベル)別に比較し、得点傾向と勝敗との因果関係について検討を行った。その結果、クォーターごとの得点傾向として1部リーグおよび2部リーグともに2Q<4Qとなっていることを明らかにした。さらに、得点差の大きな試合(20点差以上)では1Q>2Qの有意な差が認められ、1Qに大きな得点差がついていること、接戦となった試合(19点差以内)では1部リーグでは3Q, 2部リーグでは1Qが勝敗に影響すると考えられ、競技レベルで勝敗に影響するクォーターが異なっていることが推察された。
<p>【その他(講演や発表)】</p> <p>1. バスケットボールにおけるポジション別にみたりバウンド獲得状況と勝敗との関係</p> <p>2. 中学生バレーボール選手のスパイク速度に及ぼす体格と体力の影響</p> <p>3. 小学生年代のバスケットボールにおける3人制と</p>	共   共   共	平成29年9月   平成30年8月   令和元年9月	第68回日本体育学会   第69回日本体育学会   第70回日本体育学会	<p>本研究では、公式試合のBOX SCORE からポジション別のリバウンド獲得状況を明らかにすると共に、勝敗との関係を分析し、今後の指導の一助となることを目的とした。</p> <p>①ポジション別にみるとインサイドのリバウンド獲得が高い。 ②DRの獲得は勝敗に影響する ③特にインサイドのDRが影響する ④インサイドがDRを15本以上獲得することが勝利への鍵となる 以上のことから、インサイドがしっかり仕事をし、DRを獲得することが勝利につながることを示唆された。</p> <p>本研究では、中学生女子バレーボール選手11名を対象に体格データ7項目(身長、体重、BMI、体脂肪率、指極、比指極、指尖高)と体力測定データ6項目(垂直跳び、最高到達地点、立ち幅跳び、背筋力、握力、全身反応時間)とスパイク速度との関係について検討を行った。 中学生においてはスパイク速度に体格や体力が影響を及ぼしており、とくに体力ではジャンプ力がスパイクの速度に影響を与えていることが示唆された。</p> <p>本研究では小学生年代において、3人制と5人制のポジションご</p>

5 人制の比較ーポジション別の触球数に着目してー				との触球数の違いを明らかにし、練習方法の留意点について検討することを目的とした。3人制ではGとFの個人の触球数が増加するので個人技能の改善に有効であること、人数に関わらずCの触球数が少なくなる可能性があることを指導者が理解する必要があること、すべての選手の触球数を高めるルールの設定が必要であることが示唆された。
4. バスケットボールにおける「流れ」と勝敗の関係ー関西学生バスケットボール2部リーグについてー	共	令和元年9月	第70回日本体育学会	本研究では関西バスケットボール連盟2部リーグを対象にピリオドごとの得点の変化に着目し、その違いについて検討を行った。対象となった2部リーグの全試合(90試合)についてピリオドごとの得点、得失点差を記録し、勝ちチームと負けチームで比較を行った。バスケットボール競技において「流れ」をつかむために、ハーフタイム以降のピリオドにおいて得点を積み重ねることが重要であると考えられた。
5. 障がい者のスポーツイベントに関するー考察	共	令和元年9月	第70回日本体育学会	本研究では2017年に開催された国内初の3つの取り組み【「障がいの有無に関係なく実施」「夏のナイター開催」「民間出資」】により行われた「近畿アンリミテッド・パラ陸上」に着目し、この大会の有用性について、ボランティアとスポンサー企業の視点より検討・考察を行った。この大会のような新しい取り組みは、ボランティアやスポンサー企業の両者にとって好意的に捉えられ、さらにボランティアだけでなく協賛企業にとっても価値のあるイベントである可能性が高いことが推察された。
6. 片脚および両脚のプライオメトリックトレーニングの効果に関する研究ー大学バレーボール選手を対象としてー	共	令和2年6月	第31回兵庫体育・スポーツ科学学会	本研究では女子バレーボール選手を対象に、片脚と両脚のそれぞれのプライオメトリックトレーニングを行うグループを設定し、トレーニング前後のジャンプ能力、パワー発揮能力の変化を調査し、いずれのトレーニング方法が効果的であるのか検証を行った。結果は、バレーボール選手のプライオメトリックトレーニングにおいて、片脚でのトレーニングを積極的に取り入れるべきであることが示唆された。

① 教育研究業績書				
教育研究業績書				
氏名 本 橋 香				
研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【著書】 1『アメリカ文学にみる女性と 仕事： ハウスキーパーから ワーキングガールまで』（日 本図書館協会選定図書）	共著	平成 18 年 2 月	彩流社	(概要)アメリカ南北戦争の前後 に南部の農園主夫人が書いてい た日記『メアリー・チェスナットの 日記』をもとに、当時、上流階級 の白人女性が置かれていた立場 について考察した。日経新聞の 書評で紹介されるなど、好評であ った。 (全ページ)276 頁 (分担)第 II 部 「サザン・レディ の内部告発」 21 頁 (pp. 133- 153) (共著者) 編者：野口啓子、山口ヨシ子 分担執筆：藤井久仁子、野口啓 子、黛道子、前田陽子、渡辺玲 子、須藤彩子、種子田香、宮津 多美子、藤野早苗、伊藤淑子、 羽澄直子、山口ヨシ子、梅垣代 枝野)
2『アメリカ文学にみる女性改 革者』	共著	平成 22 年 2 月	彩流社	(概要)19 世紀後半のアメリカで 最も著名な黒人女性詩人であつ たフランシス・ハーパーの活躍 を、彼女の著書『アイオーラ・ルロ イ』を中心に分析した。黒人女性 の主体性を再構築することから黒 人社会全体の向上を目指そうとし たハーパーは、今日、社会改革 者として高く再評価されている。 (全ページ)315 頁 (分担)第 I 部 「人種を越境する 女性社会改革者」20 頁 (pp. 139- 158) (共著者)編者：野口啓子、山口ヨ シ子 分担執筆：黛道子、中澤ななえ、 伊藤淑子、野口啓子、梅垣代枝 野、宮津多美子、種子田香、前 田陽子、藤野早苗、須藤彩子、 藤川典子、山口ヨシ子、板場純 子、羽澄直子)
3『大学生生活入門～幼・小・特 支教員、保育士を目指す学	共著	令和元年 3 月	開成出版	芦屋大学教員で教職を目指す学 生のテキストを出版した。 (分担)「英語」と「講義ノートの取

生のためのキャリアデザイン ～』				り方」 (共著者) 芦屋大学教員 以上 3 点
【学術論文】 1“The Moment of Grace in Flannery O’Connor’s Violence”	単著	『論集』20 号 (津田塾大学大 学院英文学会)	平成 11 年 3 月	フラナリー・オコナーの短編集か ら、暴力的で神秘的な結末の理 由を探った。作者の病氣、信仰、 南部の地域性から生まれた独特 の世界観の背景を考察した。 21 頁(pp.45-55)
2“The Post-Vietnam Stress Syndrome in Bobbie Ann Mason’s <i>In Country</i> ”	単著	『論集』21 号 (津田塾大学大 学院英文学会)	平成 12 年 3 月	ボビー・アン・メイソンの『イン・カ ントリー』はベトナム戦争を知らな い少女を語り手として、現代にも 続く戦争の傷跡を描いている。ベ トナム戦争では南部出身の若い 兵士が多く派兵させられ、南北戦 争敗戦の傷跡がさらにベトナム戦 争で広がったことを指摘してい る。 13 頁(pp.59-71)
3 “Flying Men and Dying Women: The Polarized Gender Roles in <i>Song of Solomon</i> ”	単著	『論集』23 号 (津田塾大学大 学院英文学会)	平成 14 年 3 月	トニ・モリソンの『ソロモンの歌』に 描写されている黒人社会で、特 にジェンダーについて注目し、性 的役割分担が引き起こした悲劇 について言及した。 13 頁(pp.53-65)
4“The Plantation Mistress as Victim of and Accomplice to Slavery: Harriet Jacobs’ <i>Incidents in the Life of a Slave Girl</i> ”	単著	『津田塾大学言 語文化研究所 報』18 号(津田塾 大学言語文化研 究所)	平成 15 年 7 月	元奴隷であったハリエット・ジェイ コブズの奴隷体験記から、白人 農園主夫人の部分に注目し、奴 隷制下での複雑な白人女性の社 会的地位について考察した。 7 頁(pp.15-21)
5「英語多読授業の効果を高 める方法の検討—音声教材 の導入効果—」	共著	『医療看護研究』 第 3 巻 1 号(順天 堂大学医療看護 学部)	平成 19 年 3 月	英語の多読を取り入れて、訳読を 主とした英語教育を脱する実践 を試みた。また、多読にリスニン グを組み合わせることで、読解力、 聴解力に相乗的な効果が生まれ るのではないかと考え、授業アン ケート結果から学生の反応をまと めた。9 頁(pp.114-121)
6「白人令嬢から黒人奴隷 へ:フランシス・ハーパーの 『アイオーラ・ルロイ、または 向上した影』」	単著	『津田塾大学言 語文化研究所 報』24 号(津田塾 大学言語文化研 究所)	平成 21 年 7 月	フランシス・ハーパーの『アイオー ラ・ルロイ』を考察した。『アメリ カ文学にみる女性改革者』に載せ る元原稿になった。8 頁(pp.46- 53)

7「権力構造への挑戦—メアリー・E.ウィルキンズ・フリーマンの短編より」	単著	『英米文学』第58号 (関西学院大学英米文学会)	平成25年3月	メアリー・E.ウィルキンズ・フリーマンの短編3篇について分析した。産業構造から取り残された田舎町で、訛りのある言葉をそのまま表現し、リアリズムを迫及したフリーマンは、無力に見える老女の力強い反逆精神を痛快に描いており、当時のダブル・スタンダードを再考させる内容となっている。9頁(pp.121-129)
8「Ellen Glasgow とダーウィニズム—Virginiaを中心に」	単著	『神戸英米論叢』第27号 (神戸英米学会)	平成26年2月	環境に適応できる個体が生き残り、不適合者の子孫は死に絶えていくというダーウィニズムは、敗者にとっては冷徹な自然の法則であるが、作者はあえて敗者の南部文学にそれを取り入れ、作家としての先駆性を示していることを指摘した。16頁(pp.47-62)
9「赤い髪と青い服—Ellen Glasgow の <i>Barren Ground</i> に見る種の退化」	単著	『神戸英米論叢』第28号 (神戸英米学会)	平成27年2月	<i>Barren Ground</i> において先祖返りを引き起こすアルコール摂取と恋愛体験を検証し、当時の人々が恐れていた人種の退化に関する思想がどのように小説に表象されているかについて考察した。また、遺伝や環境に支配される登場人物という、自然主義的な小説技巧が小説の背景になっていることについて言及した。12頁(pp.33-44)
10「女たちの狂気は遺伝か環境か—Ellen Glasgow の『不毛の大地』より」	単著	『大谷学報』第95巻第1号	平成27年11月	『不毛の大地』における著者 Ellen Glasgow のアフリカ植民地における帝国主義への懸念を、白人女性が語る混乱した黒人表象から解読した。20世紀前半のアメリカ南部において、アフリカ系アメリカ人は“ <i>Alligator Bait</i> ”と嘲笑を込めて呼ばれていたが、テキスト中のこの黒人表象は、白人女性が教育を受ける手段を奪われている現実を示唆しており、黒人社会だけではなく白人女性もまた周縁化された存在であることを考察した。
11“ <i>The Transformation of Southern Womanhood in Ellen Glasgow’s Novels</i> ”	単著	『神戸英米論叢』第29号 (神戸英米学会)	平成28年2月	Ellen Glasgow の代表作3作と自伝から、南部白人女性像の変遷とフェミニズム作家の貢献について考察した。

12「南部白人女性像の変遷とアフリカ系アメリカ人男性作家—Langston Hughes と Richard Wright の比較研究—」	単著	『大谷学報』第 95 巻第 2 号	平成 28 年 4 月	南部白人女性像の変遷から、アメリカ南部文学のキヤノン形成へのアフリカ系アメリカ人作家たちの関与について問題提起を行った。
13「Ellen Glasgowの戦略的sisterhood—Allen TateとH. L. Menckenとの書簡から—」	単著	『西洋文学研究』第36号(大谷大学西洋文学研究会)	平成 28 年 9 月	Ellen Glasgow とアメリカ南部文壇で活躍していた白人男性の批評家 Allen Tate と H. L. Mencken の往復書簡を分析し、Glasgow が白人男性中心の文壇で成功するために、いかに女性同士の絆を利用したかを指摘した。pp.43-58
14“The Comparison of Southern White Womanhood between Langston Hughes and Richard Wright”	単著	<i>English and American Cultural Studies</i> Vol.17 No.1 (The Association of English and American Cultural Studies of Korea)	平成 29 年 2 月	12 を修正した後、英訳して出版した。Langston Hughes と Richard Wright の南部白人女性像の比較から、ハーレムルネサンスとポスト・ハーレムルネサンスの時代的区分について再考した。pp.191-206.
15 “Challenge to Othering in Katherine Paterson’s <i>Bridge to Terabithia</i> ”	単著	<i>English and American Cultural Studies</i> Vol.17 No.3 (The Association of English and American Cultural Studies of Korea)	平成 29 年 8 月	優れた児童文学作品に贈られるアメリカのニューベリー作品についての論文集に投稿した。日本語と韓国語の翻訳の両方で掲載された。pp.1-16, 169-182
16「アメリカ南部白人女性像の変化—エレン・グラスゴウとリチャード・ライトの対照的アプローチから」	単著	『芦屋論叢』第 68 号	平成 29 年 12 月	エレン・グラスゴウとリチャード・ライトは一見、対照的な作風であるが、実は自然主義的要素や従来の白人女性像の破壊など、今まで指摘されてこなかった共通点を検証し、白人女性作家、黒人男性作家というカテゴリを越境しつつ、女性像の変化という点で通底していたことを指摘した。pp.41-50
17 “Crossing Boundaries in William Wells Brown’s <i>Clotel; or, The President’s Daughter</i> ”	単著	『芦屋論叢』第 69 号	平成 30 年 3 月	アフリカ系アメリカ人によって初めて出版された小説といわれているウィリアム・ウェルズ・ブラウンの『クローテル 大統領の娘』における混血の登場人物たちの変装のモチーフを分析した。

18「心象風景としての植物描写—エレン・グラスゴウの『不毛の大地』より」	単著	『芦屋論叢』 第70号	平成30年 12月	エレン・グラスゴウの植物描写が登場人物の感情を映し出していることを指摘し、ロマン主義と写実主義のバランスを取りながら創作していたことを確認する。  以上、18点
<p>【その他(講演や発表)】 (口頭発表)</p> <p>1. Willa Cather の <i>Sapphira and the Slave Girl</i> について</p> <p>2. <i>Of Woman Born</i> について ①</p> <p>3. 英語多読授業の効果を高める方法の検討—音声教材の導入効果—</p> <p>4. <i>Of Woman Born</i> について ②</p> <p>5. <i>American Reformers</i> についての考察</p> <p>6. 「Ellen Glasgow とダーウィニズム—<i>Virginia</i> を中心に」</p>	—	<p>津田塾大学言語文化研究所 アメリカ文学女性像研究会</p> <p>津田塾大学言語文化研究所 アメリカ文学女性像研究会</p> <p>医療看護研究会(順天堂大学)</p> <p>津田塾大学言語文化研究所 アメリカ文学女性像研究会</p> <p>津田塾大学言語文化研究所 アメリカ文学女性像研究会</p> <p>日本アメリカ文学会関西支部 9月例会</p>	<p>平成15年3月</p> <p>平成17年7月</p> <p>平成18年3月</p> <p>平成18年6月</p> <p>平成21年7月</p> <p>平成25年9月</p>	<p>キャザーの作品において、南部の白人農園主夫人と混血奴隷の関係から、南部の歴史や社会制度について考察を述べた。</p> <p>The “Sacred” Calling についての発表。母性が制度化され、母親は聖なる職業というイメージを与えられ、女性たちがその役割に閉じ込められていった過程を指摘した。</p> <p>英語の多読指導にリスニングを組み合わせることで、読解力、聴解力に相乗的な効果が生まれることを指摘した。</p> <p>Mother and Son, Woman and Man の考察についての発表。フェミニストの母親が息子を育てるときの葛藤に注目した。</p> <p>Strong Drink についての発表。アメリカの禁酒運動の流れやその功績について考察し、発表した。</p> <p>環境に適応できる個体が生き残り、不適合者の子孫は死に絶えていくというダーウィニズムは、敗者にとっては冷徹な自然の法則であるが、グラスゴウはあえて敗者の南部文学にそれを取り入れ、作家としての先駆性を示している点を考察した。(50分)</p> <p>『ヴァージニア』の次に書かれた</p>

7.「不幸な結婚は遺伝する のか？—Ellen Glasgow’s <i>Life and Gabriella</i> 」	—	神戸英米学会 年次大会	平成 26 年 3 月	小説、『人生とガブリエラ』について考察し、ダーウィニズムが援用されているロンブローゾの生来性犯罪者説が小説に与えた影響に注目した。さらに、第一次大戦によって作者の視点が国内から国外へ移り、アメリカのナショナリズムが台頭しつつある時代の空気を反映していることを指摘した。(25 分)
8.「ニュー・ウーマンへと進化 する農園主夫人像—Ellen Glasgow, <i>Barren Ground</i> とダ ーウィニズム」	—	第 53 回日本ア メリカ文学会全 国大会	平成 26 年 10 月	グラスゴーの代表作、『不毛の大地』に見る自然主義的決定論と、ニュー・ウーマン・ノヴェルの自由意思がどのようなバランスで作品に表れているかを考察した。両者ともダーウィニズムの影響を受けているが、とらえ方が正反対であり、グラスゴーの独自の文学世界がどのように創り上げられていったのか、解説した。(50 分) 日本アメリカ文学会会報 ALSJ(第 52 号)2014 年 8 月 2 頁(pp.35-36)
9.「女たちの親密な関係 —Ellen Glasgow の書簡より」	—	神戸英米学会 年次大会	平成 27 年 3 月	Glasgow は多くの女性作家たちとの書簡を残しているが、なかにはロマンティックな友情を想起させる感情的な文面も残されている。往復書簡を詳細に検証することから、女性同士の親密な関係を築くことになった当時の時代的背景をジェンダーの視点から考察した。(30 分)
10.「南部白人女性像の変 遷とアフリカ系アメリカ人男性 作家—Langston Hughes と Richard Wright の比較研究」	—	中・四国アメリ カ文学会大会	平成 27 年 6 月	Langston Hughes と Richard Wright の作品を比較研究しつつ、南部白人女性像の変遷に関わる人種を越えた作家たちの相互関連性について考察した。(45 分)
11.「周縁化された白人女性 と黒人男性—Richard Wright と Ellen Glasgow の南部白 人女性像」	—	新英米文学会 年次大会	平成 27 年 8 月	Richard Wright と Ellen Glasgow はともに自然主義や H. L. Mencken のリベラルな思想に影響を受けているが、それぞれの作品にどのように表れているのか、主に白人女性像に焦点をあてて考察する。

12.「Ellen Glasgow の戦略的 sisterhood—Allen Tate と H. L. Mencken との書簡から」	—	第54回日本アメリカ文学会全国大会	平成 27 年 10 月	Ellen Glasgow は、南部のダーウィニズム受容に関して正反対の立場にたつ Allen Tate と H. L. Mencken と文通を続け、心を通わせていたが、その遠因として Glasgow と彼らの妻たちとの sisterhood があつた。主に書簡を読み解くことで、作品からだけでは読み取れない、作家たちの作品を世に送り出すための戦略を明らかにしたい。
13.「Ellen Glasgow の書簡研究—ダーウィニズムをめぐって」	—	大谷英文学会	平成 27 年 12 月	ダーウィニズムの「人間は動物から進化した」という考えは、キリスト教の「神が世界のすべてを創造し、その後は変化しなかった」という教えと対立することから、激しい論争を巻き起こした。Ellen Glasgow はアメリカ南部のように熱心な信者が多い地域で、なぜ、どのようにダーウィニズムを作品に取り込んだのか、書簡から読み解いた。
14.“Elevated Biracial Womanhood in William Wells Brown’s <i>Clotel; or The President’s Daughter</i> ”	—	EAC-SenriKinran International Conference	平成 28 年 6 月	韓国の English and American Culture Studies の研究者と研究会に参加し、アメリカで黒人作家によって最初に執筆された作品の混血女性の女性性について発表した。
15 「越境するヒロイン—William Wells Brownの <i>Clotel; or, The President’s Daughter</i> における passing と異性装」	—	大谷大学西洋文学研究会	平成 28 年 9 月	Brown の登場人物たちが変装によって人種や性差を越境し、自由を手に入れる手段としていることを指摘し、異性装に関する当時の偏ったイメージを考察した。
16 “Double Disguise in William Wells Brown’s <i>Clotel; or, The President’s Daughter</i> ”	—	English Language and Literature Association Of Korea	平成 28 年 12 月	韓国の英文学会で研究発表に招待され、パワーポイントを使って英語で発表を行った。
17 「フィクションと現実が交差する場所—Katherine Patersonの <i>Bridge to Terabithia</i> より」	—	神戸英米学会年次大会	平成 29 年 3 月	パターソンは中国生まれでアメリカ南部育ちのニューベリー賞を受賞した児童文学作家であるが、彼女の特異な経歴によって異文化理解の重要さが作品の主題になっている。スピヴァックのサバルタン研究と比較し、外からの価値観と内なる伝統主義の間で翻弄される女性たちについて言及した。

18 “Cross-Cultural Communication in Katherine Paterson’s <i>Bridge to Terabithia</i> ”	—	EAC-Senri Kinran International Conference (The Association of English-American Cultural Studies)	平成 29 年 6 月	韓国の English and American Cultural Studies の研究者とニューベリー賞受賞作品についての論文の合評会を行った。
19「心象風景としての植物描写—エレン・グラスゴウの『不毛の大地』より」	—	エコクリティシズム研究学会	平成 30 年 8 月	エレン・グラスゴウの植物描写が登場人物の感情を映し出していることを指摘し、ロマン主義と写実主義のバランスを取りながら創作していたことを確認する。
20「アトランタ歴史探訪—マーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』より」	—	芦屋市公開講座	平成 31 年 3 月	科研費による現地調査の結果を発表するために、芦屋市主催の公開講座で講演し、社会に成果を還元した。 以上 20 点
(研究ノート) 1「不幸な結婚は遺伝するの か？— <i>Life and Gabriella</i> に 見る女性像の転換」	—	『21 世紀倫理創世研究』Vol.8 (倫理創世プロジェクト)	平成 27 年 3 月	Ellen Glasgow の <i>Life and Gabriella</i> が第一次世界大戦におけるナショナリズムの台頭を反映しており、自然主義的決定論に支配される女性像から、自由意志によって力強く道を切り開いていくヒロイン像への転換点となっていることを指摘した。
2「感傷的異性愛か、女性 同士の連帯か—サラ・ハ ートの短編集『南部の形見』」	—	『芦屋論叢』 第 72 号	令和 2 年 3 月	アメリカで 20 世紀前半に活躍した文筆家 H.L.メンケンとその妻のサラ・ハートについて考察した。サラの短編集と夫との往復書簡から、彼女がアメリカ南部の近代化を願っていながらも、作品に表現しきれていない理由を当時のぜんだ一規範に探った。 以上 2 点
(博士論文) 「アメリカ南部文学における 遺伝をめぐる社会文化的言 説の研究—エレン・グラスゴ ウの小説を中心にして」	—	神戸大学大学院人文学研究科	平成 29 年 3 月 26 日	グラスゴウの小説や書簡における遺伝表象を分析し、彼女が作品を創作することでアメリカ南部の近代化を促し、南部がモダニズムを受容する礎になっていたことを論じた。

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 武田 光平						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ペー ジ数)	概 要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
健康 スポ ーツ 科学 概 論・ 健康 スポ ーツ 科学 実習	(学術論文) 芦屋大学新入生の 体力特性および全 国平均との比較に ついて	共	平成 29 年 7 月 18 日	芦屋大学論叢 第 67 号	10	著者:西光哲治 金相煥 別當和香 伊 藤武徳 武田光平 本研究では、2011年から2014年の新 体力テストの結果を用い、全国平均デ ータとの比較から体力水準の検討をお こさない、本学生の体力特性を明らか にすることで、今後の「健康スポーツ科 学実習」実技項目改善及び1年次後期 に開講される「健康スポーツ科学概論」 の授業内容改善に役立つ知見を得るこ とを目的とした。

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
<b>【著書】</b> 1 女性の雇用問題と政策に 関する一考察-女性を取り巻 く社会環境- 2	共	平成 30 年 11 月 21 日	芦屋大学論叢 第 70 号	著者:池田聡 押田美穂 清水真 武田光平 本研究では、現代の働く女性の 労働環境及び女性の子育て等の 問題点を明らかにする。そのた め、労働基準法と育児休業法に 焦点をあて現行の制度の仕組み やそれがどのように機能してい るのか、また働く女性にとって有益 であるものなのか検討した。

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 別 當 和 香					
研究業績等(10年以内)					
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ページ 数)	概 要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
【学術論文】 1. 芦屋大学新入生の体力特性及び全国平均との比較について	共	平成 29 年 7 月 発行	第 67 号 芦屋大学論叢	P13～ P17  P19～ P22	現代社会では、高齢化やライフスタイルの多様化などから派生する様々な問題が指摘されている。このような社会をより良く生き抜くためには、個々が内面的な充実感を高め、生活の質の向上や自己実現の機会拡充に向けた取り組みを模索し行動していくことが重要であると考え。そこで本研究では、2011 年から 2014 年の新体力テストの結果を用い、全国平均データとの比較から、体力水準の検討をおこない、本学生の体力特性を明らかにすることで、今後の「健康スポーツ科学実習」実技項目改善及び 1 回生後期に開講される「健康スポーツ科学概論」(講義)の授業内容改善に役立つ知見を得ることを目的とした。  著者: 西光哲治 金相煥 伊藤武徳 別當和香 武田光平
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要	
【学術論文】 1 発育期における子どもの現代的運動課題について	共著	平成 26 年 3 月	日本産業科学学会	発育期の子どもの健康の保持増進のためには、運動・栄養・休養の 3 つの条件を満たす生活リズムを確立することが重要であり、特に、発育期における適切な身体活動は、望ましい発育発達の基盤づくりとして、重要視しなければならない。そこで、本研究では、子供の健康問題や生活環境を考慮した上で、発育期における子どもの現代的運動課題について分析し、今後の対応策の検討をおこなった。(執筆担当部分: 発育期の子どもの生活リズムや運動環境について)	

2 バスケットボール競技のスクリーンプレイにおける状況判断に関する研究	単著	平成 28 年 1 月	第 64 号芦屋大学論叢	バスケットボールの戦術には、集団戦術と個人戦術があり、集団戦術は、「プレイ状況の分析」「プレイの選択」「味方との時間的・空間的調整」「動作の遂行」など、個人の戦術行為に一定の方向性を与える。本研究では、バスケットボールの代表的なグループ戦術であるオフザボール・スクリーンプレイを例に、オフザボール・スクリーンプレイにおけるパッサーが、いつ、どこを見てプレイ状況を把握し、どの時点でパスを遂行しているかを、注視傾向とパス動作のタイミングに着目し、熟練者と非熟練者間で比較をおこない、グループ戦術達成力の養成に寄与できる知見を導くことを目的とした。
3 芦屋大学新入生の体力特性及び全国平均との比較について	共著	平成 29 年 7 月	第 67 号芦屋大学論叢	現代社会では、高齢化やライフスタイルの多様化などから派生する様々な問題が指摘されている。このような社会をより良く生き抜くためには、個々が内面的な充実感を高め、生活の質の向上や自己実現の機会拡充に向けた取り組みを模索し行動していくことが重要であると考えられる。そこで本研究では、2011 年から 2014 年の新体力テストの結果を用い、全国平均データとの比較から、体力水準の検討をおこない、本学生の体力特性を明らかにすることで、今後の「健康スポーツ科学実習」実技項目改善及び 1 回生後期に開講される「健康スポーツ科学概論」(講義)の授業内容改善に役立つ知見を得ることを目的とした。 (執筆担当部分:序論、調査方法、結果及び考察)
4 バスケットボールにおける個人のパフォーマンス評価に関する研究 - Offensive Efficiency 算出の試み -	共著	平成 30 年 3 月	第 69 号芦屋大学論叢	本研究では、芦屋大学の学生を対象とし OE を活用しての個人パフォーマンスの評価と分析を勝敗別に試みることで、今後の個人のパフォーマンス評価やコーチングに OE を活用することを目的とした。 (執筆担当部分:結果・考察部分)
5 バレーボールにおける選抜チームのチームづくりに関する事例研究	共著	令和元年 10 月	大阪体育大学論叢	2017 年度西日本大学バレーボール 5 学連選抜男女対抗戦における関西選抜女子チームの優勝までのチームづくりの過程について検討、考察を行い、今後の関西地区の選手の強化、チーム発展の一助となることを目的とした。

① 教育研究業績書
教育研究業績書
氏名 林 知 代

※1 担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	概 要
カウンセリング 心理学	アスペルガー症候 群を通してみた発 達障害の重複性  スタディグループ 4 発達障害治療薬の 現状と展望:		平成 20 年 9 月  平成 22 年 9 月	日本心理臨床 第 27 回大会 学会発表  第 20 回日本 臨床精神神経 薬理学会・第 40 回日本神 経精神薬理学 会 合同年	一口に発達障害といってもその現 れ方は千差万別であり、単純にA DD(不注意・注意欠陥障害), H D(多動・衝動性障害), ASP(ア スペルガー症候群), LD(学習障害) に分類して語ることは、肝心の 個々の独自性・特性を見過ごし てしまう可能性がある。個々の特 性や傾向を知ることは適切な援助・ 支援につながる。発達障害の重複 性を事例を用いながら検討考察し ている。  PDD 治療全般の中での薬物療法 の位置づけを中心に、疫学的(浜 松大土屋)、認知機能特性(京大 十一)、医師の臨床現場(阪大安 田、名古屋大吉川)、心理的(芦屋 大林)が各専門的立場から橋本 (阪大)の進行でディスカッション。
教育相談の理 論と方法(初等)	英国ロンドンにおけ る特別支援教育の 現状—2008 年 9 月視察報告書  英国における特別 支援教育の実情		平成 21 年 3 月  平成 20 年 11 月	芦屋大学大学院発達障害教 育研究所 芦 屋市教育委員 会と連携した 小中学校にお ける特別芯教 育の補助講師 養成プログラ ム pp9-26  芦屋大学発達 障害教育研究 所報告発表	2008 年 9 月の英国ロンドン市にあ る教師、特別支援などの養成とレ ーニングをしている国の行政機関 TDA,ヨーロッパでいちばん設備の 整った養護学校”White Field”、ロ ンドン、ランベス区教育局、地元 の小学校 2 校を視察した報告書。  英国における発達支援教育を行 政の提示していることや提示して いるものを地方教育局がどのように 受け止め、各学校に浸透している かまたその独自性と合わせ発表し た。
教育相談の理 論と方法(中等)	今どんな「生徒指導 の手引き」改訂が必 要か。特別支援教 育から見た生徒指 導の課題		平成 21 年 12 月	明治図書学校 マネジメント 特集「生徒指 導の手引き」 改訂と規範意 識の育成 Vol.637 pp20- 21	依頼原稿。個々の子どものニーズ を理解し、子どもの成長に基づい た支援に目を向けることが特別支 援教育に求められていることであ る。個々のニーズとは個々の発達 の仕方に注意することでもある。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
<b>【著書】</b> 漫画でもわかるアスペルガー 読本	共著	平成 20 年	メディカルレビュー社 pp25-39	アスペルガー症候群に見られる 感覚の特異性について事例を上 げて述べている。コミュニケーション の困難について言及されるアス ペルガーであるが、まず彼らがど のような感じ方をしているかへの 理解を促している
天才の秘密 —アスペルガー症候群と芸 術的独創性—the Genesis of Artistic Creativity	共訳	平成 21 年 平成 30 年 改訂版	世界思想社	歴史上偉大な仕事をし、名を残し ている天才的な芸術家(作家、哲 学者、音楽家、画家)の中にはア スペルガー症候群の診断基準を 満たす人たちがいるが、そうした 人たちのどこがアスペルガー的 であったかをひも解く。
先生！ぼくのこころ知って る？お母さん！わたしの気 持ちわかってる？	単	平成 22 年	明治図書	アスペルガーの子どもの対応は、 スキルを教えることではない。子 どもが安定した個として育って いくためには、子どもがどんな主 観的情緒体験をしているかを理 解することから始まる。アスペル ガーの子どもが世界をどのように 感じているかを臨床現場を通して 描かれている。
蘇る教師のために	単	平成 23 年 3 月	川島書店pp17-24、p p159-166	望ましい教師像とはどのような ものであるかを、発達障害系の子 どもへの対応や姿勢に焦点を当 てて述べている。教科書的理屈 ではなく、実際に子どもと接して いる教師の対応の具体的事例を 取り上げつつ、解説をしている。
<b>【書評】</b> 福本修・平井正三編著『精 神分析から見た成人の自 閉スペクトラム』書評	単	平成 30 年 2 月	心理臨床学研究 Vol.35 No.6, p66	近年自閉症圏の問題は多様な 広がりを見せ、精神分析的アプ ローチも自閉スペクトラム(AS) の概念を念頭に入れずに治療 を進めることはできない。本書 はクライン派の視点からの臨床 実践である。筆者は自己心理 学的視点からクライン派の重 視する解釈と AS の実際の臨 床とのずれを指摘した。

<p>【学術論文】 英語がカウンセリング効果に及ぼす事例研究(修士論文)</p>	<p>単</p>	<p>平成 14 年 3 月</p>	<p>武庫川女子大学大学院</p>	<p>不登校や引きこもりの中・高生のクライアントに、それぞれの特性に沿った英語をカウンセリングに導入することがカウンセリング効果を促すことを事例を挙げ実証的に、その理由を挙げながら検証している。</p>
<p>情報発達からみたひきこもりへの間主観的アプローチ(博士論文)</p>	<p>単</p>	<p>平成 18 年 3 月</p>	<p>武庫川女子大学大学院</p>	<p>引きこもりの問題は、引きこもりという現象について語られることが多いが、引きこもらざるを得ない心的状況を理解することなしには、対応の方法を誤る。情動発達の過程で発達不全領域があるという見方により、臨床的アプローチを促進させる。情動調律を基底とした共感的理解を事例から実証する。</p>
<p>ひきこもりの息子を持つ母親との心理療法過程－代理内省としての共感による断片化した情動統合へのプロセス－</p>	<p>単</p>	<p>平成 17 年 6 月</p>	<p>心理臨床学研究 Vol.23 No.2 pp185-196</p>	<p>本事例は、引きこもりを息子を持つ母親がセラピストの代理内省による共感と受容によって自己愛の傷つきから立ち直り息子への対応が変化する過程を描いている。息子への罪悪感と子育ての努力が報われなかった怒りのアンビバレントな情動が次第に分化し統合していく過程である。</p>
<p>器質的特性を持つひきこもり者への間主観的アプローチ－アスペルガー症候群と診断された青年との心理療法過程－</p>	<p>単</p>	<p>平成 20 年 2 月</p>	<p>心理臨床学研究 Vol.25 No.6 pp659-670</p>	<p>アスペルガー症候群の成人クライアントに対し、情動の閾値に焦点をあてた心理療法過程である。本論では、母親とクライアントの関係性がセラピストの介在によっていかに変化するか、並びにアスペルガー症候群の情動の閾値に焦点を当てた間主観的アプローチとはどのようなものかを示している。</p>
<p>自閉的パーソナリティ女子への精神療法過程</p>	<p>単</p>	<p>平成 25 年 7.19.</p>	<p>芦屋大学論叢 Vol.60 pp41-52</p>	<p>自閉的パーソナリティを持ち、症状として境界例特徴を呈するクライアントにおいて、その起因として健康な愛着関係の形成の失敗によることがある。軽度の自閉性がなぜ母子関係の情緒的繋がり形成へ影響するのかについて事例を示して記述している。</p>

<p>心理アセスメントにおける自己の構成要素の発達という視点-テストバッテリーに現れるクライアントの内的現実を通して-</p>	<p>単</p>	<p>平成 28 年 7 月</p>	<p>芦屋大学論叢第 64 号 pp21-33</p>	<p>間主観的な概念に基づく心理療法の課題は、行動を導く基盤となるオーガナイズングプリンシプルを解明することである(Nurski, 2001)。本論ではその課題を実践するためには、発達論的視点とともに、今のクライアントの状態を的確に把握し、内的世界に焦点を当てることの重要性を事例を通して提示する。</p>
<p>自己感の発達における外的刺激に対する閾値の個人差への注目(1)</p>	<p>単</p>	<p>平成 29 年 1 月</p>	<p>芦屋大学論叢第 65 号 pp45-56</p>	<p>刺激に関する感受性は、普通と見える子どもにおいても個人差がある。外界刺激に対する感受性の質と量の閾値の違いは、養育者と乳児の相互交流のあり方に影響を及ぼす要因の一つである。刺激耐性が自己統合与える影響を考察した。</p>
<p>自閉スペクトラム症の特質に注目した心理療法過程-学校恐怖を訴える女兒の刺激閾値への気づきを通して-</p>	<p>単</p>	<p>平成 29 年 7 月</p>	<p>芦屋大学論叢第 66 号 pp31-40</p>	<p>DSM5 がアスペルガー症候群をはじめとする広汎性発達障害の呼称をなくした。自閉圏の発達障害特性レベルの量的示唆も 3 段階に提示したがそのレベルに該当するほどではないグレーゾーンの子どもの注意が必要である。現実生活においては学校恐怖の形をとる。何に注目して心理療法をするかを提示した。</p>
<p>誕生最早期における自己の統合に関する臨床的考察-感覚の閾値に代表される気質的差異-</p>	<p>単</p>	<p>平成 29 年 12 月</p>	<p>芦屋大学論叢第 67 号 pp23-34</p>	<p>Stern D.の自己感発達における最早期に誕生する萌芽自己感領域に焦点を当て、原初の自己の統合とは何かを明らかにし、精神療法過程における発達の視点の重要性を考察した。</p>
<p>自己発達における中核自己感領域の発達構成要素に関する心理臨床学的考察</p>	<p>単</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>芦屋大学論叢第 68 号 pp51-60</p>	<p>本論文では主体的自己として存在し続けている感覚の樹立及び発達の源となる「中核自己領域」に焦点を当て、それを構成している不変要素について考察を深める。その上で、乳幼児発達の概念が心理臨床実践とどのように繋がっているかを提示する。</p>
<p>自己発達における Intersubjective(間主体的)自己領域に関する心理臨床学的考察-Kohut から Stern への自己の発展的概念を中心に-</p>	<p>単</p>	<p>平成 30 年 2 月</p>	<p>芦屋大学論叢第 69 号 pp67-75</p>	<p>Stern D. の intersubjective relatedness とよぶ領域発達論を臨床に応用するにあたり、筆者は Intersubjective の訳を間主観とせず間主体とすることの意味を深める。Stern D.が研究において最も注目した情動 affects に基づく内的体験に基づく理論展開は心的発達が向かうところ、即ち心理臨床の目標であることの考察を深める。</p>

<p>自己発達の言語的關係性領域に関する心理臨床学的考察 —Stern D.の発達論に基づく言語機構—</p>	<p>単</p>	<p>平成 30 年 9 月</p>	<p>芦屋大学論叢第 70 号</p>	<p>本論では、4 つ目の自己発達領域である言語的關係性領域 Domain of verbal relatedness を取り上げる。言語が操作可能になるまでに既に芽生え成長を続けている3領域の自己感に加え、言語は、統合された自己感形成に関与する重要な役割をする一方、自己の断片化を起こす危険性についても論議し考察を深めている。</p>
<p>発達特性質問紙の信頼性・妥当性の検討</p>	<p>共</p>	<p>令和元年</p>	<p>芦屋大学論叢第 71 号</p>	<p>注意欠陥・不注意(AD)、衝動・多動(HD)、アスペルガー・高機能自閉(AS)、学習障害(LD)の特性の重複性を質問紙で提示した。</p>
<p>自己発達概念に基づく刺激閾値の明確化 —感覚プロフィール(SP)検査から手繰る自己統合へのアセスメント—</p>	<p>単</p>	<p>令和元年</p>	<p>芦屋大学論叢第 72 号</p>	<p>本論では D.Stern の発達の視点に基づく精神分析的心理療法におけるアセスメントの際、有効だと思われるツールとして国際的に広く利用されている感覚プロフィール(SP)日本版を使用する意義を、事例を紹介しながら明らかにしたい。</p>
<p>【その他(講演や発表)】 思春期女子をめぐる家族力動と自己発達のプロセス</p>	<p>単</p>	<p>平成 26 年 1 月</p>	<p>日本カウンセリング学会第 46 回大会</p>	<p>不登校になった中学生女子の 7 年にたる心理療法過程を中心に発表した。本人が持つ自己中心性に見えるものが、本人にとっては傷つきの補償であることをメンタライゼーション理論から検討した。</p>
<p>アスペルガー症候群女子の分離の痛みと主体的自己の獲得</p>	<p>単</p>	<p>平成 25 年 11 月</p>	<p>芦屋大学大学院教育相談研究所研修講座講師</p>	<p>発達障害教育にまつわる注意点や、心理臨床学的考察として発達という視点がいかに重要であるかについて典型的事例を提示して述べた。</p>
<p>高機能自閉症女子への心理療法—埋没からメンタライゼーションの回復という見方—:</p>	<p>単</p>	<p>平成 24 年 10 月</p>	<p>芦屋大学大学院発達障害教育研究所・秋季研修講座講師</p>	<p>思春期には家族が抱える病理が問題化する時期でもある。本学会では、特に母親と子どもの情緒的繋がり断絶が惹き起こすその起因と、子ども発達の概念を Stern の発達論に即して考察した。</p>
<p>発達障害周辺群の理論と臨床—臨床で出会う“独自の発達群”の自己発達</p>	<p>単</p>	<p>平成 26 年 10 月</p>	<p>日本心理臨床学会第 31 回大会 学会発表</p>	<p>母親からの脱同一化を課題にした青年期の女子の自己発達の過程を取り上げ発表した。考察として、本人の持つ軽度の自閉性と母親の子どもへの依存性を中心に、クライアントが母親からの自律に苦しみつつそれを支える心理</p>

<p>HTP テスト                  &lt;家・木・人の描画&gt;から読み解く理論と実際</p>	<p>単</p>	<p>令和元年 8 月</p>	<p>芦屋大学大学院教育相談研究所研修講座講師</p>	<p>療法とは何かについて明らかにした。                  描画療法の一つである HTP テストをワークショップ形式で実践してもらいその読み解きを講義した。</p>
<p>『箱庭療法』                  ～その理論と実際～</p>	<p>単</p>	<p>令和元年 2 月</p>	<p>芦屋大学大学院教育相談研究所研修講座講師</p>	<p>縦 57 cm、横 72 cm の箱で繰り広げられる世界は、その人の内面世界の表現でもあります。箱庭療法をどう読み解いていくかについて専門家へ向けて話した。</p>

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 渡 康 彦						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆ペ ージ数 (総ペ ージ 数)	概 要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
理 科 概 論	1. アクトグラフを 用いたタマネギバ エの自然条件下 での歩行活動の 記録ー小学校理 科教育での応用 の可能性ー	共 著	平成 27 年 6 月	芦屋大学論 叢 63 号	27-35 (9)	野外に近い条件下でのタマネギバエ の成虫の歩行活動リズムを明らかにす るとともに、得られたデータを実験室 (矩形波光周期・一定温度) で得られ たデータと比較することで、自然界に おいて時々刻々と変化する照度や温 度が本種の活動リズムにおよぼす影 響を示した。これらの実験結果の概要 を報告するとともに、 <u>小学校理科の現 場でのアクトグラフの利用可能性や問 題点についても検討した。</u> 著者 渡康 彦、齋藤治、田中一裕(共同研究につ き本人担当部分抽出不可能)
	2. 温度と湿度が キイロショウジョウ バエの羽化におよ ぼす影響ー小学 校理科教育での 応用の可能性ー	共 著	平成 28 年 6 月	芦屋大学論 叢 67 号	47-52 (6)	キイロショウジョウバエは高温で死亡率 が高くなり、30℃ではほとんど羽化しな い。ところが、湿度を高くすると死亡率 は減り、羽化率は高くなった。これら の実験結果の概要を報告するとともに、 簡単な装置で出来ることから、 <u>小学校 理科の現場での同様な実験を行う可 能性や問題点についても検討した。</u> 著 者 渡康彦、森田健一、田中一裕(共 同研究につき本人担当部分抽出不可 能)

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【著書】 1 大学生生活入門(共著)	共著	平成 31 年 4 月	開成出版	「教育上の能力に関する事項」を参照
【学術論文】 1 Temperature cycle amplitude alters the adult eclosion time and expression pattern of the circadian clock gene period in the onion fly	共著	平成 28 年 1 月	Journal of Insect Physiology, Vol. 86, 54-59	温度格差反応に遺伝子がどう関わっているかを調べた。時計遺伝子 <i>per</i> が 8 度較差と比較して 1 度較差のときの方が早く発現し、それらの差は羽化時刻の温度較差反応に対応していた。Miyazaki, <u>Watari</u> , Tanaka and Goto(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
2 Resetting of the circannual rhythm of the varied carpet beetle <i>Anthrenus verbasci</i> by low-temperature pulses	共著	平成 28 年 10 月	Physiological Entomology, Vol. 41, 390-399	春に蛹になり概年リズムを示すヒメマルカツオブシムシの幼虫期のいろんな時期に数週間の低温パルスを与えた。その結果、低温パルスは冬のシグナルとして、カツオブシムシの概年リズムをリセットすることが分かった。Miyazaki, <u>Watari</u> and Numata. (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
3 Day-to-day variations in the amplitude of the soil temperature cycle and impact on adult eclosion timing of the onion fly	共著	平成 29 年 6 月	International Journal of Biometeorology of Vol. 61, 1011-1016	タマネギバエは、土中の温度較差が小さいほど羽化を早める。自然界では土中の温度較差は日々変異し、変異幅は深さによって異なるが、それらの変異は温度較差反応にあまり影響しないことがわかった。Tanaka and <u>Watari</u> (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
4 温度と湿度がキイロショウジョウバエの羽化におよぼす影響—小学校理科教育での応用の可能性—	共著	平成 29 年 6 月	芦屋大学論叢 67 号 47-52	「教職課程における担当授業科目に関する研究業績等」を参照
5 Dependence of phase setting on temperature amplitude in the circadian eclosion rhythm of the onion fly <i>Delia antiqua</i>	共著	平成 30 年 9 月	Physiological Entomology Vol. 43, 346-354.	タマネギバエの蛹を 1℃較差から 20℃較差までの矩形波と正弦波の温度周期(平均温度 20℃と 25℃)に置いて羽化を比較した。Miyazaki, Tanaka and <u>Watari</u> (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)

6 Northward expansion of the bivoltine life cycle of the cricket over the last four decades	共著	平成 30 年 11 月	Global Change Biology Vol. 24, 5622-5628.	日本各地からシバズを採集し頭幅を測った結果、40 年前 (Masaki, 1978) と比較してノコギリ型のクラインが北に移動していることが分かった。これは温暖化の影響と考えられる。Matsuda 他 7 名 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
7 Robustness of latitudinal life-cycle variations in a cricket <i>Dianemobius nigrofasciatus</i> (Orthoptera: Trigonidiidae) in Japan against climate warming over the last five decades	共著	令和元年 11 月	Applied Entomology and Zoology Vol. 54, 349-357.	日本各地からマダラスズを採集し頭幅を測った結果、50 年前と比較してノコギリ型のクラインに統計的な差がなかった。これは温暖化に対してクラインが北に移動したシバズの結果と異なるが、マダラスズの成長速度の光周反応がシバズのそれと違うことによるのかもしれない。Matsuda 他 7 名 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
8 Circadian rhythm in locomotor activity of the common house centipede, <i>Thereuonema tuberculata</i> (Scutigera: Scutigera) (Scutigera)	共著	令和 2 年 6 月	Acta Arachnologica, Vol. 69, 31-35.	ゲジを明暗サイクルに置くと暗期前半にピークをもつ歩行活動リズムを示した。全暗、全明においては、自由継続リズムを示し、スケルトン光周期にも同調した。Tanaka and <u>Watari</u> (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 石田(住本) 愛子						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ページ 数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
器楽 I II III IV	(著書) 1.大学生活入門～ 幼・小・特支教員、 保育士を目指す学 生のためのキャリア デザイン～  (教育実践記録等) 1.《研究ノート》 学生の主体的な学 びを支える指導 ーピアノ個別指導 の場合ー	共    共	平成 31 年 4 月   平成 30 年 3 月	開成出版   芦屋大学論叢 第 69 号	6 (75)   (抽 出不 可) (10)	幼・小・特支教員、保育士を目指す学生 のための、大学生活の心構え、一般教 養、実習関連、免許状取得までのプロセ スについてまとめた指南書。(執筆担当 部分: I 心構え、III 実習に向けて) 第 III 章において、 <u>ピアノ実技についてどのよ うな事前準備が必要か、楽譜の取扱い や選曲のポイントなどを解説した。</u> 著者: 笠原清次、渡康彦、石田愛子(編 著)、竹安知枝、他、全 11 名  <u>ピアノ演奏実技の習得には日々の練習 が不可欠であり、教員免許取得希望学 生には授業時間外の主体的な練習が 求められる。ピアノ学習経験が乏しい学 生に対して、主体的な取り組みを促すに は何か必要か、どのような指導が効果的 か。[器楽]履修学生の実態と、[器楽] 担当教員 7 名による指導の工夫、日々 の具体的な指導方法や学生とのコミュニ ケーションの取り方について紹介し、望 ましい個別指導のあり方について考察し ている。</u> 著者: 石田愛子、稲葉修子、井上邦子、 岩崎智早、柿本久美子、野尻智子、三 宅澄子
初等 教科 教育 法 VI (音 楽)	(教育実践記録等) 1.《研究ノート》 小学校音楽科指導 に対する苦手意識 克服のための試み	単	平成 27 年 1 月	芦屋大学論叢 第 62 号	11	小学校教員を目指す本学学生の多くが 音楽に苦手意識を持ち、小学校での指 導に不安を感じている。その要因とし て、ピアノや歌唱の技術不足、音楽全般 の知識と経験の不足、自分自身が音楽 好きでない、などが挙げられる。 <u>[初等教 科教育法(音楽)]</u> では、 <u>ピアノの苦手意 識で委縮することなく前向きに音楽科指 導に取り組めるように工夫し、リコーダー 実技や器楽合奏などピアノ以外の要素 の向上をはかっている。</u> その実践を通し て見えてくる学生の実態と課題を明らか にするとともに、今後の指導の在り方 について考察した。

保育 内容 VI (表 現- 音楽 リズム)	(学術論文) 1.幼稚園年長児を 対象とした鍵盤ハ ーモニカ指導に関 する一考察一芦屋 大学附属幼稚園で の実践を通して一	共	令和1年7月	芦屋大学論叢 第71号	8 (11)	鍵盤ハーモニカは、小学校低学年の器 楽指導に使用されることが一般的である が、小学校での音楽学習にスムーズに 移行できるようにとの期待もあり、幼稚園 における器楽活動にも広く採用されるよ うになっている。本稿では、芦屋大学附 属幼稚園での実践を通して、 <u>就学前教育としての望ましい鍵盤ハーモニカ指導 のあり方と、年長児を対象とした効果的 な教材や具体的指導法、また指導上の 課題や対応策について考察した。</u> 著者： <u>石田愛子、安藝雅美</u>
	(教育実践記録等) 1.《授業実践》 実践的な音楽力を 養うために 一「保育内容VI(表 現-音楽リズム)」で の試み一	単	平成29年12 月	芦屋大学論叢 第68号	11	保育者に求められる確かな音楽スキルと 豊かな音楽性、実践的な音楽力を身に つけるために、平成29(2017)年度前期 の「保育内容VI(表現-音楽リズム)」で は、これまでの学びを活かし、関連づけ るような授業内容を展開した。 <u>保育のため のピアノ演習、ソルフェージュ、[音楽 リズム、製作、言葉など]の融合と模擬保 育、などの授業実践を報告し、本学学生 の到達度と実態、課題と今後の指導の あり方について考察している。</u>

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【著書】 1.大学生生活入門～幼・小・特 支教員、保育士を目指す学 生のためのキャリアデザイン ～ (※再掲)	共	平成 31 年 4 月	開成出版	幼・小・特支教員、保育士を目指 す学生のための、大学生活の心 構え、一般教養、実習関連、免 許状取得までのプロセスについ てまとめた指南書。(執筆担当部 分: I 心構え、III 実習に向けて) 著者: 笠原清次、渡康彦、石田愛 子(編著)、竹安知枝、他、全 11 名
【学術論文】(再掲) 1.幼稚園年長児を対象とし た鍵盤ハーモニカ指導に関 する一考察－芦屋大学附属 幼稚園での実践を通して－ (※再掲)	共	令和 1 年 7 月	芦屋大学論叢第 71 号	鍵盤ハーモニカは、小学校低学 年の器楽指導に使用されることが 一般的であるが、小学校での音 楽学習にスムーズに移行できるよ うにとの期待もあり、幼稚園にお ける器楽活動にも広く採用される ようになっている。本稿では、芦 屋大学附属幼稚園での実践を通 して、就学前教育としての望まし い鍵盤ハーモニカ指導のあり方 と、年長児を対象とした効果的な 教材や具体的指導法、また指導 上の課題や対応策について考察 した。 著者: 石田愛子、安藝雅美
【その他(講演や発表)】 (演奏会、公開講座におけ る演奏)				
1.特別公開講座「舞曲を踊っ てみよう」		平成 28 年 1 月	大阪府立夕陽丘高校 音楽科	ピアノ演奏、講師・共演: 樋口裕 子(バロックダンス)
2.特別授業「バロック時代の ダンス」		平成 28 年 2 月	兵庫県立西宮高校音 楽科	チェンバロ演奏、講師・共演: 樋 口裕子(バロックダンス)
3.京都市立芸術大学音楽学 部第 35 期生はんなりコンサ ート		平成 28 年 8 月	堀江アルテ	ヘンデル《ヴァイオリンと通奏低音 のためのソナタ イ長調 Op1-3 HWV361》、モーツァルト《フィガロ の結婚》より、チェンバロ/オルガ ン演奏
4.藤原台コール・カリヨン 30 周年記念コンサート		平成 28 年 9 月	ありまホール	合唱曲ピアノ伴奏、 ドビュッシー《ヒースの茂る荒地 地》ピアノ独奏
5.ザ・ハープシコード・カンパ ニー コンサート No.20		平成 28 年 9 月	アクア文化ホール音楽 室	J.S.バッハ《ゴルトベルク変奏曲 BWV988》より、チェンバロ独奏、 曲目解説、マンチーニ《リコーダ ーと通奏低音のためのソナタ ト 短調》通奏低音

6.特別授業(児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験)「3拍子の舞曲を踊ってみよう」		平成29年2月	兵庫県立西宮高校音楽科	チェンバロ演奏、講師・共演:樋口裕子(バロックダンス)
7.ザ・ハーブシコード・カンパニー コンサート No.21		平成29年9月	アクア文化ホール音楽室	J.S.バッハ《半音階的幻想曲とフーガ BWV903》チェンバロ独奏、曲目解説、ベッリンツァーニ《リコーダーと通奏低音のためのソナタハ短調》通奏低音
8.特別授業(児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験)「バロック時代のダンス」		平成30年2月	兵庫県立西宮高校音楽科	チェンバロ演奏、講師・共演:樋口裕子(バロックダンス)
9.エルンスト・ザイラー先生追悼コンサート		平成30年6月	京都府立府民ホールアルティ	シューマン、ブラームスの歌曲ピアノ伴奏、共演:島村泰子(ソプラノ)
10.ザ・ハーブシコード・カンパニー コンサート No.22		平成30年9月	アクア文化ホール音楽室	J.S. バッハ 《フランス序曲 BWV831》より、チェンバロ独奏、曲目解説、J.S.バッハ《リコーダーと通奏低音のためのソナタ ホ長調 BWV1035》通奏低音
11.指導者研修(中級研修)「一感性を磨く一コンサート」		平成30年12月	加佐ノ岬倶楽部音楽療法研究所主催、神戸ホテルフルーツフラワー	メンデルスゾーン《無言歌集》より〈甘い思い出〉〈狩りの歌〉〈ベネチアの舟歌〉他、ピアノ独奏、歌曲・合唱曲ピアノ伴奏
12.藤原台コール・カリヨン水無月コンサート		令和1年6月	ありまホール	合唱曲ピアノ伴奏、ブラームス《ワルツ》、ビゼー《メヌエット》ピアノ独奏
				以上

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 大江 まゆ子						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ペー ジ数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
幼児 理解 の理 論と 方法 (単 独)	(著書) 1. 新しい保育・幼 児教育方法論	共	平成 25 年 3 月	ミネルヴァ書 房	52 (208)	(再掲のため、略)
	2. 保育実習 基本 保育シリーズ⑳	共	平成 28 年 1 月	中央法規	12 (290)	(再掲のため、略)
	3. 保育実習 基本 保育シリーズ⑳ 〔第 2 版〕	共	平成 31 年 2 月	中央法規	12 (292)	(再掲のため、略)
	(学術論文) 1. ルソー思想にお ける「子ども」概 念成立の周辺概 念に関する一考 察	単	平成 23 年 10 月	芦屋学園短期 大学研究紀要 第 38 号	26	主著『エミール』を中心に、ルソーの「子 ども」概念を成立させる周辺概念を考察 することにより、ルソーの重視する「子 ども」には、“時期としての子ども”と社会に おける“存在としての子ども”が意味され ていることを明らかにした。これは「自然 」との直接性、無媒介性を志向する結果、 見出された概念であり、ルソー思想にお ては人間が自己実現して生きていくこと を求めた結果として、「子ども」概念が産 出されたことを考察した。
	(教育実践記録等) <学会発表> 1. 保育者志望学生 の幼児理解にお ける複眼的思考 の涵養(1)	共 (筆 頭)	平成 27 年 5 月	日本保育学会 第 68 回大会 於 椋山女学園 大学	1	自己の片面的理解でなく、多様な視点 から物事を捉える複眼的思考の涵養を ねらい導入したエピソード形式の実習記 録を用いて、学生の実習ごとの学びの 実情を明らかにすることを目的とした発 表。最初の実習では子ども理解よりも観 察による保育者理解に学びの関心があ り、徐々に子ども理解へと関心が移っ ていくことが示された。実習累積により、 子どもの表面的言動の変容ではなく、内 面的変容を重視する保育観の萌芽と、子 どもの主体性を大事にする子ども理解 及び自己変容が示唆されたと考えられ る。
	2. 保育者志望学生 の幼児理解にお ける複眼的思考 の涵養(2)	共	平成 27 年 5 月	日本保育学会 第 68 回大会 於 椋山女学園 大学	1	附属幼稚園で 1 人の子どもの学びに焦 点を当てた観察実習を行い、幼児理解 における成績上位者と下位者の学びの 特性を明らかにした。上位者は、保育者 としての使命を自分の力で子どもを成長 (変容)させていくことと捉えているのに 対し、下位者は子どもの視点に立ち側 面からの援助を行うことと捉えている。ま た上位者は、様々な経験から総合的に 学んでいくが、下位者は保育現場など での体験を通して学んでおり、子どもに 合わせ柔軟に自己変容する能力に優れ ていることが示唆された。
	3. 保育者志望学生 の幼児・障 碍児 理解にお ける複 眼的 思考の 涵養	共	平成 27 年 5 月	日本保育学会 第 68 回大会 於 椋山女学園 大学	1	障害者と学生によるふれあい体験の実 施から、体験学習の効果測定を行った。 学生は体験学習の前後で、実習への意 欲、自己肯定意識、他者意識、学習意 欲の 4 群を全 27 項目のブリコード式と自 由記述によるアンケートを実施した。そ の結果、平均値比較では、全項目にお いて体験学習の効果は上昇しているこ とがわかった。特に、学習意欲に関する意

						欲低下の逆転項目に関する数値は改善している傾向があり、障害者体験を通して多様性理解に通じる学習に刺激を与えていることを示唆する結果となった。
教育 実習 事前 指導 【幼 稚園】 (複数)	(著書) 1. 教職をめざす人のための教育用語・法規	共	平成 24 年 6 月	ミネルヴァ書房	5 (312)	(再掲のため、略)
	2. 保育実習 基本保育シリーズ⑳	共	平成 28 年 1 月	中央法規	12 (290)	(再掲のため、略)
	3. 保育実習 基本保育シリーズ⑳ [第 2 版]	共	平成 31 年 2 月	中央法規	12 (292)	(再掲のため、略)
	4. 大学生活入門～幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン～	共	平成 31 年 4 月	開成出版社	17 (75)	(再掲のため、略)
(学術論文) 1. 保育者養成における模擬保育の教育的効果—実習の充実に向けた指導案作成力向上と教員による模擬保育の意義—	共 (筆頭)	平成 26 年 3 月	芦屋学園短期大学研究紀要第 40 号	16	保育者養成校における実習指導法の一環として、学生間での模擬保育と教員による模擬保育の教育効果に関する研究である。質問紙調査から、学生主体の模擬保育のみでは保育者及び子どもの動きをイメージしにくく、特に指導案作成力の向上という点からは学びが深まりにくいことが明らかになり、教員による模擬保育は、保育者及び子どもの姿のイメージが得られやすく、指導内容の工夫や保育者の配慮という点で、有効に作用するという結果が明らかになった。大江まゆ子、西條喜博、新家智子	
2. 保育者志望学生の実習累積による変容過程に関する一考察—エピソード形式の実習記録からみる学生の学びと育ち— (査読付)	共 (筆頭)	平成 28 年 3 月	全国保育士養成協議会『保育士養成研究』第 33 号	10	本論文では、エピソード形式の実習記録から、学生の学びの視点と実習段階ごとの学びの実情を浮上させ、実習累積による学生の変容過程モデルを探索的に生成した。その結果、最初の実習では保育者の姿から全体的な保育イメージと保育者役割を掴み、次の実習で子どもとの関わりを模索し始め、最後の実習では関わりを生む過程に焦点を当てて学ぶ実習生の実情が示された。大江まゆ子、木下隆志、大谷彰子、片岡章彦	
3. エピソード実習記録を用いた学生の学びの実情—記録時に感じる学生の困難感に焦点を当てて—	共 (筆頭)	平成 28 年 3 月	芦屋学園短期大学研究紀要第 42 号	20	エピソード形式の実習記録を用いた学生の学びの実情の内、学生が感じる困難さに焦点を当て、困難を生む問題を探索的に調査し、分析、構造化することを目的とした論文である。その結果、困難を生む潜在的要因として【忙しさによる感動の喪失】【強いられる矛盾】【記録化の困難】【理解に向かう揺れ】という概念が浮上し、構造的要因としては書く困難と捉える困難に大別された。構造化により、実習で深い学びを得るためには、実習生特有の忙しさと強制感からの脱却が鍵となることが示唆された。大江まゆ子、大谷彰子、木下隆志、片岡章彦	
(教育実践記録等) <その他> 1. 保育実習・幼稚園教育実習のハンドブック	共	令和 2 年 3 月		84	実習の意義と目的、実習先の決定、オリエンテーション、実習生としての心構え、実習記録、エピソード記録、指導案、細案の書き方、お礼状の書き方など、実習	

						に求められる全般的な内容について記入例と共に具体的な資料を作成、掲載した。
教育実習事後指導【幼稚園】	(著書) 1. 教職をめざす人のための教育用語・法規	共	平成 24 年 6 月	ミネルヴァ書房	5 (312)	(再掲のため、略)
	2. 保育実習 基本保育シリーズ⑩	共	平成 28 年 1 月	中央法規	12 (290)	(再掲のため、略)
	3. 保育実習 基本保育シリーズ⑩〔第2版〕	共	平成 31 年 2 月	中央法規	12 (292)	(再掲のため、略)
	4. 大学生活入門～幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン～	共	平成 31 年 4 月	開成出版社	17 (75)	(再掲のため、略)
	(学術論文) 1. 保育者養成における模擬保育の教育的効果—実習の充実に向けた指導案作成力向上と教員による模擬保育の意義—	共(筆頭)	平成 26 年 3 月	芦屋学園短期大学研究紀要第 40 号	16	(再掲のため、略)
2. 保育者志望学生の実習累積による変容過程に関する—考察—エピソード形式の実習記録からみる学生の学びと育ち—(査読付)	共(筆頭)	平成 28 年 3 月	全国保育士養成協議会『保育士養成研究』第 33 号	10	(再掲のため、略)	
3. エピソード実習記録を用いた学生の学びの実情—記録時に感じる学生の困難感に焦点を当てて—	共(筆頭)	平成 28 年 3 月	芦屋学園短期大学研究紀要第 42 号	20	(再掲のため、略)	
(教育実践記録等) <その他> 1. 保育実習・幼稚園教育実習のハンドブック	共	令和 2 年 3 月		84	(再掲のため、略)	
教育実習【幼稚園】	(著書) 1. 教職をめざす人のための教育用語・法規	共	平成 24 年 6 月	ミネルヴァ書房	5 (312)	(再掲のため、略)
	2. 保育実習 基本保育シリーズ⑩	共	平成 28 年 1 月	中央法規	12 (290)	(再掲のため、略)
	3. 保育実習 基本保育シリーズ⑩〔第2版〕	共	平成 31 年 2 月	中央法規	12 (292)	(再掲のため、略)
	4. 大学生活入門～幼・小・特支教員、保育士を目指す学生	共	平成 31 年 4 月	開成出版社	17 (75)	(再掲のため、略)

	<p>のためのキャリアデザイン～</p> <p>(学術論文)</p> <p>1. 保育者養成における模擬保育の教育的効果—実習の充実に向けた指導案作成力向上と教員による模擬保育の意義—</p> <p>2. 保育者志望学生の実習累積による変容過程に関する—考察—エピソード形式の実習記録からみる学生の学びと育ち—(査読付)</p> <p>3. エピソード実習記録を用いた学生の学びの実情—記録時に感じる学生の困難感に焦点を当てて—</p> <p>(教育実践記録等) &lt;その他&gt;</p> <p>1. 保育実習・幼稚園教育実習のハンドブック</p>	<p>共 (筆頭)</p> <p>共 (筆頭)</p> <p>共 (筆頭)</p> <p>共</p>	<p>平成 26 年 3 月</p> <p>平成 28 年 3 月</p> <p>平成 28 年 3 月</p> <p>令和 2 年 3 月</p>	<p>芦屋学園短期大学研究紀要第 40 号</p> <p>全国保育士養成協議会『保育士養成研究』第 33 号</p> <p>芦屋学園短期大学研究紀要第 42 号</p>	<p>16</p> <p>10</p> <p>20</p> <p>84</p>	<p>(再掲のため、略)</p> <p>(再掲のため、略)</p> <p>(再掲のため、略)</p> <p>(再掲のため、略)</p>
<p>観察実習【幼稚園】</p>	<p>(著書)</p> <p>1. 教職をめざす人のための教育用語・法規</p> <p>2. 保育実習 基本保育シリーズ⑳</p> <p>3. 保育実習 基本保育シリーズ⑳〔第 2 版〕</p> <p>4. 大学生活入門～幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン～</p> <p>(学術論文)</p> <p>1. 保育者養成における模擬保育の教育的効果—実習の充実に向けた指導案作成力向上と教員による模擬保育の意義—</p> <p>2. 保育者志望学生の実習累積による変容過程に関する—考察—エピソード形式の実習記録からみる学生の学びと育ち—(査読付)</p>	<p>共</p> <p>共</p> <p>共</p> <p>共</p> <p>共 (筆頭)</p> <p>共 (筆頭)</p>	<p>平成 24 年 6 月</p> <p>平成 28 年 1 月</p> <p>平成 31 年 2 月</p> <p>平成 31 年 4 月</p> <p>平成 26 年 3 月</p> <p>平成 28 年 3 月</p>	<p>ミネルヴァ書房</p> <p>中央法規</p> <p>中央法規</p> <p>開成出版社</p> <p>芦屋学園短期大学研究紀要第 40 号</p> <p>全国保育士養成協議会『保育士養成研究』第 33 号</p>	<p>5 (312)</p> <p>12 (290)</p> <p>12 (292)</p> <p>17 (75)</p> <p>16</p> <p>10</p>	<p>(再掲のため、略)</p> <p>(再掲のため、略)</p> <p>(再掲のため、略)</p> <p>(再掲のため、略)</p> <p>(再掲のため、略)</p> <p>(再掲のため、略)</p>

	3. エピソード実習記録を用いた学生の学びの実情—記録時に感じる学生の困難感に焦点を当てて—  (教育実践記録等) <その他> 1. 保育実習・幼稚園教育実習のハンドブック	共 (筆頭)	平成 28 年 3 月	芦屋学園短期大学研究紀要第 42 号	20	(再掲のため、略)
		共	令和 2 年 3 月		84	(再掲のため、略)
参加実習【幼稚園】	(著書) 1. 教職をめざす人のための教育用語・法規	共	平成 24 年 6 月	ミネルヴァ書房	5 (312)	(再掲のため、略)
	2. 保育実習 基本保育シリーズ⑳	共	平成 28 年 1 月	中央法規	12 (290)	(再掲のため、略)
	3. 保育実習 基本保育シリーズ⑳[第 2 版]	共	平成 31 年 2 月	中央法規	12 (292)	(再掲のため、略)
	4. 大学生活入門～幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン～	共	平成 31 年 4 月	開成出版社	17 (75)	(再掲のため、略)
	(学術論文) 1. 保育者養成における模擬保育の教育的効果—実習の充実に向けた指導案作成力向上と教員による模擬保育の意義—	共 (筆頭)	平成 26 年 3 月	芦屋学園短期大学研究紀要第 40 号	16	(再掲のため、略)
	2. 保育者志望学生の実習累積による変容過程に関する—考察—エピソード形式の実習記録からみる学生の学びと育ち—(査読付)	共 (筆頭)	平成 28 年 3 月	全国保育士養成協議会『保育士養成研究』第 33 号	10	(再掲のため、略)
	3. エピソード実習記録を用いた学生の学びの実情—記録時に感じる学生の困難感に焦点を当てて—	共 (筆頭)	平成 28 年 3 月	芦屋学園短期大学研究紀要第 42 号	20	(再掲のため、略)
	(教育実践記録等) <その他> 1. 保育実習・幼稚園教育実習のハンドブック	共	令和 2 年 3 月		84	(再掲のため、略)

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【学術論文】 1 保育者志望学生の実習累積による変容過程に関する一考察 —エピソード形式の実習記録からみる学生の学びと育ち— (査読付)	共(筆頭)	平成 28 年 3 月	全国保育士養成協議会『保育士養成研究』第 33 号	(再掲のため、略)
2 エピソード実習記録を用いた学生の学びの実情 —記録時に感じる学生の困難感に焦点を当てて—	共(筆頭)	平成 28 年 3 月	芦屋学園短期大学研究紀要第 42 号	(再掲のため、略)
3 乳幼児ふれあい体験における学生と母親の意識の変容	共	平成 28 年 3 月	芦屋学園短期大学研究紀要第 42 号	5 回の乳幼児と母親とのふれあい体験での学生と母親の意識変容を明らかにした。両者は赤ちゃんを足懸りに【相手理解】と関わりの【自己省察】をし、回数を重ねることで【愛着形成】している。受容、承認されることによる【自尊感情】の育ちから、学生は【実習・学び・将来】、母親は【社会貢献】への【意欲】に繋がる成長サイクルを描いている。体験を通し学生の関心は、【相手理解】や【育児理解】といった外界に向かい、母親の関心は自身の【自尊感情】といった内界に向けられていることが示唆された。大谷彰子、木下隆志、大江まゆ子、片岡章彦、p. 59～p. 77、頁数 15
4 保育者養成校における「保育体験学習」の教育効果に関する一考察 —保育体験学習は学生にどのような変容をもたらしているのか—	共(筆頭)	平成 29 年 3 月	芦屋学園短期大学研究紀要第 43 号	保育体験学習の教育効果の検証を目的とし3校の学生を調査し、効果的な保育体験学習の実施について考察した論文。学生変容の図解化により、【保育者を目指す自覚】と【保育者意識】をつなぎ、保育者としての自覚と意識の往還を可能にするものとして「子どものための保育者になりたい」という変容が示された。また、事前学習の充実と体験学習に振り返りとして実施園保育者と質疑応答時間を設けるといった保育現場との協働による体験プログラムが教育効果を高める上で有効であると示唆された。大江まゆ子、大谷彰子、木下隆志、その他3名、p. 25～p. 44、頁数 19
5 保育者養成校における「体験学習」による学びの深化—体験内容の質的差異による学生の学びの認識から—	共	平成 29 年 3 月	芦屋学園短期大学研究紀要第 43 号	3 大学で共同調査した 6 種類の体験学習の質的差異による学生の学びの深化を比較検証した。体験学習での学びを生起させる要因として、対象者の有無やふれあい時間の長さ、自己裁量度合い、体験内で自己省察できる時間的余裕などに影響されている。体験学習の際には、感染動機を刺激する体験環境の構成、教育的意図に合わせた体験の自由度、自己裁量度合いの工夫、事前・事後学習の充実、体験自体をアセスメントする視点が肝要であることが示された。大谷彰子、大江まゆ子、木下隆志、その他3名、p. 45～p. 62、頁数 18

<p>6 保育者養成の質の向上につながる体験学習のしくみを考察する</p>	<p>共</p>	<p>平成 29 年 3 月</p>	<p>芦屋学園短期大学研究紀要第 43 号</p>	<p>保育士養成校の実習前教育の補助的授業として、体験学習を取り入れている 3 大学の比較検証を行った。体験学習の習得目的に添った内容について、その検証や、どの時期に効果的な体験学習を実施するかといった測定を行った先行研究は少ない。今回、実習への意欲、自己肯定意識、学習意欲、他者評価の 4 類型における 27 項目のアンケート調査より体験学習事前事後の効果測定の結果をまとめた。木下隆志、大江まゆ子、大谷彰子その他 3 名、p.5～p.24、頁数 19</p>
<p>7 生涯発達の視点からみた養育者—子ども関係におけるバウンダリーズ概念の重要性について</p>	<p>共(筆頭)</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>芦屋学園短期大学研究紀要第 44 号</p>	<p>生涯発達の視点から親や保育者といった養育者—子ども関係における境界線形成についての考察を目的とし、バウンダリーズ理論とスター・ペアレンティング理論及びNPO 法人教育政策ラボラトリの子育てワークショップ理論との比較検討を実施。養育者が子どもとの主体的関係を実現するには、一貫した姿勢で境界線を示す具体的方法や選択肢の紹介に加え、養育者同士の励まし合いを重視する点が共通に確認された。関係形成の鍵を握る養育者を支えることで、養育者自身が自律的に判断する力を身に付け、子どもの主体的成長を実現する相互の成長プロセスを重視する視点が浮上した。大江まゆ子、太田雅子、福田充男、p.59～p.83、頁数 25</p>
<p>8 『バウンダリーズ』概念の保育(育児)実践への適応</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>聖隷クリストファー大学社会福祉学部研究紀要第 16 号</p>	<p>アメリカの臨床心理学者であるヘンリー・クラウドとジョン・タウンゼントが提唱したバウンダリーズ概念の保育・育児実践への適用を目的とした論文。バウンダリーズの原則や方法の整理、評価を行い、対話的保育理論やNPO 教育政策ラボラトリの実施する子育てワークショップとの理論比較により、バウンダリーズ理論との共通性と差異性の検討を行った。養育者、子ども双方が主体的で自立的な関係形成を目指す際、バウンダリーズ概念が他律から自律に向かうアプローチに有効であることを確認した。太田雅子、大江まゆ子、福田充男、p.11～p.29、頁数 19</p>
<p>9 幼児の規範意識に対する学生の援助と保育観の変容-入学直後と卒業間近のエピソード記述の比較から-</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>芦屋学園短期大学研究紀要第 44 号</p>	<p>ルール違反を行った子どもへの援助と保育観の捉え方について、入学時と卒業時に変容する保育観をエピソード記録より分析を行った。その結果、入学時にはルールを逸脱する子どもへの指摘、「権力的かかわり」が多いのに対し、子どもの葛藤や喜びに共感する子どもの主体的な学びを尊重する「子どもの主体性重視」を大切にすることがわかった。大谷章子、木下隆志、大江まゆ子、岸本朝予 p.85～p.104、頁数 16</p>

<p>10 保育士養成校における体験学習の効果と実用性を検証する-重度心身障害者との触れ合い体験から-</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>芦屋学園短期大学研究紀要第 44 号</p>	<p>体験学習における学びの主体性を伸ばすことを目的とした「重度心身障害者との触れ合い体験」をとおして実施前後のアンケート結果より、学習効果についての検証を行った。その結果、「実習に必要な姿勢」、「学習意欲」、「他者意識」、「自己肯定意識」において、体験を通して学ぶ意欲は高くなっていることがわかった。しかし、回数を重ねるごとに、実習への意欲が顕著に高くなり、評価のための学びへの傾向や形骸化する回答といった要因もみられることがわかり、今後の課題とした。木下隆志、大江まゆ子、大谷章子、岸本朝予 p. 17～p. 35、頁数 14</p>
<p>11 「保育体験学習」を通じた学生の学びの変化に関する一考察-3 校の保育者養成における質問紙調査から-</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>大阪人間科学大学紀要</p>	<p>保育養成校の 3 校における体験学習の効果について調査を行った結果、体験学習の事前から事後において学びの効果が確認できた。各アンケート項目の要因分析を行った結果、学生の心理的側面に影響を与えていることが検証できた。野呂育未、木下隆志、大江まゆ子、大谷章子、小林志保、原田健次 p. 103～p. 110、頁数 8</p>
<p>12 夜間保育の歴史の変遷と夜間保育を取りまく環境の考察 夜間保育をめぐる文献研究から(査読付)</p>	<p>単</p>	<p>令和元年 12 月</p>	<p>人間環境学研究 17 巻 2 号</p>	<p>夜間保育に関する文献研究から日本の夜間保育の歴史の変遷を概観し、夜間保育を要する子ども、保護者、保育者を取り巻く環境を考察することで保育的な今日の議論に一つの問題提起を行うことを目的とした論文。本研究により社会環境の観点では夜間保育における汰領域の課題の存在が示され、個人の観点では多くの人々による「夜間保育」への多様な考えや葛藤が確認された。これにより夜間保育を必要とする家族への支援が十分に提供されていないことが示唆されたと考えられる。 p. 127-138</p>

【その他(講演や発表)】				
1 保育者志望学生の幼児理解における複眼的思考の涵養(1)	共 (筆)	平成 27 年 5 月	日本保育学会第 68 回大会 於椋山女学園大学	(再掲のため、略)
2 保育者志望学生の幼児理解における複眼的思考の涵養(2)	共	平成 27 年 5 月	日本保育学会第 68 回大会 於椋山女学園大学	(再掲のため、略)
3 保育者志望学生の幼児・障害児理解における複眼的思考の涵養	共	平成 27 年 5 月	日本保育学会第 68 回大会 於椋山女学園大学	(再掲のため、略)
4 体験学習「赤ちゃん先生」からの一考察	共 (筆)	平成 27 年 9 月	全国保育士養成協議会第 54 回研究大会、 於ロイトン札幌	体験学習「赤ちゃん先生」(0～3歳の乳幼児とその母親との触れ合い体験)による学生の変容の検証を目的とした発表。体験後は両学年共に学習意欲、自己肯定感、他者理解への意欲が高まり、「赤ちゃん先生」の教育効果が示された。具体的変化として〈保育者志望意欲の高まり〉、〈子への成り込みによる感謝と自尊感情の芽生え〉が学年共通に見られ、1年は赤ちゃんとの触れ合いから、2年は保護者との関わりから学びを見出す傾向があることが示された。
5 保育者養成課程における体験学習と学生の変容(1)	共 (筆)	平成 28 年 5 月	日本保育学会第 69 回大会、於東京学芸大学	保育者養成課程における効果的な体験学習(内容・時期等)の検討・構築の一助とすることを目的とし、体験学習「赤ちゃん先生」(0～3歳の乳幼児とその母親との触れ合い体験)による学生の学年別変容を検証した発表。その結果、1年は目の前の相手理解に学び意識が働く傾向が高いのに対し、2年は関わり手としての自己意識を前提とし、相手理解に向けて相手の状況、抱えている気持ち理解に努め、その上でどう関わるべきかを考える傾向が高い実情が窺えた。
6 保育者養成課程における体験学習と学生の変容(2)	共	平成 28 年 5 月	日本保育学会第 69 回大会、於東京学芸大学	学生の学習意欲や基礎的能力の課題を明らかにし、乳幼児ふれあい体験の効果を検証した。学生は、自身の能力や認められた経験の不足、実習の困難感から自己効力感の低下と学習・保育者への意欲の減退を招いており、意欲の向上には、実習の達成感や能力の向上、学びの面白さといった内発的要因が有効である。乳幼児ふれあい体験では、「自己受容」「自己肯定感」「授業・実習・保育者への意欲」や「学びへの興味」の向上に有効であり、2年生の変容が顕著で、体験を自身のことに引き付けて考察する能力の育ちが体験をより効果的にしていることが窺えた。
7 保育者養成の質の向上に繋がる、体験学習の仕組みを考察する	共	平成 28 年 8 月	全国保育士養成協議会第 55 回研究大会、 於いわて県民情報交流センター「アイーナ」	体験学習の構造化に関する指標について、3大学の共同調査を実施した。各大学で実施される体験学習について、その前後で、27項目、および、各大学のディプロマポリシーに関する8項目について、プリコード式と自由記述によるアンケートを実施した。その結果、平均値比較では、全項目において体験学習の効果は上昇していることがわかった。3大学の

<p>8 体験学習「赤ちゃん先生」による学生・母親の変容(1)</p>	<p>共</p>	<p>平成 29 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 70 回大会、於川崎学園(川崎医療福祉大学・川崎医療短期大学・川崎医療大学)</p>	<p>共通した体験学習の結果として、学生が将来像を推測しやすい体験では、ほとんどの項目で有意差を示す結果となり、学習効果の有用性を示すことができた。また、相関のある項目から実施時期と学習内容の関係を示すことを試みた。</p> <p>短期大学 2 年間 4 回の継続した「赤ちゃん先生」実施による学生の変容と学びの深化検証を目的とした発表。学生は内発的な「理解動機」を持ち、「赤ちゃん・母親理解」や「子育て理解」することを学びと捉える傾向が高く、全体の 40%以上を占めていた。他の学びの視点である「技」は開催ごとに減少し「保育の本質理解」は増加している。初めは表層的な理解、次にその行為意図を自分なりに読み取り、それに即した援助をしようと即応的实践力が育っている学生も多く見られた。教育的意図があっても表層的な学びに止まる者、意図以上に創発的な学びをする者もあり、体験学習での個々の学びの評価と学びの共有化のシステム構築が課題である。</p>
<p>9 体験学習「赤ちゃん先生」による学生・母親の変容(2)</p>	<p>共(筆)</p>	<p>平成 29 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 70 回大会、於川崎学園(川崎医療福祉大学・川崎医療短期大学・川崎医療大学)</p>	<p>「赤ちゃん先生」実施による母親の変容を調査、検証することを目的とした発表。母親に最も変容が見られたのは自己肯定意識で変容の 51%を占め、次いで学習意識 33%、他者意識 16%の上昇が見られ、「赤ちゃん先生」実施は母親の自己肯定意識の高まりに最も効果があり、2 年を対象とした開催の方が、変容が大きいと示された。養成校における「赤ちゃん先生」の実施が、母親に特有のある種のみからの解放を齎すものであれば、学生、子ども、母親にとって大きな意味を持ち、社会により循環を齎す取り組みと位置づけられると推察される。</p>
<p>10 乳幼児ふれあい体験の効果的プログラムの実践 一学年全体開催とゼミでの少人数継続開催との比較を通して一</p>	<p>共</p>	<p>平成 29 年 8 月</p>	<p>日本教育情報学会第 33 回年会 於芦屋大学</p>	<p>乳幼児ふれあい体験における集団開催と少人数開催の学びの変容を比較、検証し、より効果的な体験学習を考える一助とすることを目的とした発表。すべての体験学習が能動的学修に繋がるのではなく、主体的に関わらざるを得ない人数設定、同じ母子との密接な関わりからくる関係形成など、没頭できる環境や時間の保障が肝要であることが示された。学生と母親(教員)との関係が互恵的である時、効果的変容と学生の能動性が引き出されていた。</p>
<p>11 妊娠期から育児期の情報ニーズおよび支援ニーズに関する予備調査 I</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>日本保育者養成教育学会第 2 回大会 於共立女子大学</p>	<p>妊娠期・育児期の情報および支援ニーズを把握し、超早期からの子育て支援の構築を目的とし、妊婦、経産婦及び最終出産後 4 年以内の育児中の母親を対象に質問紙調査を行った。妊娠期・育児期の情報源はインターネットや友人・知人など身近で手軽な資源が利用され、公的機関による専門知識はあまり活用されていない実情が示された。また 1 子から 3 子の親準備</p>

<p>12 妊娠期から育児期の情報ニーズおよび支援ニーズに関する予備調査Ⅱ</p>	<p>共 (筆)</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>日本保育者養成教育学会第 2 回大会 於 共立女子大学</p>	<p>プログラムの参加率および不安・関心の選別率の推移から、1 子と 2 子以降では準備に対する意識や不安・関心も異なることが示された。</p> <p>1 子と 2 子以降での妊娠期、育児期の関心と不安の違いについて、得られたテキストデータの分析結果から質的検討を行った。妊娠、育児期は育児経験を問わず「子育て」への関心が高く、2 子以降は「きょうだいの子育て」に関心が最も高い。また、特に 2 子以降は妊娠期から育児期にかけて「上の子どもへの関わり」に不安が最も高く示された。1 子と 2 子以降の妊娠、育児では経験により軽減される不安がある一方、「きょうだいの子育て」という新たな関心・不安への支援が必要とされていることが明らかになった。</p>
<p>13 人間関係の育みにつながる乳幼児ふれあい体験</p>	<p>共 (筆)</p>	<p>平成 30 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 71 回大会、於宮城学院女子大学</p>	<p>ゼミの一環として実施した乳幼児ふれあい体験の内、「ベビーシッター体験」がもたらす学生と母親への変容を人間関係の育ちを中心に考察した発表。子どもとの濃密な関わりを迫られる環境で、学生は【子どもと関わる喜びの強まり】と【子育ての大変さ】を実感し、【保育者意識の深まり】が変容として示され、母親の変容には自らの【育児姿勢】を省み、【関係の喜び】【他者への信頼感の強まり】が示された。両者の変容はその後、自らや他者との向き合いに対する肯定的な心情の変化を持続していることが示された。</p>
<p>14 言葉の育ちにつながる乳幼児ふれあい体験</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 71 回大会、於宮城学院女子大学</p>	<p>能動的に「聞く」環境設定に変更した乳幼児ふれあい体験の効果と、赤ちゃんの言語、非言語メッセージを理解する学生と母親の視点を検証した。事前準備が赤ちゃんを共感的理解し、母親から関わりのヒントを得たいと能動的に「聞く」姿勢に変容している。学生は課題解決型の援助をしており、泣くことを自己表現と肯定的に捉え、関係構築を成長とみる学生は少数であった。一方、母親は他者との関係を築けるようになった自信のある表情などを読み取り、成長と捉え喜びとしている。</p>
<p>15 人的環境の学びにつながる乳幼児ふれあい体験</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 71 回大会、於宮城学院女子大学</p>	<p>授業の一環で行った乳幼児ふれあい体験の中で、学生と乳幼児が互いに唯一の存在となる託児体験を行い、学生と乳幼児がそれぞれ人的環境としてどのような影響を与え合う存在であるかを検証した。学生は乳幼児にとって自分は不安をもたらす否定的存在と自己評価していた。一方母親は楽しさや興味を示しているわが子の姿は、学生を肯定的存在として受け止めているとし、全く対照的な捉えであった。しかし学生にも、乳幼児の声や表情を読み取ろうと積極的に関わろうとする姿があり、自分を肯定的存在へと向</p>

<p>16 夜間保育の現状についての探索的検討—夜間保育をめぐる文献調査から—</p>	<p>単</p>	<p>平成 31 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 72 回大会、於大妻子大学</p>	<p>かわそうとする変容も表れていた。 ニーズと制度があるにもかかわらず、認可夜間保育所が増えないのはなぜかという問題意識のもと、夜間保育がこれまでどのような観点から検討されてきたのかを文献展望を通して探索的に構造化することにより、夜間保育の現状を明確化することを目的とした発表。</p>
<p>17 全国夜間保育園利用児(者)実態調査—子ども・子育て支援新制度下での夜間保育園—【完成版】</p>	<p>共</p>	<p>令和元年 9 月</p>	<p>全国夜間保育園連盟</p>	<p>夜間保育を実施する認可保育施設の多くが加盟する全国夜間保育園連盟による約 10 年ぶりの実態調査の実査を櫻井慶一氏(文教大学名誉教授)とともに担当。全 43 頁。</p>
<p>18 夜間保育施設に求められる家庭支援:2019 年度全国夜間保育園連盟実態調査から</p>	<p>共 (筆)</p>	<p>令和元年 10 月</p>	<p>第 16 回子ども学会議、於首都大学東京</p>	<p>約 10 年ぶりに実施する全国夜間保育園連盟による「2019 年度全国夜間保育園利用児(者)実態調査」から夜間保育施設に求められる家庭支援について考察することを目的とした研究発表。降園時間の深夜化に伴い、母子家庭の子育てに関する特記事項の増加が確認され、深夜に及ぶ夜間就労を必要とする母子家庭の困難さを支えている認可夜間保育施設の実情が示された。</p>
<p>19 夜間保育施設に求められる家庭支援(前編)、(後編)</p>	<p>単</p>	<p>令和2年 4 月</p>	<p>チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)</p>	<p>全国夜間保育園連盟による実態調査から夜間保育施設に求められる家庭支援を考察した論考。調査から降園時間の深夜化に伴い、母子家庭の子育てに関する特記事項の増加が示され、親子の気になる姿として、親の養育力や家庭の孤立感、ひとり親家庭の子育て困難といった家庭の状況が浮上した。夜間保育施設に求められる家庭支援の役割の最重要事項の一つに、夜間保育を要する親子の子育てを含む生活の困難を軽減させ、親子ともに安心して生活することが保障される、地域のセーフティネットとしての機能が示唆された。</p>
<p>&lt;研究助成&gt; 1 保育養成校協議会近畿ブロック研究助成</p>	<p>共同</p>	<p>平成 27 年 9 月～平成 28 年 8 月</p>	<p>保育養成校協議会近畿ブロック研究会</p>	<p>各養成校それぞれの体験学習を受ける学生を対象とし、体験学習の事前事後にアンケート調査を実施する。また、各養成校における体験学習の実施時期、ねらい、効果を比較、検証し、体験学習の在り方について考察する。助成 150 千円</p>

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 大谷 彰子						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
保育 内容 IV (言葉)	(著書) 『新しい幼児教育方法・ 指導法』改訂	共	平成25年3月 (改訂平成29年3月)	ミネルヴァ書房	4	学生や保育者を対象にした幼児の教育方法や指導法についてのテキスト。 具体的な事例をまじえ、保育現場における幼児教育方法の理論と保育の展開を分かりやすく解説している。(全12章) 以下の項目を執筆。 第2章 保育方法の本質 1節 保育の方法とは何か 共著者: 広岡義之、大谷彰子他
	(学術論文) 1「保育者養成課程における実習での自己評価と課題—実習記録の言葉と音楽に関する場面の読み取りから—」 (査読あり)	共	平成24年3月	保育士養成研究 29号 59—68頁	10	学生が実習において自分の保育を振り返り、どのような省察を行ない、実習において何を学び得たのかを明らかにした。学生は、初回の実習では、保育技術や意欲・態度に関する省察を行なっている。一方、最後の実習では、子どもの反応を見て、気持ちを考えながら言葉を掛けるなどの双方向的な保育をしようと工夫している。経験を積むことで、子どもの内面の声を捉えようとする姿勢への変化が明らかとなった。 共著者: 大谷彰子、今井順子、上田智佳
	2 学生・赤ちゃん相互の言葉の育ちにつながる乳幼児ふれあい体験—母親・学生の子ども理解の視点比較から—	単	平成31年3月	芦屋学園短期大学紀要 45号 21—41頁	20	乳幼児ふれあい体験を通し、学生の非言語メッセージ理解の深化と、赤ちゃんの母親以外の人とのふれあいが、言葉の育ちに繋がるのかを検証することであった。赤ちゃんは、学生と関わる際、信用できる人かを母親の様子を見て【相手を見極め】ている。そして、【目を合わせ】、学生に働きかけを促すきっかけ行動【誘いかけ】をおこない、非言語メッセージを【意図的道具性】として使用し、そのサインに学生との間で通用する【協約性】を感じ、その子独自の【原言語】を使用し、【共感】し【愛着・安心】できる関係を築いている。
	(その他)学会発表 1 言葉の育ちにつながる乳幼児ふれあい体験	共	平成30年5月	日本保育学会 第71回大会発表	2	乳幼児ふれあい体験を通して、赤ちゃんの言語、非言語メッセージを学生と母親はどのような視点で「聞き」理解しているのか検証した。学生は非言語メッセージを丁寧に読み取り、赤ちゃんの「笑顔」を目指して不安な感情に共感、代弁し言葉の育ちの基礎としての心の通い合いが認められた。しかし、笑顔になることを目標とした課題解決型の援助になっており、泣くことを自己表現と肯定的に捉え、関係構築を成長とみる学生は少数であった。一方、母親は赤ちゃんが親以外の他者との関係を成長と捉え喜びとしている。 共著者: 大谷彰子、木下隆志、大江まゆ子、岸本朝予

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
<b>【著書】</b> 1『教職を目指す人のための教育用語・法規』		平成 24 年 6 月	ミネルヴァ書房	教員志望者等の学生・一般が対象であるため平易な用語解釈を基本とする教育に関する法規とそれに関する用語解説書である。資料として、「教育ニ関スル勅語」や日本および西洋の教育史年表等も巻末に掲載されている。(46 判 全 297 頁) 以下の用語を解説した。「保育士」「児童福祉法」「児童権利宣言」「幼保一元化」「保育制度」「平和教育」 共著者：広岡義之、猪田裕子、今井博、梅本恵、大江まゆ子、 <u>大谷彰子</u> 、大平曜子、上寺康司、塩見剛一、芝田圭一郎、砂子滋美、津田徹、中田尚美、西本望、福田規秀、松井玲子、松田信樹、吉原恵子
<b>【学術論文】</b> 1「二年生保育者養成校における実習での幼児理解—保育者との比較から—」 (査読付)	単	平成 25 年 3 月	甲子園短期大学紀要 31 号 55—66 頁	二年制保育者養成校の学生 156 名と保育者 194 名に質問紙調査を行い、「気になる子の理解」に対する捉えの認識の差異を明らかにした。学生は、保育者と比較し「気になる子」への関わりと理解への意欲が些少であるが、新任保育者よりも「気になる子」を理解できたとする割合が高かった。「気になる子」を特別視しないことが平等であると捉えており、保育者の資質において向上心の必要性を感じていないことが特徴として挙げられた。
2「保育者養成校での実習における幼児理解—エピソード記録を通して—」 (査読付)	共	平成 26 年 3 月	芦屋学園短期大学紀要 40 号 17—32 頁	保育実習・教育実習においてエピソード記録を描いている学生は、記録が幼児理解につながるかと認識しているのか、その内容についてどのように認識し、保育者との保育の違いをどう捉えているのかについて明らかにした。学生はエピソード記録を描くことが幼児理解に有効であると捉えているが、1 年生は表層的な可視化できる姿や関

<p>3「子ども理解」の捉えの変容プロセス —保育者養成学生と保育者の自己認識と相互の差異認識の比較を通して— (査読付)</p>	<p>共</p>	<p>平成 27 年 3 月</p>	<p>社団法人全国保育士養成協議会 保育士養成研究第 32 号 11—20 頁</p>	<p>わりに止まり、子どもの気持ちより「自分主体」の幼児理解である。2 年になると「子ども主体」の幼児理解に意識が変容している。 共著者:大谷彰子、西條喜博</p> <p>保育者養成校の学生、保育者を対象に、実習・保育経験による「子ども理解」の捉えの変容プロセスの検証を行った。入学直後の学生は、援助を通して自己有用感を味わう「自己満足の理解」。実習前の学生は、対応困難な子どもの「行動理由の理解」。保育実習Ⅱ終了後の学生は、保育者意識の芽生えの「保育者に向かう理解」。保育経験 1~3 年の保育者は、責任の重さと子どもを引き受ける「抱える理解」。経験 4 年以上の保育者は、その子の発達の「見極めの理解」と捉えており、保育者としての幼児理解の深化プロセスについて示唆する結果であった。 共著者:大谷彰子、西條喜博</p>
<p>4「幼児の畑活動と地域の人との関わりに関する研究—幼児と地域の人との関わりを生む、保育者の資質向上を目指して—」(査読付)</p>	<p>共</p>	<p>平成 27 年 10 月</p>	<p>地域福祉サイエンス第 2 号 231—239 頁</p>	<p>本研究は、実践事例、幼稚園での活動観察、保育者に対するアンケートを基に、幼児の畑活動と地域の人との関わりをまとめたものである。研究の過程で、保育者自身の地域の人との関わりに対する意識の高さや、実際の関わりによって幼児の地域の人との関わりに差があることも明らかとなった。その結果を踏まえ、幼児を取り巻く地域の人との関わりを生む、保育者の資質向上にまで言及した。共著者:片岡章彦、木下隆志、大谷彰子、大江まゆ子</p>
<p>5「中高生向け精神保健福祉教材の開発と模擬授業を通じた教材の評価と考察」 (査読付)</p>	<p>共</p>	<p>平成 27 年 10 月</p>	<p>地域福祉サイエンス第 2 号 177—186 頁</p>	<p>精神保健福祉に関する中高生の認知は低く、学内での不登校やいじめにつながるケースも多い。また、疾患の理解が教員や生徒自身に定着することにより、当事者心理や治療経過に大きな影響を与えることがわかっている。これらの取り組みを行う行政や団体の既存資料を比較し、新たに教材を作成する NPO 法人の取り組みについてまとめ、その有用性につ</p>

<p>6「保育者志望学生の実習累積による変容過程に関する一考察 —エピソード形式の実習記録からみる学生の学びと育ち—」 (査読付)</p>	<p>共</p>	<p>平成 28 年 3 月</p>	<p>社団法人全国保育士養成協議会 保育士養成研究第 33 号 1～10 頁</p>	<p>いて検証を行った。その結果、精神疾患の名称の使用の有無、授業内での活用の有無等、内容や実施形態において課題を見出すことができた。これらの結果を背景として、新たな教材コンセプトを提示した。 共著者:木下隆志、<u>大谷彰子</u>、大江まゆ子、片岡章彦</p> <p>本論文では、エピソード形式の実習記録から、学生の学びの視点と実習段階ごとの学びの実情を浮上させ、実習累積による学生の変容過程モデルを探索的に生成した。その結果、最初の実習では保育者の姿から全体的な保育イメージと保育者役割を掴み、次の実習で子どもとの関わりを模索し始め、最後の実習では関わりを生む過程に焦点を当てて学ぶ実習生の実情が示された。 共著者:大江まゆ子、<u>大谷彰子</u>、片岡章彦、木下隆志</p>
<p>7「乳幼児ふれあい体験における学生と母親の意識の変容」</p>	<p>共</p>	<p>平成 28 年 3 月</p>	<p>芦屋学園短期大学紀要 42 号 59－77 頁</p>	<p>5 回の乳幼児と母親とのふれあい体験での学生と母親の意識変容を明らかにした。両者は赤ちゃんを足懸りに【相手理解】と関わり【自己省察】をし、回数を重ねることで【愛着形成】している。受容、承認されることによる【自尊感情】の育ちから、学生は【実習・学び・将来】、母親は【社会貢献】への【意欲】に繋がる成長サイクルを描いている。体験を通し学生の関心は、【相手理解】や【育児理解】といった外界に向かい、母親の関心は自身の【自尊感情】といった内界に向けられていることが示唆された。 共著者:<u>大谷彰子</u>・木下隆志・大江まゆ子・片岡章彦</p>
<p>8「エピソード実習記録を用いた学生の学びの実情 —記録時に感じる学生の困難感に焦点を当てて—」</p>	<p>共</p>	<p>平成 28 年 3 月</p>	<p>芦屋学園短期大学紀要 42 号 39－58 頁</p>	<p>エピソード形式の実習記録を用いた学生の学びの実情の内、学生が感じる困難さに焦点を当て、困難を生む問題を探索的に調査し、分析、構造化することを目的とした論文である。その結果、困難を生む潜在的要因として【忙しさによる感動の喪失】【強いられる矛盾】【記録化の困難】【理解に向かう揺れ】という概念が浮上し、</p>

9「介護保険制度の地域包括ケア移行期に伴う障害者支給決定ガイドラインの検証—ガイドライン下における多職種連携を考察する—」	共	平成 28 年 3 月	芦屋学園短期大学紀要 42 号 25—38 頁	<p>構造的要因としては書く困難と捉える困難に大別された。構造化により、実習で深い学びを得るためには、実習生特有の忙しさと強制感からの脱却が鍵となることが示唆された。</p> <p>共著者:大江まゆ子、<u>大谷彰子</u> 片岡章彦、木下隆志</p> <p>兵庫県下の障害者サービスガイドライン(給付額の標準化)を行う行政市の政策内容を検証するとともに、各市におけるサービス標準支給額の比較検討を行った。また、サービスガイドラインが、障害者固有の社会保障の位置づけとの関係において、妥当性がある制度であるかどうかについて言及した。その結果、各市におけるガイドラインの算出の方法、支給額に違いがあることがわかった。財政課題と社会保障の関係がガイドラインに影響を与えていることがわかり、障害者基本法で示す障害者の権利保障との関係を再検討する必要性を示すことができた。</p> <p>共著者:木下隆志、<u>大谷彰子</u>、大江まゆ子、片岡章彦</p>
10 「保育者養成校における「体験学習」による学びの深化—体験内容の質的差異による学生の学びの認識から—	共	平成 29 年 3 月	芦屋学園短期大学紀要 43 号	<p>3 大学で共同研究した 6 種類の体験学習の質的差異による学生の学びの深化を比較検証した。体験学習での学びを生起させる要因として、対象者の有無やふれあい時間の長さ、自己裁量度合い、体験内で自己省察できる時間的余裕などに影響されている。体験学習の際には、感染動機を刺激する体験環境の構成、教育的意図に合わせた体験の自由度、自己裁量度合いの工夫、事前・事後学習の充実、体験自体をアセスメントする視点が肝要であることが示唆された。</p>
11 アクティブラーニングとしての「赤ちゃん先生」プログラムの検討—学年での集団開催とゼミでの少人数継続開催との比較を通して—	共	平成29平成30年3月8月	地域福祉サイエンス第4号 75—84 頁	<p>乳幼児ふれあい体験における集団開催と少人数制開催での学びの効果と深化を可視化し、アクティブラーニングとなる体験学習の要因を検証した。その結果、①正解のない解決すべき課題がある ②理解したいと思う赤ちゃんとの愛着関係 ③自己開示と相互受容による自己肯定感の補強 ④自らの関わりを省察し、学びを俯瞰できるメタ認知 ⑤「聞く」より「体験」の先行 ⑥他人を意識せず能動的に関われる少人数設定</p>

12 幼児の規範意識に対する学生の援助と保育観の変容ー入学直後と卒業間近のエピソード記述の比較からー	単	平成30年3月	芦屋学園短期大学紀要 44号 85-103頁	<p>⑦没頭できる環境と時間の保障の要件を満たした際にアクティブラーニングとなり、学生は能動的学修者となっていた。 共著者: <u>大谷彰子</u>・木下隆志・大江まゆ子・岸本朝予</p> <p>幼児の遊びの中でのルールに反した行動に対する周囲の子どもへの対応を、人間関係における規範意識という視点で観察し、保育者養成課程の学生の入学直後と卒業前の保育観と援助の変容を明らかにした。入学直後に「否定的理解」であった子ども理解の姿勢が、卒業間近には「肯定的理解」「共感的理解」に、主体者が「保育者主体」から「子ども主体」「相互主体」に、援助方法が「規範重視の権力的かかわり」から「受容・共感的かかわり」に変容していた。しかし、保育者の指示性や指導性を否定的に捉えるようになる学生も多く、子どもと保育者の主体性のバランスが「子ども主体」に傾いている学生もいる。保育者として子どもの規範意識を育成する責任感の醸成が課題としてあげられた。</p>
【その他(講演や発表)】 1「保育者志望学生の幼児理解における複眼的思考の涵養(1)」	共	平成27年5月	日本保育学会第68回大会発表 於椋山女学園大学	<p>自己の一方的理解でなく、多様な視点から物事を捉える複眼的思考の涵養をねらい導入したエピソード形式の実習記録を用いて、学生の実習ごとの学びの実情を明らかにすることを目的とした発表。最初の実習では子ども理解よりも観察による保育者理解に学びの関心があり、徐々に子ども理解へと関心が移っていくことが示された。実習累積により、子どもの表面的言動の変容ではなく、内面的変容を重視する保育観の萌芽と、子どもの主体性を大事にする子ども理解及び自己変容が示唆されたと考えられる。 共著者: <u>大江まゆ子</u>・大谷彰子・木下隆志</p>
2「保育者志望学生の幼児理解における複眼的思考の涵養(2)」	共	平成27年5月	日本保育学会第68回大会発表 於椋山女学園大学	<p>幼稚園で1人の子どもの学びに焦点を当てた観察実習を行い、幼児理解における成績上位者と下位者の学びの特性を明らかにした。上位者は、保育者としての使命を自分の力で子どもを成長(変容)させていくことと捉えているのに対し、下位</p>

<p>3「保育者志望学生の幼児、 障害児理解における複眼的 思考の涵養」</p>	<p>共</p>	<p>平成 27 年 5 月</p>	<p>日本保育学会 第 68 回大会発表 於 椋山女学園大学</p>	<p>者は子どもの視点に立ち側面 からの援助を行うことと捉え ている。また上位者は、様々な 経験から総合的に学んでいく が、下位者は保育現場などでの 体験を通して学んでおり、子ど もに合わせ柔軟に自己変容す る能力に優れていることが示 唆された。 共著者:<u>大谷彰子</u>・木下隆志・大 江まゆ子</p> <p>障害者と学生によるふれあい 体験の実施から、体験学習の効 果測定を行った。学生は体験学 習の前後で、実習への意欲、自 己肯定意識、他者意識、学習意 欲の 4 群を全 27 項目のプリコ ード式と自由記述によるアン ケートを実施した。その結果、 平均値比較では、全項目におい て体験学習の効果は上昇して いることがわかった。特に、学 習意欲に関する意欲低下の逆 転項目に関する数値は改善し ている傾向があり、障害者体験 を通して多様性理解に通じる 学習に刺激を与えていること を示唆する結果となった。 共著者:木下隆志、<u>大谷彰子</u>、 大江まゆ子</p>
<p>4「体験学習「赤ちゃん先生」 からの一考察」</p>	<p>共</p>	<p>平成 27 年 9 月</p>	<p>全国保育士養成協議 会 第 54 回研究大会発表 於 ロイトン札幌</p>	<p>体験学習「赤ちゃん先生」(0～ 3 歳の乳幼児とその母親との触 れ合い体験)による学生の変容 の検証を目的とした発表。体験 後は両学年共に学習意欲、自己 肯定感、他者理解への意欲が高 まり、「赤ちゃん先生」の教育 効果が示された。具体的変化と して〈保育者志望意欲の高まり〉、〈子への成り込みによる感 謝と自尊感情の芽生え〉が学年 共通に見られ、1 年は赤ちゃ んとの触れ合いから、2 年は保 護者との関わりから学びを見出 す傾向があることが示された。 共著者:大江まゆ子、<u>大谷彰子</u> 木下隆志</p>
<p>5 保育者養成課程における 体験学習と学生の変容 (1)</p>	<p>共</p>	<p>平成 28 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 69 回 大会 於 東京学芸大学</p>	<p>保育者養成課程における効果 的な体験学習(内容・時期等)の 検討・構築の一助とすることを 目的とし、体験学習「赤ちゃん 先生」(0～3 歳の乳幼児とその 母親との触れ合い体験)による 学生の学年別変容を検証した 発表。その結果、1 年は目の前</p>

6 保育者養成課程における体験学習と学生の変容 (2)	単	平成 28 年 5 月	日本保育学会第 69 回大会 於東京学芸大学	<p>の相手理解に学び意識が働く傾向が高いのに対し、2 年は関わり手としての自己意識を前提とし、相手理解に向けて相手の状況、抱えている気持ち理解に努め、その上でどう関わるべきかを考える傾向が高い実情が窺えた。</p> <p>共著者：大江まゆ子、大谷彰子、木下隆志</p> <p>学生の学習意欲や基礎的能力の課題を明らかにし、乳幼児ふれあい体験の効果を検証した。学生は、自身の能力や認められた経験の不足、実習の困難感から自己効力感の低下と学習・保育者への意欲の減退を招いており、意欲の向上には、実習の達成感や能力の向上、学びの面白さといった内発的要因が有効である。乳幼児ふれあい体験では、「自己受容」「自己肯定感」「授業・実習・保育者への意欲」や「学びへの興味」の向上に有効であり、2 年生の変容が顕著で、体験を自身のことに取り付けて考察する能力の育ちが体験をより効果的にしていることが窺えた</p>
7 体験学習「赤ちゃん先生」による学生・母親の変容	共	平成29年5月	日本保育学会第 70 回大会	<p>2 年間 4 回の継続した「赤ちゃん先生」での学生の変容と学びの深化を検証した。学生は、内発的な「理解動機」を持ち、学びを「赤ちゃん・母親理解」や「子育て理解」することと捉えており、2 年間を通して 40% 以上を占めている。そして、「共感」自体を学びとしては認識していないが、共感的視点を持ち、感覚的な刺激から赤ちゃんや母親との間に「共振」が起こり、共感的援助を行うことで概念の変容や共感的知性が育っている。</p> <p>共著者：大谷彰子、木下隆志、大江まゆ子</p>
8 乳幼児ふれあい体験の効果的プログラムの実践 ー 学年全体開催とゼミでの少人数継続開催との比較を通してー	単	平成29年8月	教育情報学会 第 33 回大会発表	<p>乳幼児ふれあい体験における集団開催と少人数制開催での学びの効果を比較し、アクティブラーニングとなる体験学習の要因を検証した。その結果、アクティブラーニングの体験となるためには、体験のための知識理解(内化)⇒自己開示と愛着形成(能動的なふれあい体験)⇒体験の言語的アウトプットとそれを受容される体験(外化)⇒理解の深化とメタ認知(内化)といったスパイラルとなる</p>

				ことが肝要であった。
--	--	--	--	------------

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 竹安 知枝					
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	概 要
初等教科教育 法IX(体育)	(著書) 1.『これならわかる！健康科学入門』	単	平成 25 年 6 月	開成出版社 (73 頁)	栄養・運動・睡眠・免疫・病気などに関する基礎知識と健康に影響を与える要因について記した書籍である。(全頁数 73 頁) 神戸海星女子学院大学の「健康科学」の科目において、テキストとして使用した。また大阪成蹊短期大学の専門演習Ⅱの科目にて使用した。
	2.『小学校教諭をめざす学生のための一般教養リメディアルワーク	共	平成 24 年 4 月	開成出版社 (68 頁)	第6章「健康」を担当(pp.55-64) (全頁数68頁、樋口勝一編)小学校教諭を目指す学生のための一般教養を習得するためのテキストである。神戸海星女子学院大学の一般教養科目においてテキストとして採用された。
	3.『子どもの保健と安全』	共	令和2年3月	教育情報出版 (192 頁)	再掲のため、略
	(学術論文) 1. 遊びの教育的意義と現状—幼児期の外遊びを中心として—	単	平成 25 年 7 月	芦屋大学論叢 (第 59 号) pp.35-43	教育的観点から、子どもの遊びについて記し、子どもたちの遊びの現状を調査し明らかにすることを通して、現在の子どもたちを取り巻く環境を考察し、子どもにとっての遊びの重要性について記した論文である。
	2. 児童期の遊びの好みが青年期の運動に対する好き・嫌いに与える影響	共 (代表)	平成 28 年 4 月	大阪成蹊短期 大学研究紀要 (第 13 号) pp.37-41	児童期の遊びの好み(室内遊びが好きだったか・外遊びが好きだったか)が、食習慣と体育や運動に対する好き・嫌いに与える影響について兵庫県下の女子大学生を対象にアンケート調査を実施し考察した。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
	3. 子どもの頃の外遊びの頻度がその	単	平成 30 年 11 月	芦屋大学論叢 (第 70 号)	大阪市内の女子短期大学生を対象に児童期の遊び(外遊びの

	後の運動に対する主観的評価(好き・嫌い)に与える影響  (教育実践記録等) 1. 小学校時代における運動の「好き」・「嫌い」が体力に及ぼす影響について—女子大学生を対象に—  2. 児童期の遊びの好みとその後の運動に対する主観(好き・嫌い)に与える影響	単  単	平成 26 年 6 月  平成 29 年 6 月	pp.23-30.  兵庫教育大学嬉野体育研究会『健』(第 36 号) pp.7-14  兵庫教育大学嬉野体育研究会『健』(第 39 号) pp.5-9	頻度)と小学校体育やその後(現在)の運動に対する主観的評価(好き・嫌い)に関するアンケート調査を実施した。その結果、外遊びをほぼ毎日している場合、週に1・2回(もしくはほとんどしていない)場合と比較して、小学校体育とその後(青年期)の運動に対して好意的に捉える可能性が高い( $p < 0.01$ )という事が示唆された。  小学校時代に運動・体育が好きであったかどうかと、中学校・高校時代の運動の習慣との関連について検証し、また体育を好意的に捉えるために重要な要素について考察した。  再掲のため、略
児童体育	(学術論文) 1. 遊びの教育的意義と現状—幼児期の外遊びを中心として—  2. 児童期の遊びの好みと青年期の運動に対する好き・嫌いに与える影響  3. 子どもの頃の外遊びの頻度がその後の運動に対する主観的評価(好き・嫌い)に与える影響  (教育実践記録等) 1. 小学校時代における運動の「好き」・「嫌い」が体力に及ぼす影響について—女子大学生を対象に—	単  共(代表)  単  単	平成 25 年 7 月  平成 28 年 4 月  平成 30 年 11 月  平成 26 年 6 月	芦屋大学論叢(第 59 号) pp.35-43  大阪成蹊短期大学研究紀要(第 13 号) pp.37-41  芦屋大学論叢(第 70 号) pp.23-30.  兵庫教育大学嬉野体育研究会『健』(第 36 号) pp.7-14	再掲のため、略  再掲のため、略  再掲のため、略  再掲のため、略
幼児体育	(学術論文) 1. 幼稚園児を対象に体力の向上を目的とした運動遊びに関する一考察	共(代表)	平成 24 年 3 月	神戸海星女子学院大学研究紀要(第 50 号) pp.61-67	幼児の体力向上に寄与する運動遊びについて多種多様な運動遊びを実践し、運動介入前後に体力測定(筋力・巧緻性・柔軟性など)を実施し、考察した論文である。(竹安知枝・山本忠志・

2. 幼児の運動能力の要素間における関連性についての一考察	単	平成 25 年 1 月	芦屋大学論叢 (第 58 号) pp.43-54	岡田隆造) 幼児期における各運動能力(筋力・瞬発力・敏捷性・柔軟性など)の要素間の関連(相関関係)について体力測定を行い、結果について男女別に考察した。
3. 幼児の運動能力の性差に関する一考察	単	平成 25 年 3 月	神戸海星女子学院大学研究紀要(第 51 号)pp.39-44	幼児(年長児を対象)の運動能力(筋力・瞬発力・調整力・柔軟性など)において、各要素の性差について調査し考察を行なった論文である。
4. 体力の向上を目的とした幼児の運動遊びに関する研究—縄跳び遊びを通して—	単	平成 25 年 9 月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第5巻)pp.29-38	効率的に短期間で、幼児の運動能力を伸ばす運動遊びを検討した研究である。縄跳び遊びに着目し、短期間(約 40 日間)での縄跳び遊びの効果について検証した論文(原著)である
5. 幼児の外遊びに関する一考察	単	平成 26 年 3 月	神戸海星女子学院大学研究紀要(第52号) pp.25-29	幼児期における遊びの重要性と子どもの遊びの現状(室内遊びを中心としているか外遊びを中心としているか)について考察し、遊びと社会性の発達の観点からも考察した論文である。
6. 幼少期の遊びがその後の運動習慣・体力に与える影響についての一考察	単	平成 26 年 3 月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第6巻)pp.43-51	幼少期の遊び(室内遊び・外遊び)の習慣が、その後の運動習慣にどのように影響を与え、またどのような体力要素(筋力・瞬発力・敏捷性・柔軟性など)に影響を与えるかについて検証した論文(原著)である。
7. 遊びが運動能力と体格に及ぼす影響についての一考察—年長児を対象に—	共 (代表)	平成 28 年 4 月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第8巻) pp.7-13	幼児期の遊びの好みは運動能力に及ぼす影響について、また子どもの居住環境(都市部と農村部)と体格との関連について考察した論文(原著)である。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
8. 都市部と農村部における幼児の運動能力の比較 ～大阪市と姫路市の年長児を対象に	共 (代表)	平成 29 年4月	大阪成蹊短期大学研究紀要(第 14 号) pp.81-84	都市部と農村部の幼児を対象に運動能力テストと保護者を対象にアンケート調査を実施した。その結果、農村部に居住している幼児は都市部に居住している幼児と比べて運動能力が高い水準であることが示唆された。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
	共 (代表)	平成 31 年9月	日本幼児体育学会 幼児体	大阪市内の短期大学の1年生 236 名を対象に幼少期の遊びに

	9. 幼少期の遊びがその後の人格形成に与える影響			育学研究(第11巻第2号) pp.1-7.	関するアンケート調査を実施し、遊びの好み(外遊び・室内遊び)と、遊びがその後の人格形成(性格・社会性)や体力に与える影響について考察し、幼少期の遊びの重要性について示した。 (竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
保育内容 I (健康)	(著書) 1. 『これならわかる!健康科学入門』	単	平成25年6月	開成出版社 (73頁)	再掲のため、略
	2. 『幼稚園教諭・保育士をめざす学生のための一般教養リメディアルワーク』	共	平成25年9月	開成出版社 (96頁)	第5章「子どもの健康」を担当(pp.75-90)(全頁数96頁、樋口勝一編)幼稚園教諭・保育士を目指す学生のための一般教養を習得するためのテキストである。神戸海星女子学院大学の一般教養科目においてテキストとして採用された。
	3. 『生活事例からはじめるー保育内容ー健康』	共	平成28年3月	青踏社 (208頁)	保育内容の領域「健康」に関する内容であり、第4章1節「遊びの実際」(pp.58-70)と2節「健康な生活習慣の自立とリズム」(pp.79-95)担当(全208頁中、計30頁)。「保育内容 健康」の科目において、テキストとして複数の大学にて使用されている。 (徳安敦他編著 著者竹安知枝他)
	4. 『保育・教職実践演習ーわたしを見つめ、求められる保育者になるためにー』	共	平成29年10月	ミネルヴァ書房 (190頁)	保育内容の全領域から、保育における現在の課題に至るまで、具体的に示した書籍であり、複数の大学で(保育・教職実践演習の科目において)テキストとして採択されている。 保育内容「健康」の領域について(pp.20-21)担当した。(全頁数190頁、寺田恭子・榊原志保・高橋一夫編著)
	5. 『生活事例からはじめるー保育内容ー健康』	共	平成30年3月	青踏社 (222頁)	保育内容の領域「健康」に関する内容であり、第4章「健康な生活習慣」pp.90-106(17頁)を担当。「保育内容 健康」の科目において、テキストとして複数の大学にて使用されている。全222頁。(近藤幹夫監修 著者竹安知枝他)
	6. 『子どもの保健と安全』	共	令和2年3月	教育情報出版 (192頁)	再掲のため、略

	(学術論文)				
	1. 遊びの教育的意義と現状—幼児期の外遊びを中心として—	単	平成 25 年 7 月	芦屋大学論叢 (第 59 号) pp.35-43	再掲のため、略
	2. 幼少期の遊びがその後の運動習慣・体力に与える影響についての一考察	単	平成 26 年 3 月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第6巻)pp.43-51	再掲のため略
	3. 遊びが運動能力と体格に及ぼす影響についての一考察—一年長児を対象に—	共 (代表)	平成 28 年 4 月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第8巻)pp.7-13	再掲のため、略
	4. 幼少期の遊びがその後の人格形成に与える影響	共 (代表)	平成 31 年9月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第11 巻第2号) pp.1-7.	再掲のため、略
	(教育実践記録等)				
1. 「子どもの頃の体験が大人になってどのような影響を及ぼすか」に関する調査 ～未来へはばたく子どもたちのために～	共	平成 25 年 3 月	兵庫県青少年団体連絡協議会 (全 32 頁)	再掲のため、略	
2. 環境が幼児の運動能力に与える影響 ～幼児の居住環境に着目して～	単	平成 30 年 6 月	兵庫教育大学嬉野体育研究会『健』(第 40 号)	大阪市の都市部と姫路市の農村部に居住する幼児を対象に、運動能力テストと保護者を対象としたアンケート調査を実施した。その結果、農村部に居住する幼児は、都市部に居住している幼児と比べて運動能力が高い傾向にあることが示唆された。	

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
<b>【著書】</b>				
1. 『生活事例からはじめる—保育内容—健康』	共	平成 28 年3月	青踏社	保育内容の領域「健康」に関する内容であり、第4章1節「遊びの実

<p>2. 『保育・教職実践演習 ―わたしを見つめ、求められる保育者になるために―』</p>	共	平成 29 年 10 月	ミネルヴァ書房	<p>際」(pp.58-70)と2節「健康な生活習慣の自立とリズム」(pp.79-95)担当(全208頁中、計30頁)。「保育内容 健康」の科目において、テキストとして複数の大学にて使用されている。(徳安敦他編著 著者竹安知枝_他)</p> <p>保育内容の全領域から、保育における現在の課題に至るまで、具体的に示した書籍であり、複数の大学で(保育・教職実践演習の科目において)テキストとして採択されている。</p> <p>保育内容「健康」の領域について(pp.20-21)担当した。(全頁数190頁、寺田恭子・榊原志保・高橋一夫編著)</p>
<p>3. 『生活事例からはじめる―保育内容―健康』</p>	共	平成 30 年3月	青踏社	<p>保育内容の領域「健康」に関する内容であり、第4章「健康な生活習慣」pp.90-106(17頁)を担当。「保育内容 健康」の科目において、テキストとして複数の大学にて使用されている。全222頁。(近藤幹夫監修 著者竹安知枝_他)</p>
<p>4. 『大学生生活入門～幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン～』</p>	共 (編著)	平成 31 年4月	開成出版社	<p>大学生対象の初年次教育科目で使用するテキストである。幼稚園教諭・小学校教諭・特別支援教諭・保育士を目指すための重要な要素に関すること、また基礎学力を身に付けるための内容となっている。全75頁。Ⅰ-1、Ⅱ-1、Ⅱ-3 計16頁担当。(笠原清次・渡康彦 監修、石田愛子・竹安知枝 編著)</p>
<p>5. 『子どもの保健と安全』</p>	共	令和2年3月	教育情報出版	<p>子どもの心身の健康と保健、安全管理等に関する事柄について記した書籍であり、「子どもの保健」関連科目の大学生用のテキストとして、複数の大学において使用予定。(全192頁)第1章3節と第6章1節の計4頁を担当。(高内正子編著、著者 竹安知枝他)</p>
<p>【学術論文】</p>				
<p>1. スポーツの重要性と普及に関する一考察 ―テニスに着目して―</p>	共 (代表)	平成 27 年 4 月	大阪成蹊短期大学研究紀要(第12号) pp.31-34	<p>スポーツの重要性と普及に関して、生涯スポーツであるテニスに着目し、大学生を対象にアンケート調査を実施し、考察を行なった。結果、テニスの普及のために重要な要因について示唆された。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎)</p>
<p>2. 高強度長時間運動に伴う</p>	共	平成 27 年 4 月	大阪成蹊短期大学研	高強度長時間運動に伴う口腔内

口腔内免疫および虫歯菌活性度の変化			究紀要(第12号) pp.14-19	免疫の変化と虫歯菌活性の関連性について検討した論文である。(臼井達矢・辻慎太郎・織田恵輔・ <u>竹安知枝</u> )
3.体力と注意機能の関係性	共	平成27年4月	大阪成蹊短期大学研究紀要(第12号) pp.20-24	体力(運動を行い体力を高めること)と注意機能との関連性について検討した論文である。(織田恵輔・ <u>竹安知枝</u> ・辻慎太郎・臼井達矢)
4.遊びが運動能力と体格に及ぼす影響についての一考察—一年長児を対象に—	共 (代表)	平成28年4月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第8巻) pp.7-13	幼児期の遊びの好みは運動能力に及ぼす影響について、また子どもの居住環境(都市部と農村部)と体格との関連について考察した論文(原著)である。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
5.児童期の遊びの好みは青年期の運動に対する好き・嫌いに与える影響	共 (代表)	平成28年4月	大阪成蹊短期大学研究紀要(第13号) pp.37-41	児童期の遊びの好み(室内遊びが好きだったか・外遊びが好きだったか)が、食習慣と体育や運動に対する好き・嫌いに与える影響について兵庫県下の女子大学生を対象にアンケート調査を実施し考察した。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
6.6ヶ月間の中等度運動トレーニングが口腔内粘膜免疫および虫歯菌活性に及ぼす影響	共	平成28年4月	大阪成蹊短期大学研究紀要(第13号)pp.1-5	中等度のトレーニングを6ヶ月間実施し、それが口腔内の免疫と虫歯菌の活性にどのような影響を与えるかについて調査した。その結果6ヶ月間の定期的な運動実践はこれらに影響を与えることが示唆された。(臼井達矢・辻慎太郎・松尾貴司・織田恵輔・ <u>竹安知枝</u> )
7.加齢による Trail Making Test の変化	共	平成28年4月	大阪成蹊短期大学研究紀要(第13号) pp.13-18	Trail Making Test (TMT)は注意の探索性、選択や転換性を評価する尺度として用いられており、加齢と注意力との関連性について、これを用いて調査した。その結果、TMT の測定値は加齢と共に延長すること(これらの関係性について)が示唆された。(織田恵輔・ <u>竹安知枝</u> ・辻慎太郎・松尾貴司・臼井達矢)
8.長距離マラソンランナーにおける唾液抗菌性ペプチドと虫歯菌および上気道感染症との関連	共	平成28年12月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 26号 pp.1-4	マラソントレーニングを行っているアスリートを対象に唾液 HBD-2濃度を測定するとともに、その上清の存在下で培養した場合の菌の発育程度と上気道感染の発生頻度を調べ、それらの関連性について考察した。(臼井達矢・永井伸人・辻慎太郎・ <u>竹安知枝</u> )

<p>9.都市部と農村部における幼児の運動能力の比較 ～大阪市と姫路市の年長児を対象に～</p>	<p>共 (代表)</p>	<p>平成 29 年4月</p>	<p>大阪成蹊短期大学研究紀要(第 14 号) pp.81-84</p>	<p>都市部と農村部の幼児を対象に運動能力テストと保護者を対象にアンケート調査を実施した。その結果、農村部に居住している幼児は都市部に居住している幼児と比べて運動能力が高い水準であることが示唆された。(竹安知枝・白井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)</p>
<p>10.高強度運動による口腔内抗菌性ペプチドの変化と神経内分泌応答との関連</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>教育医学第 63 巻 3 号</p>	<p>唾液抗菌性ペプチドに対する一過性の高強度運動の影響とストレスホルモンとの関連性について検討した。その結果、一過性の高強度運動は唾液抗菌性ペプチドを有意に増加させるが、ストレスホルモンであるコルチゾールの分泌に伴い、その分泌が抑制されることが示唆された。(白井達矢・辻慎太郎・永井伸人・竹安知枝)</p>
<p>11.障がい者スポーツの普及促進に向けた取り組みに関する一考察 ～「近畿アンリミテッド・パラ陸上(ナイター)」における国内初の試みに着目して～</p>	<p>共 (代表)</p>	<p>平成 30 年3月</p>	<p>芦屋大学論叢(第 69 号)pp.49-60.</p>	<p>国内初の3つの試み(障がいの有無に関わらず参加が可能・夏のナイターでの開催・民間からの出資 100%により実施)により開催された「近畿アンリミテッド・パラ陸上」に着目し、参加選手に大会の有用性について調査を実施した結果、この3つの試みにおける大会の有用性について示唆され、今後の障がい者スポーツを普及促進させるための一助を得ることができた。(竹安知枝・北林直哉・織田恵輔)</p>
<p>12.サッカースクールに所属する幼児の足趾把持筋力と体力因子との関連性</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年3月</p>	<p>日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第10巻) pp.101-108.</p>	<p>サッカースクール(週2回)に所属する幼児(その他のスポーツは実践していない)を対象に、足趾把持筋力が体力因子(スピード・静的バランス・反応性・敏捷性等)との関連性について調査した。その結果、足趾把持筋力とスピード・反応性・バランスに関する体力因子との関連性が認められた。(辻慎太郎・永井伸人・竹安知枝・白井達矢)</p>
<p>13.子どもの頃の外遊びの頻度がその後の運動に対する主観的評価(好き・嫌い)に与える影響</p>	<p>単</p>	<p>平成 30 年 11 月</p>	<p>芦屋大学論叢(第70号) pp.23-30.</p>	<p>大阪市内の女子短期大学生女子 236 名を対象に児童期の遊び(外遊びの頻度)と小学校体育やその後(現在)の運動に対する主観的評価(好き・嫌い)に関するアンケート調査を実施した。その結果、外遊びをほぼ毎日している場合、週に1・2回(もしくはほとんどしていない)場合と比較して、小学校体育とその後(青年期)の運動に対して好意的に捉える可能</p>

<p>14. 中学生女子バレーボール選手の身体特性と体力がスパイク速度に及ぼす影響</p>	<p>共</p>	<p>平成 31 年2月</p>	<p>スポーツサイエンス第 13 号(1) pp.17-32.</p>	<p>性が高い(p&lt;0.01)という事が示唆された。  中学生女子バレーボール選手を対象に、スパイク速度と身体特性や体力測定を行い、身体特性や体力がスパイク速度に与える影響について検討した。その結果、体重および BMI とスパイク速度との間に有意な相関が認められた。また、体力とスパイク速度との連については、立幅跳びとスパイク速度との間に有意な相関が認められ、立ち幅跳びがスパイク速度に影響を及ぼす重要な体力因子であることが示唆された。(青木敦英・石川俊・竹安知枝)</p>
<p>15. 障がい者(こども)のスポーツイベントの普及に向けて</p>	<p>単</p>	<p>平成 31 年 3 月</p>	<p>日本産業科学学会 研究論叢 第 24 号 pp.51-56.</p>	<p>障がい者スポーツの今後の普及・促進に向け、有効的なイベント・取り組み等を行っていくために重要とされる要素について検討した。障がい者スポーツ施設で実施された、障がい者(こども)のスポーツイベントにおいて 41 名を対象にアンケート調査を実施した。そして、アンケート結果について多角的な観点から考察し、今後の障がい者スポーツのイベント開催に向けて、重要な要素と課題について示した。</p>
<p>16. 大学の特徴を生かした教員への就職支援に関する一考察—芦屋大学での教員採用試験対策講座をもとに—</p>	<p>共</p>	<p>令和元年 7 月</p>	<p>芦屋大学論叢(第 71 号)pp.21-30.</p>	<p>小規模大学(定員 1000 名)の大学における教員採用試験対策講座への参加を促す方策について取り上げ、考察することで、小規模大学における教員就職支援のための取り組み方法について検討した。(笠原清次・竹安知枝・森谷享・青木敦英・若杉祥太・石川峻・辻尚志・雄倉春来)</p>
<p>17. 幼少期の遊びがその後の人格形成に与える影響</p>	<p>共 (代表)</p>	<p>令和元年9月</p>	<p>日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第 11 巻 第2号) pp.1-7</p>	<p>大阪市内の短期大学の1年生 236 名を対象に幼少期の遊びに関するアンケート調査を実施し、遊びの好み(外遊び・室内遊び)と、遊びがその後の人格形成(性格・社会性)や体力に与える影響について考察し、幼少期の遊びの重要性について示した。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)</p>
<p>18. 1年間の中強度運動トレーニングの実践が口腔内粘膜免疫および虫歯菌活性に及ぼす影響</p>	<p>共</p>	<p>令和 2 年2月</p>	<p>日本教育医学会 65 巻 3 号 pp.184-190. <u>査読あり</u></p>	<p>中強度強度の運動トレーニングの実践が口腔内局所免疫機能に及ぼす影響を検討した。その結果、唾液 HBD-2 は</p>

<p>19. ミニテニスのイメージに関する調査－大学生を対象に－(調査報告)</p>	<p>共 (代表)</p>	<p>令和2年3月</p>	<p>芦屋大学論叢(第72号)pp.79-88 <u>査読あり</u></p>	<p>35.9 ± 7.4 から 60.4 ± 8.7 pg/mL と有意に増加し、虫歯菌に対する菌抑制効果は介入後に有意に高まった。1年間の中強度での運動トレーニングの実践は安静時の唾液 HBD-2 濃度を高め、さらに虫歯菌抑制効果が有意に高まることが示唆された。(臼井達矢・辻慎太郎・永井伸人・<u>竹安知枝</u>・織田恵輔)</p> <p>ミニテニスの普及・活性化に向けての手がかりを得ることを目的に、大学生103名を対象に認知度とイメージに関するアンケート調査を実施した。その結果、ミニテニスの認知度に関しては、低い結果であったが、このスポーツに関して肯定的なイメージを持っている人の割合が多いことがわかった。また、「健康的」「楽しい」「ルールが簡単」の3つのキーワードが普及につながる可能性があると考えられた。(竹安知枝・青木敦英・臼井達矢)</p>
<p>【その他(講演や発表)】 (学会発表)</p> <p>1. 運動ストレス時の口腔内免疫機能の低下を6ヶ月間の定期的な運動トレーニングで予防できるか?</p> <p>2. きんたくん健幸体操が中高齢者の体力因子に及ぼす影響～川西市地域活性プロジェクト～</p> <p>3. 現在の体力レベルに幼児期の外遊びが与える影響</p>	<p>共  共  共 (代表)</p>	<p>平成27年1月  平成27年8月  平成27年9月</p>	<p>日本体力医学会第29回近畿地方大会  日本教育医学会第63回大会  日本体力医学会第70回大会 予稿集 p.211</p>	<p>6ヶ月間の定期的な運動トレーニングが、運動ストレス時の口腔内免疫機能の低下に対して、どのような効果を発揮するのかについて調査した研究である。(臼井達矢・織田恵輔・<u>竹安知枝</u>・辻慎太郎)</p> <p>川西市地域活性プロジェクトとして考案された、きんたくん健幸体操(ストレッチ編・ウォーキング編・転倒予防編にてDVD作成担当)の実施により、この体操が中高齢者のバランス能力・注力の向上・反射神経の改善に効果であることが示唆された。(辻慎太郎・臼井達矢・織田恵輔・<u>竹安知枝</u>)</p> <p>幼児期の外遊びがその後の運動習慣(中学校・高校時代の運動部の所属経験)と現在(大学)における運動能力に与える影響について、兵庫県下の女子大学生</p>

4.中高齢者における敏捷性と注意機能との関連	共	平成 27 年 9 月	日本体力医学会 第 70 回大会 予稿集 p.214	103 名を対象に体力測定とアンケート調査を実施し考察した。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎)  50～70 歳代の男女 70 名を対象全身反応および注意課題測定 (trail making test (TMT)) を実施し考察を行なった結果、体力(敏捷性)注意機能に相関が認められた。このことから運動により敏捷性を向上させることは中高齢者の注意機能の改善・向上に効果的であることが示唆された。(織田恵輔・臼井達矢・竹安知枝・辻慎太郎)
5.1年間のレッドコード運動が要支援・要介護高齢者の体力因子に与える影響	共	平成 27 年 9 月	日本体力医学会 第 70 回大会 予稿集 p.245	要支援・要介護高齢者男女計 41 名を対象にレッドコード運動を実施した。そして介入前後に体力測定を実施した。その結果その下肢筋力および歩行能力の項目において有意に改善されたことから、レッドコード運動が動的バランス能力の改善に有効であることが示された。(辻慎太郎・織田恵輔・竹安知枝・松尾貴司・臼井達矢)
6.週1回の運動実践でも運動ストレス時の口腔内免疫の低下を予防できるか?	共	平成 27 年 9 月	日本体力医学会 第 70 回大会 予稿集 p.271	一般家健常者 14 名を対象に調査を行なった(運動介入群 7 名(自転車運動を 1 回 60 分、週1回、6ヶ月間)とコントロール群 7 名)。その結果、週1回の運動実践は、運動ストレス時の口腔内免疫を高め、翌日においてもその低下を予防することが示唆された。(臼井達矢・織田恵輔・竹安知枝・上田真也・桂良寛・辻慎太郎・松尾貴司)
7.きんたくん健幸体操が注意機能及び全身反応時間・重心動揺性に及ぼす影響～家庭用エクササイズ DVD を用いた運動効果の検証～	共	平成 28 年2月	日本体力医学会第 30 回近畿地方会予稿集 p.5	地域高齢者において身近で継続できる運動を実践することが望まれている。そこで川西市で地域活性プロジェクトとして健康寿命の延伸に向けた運動プログラムを我々と共同開発し、その有効性について調査を行ない検証(重心動揺性・全身反応時間・TMT テストにより)したものである。その結果、それらの向上に有効であることが示唆された。(辻慎太郎・織田恵輔・竹安知枝・松尾貴司・臼井達矢)
8.高齢者における注意機能と体力の関係について	共	平成 28 年2月	日本体力医学会第 30 回近畿地方会予稿集 p.6	高齢者が転倒する要因は体力低下だけではなく、認知機能の1つである注意機能の低下や記憶力の低下なども関係していると考え

<p>9.小学生の姿勢制御能力と足趾把持筋力との関連</p>	<p>共</p>	<p>平成 28 年2月</p>	<p>日本体力医学会第 30 回近畿地方会予稿集 p.18</p>	<p>られている。そこで注意機能の向上・改善のためにどのような運動が効果的かについて検討した。その結果 TMT と垂直跳び及び TMT と全身反応時間において相関関係が認められた。(織田恵輔・竹安知枝・辻慎太郎・松尾貴司・臼井達矢)</p>
<p>10. 児童期の遊びの好みが青年期の運動に対する主観に与える影響</p>	<p>共 (代表)</p>	<p>平成 28 年 5 月</p>	<p>兵庫体育・スポーツ科学学会 第 27 回大会発表抄録集 p.13</p>	<p>姿勢制御能力と足趾把持筋力との関連性について探るために、小学生を対象に重心動揺生を測定し考察を行った。その結果、姿勢制御能力向上のためには足趾把持筋力の強化が有効である可能性が示唆された。(松尾貴司・織田恵輔・竹安知枝・辻慎太郎・臼井達矢)</p>
<p>11.長距離マラソンランナーにおける唾液抗菌ペプチドと虫歯菌および上気道感染症との関連</p>	<p>共</p>	<p>平成 28 年 6 月</p>	<p>関西臨床スポーツ医・科学研究会第 26 回大会 抄録集 p.17</p>	<p>女子大学生 236 名を対象に、児童期に関するアンケート調査(遊びの好みと食習慣と運動に対する主観的評価について)を実施した。その結果、遊びと食習慣との関連性については明らかにできなかったが、児童期の遊びの好みとその後の運動に対する主観に影響を与えている可能性が示唆された。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)</p>
<p>12.中高年女性における1年間の運動実施頻度と口腔内局所免疫との関連 ～週1回の運動実践でもストレス時の口腔内免疫低下を予防できるか?～</p>	<p>共</p>	<p>平成 28 年8月</p>	<p>日本教育医学会 第 64 回大会 大会抄録集 p.62</p>	<p>長距離マラソンランナーに着目し、高強度高頻度の運動トレーニングの実践が口腔内免疫環境に及ぼす影響について調査を実施し検討したものである。その結果、オーバートレーニングは口腔内の局所免疫機能を低下させることが示唆された。</p>
<p>13.小学生における足趾把持筋力と走能力および重心動揺性との関連</p>	<p>共</p>	<p>平成 28 年8月</p>	<p>日本教育医学会 第 64 回大会 大会抄録集 p50</p>	<p>口腔内免疫機能を高める有効な運動頻度明らかにするために女性 73 名を対象に唾液免疫成分および1年間の上気道感染症の罹患回数を測定した。その結果、高強度での運動実践は、口腔内免疫機能を低下させ、上気道感染症の罹患回数増加につながることを示唆された。(臼井達矢・織田恵輔・竹安知枝・辻慎太郎・松尾貴司)</p>
<p>13.小学生における足趾把持筋力と走能力および重心動揺性との関連</p>	<p>共</p>	<p>平成 28 年8月</p>	<p>日本教育医学会 第 64 回大会 大会抄録集 p50</p>	<p>小学生における足趾把持筋力が重心動揺(両足たち・片足立ち)および走能力(25m・50m)との関連について検討した結果、足趾把持筋力と走能力およびバランス能力において関連性が認めら</p>

14. 中学校・高校時代の運動部の所属経験とその後の体力との関連	共 (代表)	平成 28 年 9 月	日本体力医学会 第 71 回大会 大会抄録集 p.130	れた。(辻慎太郎・松尾貴司・ <u>竹安知枝</u> ・織田恵輔・臼井達矢)  思春期の運動経験がその後の体力に与える影響について 103 名の女子大学生を対象に体力測定とアンケート調査を実施し考察した。その結果、筋力と筋持久力の要素については、思春期の運動習慣が影響を与えている可能性が高いことが示唆された。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
15. 1年間の運動トレーニングが口腔内免疫機能および虫歯菌抑制に与える影響	共	平成 28 年 9 月	日本体力医学会 第 71 回大会 大会抄録集 p.257	1年間の運動トレーニングが口腔内免疫機能および虫歯菌活性に及ぼす影響について検討した結果、1年間の定期的な運動トレーニングの実践は、安静時の唾液 HBD-2 濃度を高め、さらに虫歯菌に対する筋の阻止能力が有意に高まることが示唆された。(臼井達矢・織田恵輔・ <u>竹安知枝</u> ・辻慎太郎・松尾貴司・上田真也・桂良寛)
16. 要支援・要介護高齢者の運動機能および日常生活動作能力の改善に向けた Redcord を用いた運動療法について	共	平成 28 年 9 月	日本体力医学会 第 71 回大会 大会抄録集 p.164	要支援・要介護高齢者の運動機能および日常生活動作能力の改善に向けた Redcord を用いた運動療法の有効性について検討した結果、Redcord を用いた運動プログラムは、介護予防の運動療法として有効なプログラムであることが示唆された。(辻慎太郎・松尾貴司・ <u>竹安知枝</u> ・織田恵輔・臼井達矢)
17. オーバートレーニングが口腔内局所免疫と虫歯菌増加に及ぼす影響	共 (代表)	平成 29 年 8 月	日本教育医学会 第 65 回大会	大学陸上部に所属している長距離選手 20 名と比較対象として非アスリート 20 名を対象に安静時に唾液採取を行い口腔内免疫機能に関して調査を実施した結果、オーバートレーニングは口腔内局所免疫機能を著しく低下させることが示唆された。(臼井達矢・永井伸人・辻慎太郎・ <u>竹安知枝</u> )
18. サッカークラブに所属する幼児の足趾把持筋力と体力因子との関連性	共	平成 29 年 8 月	日本教育医学会 第 65 回大会	大阪府のサッカースクールに所属する幼児 20 名を対象に対体力測定や重心動揺(バランス能力)のテストを実施し、体力因子と足趾機能との関連性について検討した。その結果、足趾把持筋力が強い者ほどバランス能力・脚力が高いことが示された。(辻慎太郎・永井伸人・ <u>竹安知枝</u> ・臼井達矢)

19. 幼少期の遊びがその後の人格形成に与える影響	共 (代表)	平成 29 年 10 月	日本子ども学会第 14 回 大会抄録集 p.37	幼少期の遊びの好み(外遊び・ 室内遊び)がその後の人格形成 (集中力・創造力・注意力・社会 性など)に与える影響について大 阪市内の女子大学生 236 名を対 象にアンケート調査を実施し、遊 びの好みと社会性との関連性につ いて考察した。(竹安知枝・臼 井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松 尾貴司)
20. 幼児期におけるキッズバ イクの使用経験と運動能力と の関連	共	平成 30 月 2 月	日本体力医学会第 32 回近畿地方会	幼児期のキッズバイクの使用が 運動能力に与える影響につい て、調査し考察した。その結果、 キッズバイクの経験年数が多い者 は、経験年数が少ない者と比較 して、走能力や足趾機能・全身反 応性などにおいて有意に高い水 準であることが示唆された。(織田 恵輔・竹安知枝・辻慎太郎・松尾 貴司・臼井達矢・木村晴尚)
21. 障がい者(こども)のスポ ーツイベントの普及にむけて	共 (代表)	平成 30 月 8 月	日本産業科学学会 第 24 回大会全国大会発 表抄録集 pp.35-36.	障がい者(こども)のスポーツイベ ントの参加者 41 名(無作為抽出、 保護者が回答)を対象にイベント に参加する際に重要視する事柄 について調査を実施した。その結 果、「身体を動かす内容」「自然 遊び」「初心者でも楽しめる内容」 「教育や発達に影響を与える内 容」などについて重要視している 保護者が多いということが明らか になった。
22. 児童期における外遊び の多寡がその後の運動に対 する主観的評価に与える影 響	共 (代表)	平成 30 月 9 月	日本体力医学会 第 73 回大会 大会抄録集 pp.185.	児童期の外遊び(頻度)と青年期 の運動に対する主観的評価(好 き・嫌い)との関連性について、短 期大学の女子学生を対象にアン ケート調査を実施した。その結 果、外遊び(頻度)が小学校体育 に対する主観的評価に影響を与 えていることが示唆され( $p <$ $0.01$ )、またその後(青年期)の運 動に対する主観的評価にも影響 を与える可能性が高い(好意的 に捉える)ということが示唆され た( $p < 0.01$ )。
23. 高齢者におけるオー ラルフレイル予防に向けた 運動療法の有効性の検討	共	平成 30 月 9 月	日本体力医学会 第 73 回大会 大会抄録集 p.178.	地域在宅高齢者(女性 48 名)に 対する週 1 回(3ヶ月間)の健康運 動教室がオーラルフレイル(口腔 機能低下)予防に有効であるか 検討した。その結果、自律神経バ ランスが整えられ、口腔内免疫機 能が高まることが確認され、週 1 回の健康運動教室の開催は、オ ーラルフレイル予防に有効である ことが示唆された。(臼井達矢・辻

<p>24. 地域在宅高齢者に対する健康増進活動はオーラルフレイル予防に有効か？</p>	<p>共</p>	<p>令和元年8月</p>	<p>日本教育医学会 第 67 回大会</p>	<p>慎太郎・永井伸人・<u>竹安知枝</u>・織田恵輔)</p> <p>地域在宅高齢者に対する週1回の健康増進活動(健康に関する学習・健康体操等を実施)がオーラルフレイル(口腔機能低下)に予防に有効であるかについて検討した。その結果、この実践は自律神経バランスを整える整えるとともに、口腔免疫機能や口腔機能を高めることが示され、オーラルフレイル予防に有効であることが示唆された。(臼井達矢・辻慎太郎・永井伸人・<u>竹安知枝</u>・織田恵輔)</p>
<p>25. 障がい者のスポーツイベントに関する一考察</p>	<p>共 (代表)</p>	<p>令和元年9月</p>	<p>日本体育学会 第 70 回大会 大会抄録集 p.138</p>	<p>国内初の3つの取り組み【[障害の有無に関係なく実施][夏のナイター開催][民間出資 100%]】により行われた「近畿アンリミテッド・パラ陸上」(2017)に着目し、ボランティア・スポンサー企業の視点より、大会の有用性について検討を行った。その結果、このような新しい取り組みは、ボランティア・スポンサー企業の両者にとって好意的に捉えられ、さらにボランティアだけでなく協賛企業にとっても価値のあるイベントである可能性が高いということが推察された。(竹安知枝・青木敦英・石川峻)</p>
<p>26 バスケットボールにおける「流れ」と勝敗の関係—関西学生バスケットボール2部リーグについて—</p>	<p>共</p>	<p>令和元年9月</p>	<p>日本体育学会 第 70 回大会 大会抄録集 p.113</p>	<p>関西バスケットボール連盟2部リーグを対象にピリオドごとの得点の変化に着目し、その違いについて検討を行った。対象となった2部リーグの全試合(90 試合)についてピリオドごとの得点、得失点差を記録し、勝ちチームと負けチームで比較を行った。その結果、バスケットボール競技において「流れ」をつかむために、ハーフタイム以降のピリオドにおいて得点を積み重ねることが重要であると考えられた。(青木敦英・石川峻・<u>竹安知枝</u>)</p>
<p>27. ミニテニスの普及に関する一考察</p>	<p>共 (代表)</p>	<p>令和元年9月</p>	<p>日本体力医学会 第 74 回大会 大会抄録集 p.281</p>	<p>「年齢・性別を問わず誰でも楽しめる」特徴を持ったスポーツである「ミニテニス」に着目し、このスポーツの認知度やイメージについて、大学生 103 名を対象に調査を行った。その結果、15%の人にしか認知されていないが、約9割の人は好意的なイメージを持っているということがわかった。今後</p>

28. 中年女性におけるオーラルフレイル予防に向けた水中運動トレーニングの有効性	共	令和元年9月	日本体力医学会 第74回大会 大会抄録集 p.309	は、学校体育や社会的なスポーツイベントで積極的に取り上げられることが普及に向けて効果的であると思われる。(竹安知枝・青木敦英・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)  中年女性に対する水中トレーニングがオーラルフレイル(口腔機能低下)の予防に有効であるかを検討(唾液免疫成分・口腔内機能・自律神経活動の測定の実施により)した。その結果、週1回(計12回)の水中運動トレーニングの実践は、自律神経のバランスを整え、口腔機能を高めることが示唆され、オーラルフレイル予防に有効であることが示唆された。(臼井達矢・辻慎太郎・永井伸人・ <u>竹安知枝</u> ・織田恵輔)
29. 中高年女性の足趾把持筋力と体力因子の関係	共	令和元年9月	日本体力医学会 第74回大会 大会抄録集 p.294	中高年女性40名(60~89歳)を対象に足趾把持筋力と体力因子(注意機能(TMT)・重心動揺・全身反応時間・垂直跳び)との関連性について調査した。その結果、中高年女性の足趾把持筋力と体力因子において、有意な相関関係が認められた。転倒防止に関係するバランス機能を高めるには、足趾把持へのアプローチが効果的であると考えられる。(辻慎太郎・臼井達矢・永井伸人・ <u>竹安知枝</u> ・織田恵輔・涌井忠昭)
30. ミニテニスの意識に対する調査ー経験者を対象にー	共 (代表)	令和2年6月	兵庫体育・スポーツ科学学会 第31回大会 発表抄録集 p.8	ミニテニスの経験者男女55名(40~80歳代)を対象に、このスポーツに対する意識についてアンケート調査を実施した。その結果、ミニテニスに対して「健康に良く安全に実施でき、かつ経済的である」と捉えている人が大半を占めていることが明らかになり、今後の我が国における生涯スポーツの一つとして、ミニテニスが普及していくことが望ましいと考えられる。 (竹安知枝・青木敦英・石川峻・臼井達矢)
31. 片脚および両脚のプライオメトリックトレーニングの効果に関する研究ー大学バレーボール選手を対象としてー	共	令和2年6月	兵庫体育・スポーツ科学学会 第31回大会 発表抄録集 p.1	関西学生バレーボール連盟1部に所属する女子バレーボール選手を対象に、片脚と両脚のそれぞれのプライオメトリックトレーニングを行うグループを設定

				し、トレーニング前後のジャンプ能力、パワー発揮能力の変化を調査し、いずれのトレーニング方法が効果的であるのか検証を行った。その結果、バレーボール選手のプライオメトリックトレーニングにおいて、片脚でのトレーニングを積極的に取り入れるべきであることが示唆された。(青木敦英・石川峻・ <u>竹安知枝</u> )
--	--	--	--	---

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 丹下秀夫						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
中等教科教育法 英語 I II	(著書) 1 大学生生活入門	共	令和元年4月1日	開成出版株式会社	8ページ (75ページ)	幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザインとして児童教育学科の学生の基礎学力及び一般常識の基礎を培うための学習書である。 一般常識の英単語・英語表現として小学校教諭に必要な教室英語に関する基本単語や表現を記載した。  (執筆担当分:知っておきたい英単語・英語表現)
	2教育実習ハンドブック	共	令和2年4月1日	芦屋大学	4ページ (71ページ)	本学の学生が教員免許状を取得するにあたり必要な基礎知識や資質向上に必要な内容を織り込んだものである。 筆者は中学校英語科学習指導案(例)として現行教科書単元を取り上げ、教材観・生徒観・指導観、評価規準、単元計画、本時指導案などの具体例を記載した。
	( (実践報告) 1 芦屋大学特別支援教育冬季研修会報告 「保護者とのつながりを求めて」	単	平成29年7月18日	芦屋大学	9ページ (61ページ)	本学特別支援教育冬季研修会での講義内容をまとめた。 筆者の学校現場で扱った事例を紹介しながら、「保護者との良好な人間関係の構築」に必要なものを整理した。 校長、教頭、教諭など様々な立場に課せられた課題対応の役割も整理している。 「学校教育の抱える矛盾との共存」や「義務教育の役割」を見つめ直す機会とした。
教職論 中等	2英語教育における小中連携		平成29年12月18日	芦屋大学	12ページ (111ページ)	小中学校学習指導要領の特徴を整理し <u>外国語教育における小中の接続の重要性</u> 、「 <u>絵本や子供向けの歌</u> 」などを扱い方、「 <u>聞く力、話す力(やり取り)</u> (発表)、 <u>読む力、書く力</u> 」の4技能5

					<p>領域を育てる効果的な指導の在り方をまとめている。加えて、「<u>小学校外国語教育の変遷</u>」、「<u>これまでの小学校外国語活動の成果と外国語教育における小中連携</u>」、「<u>新学習指導要領の特徴を背景に様々な指導環境に対応する基礎事項の整理</u>」、「<u>国語教育等の他教科との連携を図りながら子どもの気づきを促す指導</u>」、「<u>発達段階に応じたインプットの在り方</u>」や「<u>パワーポイントやデジタル教材などICT等の効果的な活用方法</u>」、「<u>小学校教師に必要な英語指導者としての資質</u>」に関する授業実践をまとめた。</p>
--	--	--	--	--	---

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
<p><b>【著書】</b> 大学生生活入門 (一般常識 知っておきたい英単語・英語表現 P39～P46)</p>	共著	令和元年 4 月 1 日	開成出版株式会社	<p>幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザインとして児童教育学科の学生の基礎学力及び一般常識の基礎を培うための学習書である。 一般常識の英単語・英語表現として小学校教諭に必要な教室英語に関する基本単語や表現を記載した。</p>
<p>教育実習ハンドブック (学習指導案の参考⑦ 中学校英語科学習指導案(例) P61～P64 )</p>	共著	令和 2 年 4 月 1 日	芦屋大学	<p>本学の学生が教員免許状を取得するにあたり必要な基礎知識や資質向上に必要な内容を織り込んだものである。 筆者は中学校英語科学習指導案(例)として現行教科書単元を取り上げ、教材観・生徒観・指導観、評価規準、単元計画、本時指導案などの具体例を記載した。</p>
<p><b>【実践報告】</b> 1 芦屋大学特別支援 教育冬季研修会報告 「保護者とのつながりを求めて」</p>	単	平成 29 年 7 月 18 日	芦屋大学論叢第 67 号 (P53～61)	<p>本学特別支援教育冬季研修会での講義内容をまとめた。 筆者の学校現場で扱った事例を紹介しながら、「保護者との良好な人間関係の構築」に必要なものを整理した。 校長、教頭、教諭など様々な立場に課せられた課題対応の役割も整理している。 「学校教育の抱える矛盾との共存」や「義務教育の役割」を見つ</p>

<p>2 英語教育における小中連携</p>	<p>単</p>	<p>平成 29 年 12 月 18 日</p>	<p>芦屋大学論叢第 68 号 (P99～P111)</p>	<p>め直す機会とした。</p> <p><u>小中学校学習指導要領の特徴を整理し外国語教育における小中の接続の重要性</u>、「<u>絵本や子供向けの歌</u>」などを扱い方、「<u>聞く力、話す力(やり取り)(発表)、読む力、書く力</u>」の4技能5領域を育てる効果的な指導の在り方をまとめている。加えて、「<u>小学校外国語教育の変遷</u>」、「<u>これまでの小学校外国語活動の成果と外国語教育における小中連携</u>」、「<u>新学習指導要領の特徴を背景に様々な指導環境に対応する基礎事項の整理</u>」、「<u>国語教育等の他教科との連携を図りながら子どもの気づきを促す指導</u>」、「<u>発達段階に応じたインプットの在り方</u>」や「<u>パワーポイントやデジタル教材などICT等の効果的な活用方法</u>」、「<u>小学校教師に必要な英語指導者としての資質</u>」に関する授業実践をまとめた。</p>
-----------------------	----------	------------------------------	------------------------------------	---

【その他(講演や発表)】				
1 芦屋大学夏季研修講座 講師	単	平成 27 年 8 月	芦屋大学教育研究所	テーマ 「学校現場における生徒指導 の課題」 中学校現場での生徒指導に 係る体験を紹介し、多感期の生 徒指導の在り方を示唆した
2 芦屋大学冬季研修講座 講師	単	平成 29 年 2 月	芦屋大学教育研究所	テーマ 「保護者とのつながりを求めて」 中学校現場での特別支援教 育に係る実践例から生徒支援 の在り方や課題を提示した。
3 平成 29 年度猪名川町 学校園経営研究会講師	単	平成 29 年 6 月	猪名川町教育教育委 員会	テーマ 「学校運営におけるそれぞれの 職の在り方」 学校教育法37条にある職の違 いを軸に、管理職を目指す教員 を対象に、生徒の個性を伸長す る学校の在り方や課題を提示し た。
4 芦屋市小中学校教科等 研究会講師		平成 30 年 10 月	芦屋市立小中学校教 科等研究会	テーマ 「英語教育の小中連携の在り方」 英語の授業構築における小中の 連携の在り方を具体的な教材を 提示しながら示唆した。小中で共 通に扱える題材を小中学校教員 を対象に提示した。

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 中村 整七					
教員個人に関する研究業績等					
科目名称	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発 表学会等の 名称	概 要
数学概論	(教育実践記録等) 1.平成 23・24 年度 芦屋市立山手中学 校研究紀要 平成23年 平成24年	共	平成 24 年 3 月 平成 25 年 3 月	芦屋市立山 手中学校	学校教育目標・教育課程・人 権教育・生徒指導・授業研究 などまとめ発刊した。授業研究 では、「基礎学力の定着を図り、 主体的に学ぶ力を育てる」 ための教育課程づくりの研究 実践をまとめた。特に、 <u>数学科 における授業研究では、「学習 集団における核となる生徒へ の指導方法の工夫を視点にし た研究を行った際に、「教師用 授業チェックリスト」など、どの 生徒にもわかりやすい学習にす るための指導者の細やかな方 策立案と運用に係る指導助言 をし、実践記録と考察を監修し た。1～4P 中村整七・今村一 美・大石健二・坪井政人・比嘉 美智子・米田直樹・村上秀作・ 上月ちひろ</u>
	(その他) 1.平成 28 年度 芦屋市教育研究部 会委嘱研究報告書	共	平成29年 3 月	打出教育文 化センター	芦屋市教育委員会が研究を委 嘱する「 <u>ユニバーサルデザイン 授業づくり部会</u> 」の算数数学科 の授業研究で「 <u>焦点化</u> 」「 <u>視覚 化</u> 」「 <u>共有化</u> 」の3つの視点を 意識的に取り入れた実践研究 を指導した。子どもの側に立っ た3つの視点でわかり易さを作 る研究成果をリーフレットや報 告書にまとめ、報告会で発表 するとともに市内の教職員に配 布した。 1P中村整七・山下正 記・佐伯千紘・八木美子・田淵 雅樹・林優也・田中義明・森洋 樹・小西三枝
	2.平成 29 年度 芦屋市教育研究部 会委嘱研究報告書	共	平成30年 3 月	打出教育文 化センター	芦屋市教育委員会が研究を委 嘱する「 <u>情報教育部会</u> 」の算数 数学科の授業で、 <u>学習支援ソ フト「スカイメニュー</u> 」を活用して 「 <u>誰もが授業で使えるタブレット</u>

					<p>PC」をテーマにした研究の指導を行う。<u>児童生徒がペアやグループで考えたものを個々のタブレットから大型提示装置に映し出し、それらの考えの共通点や違いを話し合い、学びを深めていく授業づくりの成果を報告書にまとめた。これを報告会で発表するとともに市内の教職員に配布した。1P中村整七・柳本耕平・加島太成・坂東龍二・池田兼資・陰山圭一・眞崎幹雄・伊藤佑輔・今若孝広・大川隼寛・長野伸哉・垣内あゆみ</u></p>
<p>初等教科教育法Ⅲ (算数)</p>	<p>(教育実践記録等). 1 平成 28・29 年度 芦屋市立打出教育文化センター所報</p>	共	<p>平成 29 年 3 月 平成 30 年 3 月</p>	<p>打出教育文化センター</p>	<p>芦屋市立学校園教職員の研修等(一般研修・課題別研修 38 講座、新規採用教員研修及び 2～5 年目教員研修 8 講座、教師力向上支援事業)の実施し、研修内容をとりまとめたもの。それぞれを監修した後に冊子化し、教育現場や各教育研究機関に配付した。<u>教師力向上支援事業においては、算数科 1 年「大きな数」・2 年「長さ」の単元全時間において授業者とともに単元構想を練り、毎時間の指導の実際を考察し、子どもの理解度を観点にした研究を掲載している。1P中村整七・大林亮・幸谷省吾</u></p>
	<p>2.平成 25 年度 芦屋市立山手小学校研究紀要</p>	共	<p>平成 26 年 3 月</p>	<p>芦屋市立山手小学校</p>	<p>教育目標「みんながかがやく」を実現させる研究実践をまとめ発刊した。授業研究では、「共に学びを創り合う子どもを求めて」を研究テーマに算数科の学習における言語活動の充実を目指し、「対話力」を育てるための方策を探る研究に取り組んだ。研究授業を実施するごとに「一般化できる方策」を取りまとめた実践記録を監修したものを掲載している。1～3P 中村整七・栖田千聡・石原恭子・櫃田麻衣・村岡宏美・大森一彦・新屋敷恵美子・三浦望帆・高橋知子・森洋樹・森本良子</p>
	<p>3.平成27年度</p>	共	<p>平成 28 年 3 月</p>	<p>芦屋市立</p>	<p>教育目標「みんながかがやく」</p>

	芦屋市立山手小学校研究紀要			山手小学校	<p>を実現させる研究実践をまとめ発刊した。<u>算数科教育では、子どもたちが、「算数(数学)用語」を駆使して、言葉を生かした対話ができることで知識や技能を更新していくことを観点にした実践研究を行う。考えた道筋を聴き合い、創り合うことで「仲間との応答のある学び」が具現できることを目指した研究実践を監修し掲載している。</u></p> <p>1～3P 中村整七・垣内あゆみ・佐伯千紘・塩山 利枝・延原勝哉・村岡 宏美・上殿敦子・宮尾陽子・澁谷英明・西嶋大輔・西尾節子</p>
教職実践演習(幼・小)	(教育実践記録等) 1.平成 25・26・27 年度 芦屋市立山手小学校「学校要覧」	単	平成 25 年 4 月 平成 26 年 4 月 平成 27 年 4 月	芦屋市立山手小学校	<p>学校経営の基本的構えを明示し、学校教育目標との関連、目指す地域の姿、目指す学校の姿、目指す家庭の姿を相互に関連づけ、<u>幼児教育との連携を視野に入れて教育課程編成に反映させている。さらに、学校の教育課程において実践する人権教育、授業、特別活動を 3 本柱に据え、年間計画に基づいた具体的な実践の様子を著し考察を加えている。</u>同時に、各学年及び専科における年間目標を監修したものを掲載している。</p>
	2.平成 26 年度 芦屋市立山手小学校研究紀要	共	平成 27 年 3 月	芦屋市立山手小学校	<p>教育目標「みんながかがやく」を実現させる研究実践をまとめ発刊した。<u>人権教育では、「確かな人権感覚を持ち、互いに認め合い、共に生きる子の育成をはかる」を基本方針にして、7つ(差別解消, いじめ・心, 特別支援, 国際理解, 平和, 男女共生, 命)の柱を立て、幼児教育との連携の視点も加えて取り組んだ教育活動の具体的な実践方法と実践記録をまとめ発刊した。</u>1～4P 中村整七・西尾節子・村岡 宏美・佐伯千紘・上殿敦子・宮尾陽子・澁谷英明・西嶋大輔・榎田麻衣・福本洋子・延原勝哉・中村珠貴</p>

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 福山 恵美子					
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	概 要
特別支援教育 総論	(著書) 1. 特別支援教育 総論	共著	平成 26 年 10 月	風間書房	本書は、特別支援教育の全容を理解しやすくするために、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱、言語障害、発達障害、情緒障害、重複障害のそれぞれの障害ごとにその歴史、心理、・生理・病理、教育課程・指導法、検査法を体系的にまとめたものである。筆者は知的障害教育の歴史を執筆した。 編著:守屋國光 分担執筆:山本晃、金森裕治、中村貴志、杉田律子、西山健、井坂行男、福山恵美子、藤田裕司、吉田昌義、武部綾子、小田浩伸、徳永亜希雄、行本舞子、平賀健太郎、横田雅史、上村逸子、小坂美鶴、山下光、小西嘉朗、高田昭夫、須田正信、富永光昭、氏間和仁 pp.133-143(498 項)
	(学術論文) 2. 知的障がい特別支援学校における ティーム・ティーチ ングに関する実践 的な研究－授業分 析とATの支援に焦 点をあてて－」第 I 報～第 III 報	単著	第 I 報 平成 26 年 9 月	大阪教育大学 紀要第 IV 部門 教科教育 63 巻第 1 号	ティーム・ティーチングの歴史や課題を踏まえ、より効果的な「ATの支援評価」表及び「長所項目」表を作成した。 pp.155-169
		単著	第 II 報 平成 27 年 9 月	大阪教育大学 紀要第 V 部門 教科教育 第 64 巻第 1 号	特別支援学校の授業をこれらの表を活用し、授業の中で効果的なティーム・ティーチングが行われていることを明らかにした。 pp.85-98
		単著	第 III 報 平成 28 年 3 月	大阪教育大学 紀要第 V 部門 教科教育 第 64 巻第 2 号	授業分析し、授業の特徴、「ATの支援評価」表を活用してその変容を探った。 pp.75-91

	<p>(著書) 3. 保育と表現</p>	<p>共著</p>	<p>平成 27 年 4 月</p>	<p>嵯峨野書院</p>	<p>第1章から第 12 章で成り立っている。筆者は、第 11 章、1 節、2 節において、<u>聾重複児が指文字や簡単な手話を使用して、ことばを獲得した事例について述べた。</u>(編著:石上浩美 分担執筆:矢野正、吉井英博、小松正史、長尾牧子、藤崎亜由子、藤井真理、手良村昭子、澤田真弓、湊田陽子、宮前佳子、<u>福山恵美子</u>、池永真義) pp.90-94(108 項) 第 11 章 1 節～2 節</p>
	<p>(学術論文) 特別支援教育におけるティーム・ティーチングに関する一考察—知的障害特別支援学校におけるティーム・ティーチングの長所項目表と AT の支援評価表作成を通して—</p>	<p>単著</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>大阪総合保育大学紀要第 12 号</p>	<p>第 I 章では、ティーム・ティーチングの定義・歴史を述べた。第 II 章では、知的障害の特別支援学校のティーム・ティーチングの課題について検討した。第 III 章では、先行研究からティーム・ティーチングの長所項目表の作成の過程、第 IV 章では、AT の支援評価表の作成の経緯を述べた。 pp.111-132</p>
	<p>4 特別支援教育におけるティーム・ティーチングの多様化に関する研究—共生社会を見据えたティーム・ティーチングのあり方を探って—</p>	<p>単著</p>	<p>平成 31 年 3 月</p>	<p>大阪総合保育大学大学院 博士学位論文</p>	<p>特別支援教育の現状に鑑み、通常学級及び特別支援学校の授業における T・T の実態と課題、専門スタッフ、外部人材が参画している T・T の実態と課題を明らかにするとともに、授業における T・T から多様な人材が教育活動に参画する T・T へと視点を広げ、共生社会を見据えた T・T のあり方を探った。 pp1-394</p>

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
<b>【著書】</b> 1 大学生生活入門～幼・小・特 支教員、保育士を目指す学 生のためのキャリアデザイン ～	共著	令和元年 4 月	開成出版株式会社	大学生として必要な心構え、一般 常識、実習に向けて及び教員と して働くための基礎知識を簡潔 に記載している。 <u>筆者は特別支            援学校での教育実習、現場で使            え割れる用語について担当した。</u> p.48,49,51,57,61,62(75 項) 監修:笠原清次,渡康彦 編者:石田愛子,竹安知枝 著者:安藝雅美,大江まゆ子,大谷 彰子,木下隆志,種田香,丹下秀 夫, <u>福山恵美子</u>
<b>【学術論文】</b> 1 特殊教育から特別支援教 育への転換ーその歴史的背 景と近年の動向ー (査読付)	単著	平成 29 年 3 月	大阪総合保育大学紀 要第 11 号	第 I 章では、ノーマライゼーシ ョンの理念ニリエのノーマライゼ ーションの思想と国連及び日本 におけるノーマライゼーション実 現のための動向について述べ た。第 II 章では、国際連合及び 日本における障害者施策につい て述べた。第 III 章では、障害の 概念の変遷として、ICIDH から ICF への転換の経緯、ICF の各 要素について述べた。第 IV 章で は、教育の場に注目しながら特 別支援教育に至るまでの歴史的 経緯について述べた。 pp.91-113
2 聾重複児のコミュニケーション 指導の事例 (査読付)	単著	平成 30 年 2 月	発達人間学研究 生涯発達科学会 第 18 巻第 1 号	聾重複児のコミュニケーション指 導をテーマに、ことばの発達、発 達の観点、聾重複児のコミュニケ ーション指導とは、ティーム・ティ ーチング、聾重複児の実際のコミ ュニケーション指導を通して考察 した。 <u>山中矢展、上村逸子、福山恵美            子、小田多佳子</u> pp.27-34
3 特別支援教育におけるティ ーム・ティーチングに関する 一考察ー知的障害特別支 援学校におけるティーム・テ ィーチングの長所項目表と AT の支援評価表作成を通し てー (査読付)	単著	平成 30 年 3 月	大阪総合保育大学紀 要 第 12 号	第 I 章では、T・T の定義と歴史 を述べた。第 II 章では、知的障 害特別支援学校の T・T の課題に ついて先行研究等を通して考察 した。第 III 章では、先行研究から T・T の長所を検討した。第 IV 章 では、先行研究及び授業分析を 通して、AT の支援評価表作成の 経緯について述べた。 pp.111-132

4 特別支援教育におけるチーム・ティーチングの多様化に関する研究—共生社会を見据えたチーム・ティーチングのあり方を探って—	単著	平成 31 年 3 月	大阪総合保育大学大学院 博士学位論文	特別支援教育の現状に鑑み、通常学級及び特別支援学校の授業における T・T の実態と課題、専門スタッフ、外部人材が参画している T・T の実態と課題を明らかにするとともに、授業における T・T から多様な人材が教育活動に参画する T・T へと視点を広げ、共生社会を見据えた T・T のあり方を探った。
---	----	-------------	--------------------	---

教育研究業績書					
安藝 雅美					
研究業績等					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	概 要
保育内容領域 「人間関係」	(学術論文) 『子育て支援にお ける縦割り懇談会 の試み —保育内容領域 「人間関係」の示唆 に向けて—』	単	平成30年4月	芦屋大学論叢 69号	子育て支援の一つでもある、 「懇談会」に対する新たな取り 組みと、養成校における「 <u>保育 者の質</u> 」向上に対する授業「 <u>人 間関係</u> 」への応用を考え、検討 した。
保育内容領域 「言葉」	(教育実践記録等) 「楽しい」絵本と「悲 しい」絵本の読み聞 かせ時の幼児の情 動反応	共	平成21年10月	日本小児保健 学会講演集 第56回 pp.202	幼稚園での読み聞かせ場面を ビデオ録画し、行動や表情を 分析した結果、 <u>楽しい内容の 絵本と悲しい内容の絵本では、 同じ読み聞かせでも幼児の情 動反応に変化が見られた。</u> 「楽 しい」絵本の読み聞かせでは、 行動・表情の表出や発話を増 加させるが「悲しい」絵本では 情動表出がほとんど見られな かった。
	子どものつぶやき から捉えた言葉の 育ち	単	平成29年11月	関西教育学会 69回	(共著者:松村京子、 <u>安藝雅美</u> ) 幼稚園での子どもの「つぶや き」を米田の分類を用いて行 い、さらに年齢別や男女別での 違いも検討し、 <u>そこから浮かび 上がる言葉の育ちを考察した。</u>
	絵本を通して心の 育ちを考える—絵 本読みの新たな試 みを通して—	単	平成31年3月	兵庫県私立幼 稚園協会教員 研修大会	<u>絵本読みの実践を通して、子 どもの育ちを見る。</u>
教育実習 教育実習事前・ 事後指導 参加実習 観察実習	(著書) 『成長し続ける教 育・保育実習』	共	平成30年4月	教育情報出版 2-8	<u>学生が実習に行くまでのオリエ ンテーション</u> についてを解説し た。(pp66~69) 著者: <u>安藝雅美</u> 、浦田雅夫、他
保育内容指導 法Ⅰ・Ⅱ	(論文) 「幼稚園年長児を 対象とした鍵盤ハ ーモニカ指導に関 する—考察」	共	令和元年7月	芦屋大学論叢 71号	附属幼稚園にて年長児への実 践指導を通して <u>保育実践の在 り方を考察する。</u> (共著者:石田愛子、 <u>安藝雅 美</u> 、)
	(教育実践記録等) 異年齢保育におけ る年長児の協同的 学び(2)	共	平成23年5月	日本保育学会 第64回大会 発表論文集 pp.753	劇遊びを中心とする協同的学 びに関する実践例を実際に使 用した教材や資料の紹介ととも に行う。 (共著者: <u>安藝雅美</u> 、中田尚美)

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
<b>【著書】</b> 1 成長し続ける教育・保育実習	共	平成30年4月	教育情報出版 2-8	再掲のため、略
2 大学生生活入門～幼・小・特支 教員、保育士を目指す学生のため のキャリアデザイン～	共	平成31年4月	開成出版 Ⅲ-2～3, IV-2(2)	学生としても心構えと、教員になる ための基礎知識と練習問題
<b>【学術論文】</b> 1『子育て支援における縦割り 懇談会の試み ー保育内容領域「人間関係」 の示唆に向けてー』	単	平成30年4月	芦屋大学論叢 69号	再掲のため、略
2(論文) 「幼稚園年長児を対象とした 鍵盤ハーモニカ指導に関する 一考察」	単	令和元年7月	芦屋大学論叢 71号	再掲のため、略
<b>【その他(講演や発表)】</b> 1 幼稚園における「2歳児保 育」の在り方についての一考 察	共	平成26年5月	日本保育学会第67回 大会発表論文集 pp.597	2歳児保育を導入している2園の 実践事例を通し検討した結果、 共通して保護者への育児支援と 子どもへの自立援助につながっ ていることが示された。 (共著者:安藝雅美、益岡時美、 山村悦子)
2 園舎建替工事を活かした モンテッソーリ教育的保育の 取り組み	共	平成28年5月	日本保育学会第69回 大会発表論文集 ID:18020	幼稚園などの建替工事におい ては、音や臭いや苦情など、マイ ナスなイメージが多い。しかし本 研究では、同敷地内での工事を通 して直接子どもが建築の様子を 目の当たりに出来る環境を生か し、日常保育の中に積極的に教 材として取り入れることで子ども たちの工事に対する思いが変化 していった実践例を紹介する。 (共著者:安藝雅美、齋藤香織)
3 子どものつぶやきから捉え た言葉の育ち	単	平成29年11月	関西教育学会 69回発 表論文集	再掲のため、略
4 「乳児保育」の検討Ⅰー 「乳児保育」科目の変遷ー	共	平成30年9月	保育教諭養成課程研 究会研究大会	「乳児保育」科目設置の背景・科目 の性質の変遷、教授内容の変遷の具 体の整理を目的とする。
5 「乳児保育」の検討Ⅱー 教科書目次からの分析ー	共	平成30年9月	保育教諭養成課程研 究会研究大会	新カリキュラムにおける保育士養成 課程で求められている「乳児保育Ⅰ」 「乳児保育Ⅱ」の方向性について、教 科書目次からの分析する。
6 「乳児保育」の検討Ⅲー 「子どもの保健」科目を中心 とした近隣科目との関連ー	共	平成30年9月	保育教諭養成課程研 究会研究大会	
7 絵本を通して心の育ちを 考えるー絵本読みの新たな 試みを通してー	単	平成31年3月	兵庫県私立幼稚園協 会教員研修大会	再掲のため、略

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 西光 晴彦					
教職課程における担当授業科目に関する研究業績等					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は 発表学会等 の名称	概要
情報社会と情報倫理(Ⅰ) ・情報社会と情報倫理(Ⅱ)	マスコミ環境の改善と現代の子ども達へのメディア教育1 現代メディアの状況を踏まえてマス・メディアを考える	単著	平成 14 年 11 月	芦屋大学論叢第 37 号	教育学論説資料保存会優秀論文として掲載保存。人類の進化・成長過程で言語が生まれ文字が創り出され人間社会のコミュニケーションの媒体となった。科学技術の発達により視聴覚メディアが誕生。更にこれを一斉に電送するマスメディアを開発した。情報化時代は高度通信情報化社会を誕生させた歴史的経緯を論述すると共に、「コミュニケーションとは」についての諸説を紹介している。そしてこれらのマスメディアから発信される膨大な情報を正しく取捨選択する処理能力を養うためのマスメディア教育の重要性について論究している。
	マスコミ環境の改善と現代の子ども達へのメディア教育2 現代メディアの状況を踏まえてマス・メディアを考える	単著	平成 15 年 3 月	芦屋大学論叢第 38 号	教育学論説資料保存会優秀論文として掲載保存。 <u>変貌したマスメディアの注目すべき事例(報道)を取り上げ、その報道のあり方が社会に対してどのような影響を与えたのかを検証と考察として論述した。また、これらことから「ジャーナリズムの倫理」について言及し、更には「言論の自由と知る権利」とは如何なるものなのかについても論述している。また、報道のあり方の問題点とマスメディア(ジャーナリズム)の本来あるべき任務と使命、そして存在意義を確認することによってマスメディアから発信される情報にアジテートされないメディアリテラシーを養成することを論述している。</u>
・視聴覚教育Ⅰ 放送教育Ⅱ	:伝達(教育)方法の発達過程とその歴史的背景の一	単著	平成 17 年 6 月	芦屋大学創立 40 周年記念論文集Ⅱ	教育と伝達について、その歴史的経緯・発達過程を探りながら、その発達過程の中で、こ

	<p>考察 -視聴覚教育を中心に-</p>			<p>れまで開発された視聴覚教育や視聴覚教材について紹介している。そしてこれらの視聴覚教材が教育にどのように役立っていることができたのかを論究している。また、視聴覚教育・視聴覚教材についての諸説を紹介し、現代の視聴覚教育・視聴覚教材と比較し解説している。そして高度情報通信社会で育った現代の子供たちの教育に視聴覚教育・視聴覚教材は必要であることを論述・展開しているが、これらはあくまでも教育の補助であり、これを活用する教師の役割が重要であることを結論づけている。</p>
--	-----------------------	--	--	---

教職課程以外の教員個人に関する研究業績等

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表 雑誌又は発 表学会等の 名称	概 要
<p><b>【学術論文】</b> マス・メディアの大衆操作とメディア教育(その1) 子供の食品(お菓子)選択吟味に与える影響[CommunicabilityとLiteracy]</p>	<p>単著</p>	<p>平成4年 12 月</p>	<p>平成4年度 日本産業教育研究会研究紀要</p>	<p>教育学論説資料保存会優秀論文として掲載保存。現在の子ども達は急激に発達した情報化社会の中で生活している。特にテレビの発達普及により自分から働きかけなくとも容易に情報が得られ、その断片との接触に終始という状況を作ってきた。このために子ども達の学習に対する姿勢は受動的な傾向が強く、無感動であり、探求心に乏しい。しかし情報化社会で育った子ども達の感性に訴えた情報伝達はかえって効果が高められると考える。感性に訴えた情報伝達すなわちテレビを媒体とする情報伝達である。この効果を論究している。</p>
<p>マス・メディアの大衆操作とメディア教育(その2) テレビ・メディアの虚構と現実 [CommunicabilityとLiteracy]</p>	<p>単著</p>	<p>平成8年9月</p>	<p>芦屋大学論叢 第25号</p>	<p>教育学論説資料保存会優秀論文として掲載保存。現代の子ども達を取り巻く環境は、その得る情報の質・量共に大人の社会に迫っている。しかも、これらの情報が子ども達に悪影響を与えていることも事実である。そして、この傾向は今後益々深まって行くことは容易に予測される。そこで、本研究の目的はマス・メディアから発信される情報伝達を正しく各々の</p>

				<p>映像メディアや活字メディアと比較判断すると共に取捨選択し、自分のものとして正しく理解するためのリテラシー(Literacy「情報処理能力」)を養成するためのメディア教育の必要性と、そのあり方と効果について報告するものであるが、現代メディアの状況を踏まえてマス・コミュニケーションを考える(近年の事例を検証しながら報道のあり方に一石を投じる)ことによって、マス・メディア(情報発信者)に警鐘を鳴らし、本来あるべきマス・メディア(ジャーナリズム)の使命と存在意義を確認し、その問題解決のための方途を論述してゆきたい。</p>
<p>伝達(教育)方法の発達の一考察 視聴覚教育の史的展開を中心に</p>	<p>単著</p>	<p>平成 10 年8月</p>	<p>大阪府立小学校・科学教育部(視聴覚教育分科会)特別紀要</p>	<p>当然のこととして視聴覚教材を活用した教育伝達(映像記号伝達)は、これをまったく活用しなかった教育伝達(文字記号伝達)よりも、その効果が高いのは自明の理である。このことは文字だけによるコミュニケーションと大きく異なることであり、文字は原則として就学することによってはじめて教えられ、文字と共に難しい意味や法則・論理を学んでいくのであるが、現代の情報化社会で生きる子ども達は就学以前の家庭のなかで、無意識の中で映像記号伝達(テレビが中心)を習得しているのである。そこで、人類がコミュニケーションを取る手段として言語や文字を開発してきた経緯と知識の伝達(教育)方法がどのように発達してきたのか、また、その過程の中で開発された視聴覚教育(教材)は、どのような必要性で誕生したのか、そして、代表的な学者や教育者の諸説の解説を通して、その発展過程と歴史的背景と意義を探ることによって現在の伝達(教育)に役立てようとするものである。</p>
<p>小学生における情報機器(コンピュータ・放送機器)に関する実態調査研究</p>	<p>共著</p>	<p>平成 11 年5月</p>	<p>平成 11 年度日本産業教育研究会研究紀要</p>	<p>情報機器(コンピュータ・放送教材)を活用することによって、学習者である子供たちは、新鮮な感動を得ることができるの</p>

<p>マスコミ環境(テレビを中心に)が現代の子ども達に与えた功と罪</p>	<p>単著</p>	<p>平成 14 年5月</p>	<p>日本産業教育研究会研究紀要</p>	<p>ではないかと考えることができる。そしてこのことによって、学習意欲が高められ、事物事象の認識を容易にさせるとともに、クリエイティブな思考と発展的な学習を促すことにつながると思われる。そして、何よりもこれらの情報機器(コンピュータ・放送教材)を正しく活用することによって、洪水のように氾濫するさまざまな情報を正しく比較判断するリテラシー(Literacy)も養成することになると考えられるのではないか。</p> <p>現代を生きる子供たちは情報機器に関して、どの程度の興味や知識を持っているのか、そして活用する環境作りはできているのか、また活用しようとしているのかということについて実態調査を行った結果を分析し、その実態を把握することによって、次代を担う子供たちに、少しでも正しい情報機器(コンピュータ・放送教材)の活用の仕方や情報機器(コンピュータ・放送教材)の設置・環境作り役に役立ててゆく為の方途を探りゆくものである。</p> <p>今世紀初頭に開発されたテレビによって、たしかに、コミュニケーション能力は高められ、私達の生活は便利になり、世界は狭まった。私達の住んでいる地球の裏側で起こった出来事が、テレビ画面を通じて自宅に伝達され、私達は、それらの情報をもとにして出来事を認識している。しかし、その情報は事実として直接、自分の感覚器で確かめたわけではない。もちろん地球の裏側で起こった出来事を誰もが直接確認することはできないが、いつのまにか私達は、それはテレビ画面に映った一部であるということを忘れている。その出来事が起こるに至るまでの背景や、その土地の環境まで、克明に認識する必要はないかも知れないが、少なくとも私達の生活に直接影響することや、私達の判断によっては社会情勢に変化をもた</p>
---------------------------------------	-----------	------------------	----------------------	---

<p>マス・メディアの大衆操作とメディア教育(その3) テレビ・メディアの虚構と現実 [Communicability と Literacy]</p>	<p>単著</p>	<p>平成 25 年3月</p>	<p>日本産業科学学会研究論叢 第18号</p>	<p>らすようなことについては慎重な判断と、それにとまなう行動をしなければならない。そこで、本研究ではマス・メディアより発信される情報伝達を正しく比較判断するリテラシー(Literacy)を養成するためのメディア教育の必要性と、そのあり方と効果について報告するものであるが、本稿では、サブタイトルにあるように[マスコミ環境(テレビを中心に)が現在の子ども達に与えた功と罪]について論述してゆきたい。</p> <p>私たちの日常生活での情報源は未だテレビ放送から発信されるものが、その大半を占めているのが現状である。このことから映像による情報伝達の媒体として、凄まじい影響力を持つテレビは弊害も与えていることは紛れもない事実である。家庭の茶の間に座ってテレビを見ながらくつろいでいるだけなのに、実際にはエネルギーを消費しているし、テレビを見すぎると精神活動が低下してしまうという精神科医からの報告もあげられている。また、テレビ映像の持つ特殊技法の発達には虚構と現実の境界をぼかしていることにも気づかねばならない。このことにより、マス・メディア(テレビ放送)より発信される情報伝達を正しく比較判断するリテラシー(Literacy)を養成するためのメディア教育の必要性を報告するものである。</p>
---	-----------	------------------	--------------------------	--

① 教育研究業績書					
教 育 研 究 業 績 書					
氏 名 藤 本 光 司					
教職課程における担当授業科目に関する研究業績等					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は 発表学会等 の名称	概 要
中等教科教育 法【技術】	(著書) 『技術・家庭科 【技術分野】』	共著	平成 27 年 2 月	開隆堂	主な執筆は、「ガイダンス p2-14」、「材料と加工に関する技術 p20-84」である。本教科書は、全国の中学校技術科で6割が利用している文部科学省検定済教科書である。
	『技術・家庭科 【技術分野】学習 ノート』、開隆堂	編著	平成 27 年 11 月 発行予定	開隆堂	全国の中学校技術科で生徒が使用する学習用ノートの編著。「ガイダンス：p1-7」、「材料と加工に関する技術：p8-43」、「エネルギー変換に関する技術：p44-63」について、本学卒業のベテラン技術科教員6名を招集し、新たな視点による生徒の学び支援の学習ノートとしてまとめた。
	『アクティブラーニングで深める技術科教育（自己肯定感が備わる実践）』	共著	平成 27 年 10 月 30 日	開隆堂	グローバル化に対応した学校教育として、個々人の潜在的な能力を最大限に引き出し、よりよい社会を築いていけるような教育が重要である。本著は、技術科教育の意義を改めて見直し、実践的な内容で編集した。「倫理観を養いやさしさを育む情報教育」 pp128-135
	『主体的に学び意欲を育てる教学改善のすすめ』	編著	平成 28 年 4 月 15 日	ぎょうせい	教育学を学ぶ学生、教職に従事している教員に対して、これからの「教学」を考え、その在り方、道筋を示すために教育方法的な側面から執筆した。全 238 ページ編著

	(学術論文) 藤本光司、他 15 名：「工業高校におけるコミュニケーション演習と能動的学習(1)～(6)」	共著	平成 26 年 3 月～ 28 年 3 月	情報コミュニケーション学会 研究報告 CIS (2014～2018)	工業高校の特色を活かし、チーム学習、ものづくりを通して、コミュニケーション能力や表現能力を身につけさせることを目的に授業内容や学習の効果と課題、評価方法について 5 年間の取組を論述した。第 13 回全国大会にて優秀発表賞を受賞
	(教育実践記録等) 「循環型社会形成をめざした環境学習の実践、～ミミズ・コンポストによる給食残菜の堆肥化と野菜の栽培・調理・販売～」	単著	平成 19 年 3 月	『シティ・サクセス・ファンド第 3 回実践報告集』、(財)消費者教育支援センター	技術科の「生物育成に関する技術」における教材として、給食から排出される残菜を活用して、ミミズを育て、そこから生まれた堆肥を活用し生物を育成する学習モデルを作成し循環型環境教育の授業実践を行った。本稿では、その取組についての概要を論じた。pp.92-95
	「アクティブラーニングに求められる学習成果の測定と活用」	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会 第 30 回年会論文集(京都市立芸術大学)	学習者が教科の到達目標に達したか否かは形成的評価を経て定期考査などで判定される。その過程で情意形成が関連しているが、生徒の自主性について視覚化できる評価の方法論について調査に基づき報告した。pp18-21
	(著書) 『中学校技術・家庭科地域別教材「技術分野の実践例・授業提案集(近畿編)」』	編著	平成 27 年 5 月	開隆堂	本著の編著者として「巻頭言」を執筆し次の学習指導要領の方向性を述べた。近畿地区 2 府 4 県の技術科教員から集めた教育実践集であり、地域の特色を取り入れた実践でまとめた。技術科全 4 領域を網羅し各地区から 15 編を選んだ教育実践集である。pp2-31
	(学術論文) 「中学校技術科における材料加工分野の研究(1) — 木工具に視点をおいた教材の考察 —」	共著	平成 28 年 2 月	情報コミュニケーション学会 第 13 回全国大会発表論文集	材料加工分野についての基礎研究として、平成 28 年度から使用される文部科学省検定済の『技術・家庭科(技術分野)』の 3 社に記載された木材加工の「木工具」について比較調査した。その結果、多様に掲載されているものの各社かなりの差が見受けられた。

	「主体的・対話的で深い学び」に挑む技術科教育の研究(1)－兵庫県中学校技術・家庭科教育の研究と試行的取組からの学び－」	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会 第 33 回 年会論文集	次期学習指導要領を教育現場で実践するために、県内の教科部会との共著で投稿した。主に技術科としての「見方・考え方」について、生物育成の内容の授業実践を含めて論述した。
	中学校技術科の教職課程における課題と展望(1)－全国の動向と本学の現状について－	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会 第 35 回 年会論文集	本学では 2018 年度末、文科省が実施した教職課程の再課程認定審査を終えた。これに基づき、技術科教育の全国的な養成課程の状況を整理した。一方、本学学生の教員としての学校への着任状況を過去 8 年間に遡り整理するとともに、本学の課題と展望を述べた。
	「教員採用試験における専門分野への対応、－オリジナル問題集の制作と学生調査による評価－」	共著	令和 2 年 2 月	情報コミュニケーション学会 第 17 回 全国大会発表論文集	技術科専門分野の採用試験問題集を制作し、さらに本学学生に調査を実施して採用試験に関する課題や展望について述べた。
教育の方法と技術(中等)	(著書) 『元気が出る学び力 世の中の本質が見えてくる学びのヒント』	編著	平成 23 年 4 月	ぎょうせい	教員が軸とするこれからの教育的視点を論じた。コミュニケーションなどの古典的教授法はもとより、ピアジェの行動主義やジューイの構成主義の考え方などを現代の教育事例に透かして考える内容を掲載している。さらに、学習者が主体的に学ぶアクティブラーニングの手法として、e-learning や学習環境のラーニングコモンについても執筆した。林徳治、奥野雅和らと編著、pp1-202
	(学術論文) 「アクティブラーニングに求められる学習成果の測定と活用」※方法論からのアプローチ(テーマ別セッション)	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会 第 30 回 年会論文集、pp18-21	学習者が教科の到達目標に達したか否かの形成的評価について情意形成の側面から自主性の因子分析を行い、高等学校 1 年生と 3 年生の変容を統計分析して研究成果を報告した。

	(教育実践記録) 「工業高校におけるコミュニケーション演習と能動的学習(1)～(5)」	共著	平成 25 年～平成 27 年	情報コミュニケーション学会第 10 回～13 回全国大会発表論文集	高大連携校での 3 年間の取り組みについて、授業内容、ものづくりを通じたコミュニケーション演習、生徒主体の展示活動、チーム学習の効果と課題、などについて報告した。
	(著書) 『主体的に学び意欲を育てる 教学改善のすすめ』	編著	平成 28 年 4 月	ぎょうせい	本著は、知識基盤社会を生き抜く力の学生の学びについて主に教職履修の学生を対象とした著書である。構成主義や行動主義、ガニエの 9 教授事象など基礎・基本的な学習理論を網羅しつつ、アクティブラーニング型授業の設計プロセス(ADDIE モデルやロジックツリーなど)について、これから求められている 21 世紀型能力のキーコンピテンシーを軸に展開している。また、ICT を活用した反転授業や情報モラルの指導方法など、最新の ICT 活用の実践も掲載している。全 238 ページを編著
	(学術論文) 『学習情報研究 (2007、3 月号)』、 特集：国際交流学習の成功の秘訣、 「国際理解教育における成功の秘訣」	共著	平成 19 年 3 月	(財)学習ソフトウェア情報研究センター	国際社会では自己を確立し、人権感覚を育み、広い視野で異文化を吸収し、違った立場や違う国の人との共生をめざした資質や能力を育成する必要がある。本稿では、日本人学校や国際協力の教育活動(JICA) について社会教育を軸に論述した。林徳治との共著、pp.9-13、
	(教育実践記録) 「中学校技術科教育におけるエネルギー変換に関する教材研究(1) - ESD の観点から LED 教材の一考察 -」	共著	平成 26 年 11 月	情報コミュニケーション学会 研究報告 CIS Vol.11、No4	中学校技術科において、持続可能な開発のための教育 (ESD) の観点からエネルギー変換の領域で扱う教材について考察した。pp14-15

「中学校技術科における自尊感情育成の研究(1) - 電子黒板の効果的活用法 -」	共著	平成 28 年 2 月	情報コミュニケーション学会 第 13 回全国大会発表論文集	授業に参加できない生徒の中には「意欲」に問題があるのではなく「発達障害」が原因であると推定される者も少なくない。これらの生徒に対する「合理的配慮」についても検討していく必要がある。本稿では、電子黒板(スマートボード)を活用した授業実践について報告した。pp24-27
「プログラミング教育における自己調整学習モデルの開発と取り組み」	共著	平成 31 年 2 月	情報コミュニケーション学会 第 16 回全国大会発表論文集	小学校の学習指導要領が改訂されプログラミング教育について、今後の方策など取り組みべき概観を述べた pp116-117
「中学校技術科の教材開発における SDGs との関連(1) - 理論背景の整理と学習モデルの開発に向けて -」	共著	平成 31 年 2 月	情報コミュニケーション学会 第 16 回全国大会発表論文集	持続可能な開発目標(以下、SDGs)は、昨今、国際的な行動規範として多くの産学官のビジョンに位置づけられている。本稿では、大学教育における教学面から SDGs への方策について、先行事例を概観し、次に本学的な教育ビジョンを示した。
「中学校技術科の教材開発における SDGs との関連(2) - 再生可能エネルギーを用いた教材開発について -」	共著	平成 31 年 2 月	情報コミュニケーション学会 第 16 回全国大会発表論文集	本稿では、先の第 1 報を引き継ぎ、技術科の「エネルギー変換の技術」領域と本学のソーラーカープロジェクト活動で得た知見を融合しつつ、SDGs と関連させた教材開発の実施している内容について報告した。
「中学校技術科の教材開発における SDGs との関連(3) - 稲作を題材とした生物育成と持続可能な教材モデル -」	共著	平成 31 年 2 月	情報コミュニケーション学会 第 16 回全国大会発表論文集	稲作に関する学習は小学校で終わってしまうことが多い。本稿では、技術科の生物育成の技術と小学校の学びを連携させ、SDGs の概念を取り入れた教材開発について述べた
(著書) 『必携! 相互理解を深める コミュニケーション実践学(改訂版)』	共著	平成 22 年 3 月	ぎょうせい	学習者相互がコミュニケーション演習を通じて、相互理解できる、21 の演習内容を編集した。また、アクティブラーニングで利用できる演習用のワークシートも作成した。

教職実践演習 (中等)	(学術論文) 「主体的な学びを支援するためのチーム学習に関する研究」	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会 第 30 回年会論文集	心理学カウンセリング手法の「アサーション」や地区的概念法(KJ法、強制連結法)など、21の教材コンテンツ。全教材が90分のグループ演習とし、学習者がPDCAサイクルマネジメントによる振り返り学習が可能な学習者参加型教材。教員が学級経営や授業作りに活用できる配布プリント教材も全ての編に揃えている。林徳治、沖裕貴監修、pp1-186
	「未来を拓く”人間力”を育てる」	共著	平成 30 年 12 月	日本教育情報学会誌「教育情報研究」、第 33 巻第 2 号 2017、pp43-57	本学の3つのポリシーにおいても重視している「人間力」について、学術シンポジウムを開催し、理論背景や概念を整理した。様々な立場のシンポジストの発言を整理して、今後の人間力に関する点を概観した。
	(教育実践記録) 『学習情報研究 (2009、3月号)』 「Web活用によるフォトランゲージ手法 ～情報を構造化する力の育成～」	単著	平成 21 年 3 月	(財)学習ソフトウェア情報研究センター	学校の教科指導や特別活動において班編成を軸とした学習をすすめることが多いが、無作為抽出型の班編成では、学習者の情意的特性が偏り、班の活気や学習到達度に影響する場合もある。FFS理論を活用して中高生のリーダー特性を分析し、リーダータイプの出現率や因子特性を一般社会人と比較した。 pp206-207

	<p>(学術論文記録) 「職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(1) ー ARCS モデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だて ー」</p>	共著	平成 29 年 3 月	情報コミュニケーション学会 第 14 回全国大会 発表論文集	<p>Web 上に発信された情報を学習教材として活用する場合、その情報の信憑性を精査しなければならない。言語情報の整合性を確認するのは容易であっても、視覚情報が与える影響は意図に反した解釈がなされる場合もある。フォトランゲージ (Photo Language) 手法に応用し、授業実践で得た視覚情報の取り扱いに関する知見について述べた。pp1-2</p>
	<p>「教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開 (3) ー 中学校技術科教育における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業モデルの検討 ー」</p>	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会 第 15 回全国大会 発表論文集	<p>教科教育法で求められる指導内容は、教科の歴史的経緯を理解し、学習指導要領の読み解き、授業の実践力に必要な知識・技能の習得などである。本研究では、15 回の授業を通じたアクティブラーニングの実施と技術科教員に必要な知識と実践力を対話的かつ主体的に身に付け、深化できる能力を求め、インストラクショナルデザインの知見を取り入れ実践を重ね知識と実践力を効果的に身に付けさせたいと考えた。本稿では、特に ARCS モデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だてを報告した。pp28-29</p>
	<p>「プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(1) ープログラミング的思考と学習状況に関するアンケート調査よりー」</p>	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会 第 34 回年会論文集	<p>中学校技術科の教職科目において、授業設計を行うための授業デザインを論述した。特に、次期学習指導要領に掲載された、設計と試作について、学生たちと取り組んだ試作モデルの製作と授業時数との関連性について述べた。pp149-149</p>

	「グローバル人材の育成を視野に入れた高大接続教育の研究 － 芦屋学園中学校・高等学校における海外派遣プログラムの検証 ー」	共著	令和元年 7 月	芦屋大学論叢第 71 号	中等教育において、プログラミング的思考の向上を目的として、自己調整学習に関する研究を行った第 1 報である。本報では、プログラミング的思考と学習状況に関するアンケート調査を実施した内容を述べた。pp254-255
	(学術論文記録) 「教育実習中における教育実習支援モデルに関する検討 ー SNS を利用したコミュニケーション活動を通じて ー」	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会 第 32 回年会論文集	「国際理解教育」から今後求められている「国際教育」について考察し、さらに、海外生徒派遣プログラムに特化して附属学園高校における生徒派遣プログラムの取り組みを振り返る。一方、その成果と課題を踏まえ、今後の海外派遣プログラムのあるべき方向性を再検討し、これからの国際教育への取り組みを提言した。Pp77-87
教育実習【技術】	(学術論文) 「グローバル人材の育成を視野に入れた高大接続教育の研究 － 芦屋学園中学校・高等学校における海外派遣プログラムの検証 ー」	共著	令和元年 7 月	芦屋大学論叢 71 号、pp77-87	高大接続教育の柱とする『学力の 3 要素』を育むための最適な教育財を国際教育活動の観点から考察したい。加えて文部科学省が現在進めようとしている多種多様な高大接続教育改革において、将来日本が様々な分野で世界的に高い競争力を保持し、継続的かつ恒久的にそれが担保することが可能な教育システムの構築を模索するものである。「アクティブ・ラーニング」メソッドも考慮に

					入れながら理想的な国際教育の方向性を高大接続事業の観点から考察し提言した。
(教育実践記録)					
「技術科教育としての産学連携とカリキュラム・マネジメント (1) - エネルギー変換分野における神戸と但馬の授業実践 -」	共著	令和2年2月	情報コミュニケーション学会 第17回全国大会 発表論文集	教育実習は、実習生自らが教職への適性や進路を考える貴重な機会である。一方で、多くの実習生は教育実習に対して様々な期待とともに悩みや疑問を抱いていることが多い。教育実習用 SNS を通じて様々なコミュニケーション活動を行い、実習に関する情報の共有などに対して積極的な助言や励ましという支援を行った。実習生をはじめ3年生においても成果が得られた。教育実習支援モデルについての概要とその成果について報告した。 pp24-27	
「技術科教育としての産学連携とカリキュラム・マネジメント (2)、- 問題解決力の育成を目的とした学生の主体的な学び -」	共著	令和2年2月	情報コミュニケーション学会 第17回全国大会 発表論文集	教科間連携や異校種連携(幼少中など)などカリキュラム・マネジメントを取り入れた教育活動が注目されている。本稿では、理論背景を整理し、産官学の関連による実際の授業実践事例を紹介	

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 齋藤 治						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発 表学会等の名 称	執筆 ペー ジ数 (総ペ ージ 数)	概 要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は 執筆箇所を詳述)
電気 電子 工学 I 実験 実習 I	<学術論文> ブレッドボード電子回路 実習教材研究	共	平成 29 年 8 月	日本教育情 報学会第 33 回年会	(抽出 不可) (2)	齋藤治、森寄功、森下博行 ハンダを用いず、電子回路図から実体配線を展開学習 する際に有用となる教材の考え方を述べている。エネ ルギー変換分野での電子回路実習教材のコア的教材 論を述べた。
電気 電子 工学 I	<学術論文> 演習用合成抵抗ボード を用いた電気配線構築 力育成の考察	共	平成 29 年 8 月	日本教育情 報学会第 33 回年会	(抽出 不可) (2)	森寄功、齋藤治、渡康彦 電気回路配線技術の基本習得となる合成抵抗計算と 実習に関する論述。エネルギー変換分野での基礎コア 領域教材となる考察である。
電気 電子 工学 I 実験 実習 I	<学術論文> アクトグラフを用いたタマ ネギバエの自然条件下 での歩行活動の記録	共	平成 27 年 7 月	芦屋大学論 叢第 63 号	1(10)	渡康彦、齋藤治、田中一裕 筆者らが持つ専門電子技術およびソフトウェアが特異 な生物学研究分野での装置作成と実務運用に帰する 論文の紹介。(執筆担当部分:実用的専門的計測装置 の紹介と開発過程の記述が、エネルギー変換分野に おいての応用電子装置の紹介(p34-35)となる。
電気 電子 工学 I 実験 実習 I	<学術論文> 齋藤治、C++MFC による アクトグラムソリューション の移植構築	単	平成 26 年 1 月	芦屋大学論 叢第 60 号	9(9)	筆者の持つシステムエンジニアリング技術、C++言語に て電子応用装置であるアクトグラム装置の全移植構築 をした記述内容。エネルギー変換分野では、実務、応 用電子分野での開発過程を論述している箇所に有意 性がある。
電気 電子 工学 I 実験 実習 I	<学術論文> ブレッドボード配線方式 による電子回路作成の技 術教育	共	平成 25 年 8 月	日本産業教 育学会第 56 回全国大会 (山口)	(抽出 不可) (1)	齋藤治、渡康彦、藤本光司 筆者の教育現場で実演しているハンダ付けを必要とし ないブレッドボードによる電子回路学習作製状況を発 表。エネルギー変換分野での電子回路論理の理解と 配線技法修得に学習者の躓き易いポイントを提示、紹 介(P41)した。
電気 電子 工学 I 実験 実習 I	<学術論文> 齋藤治、昆虫活動記録 装置の高速計測システム ソフトウェア移植	単	平成 22 年 12 月	芦屋大学論 叢 54 号	10(10)	筆者が持つ特異なインターバルタイマ操作技術を Win-PC 上に C++言語で移植構築した、電子制御分野 での高速サンプリング技術を紹介している。エネルギー 変換技術分野では、応用計測の基幹技術となり、電子 計測の基本分野である。

電気 電子 工学 I 実験 実習 I	< 学術論文 > Measurements of locomotor activity in hatchlings of the migratory locust <i>Locusta migratoria</i> : effects of intrinsic and extrinsic factors	共	平成 21 年 8 月	Physiological Entomology (2009)34	1(10)	KenichiHarano,SeijiTanaka,YasuoWatari,OsamuSaito,  筆者が独自開発した高速応答装置を、国際学会論文 (昆虫領域)での共著、根幹技術について、紹介をし た。(執筆担当部分:観測データ、記録、開発システム コストなどについて記載があり、エネルギー変換技術分 野での、応用電子回路の一部紹介(P263)。)
--------------------------------------	--	---	-------------	---	-------	---

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表 学会等の名称	概 要
1【実践報告】 芦屋大学自己点検評価委員会 2016年度上半期活動の軌跡	共	平成 29 年 1 月	芦屋大学論叢 66 号 3(10) P51-61	河村繁、齋藤治、石田愛子、青木敦英、中村 卓司、猪田裕子、森下博行  筆者が持つ ICT ソリューション技術を、大学認 証評価業務での基幹システムとし、リサイクル PC、および共有サーバ構築を運用し、劇的な 実務効率改善を行った記録。(P52~P54)
【その他】 (講演や発表、運営委員会等) 1.大学自己点検評価委員会 芦屋大学認証評価業務遂行での 副委員長職を担当 2.日本教育情報学会実行委員会 3.芦屋大学卒論プレゼンテーショ ン大会 司会進行等企画実行委 員長		令和 1 年 12 月 (平成 28 年 4 月 ~)  平成 29 年 8 月  平成 27 年 1 月 迄実施 (平成 24 年 1 月 ~ )	芦屋大学 自己点検評価委 員会  日本教育情報学会第 33 回  芦屋大学経営教育学部卒 論発表運営委員会	毎年作成をする大学認証評価書編纂と 7 年毎の実地調査実務業務運営を担当。  大会実行委員会運営委員一員として大 会運営業務を担当。  卒業論文発表会の企画運営司会進行お よび専門分野(電気電子エレクトロニクス 分野)での講評、コメント等。

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 瀧 巖						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ページ 数)	概 要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
	芦屋大学論叢第2 9号	単	1998 年 11月		6	一般教養としての 技術科教育方法の考察 －大学生の木材加工の基礎技術評価 を通して  はさみやのこぎりが無器用で上手に使 えることが少なくなってきたといわれ る1970年から80年代にかけて育っ た子供たちが現在、大学生になっ ている。その学生たちに対して木 材加工の技術について指導した 内容について考察した。
	芦屋大学論叢第3 6号	単	2002 年 3月		16	中学校技術分野の教育課程の編成と 「技術とものづくり」指導の在り方  平成14年度より学習指導要領が改訂 され、技術科の授業数に変化が生じ た。今後の授業形態はどのように運 営すればよいのか、学生にアンケート を実施し今後の技術教育の在り方 について考察した。
	芦屋大学卒の事 業家たち	共	2005 年 7月		14	芦屋大学卒の事業家たち  芦屋大学を卒業したOBたちに、大 学時代の思い出や現在の会社経営 などについて現在に至る現在に 至るインタビューし、まとめた。
	芦屋大学論叢第4 2号	単	2005 年 11月		12	中学校技術分野における改訂教育課 程の編成－学校教育適用への課題 に関する考察－  兵庫県の某中学校において現行の 教育課程実施の実態調査を行った。 これについての考察。
	芦屋大学論叢第4 5号	共	2007 年 6月		12	アジア太平洋における武道国際交 流－ハワイにおける空手国際交流 を中心－

						ハワイでの武道国際交流における異文化交流と日本本土と違った空手道の歴史について
	芦屋大学論叢第70号	共	2018年 11月	講演論文	1	北村絵梨加、藤本光司、盛谷亨、若杉祥太、瀧巖:「教職科目におけるインスタラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(3) — 中学校技術科教育における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業モデルの検討 —」 Development of Active Learning using Instructional Design in Teacher Training Courses (3) — Teaching model for realizing “self-directed, interactive, and deep learning” in the Industrial Arts Education of the Junior High School — 情報コミュニケーション学会 第15回全国大会発表論文集(大手前大学)、pp148-149、2018.3.11

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
【その他(講演や発表)】 1 神戸東ロータリークラブ		2006年 4月		兵庫県武道国際交流団の報告 —日本武道の必要性— 日本の武道の魅力と必要性は、国内以上に世界で認められ、盛んに指導が行われている。
2 ひょうご講座		2006年 7月		武道国際交流における英語異文化の理解について

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 中村 宏敏						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ページ 数)	概 要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
情報 機器 の操 作	『生活と経営』	共	平成 20 年 4 月	株式会社 一 灯館		「情報機器の操作」について モラル教育を中心に解説
ネッ トワ ーク 技術	『経済学入門-個別 現象から学ぶ-』	共	平成 30 年 3 月	ニシダ印刷製 本	(p11 5～ 125)	webページ制作 著者:中村宏敏 全体を松井温文が編著 13章(最終章)で授業ネットワーク技術 で行っているwebページ制作を、わかり やすく、解説をしながら目的を持ったwe bページ作成について執筆
情報 通信 ネッ トワ ーク	(学術論文) 1.『教育現場のネ ットワークセキュ リティの現状と提言』	共	平成 20 年 12 月	日本産業科 学学会 関西 部会		学校教育現場、特に中学校・高等学校にお いてのネットワークのセキュリティと現状につ いての調査報告です、学生や生徒が使うネ ットワークのネットワークセキュリティとそれを 管理する責任者について報告と提言をした もの

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【学術論文】 1『教育現場のネットワーク セキュリティの現状と提言』 情報通信ネットワーク	共著	平成 20 年 12 月	日本産業科学学会関 西部会	学校教育現場、特に中学校・高等学 校においてのネットワークのセキュリ ティと現状についての調査報告で す、学生や生徒が使うネットワークの ネットワークセキュリティとそれを管理 する責任者について報告と提言をし たもの
2『インターネット利用のメリ ットとリスクーこどものネット 環境においてー』 コンピュータネットワーク	共著	平成 21 年 12 月	日本産業科学学会関 西部会	学校教育現場、特にこどもの教育現 場でのインターネット活用した調べ学 習について、その必要性とリスクにつ いて考えた。学校のネットワーク環境 も踏まえながら報告
3『教育現場におけるネット ワークセキュリティと情報教 育の必要性 コンピュータネットワーク	共著	平成 21 年 12 月	日本産業科学学会関 西部会	学校教育現場においてのネットワ ーク環境のセキュリティと現状につ いて調査報告した。学生や生徒が使うネ ットワークのセキュリティとそれを管理 する責任者について、とくに教育現 場における提言

4『学生相談における携帯電話相談システムの構築』	単著	平成 22 年 4 月	日本産業科学学会関西西部会	平成 21 年度文部科学省採択事業である学生支援推進事業の[教職協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施の中のシステムである「携帯電話による相談システム」の部分について開発時の報告についてセキュリティをどのように保つのかを個人情報、相談情報を含め報告
5『携帯電話相談システムの構築と稼働』	単著	平成 22 年 7 月	日本産業科学学会第 16 回全国大会	平成 21 年度文部科学省採択事業である学生支援推進事業の[教職協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施のシステムの中の特に「携帯電話による相談システム」の部分について構築・稼働やこれからの問題点について報告
6『教職員協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施 平成 21 年度取組経過報告』	共著	平成 22 年 12 月	芦屋大学論叢 54 号	平成 21 年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業学生支援推進プログラムの補助事業として実施している「教職員協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施」の平成 21 年度取組経過報告書である。 本稿は、本取組の目的と概要、取組の体制と実施計画、本年度の活動経過、評価委員会、目的の達成状況、などの項目に分けて、本年度の活動内容を紹介し、最後に本年度活動を総括するとともに、次年度活動の方向などに言及している。
7『外出先でのネット接続について-Wi-Fi 接続-』 情報通信ネットワーク	単著	平成 22 年 12 月	日本産業科学学会関西西部会	出張時などの外出先で、インターネットへの接続に関する調査報告(フリースポットとはなんなのか、どこでどのように接続ができるのかを)と、特に Wi-Fi 接続器機(i-PodTouch や i-Pad・ノートパソコン)について、今後の動向と可能性についての調査報告、学部生においては、自宅と変わらないネットワークへの接続環境にするためには報告
8『学生連絡システムの構築』 (大学教育・学生支援推進事業【テーマ】学生支援推進プログラム)	単著	平成 23 年 4 月	日本産業科学学会関西西部会	平成 21 年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業学生支援推進プログラムの補助事業として実施している「教職員協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施」の平成 22 年度から 23 年度に開発をした教職員から学生への連絡システムを構築した取組経過報告である。 本稿は、本取組の目的と概要、取組の体制と実施計画、本年度の活動経過、評価委員会、目的の達成状況、などの項目に分けて、本年度の活動内容を紹介し、最後に本年度活動を総括するとともに、次年度活動の方向などに言及している。
9『リアルタイムサポートシステム学生連絡システムの構築』	単著	平成 23 年 7 月	日本産業科学学会第 17 回全国大会	平成 21 年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業学生支援推進プログラムの補助事業として実施している「教職員協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施」の平成

(大学教育・学生支援推進事業【テーマ B】学生支援推進プログラム)				22年度から23年度に開発した教職員から学生への連絡システムを構築した報告である。 本稿は、本取組の目的と概要、取組の体制と実施計画、本年度の活動経過、評価委員会、目的の達成状況、などの項目に分けて、本年度の活動内容を紹介し、最後に本年度活動を総括するとともに、次年度活動の方向などに言及している。
10『平成21年度 文部科学省 大学教育・学生支援推進事業 学生支援推進プログラム 教職員協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施 平成22年度取組経過報告』	共著	平成24年1月	芦屋大学論叢 56号	平成21年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業学生支援推進プログラムの補助事業として実施している「教職協働による学生リアルタイムサポートシステム体制構築と実施」の最終年度改良報告と22年度の経過報告
11『リアルタイムサポートシステム学生連絡システムの構築』 (大学教育・学生支援推進事業【テーマ B】学生支援推進プログラム)	単著	平成23年3月	日本産業科学学会研究論叢 17号	平成21年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業学生支援推進プログラムの補助事業として実施している「教職員協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施」の平成22年度から23年度に開発した教職員から学生への連絡システムを構築したことで双方向連絡システムを構築した報告である。 本稿は、本取組の目的と概要、取組の体制と実施計画、活動経過、評価委員会、目的の達成状況、などの項目に分けて、本年度の活動内容を紹介し、今後の活動の方向などに言及している。
12『携帯電話とパソコンを賢く上手に使おう』	共著	平成24年12月	日本産業科学学会関西西部会研究報告集	スマートフォンの無料通話アプリ比較、利用する学生目線での便利な点、気をつけなければいけない点をアプリ毎に比較をしながら学生生活でどのように使えるかを報告
13『平成21年度 文部科学省 大学教育・学生支援推進事業 学生支援推進プログラム教職員協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施』平成22年度取組経過報告	共著	平成25年1月	芦屋大学研究論叢第58号	平成21年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業学生支援推進プログラムの補助事業として実施した「教職員協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施」が平成23年度で完了したので、その成果を報告するものである。 本稿は、本取組の目的と概要、実施体制と実施経過、成果物の概要と得られた効果、などの項目に分けて、活動内容を紹介し、最後に今後の運用に言及している。
14『心理学を応用したWEBデザインによる経営戦略』	共著	平成25年12月		色彩や配色、コンテンツが与える心理学効果を期待し、本学学生を対象に賃貸住宅のホームページを調査研究した。学生が賃貸住宅を考える場合にホームページが与える企業イメージがどのように作用するかをアンケート調査により調査研究し、実際に学

				生の実家で経営されている賃貸住宅ホームページに適應してみてもどのような効果が得られるかを研究したものである
<b>【その他(講演や発表)】</b> 1 学生拳法リーダーズ研修会 2008～2020	単独	1996年,1997年 1998年,1999年 2000年,2001年 2002年 2003年 2004年 2005年 2006年 2007年 2008年 2009年 2010年 2011年 2012年 2013年 2014年 2015年 2016年 2017年 2018年 2019年 2020年 毎年3月実施	ラマダホテル 大阪キャッスルホテル	学生拳法におけるデータ整理と伝達方法について、ホームページをどう活用するかなどを各大学の主将や主務に毎年講演

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 森 下 博 行					
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	概 要
マルチメディア 概論ⅠⅡ 教育の方法と技 術	初等教育における 情報教育の考え方	単	平成27年1月	芦屋大学論叢 第62号	近年の教育を取り巻く環境を構成する種々の要素の中で、最も変化・進化の度合いが著しいものの一つに「情報」がある。日本では平成元年以降、インターネット利用の一般化に歩調を合わせるように携帯電話が普及してきた。同時にインターネットの発展は学校に通う児童生徒にさえ危険を与えるに至ってしまっている。 <u>初等教育における情報教育の背景と歴史、必要性や問題点、また今後に取り組むべき課題などについて考察した。</u>
マルチメディア 概論ⅠⅡ 教育の方法と技 術	ICT教育について の一考察	単	平成28年1月	芦屋大学論叢 64号	大学教育にICTを導入すべく考察した。 <u>初等教育における情報教育の背景と歴史、必要性や問題点、また今後に取り組むべき課題などについて考察した。</u>
マルチメディア 概論ⅠⅡ 教育の方法と技 術	ICT環境における 自己表現力の育成 について ー児童・生徒への 情報機器を用いた 自己表現方法ー	共	平成28年7月	芦屋大学論叢 第65号	<u>森下博行・塚本邦昭。</u> 近年、自己表現能力の向上が求められており、社会的なニーズや大学教育にも自己表現力の導入が求められている。その育成方法として、 <u>ICTの活用を前提とした表現力の育成について考察した。</u>

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(2)	共	平成28年8月	日本教育情報学会第32回年会	藤本光司・ <u>森下博行</u> ・池田聡・若杉祥太。 本学の初年次教育「大学生活入門」について、 <u>研究経緯と授業内容、実践例</u> についてまとめた。共同研究により抽出不可能。
芦屋大学自己点検評価委員会2016年度上半期活動の軌跡	共	平成29年1月	芦屋大学論叢第66号	河村繁・齋藤治・石田愛子・青木敦英・中村卓司・猪田裕子・ <u>森下博行</u> 。 <u>本学が本年受審した大学機関別認証評価の報告書を編纂及び作成する過程をまとめたものである。</u> ワークフローを開示することで、7年後の受審に向けての準備の一助としたい。共同研究により抽出不可能。
教授法が大学を変える「コミュニケーションスキルの向上を通じた大学生活への適応支援 芦屋大学、大学生活入門、基礎演習Ⅰ」	共	平成29年3月	教育学術新聞第2678号	藤本光司・ <u>森下博行</u> 、池田聡、若杉祥太。 本学の初年次教育において、 <u>コミュニケーション実践のための教授法</u> について探求。実際に講義での実習を通してコミュニケーションスキルの向上研究についてまとめた。共同研究により抽出不可能。
初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(3)-運用マネジメントおよび学習活動の質的評価と量的評価に関する考察-	共	平成29年8月	日本教育情報学会第33回年会	藤本光司・ <u>森下博行</u> ・池田聡・西藤治・井村薫子・成瀬優享・若杉祥太。 本学の初年次教育「大学生活入門」について、 <u>研究経緯と授業内容、実践例</u> についてまとめた。共同研究により抽出不可能。
ブレッドボード電子回路実習教材研究	共	平成29年8月	日本教育情報学会第33回年会	齋藤治・森寄功・ <u>森下博行</u> 。 複数電子部品の相互接続配線において <u>電子回路図から実体配線までの教材開発等の立場から考察した。</u>

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 盛谷 亨						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ページ数)	概要
プログラムと計測・制御 機械工学 実験・実習	1. ソーラーカーの電気系計測装置と計測法について	単著	平成20年2月	日本太陽エネルギー学会 電気自動車・燃料電池車・ソーラーカー製作講習会	6	芦屋 Sky Ace TIGA に搭載した電気系計測装置の機能と計測法、および競技会における運用方法について。
プログラムと計測・制御 機械工学 実験・実習	2. 競技用ソーラ・カー	共著	平成22年3月	トランジスタ技術 第47巻 第3号 通巻第546号 (CQ出版社)	10 (12)	中川邦夫・城ノ口英樹 芦屋 Sky Ace TIGA に搭載した電気系計測装置の機能と計測法、および競技会における運用方法について。
プログラムと計測・制御 機械工学 実験・実習	3. 太陽電池活用の基礎と応用	共著	平成23年5月	CQ出版株式会社	13 (16)	中川邦夫・城ノ口英樹 ソーラーカー「芦屋 Sky Ace TIGA」に搭載された電気・電子系装置の紹介と、太陽電池の発電制御に関する技術について。
情報処理基礎 プログラムと計測・制御 機械工学 実験・実習	4. 中学校技術科「プログラムによる計測・制御」における教材研究－自動演奏ピアノの製作－	共著	平成25年3月	情報コミュニケーション学会 第10回全国大会発表 論文集	(摘出不可) (2)	草地和則 玩具のピアノに小型電磁ソレノイドを取り付け、コンピュータ制御することによって自動演奏をさせる教材の提案と製作。
機械工学 実験・実習	5. 2級自動車整備士養成課程におけるPBL授業プログラムの開発と導入効果(1) － 車両作成を通じた深い課題解決能力の獲得 －	単著	平成29年8月	日本教育情報学会 第33回 年会 論文集	(摘出不可) (2)	成瀬優享・大西昌哲・藤本光司 若杉祥太 自動車整備士養成課程を対象とした実習授業に於いて、技術と知識を養うとともに課題解決能力を高める事を目的に、小型モビリティの作成を課題とし PBLを活用した授業プログラムについて

機械工学 実験・実習	6. 2級自動車 整備士養成 課程における PBL 授業プロ グラムの開発 と導入効果 (2) －車両製作 の取り組みと 報告－	単著	平成30年8月	日本 教育情報学会 第34回 年会 論文集	(摘出 不可) (2)	成瀬優享・大西昌哲・藤本光司 若杉祥太・斎藤治 2級自動車整備士養成課程に おける深い課題解決能力獲得を 目的としたPBL授業プログラ ムの開発及び実践研究に準じた 各年度の比較及び実践報告。
---------------	---	----	---------	--------------------------------	-------------------	--

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
<b>【学術論文】</b> 1. 「ソーラーカーを活用した アクティブラーニングの研究 (1) －教学として学生のマネジメ ント活動に視点をあてて－	共著	平成26年8月	日本教育情報学会 第30回 年会 論文集	ソーラーカーを活用したプロジェ クト活動について、学生の積極的 な参加と主体性を促すための方策 として取り入れた、PBL の学びと その方向性について。
2. ソーラーカーを活用した アクティブラーニングの研究 (2) －産学協働による PBL とマ ネジメント活動の充実－	共著	平成27年8月	日本教育情報学会 第31回 年会 論文集	ソーラーカーを活用したプロジェ クト活動について、学生を主体と した産学連携、スポンサー誘致活 動のあり方を考えた、PBL の学び とその方向性について。
3. ソーラーカープロジェクト のフィールドワークを重視し たアクティブラーニング (1) －学生主体のマネジメント活 動について－	共著	平成28年2月	情報コミュニケーション 学会 第13回 全国大会発表 論文集	ソーラーカープロジェクト活動に おける、アクティブラーニングを 重視した学生主導による産学連 携、スポンサー誘致活動のあり方 について。
4. ソーラーカーを活用した アクティブラーニングの研究 (3) －PBL の実際と学生が主体 となった社会貢献活動につ いて－	共著	平成28年7月	日本教育情報学会 第32回 年会 論文集	ソーラーカーを活用したプロジェ クト活動について、学生を主体と した産学連携、スポンサー誘致活 動のあり方を考えた、PBL の学び とその方向性について。
5. 教職科目におけるインス トラクショナルデザインを用 いたアクティブラーニングの展 開 (3) －中学校技術科教育 における「主体的・対話的で 深い学び」を実現するための 授業モデルの検討－	共著	平成30年3月	情報コミュニケーション 学会 第15回 全国大会発表 論文集	中学校技術科の教職科目におい て、授業設計を行うための授業 デザインを論述。特に、次期学習 指導要領に掲載された、設計と 試作時において、学生たちと取 組んだ試作モデルの製作と授業 時数との関連性について。

6. 中学校技術科の教職課程における課題と展望(1) ー全国の動向と本学の現状についてー	共著	令和元年8月	日本教育情報学会 第35回年会 論文集	文科省が実施した教職課程の再課程認定審査に基づき、技術科教育の全国的な養成課程の状況を整理した。一方、本学学生の教員としての学校への着任状況を過去8年間に遡り整理するとともに、本学の課題と展望を述べた。
---	----	--------	---------------------------	---



① 教育研究業績書				
教育研究業績書				
氏名 池田 聡				
研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
(著書) 大学生の基礎教養	編 著	平成 22 年 4 月 1 日	大学生の基礎教 養 出版元:株式会社 一灯館 印刷・製本:藤成 印刷株式会社 編著者:池田聡	昨今の大学教員には研究だけではなく、教育も重要な課題となっており、テキスト作成に係わる業績も問われるようになった。このような状況の中で他大学の教員や民間有識者の協力の下、様々な分野から大学生の基礎教養を考えてもらい、一冊にまとめている。
(著書) 環境問題と教育の 重要性について	単	平成 22 年 4 月 1 日	大学生の基礎教 養 出版元:株式会社 一灯館 印刷・製本:藤成 印刷株式会社 編著者:池田聡	メディアを通して報道される環境問題は正しい知識を持っていなければ誤った解釈をしかねない。そのためには、学校での環境教育が重要となり、各年代に合わせた教育も重要となる。このような考えから学校教育における体験型の教育を考察している。
(著書) 学校教育における 旅行型環境教育	単	平成 22 年 4 月 1 日	大学生の基礎教 養 出版元:株式会社 一灯館 印刷・製本:藤成 印刷株式会社 編著者:池田聡	実践型の環境教育であるピオトープの重要性について学校教育を通して考え、得た知識をいかに教育的効果が高い修学旅行に活かせるのかを考察している。
(著書) 心配り・心遣いを学 ぶ	単	平成 22 年 4 月 1 日	大学生の基礎教 養 出版元:株式会社 一灯館 印刷・製本:藤成 印刷株式会社 編著者:池田聡	人間関係の希薄化が影響でコミュニケーション能力の低下が問題となっている。学生時代にはこの問題を解決する絶好の機会である。大学生活での心配り・心遣いを考察している。
(研究ノート) 児童虐待の現状と 防止対策	共	平成 22 年 6 月 12 日	芦屋大学論叢 第 53 号	児童虐待により、悲惨な報道がされる昨今において、その傾向を中心に考察している。また、事例を加えながらその対策についても考察している。
(学術論文) 児童虐待の現状と 防止対策 一富山県を中心とし て	共	平成 22 年 12 月 12 日	芦屋大学論叢 第 54 号	児童虐待の現状を中心に、虐待の種類、母親の育児負担、その問題の原因を考察し、現場の最前線で問題に直面している児童福祉司・子育て支援職員等の人物にヒアリング調査し、富山県を中心に考察している。

(研究ノート) エコツーリズムにおける環境教育の現状と課題	単	平成 23 年 6 月 14 日	芦屋大学論叢 第 55 号	エコツーリズムの現状とツアーで実施される内容にどのような教育的効果があるのか。世界的な視点から日本の現状を考察している。
(著書) 継承 — 夢へのスタート —	単	平成 24 年 3 月 10 日	芦屋大学卒の事業家たちの教え 出版元:株式会社 晃洋書房 発行者:上田芳樹 印刷者:藤森秀夫 編者:芦屋大学経営教育学部 芦屋大学ビジネス研究センター	芦屋大学で学び卒業後に事業家として活躍する数名をピックアップし、在学生に講義の一環として体験談を語ったものであり、本著は山陽企業株式会社の代表取締役である吉岡一博氏の経営哲学や経営方針をインタビュー形式でまとめたものである。
(学会報告) 長期宿泊における体験型環境教育	—	平成 24 年 4 月 21 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:高田短期大学	学校教育における体験活動の現状と青少年の現代的課題を中心に文部科学省が平成 23 年に位置づけた「長期集団体験活動」の取組みについての部会報告である。
(学会報告) 長期宿泊における体験型環境教育 — 青少年の現代的課題を中心として —	—	平成 24 年 8 月 26 日	日本産業科学学会 全国大会 開催場所:芦屋大学	平成 24 年 4 月 21 日実施の関西部会において報告した長期宿泊における体験型環境教育に青少年の現代的課題と実施の問題点を中心とした学会報告である。
(学術論文) 長期宿泊における体験型環境教育 — 青少年の現代的課題を中心として —	単	平成 25 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第 18 号 発行所:日本産業科学学会(本部事務局) 出版所:株式会社 荒川印刷	長期集団体験活動において体験型環境教育の意義と目的について青少年の現代的課題と問題点を中心に今後の活動についての考察をしている。
(学会報告) 体験型環境教育から考察した 子どもの現代的課題について	—	平成 25 年 4 月 20 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:芦屋大学	体験型環境教育を実施するにあたり、子どもの成長段階において必要な運動能力と精神機能についての生体リズムを「スキヤモンの発達・発育曲線を参考に報告している。
(学術論文) 発育期における子どもの現代的運動課題について	共	平成 26 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第 19 号 発行所:日本産業科学学会(本部事務局) 出版所:株式会社 荒川印刷	生活環境の変化に伴い子どもの発育と運動能力、健康問題を課題とし、あそび・レクリエーション・自然活動を通して問題解決を考察している。

(学会報告) 観光立国におけるスポーツツーリズム	—	平成 26 年 4 月 12 日	人材活用研究会 関西部会 開催場所:近江八幡商工会議所	2007 年に観光立国宣言をした我が国におけるスポーツツーリズムの発展と今後の展開についての報告をしている。
(学会報告) スポーツツーリズムについて	—	平成 26 年 4 月 19 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:芦屋大学大阪キャンパス	過去 10 年間の訪日外客数を調査し、その目的と希望を考察している。また、国際大会等のイベントを調査し 2020 年、東京で開催されるオリンピック・パラリンピックでの訪日外客者数増の可能性についての学会報告。
(学会報告) 地域の特性を活かしたスポーツツーリズム	—	平成 26 年 8 月 23 日	日本産業科学学会 全国大会 開催場所:青森公立大学	地域に特化したスポーツツーリズムの現状と課題を考察し継続的なスポーツツーリズムの在り方についての学会報告であった。
(学術論文) ケース・メソッド教育とキャリア教育	共	平成 27 年 3 月 31 日	高田短期大学紀要 第 33 号	ケース・メソッド教育を用いた実践的なキャリア教育について事例を参考に今後の発展性を考察している。
(学術論文) スポーツツーリズムの現状と課題	単	平成 27 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第 20 号 発行所:日本産業科学学会 出版所:株式会社荒川印刷	これまで技術大国・物づくり大国として国際社会の中で不動の位置を確立してきた我が国は、東日本大震災による原発事故以降第 3 次産業に着目してきた。2007 年観光立国基本法が施行されさらなる方向性の変化が急速に進みつつある。本研究はスポーツに特化した旅行形態である「スポーツツーリズム」の現状と課題を主題とし、2020 年に東京で開催が決定したオリンピック・パラリンピックの波及効果についても今後の研究としている。
(学会報告) 環境の構成と保全管理	—	平成 28 年 5 月 13 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:大阪産業大学	環境の構成を明確化し、地球規模での気候変動及びその影響による生命の変化について現状の生命体の中で高度な知能を持つと考えられる人間(ホモサピエンス)の観点から環境保全管理を考察している。
(学術論文) 初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(2) —5 年間の「大学生生活入門」を通じた省察—	共	平成 28 年 8 月 20 日	日本教育情報学会 第 32 回年会誌	ここ数年の学生調査・学習評価について概観するとともに新たに授業に加えた「18 歳選挙・有権者教育」について、スマホ・REAS(リアルタイム評価支援システム)を活用したアクティブラーニングについての見解。
(学会報告) 環境の構成と人間社会～人為起因と自然起因～	—	平成 28 年 8 月 21 日	日本産業科学学会 全国大会 開催場所:大阪産業大学	環境の構成と人間社会の関わり合いを明確にし、地球に与える影響を人為起因と自然起因と線引きし、その関わり合いについて全国大会での報告であった。

(新聞記事掲載) 教育学術新聞 「コミュニケーション スキルの向上を通じた 大学生活への適 応支援、芦屋大学 『大学生生活入門』基 礎演習 I pp3」	—	平成 29 年 3 月 8 日	教育学術新聞 平成 29 年 3 月 8 日掲載	本学で実施している1回生の講義「基礎演習」を取り上げた新聞掲載。少人数教育を活かしたコミュニケーション能力向上を目的とする講義内容に関連させた記事である。
(学術論文) 環境の構成と人間 社会～人為起因と 自然起因～	単	平成 29 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第 22 号 発行所: 日本産業 科学学会 出版所: 株式会社 荒川印刷	人間社会から考察する環境の構成を明確にし、地球規模での環境変動と時系列、産業革命以降の環境問題、地球温暖化を中心に見解を考察している。
(学術論文) 初年次教育における アクティブラーニング の研究(3) —運用マネジメントお よび学習活動の質的 評価に関する考察—	共	平成 29 年 8 月 20 日	日本教育情報学会 第 33 回年会誌	ここ数年の学生調査・学習評価について概観するとともに新たに授業に加えた「18 歳選挙・有権者教育」について、スマホ・REAS(リアルタイム評価支援システム)を活用したアクティブラーニングについての見解。(2)の継続研究。
(学会報告) ファッション業界を支 える職人  ※ゼミ生指導報告	—	平成 29 年 12 月 16 日	日本産業科学学会 関西西部会 開催場所: 芦屋大 学	ファッション業界の現状と日本の産地と文化について実地調査を踏まえての学会報告となっている。(指導教員として)
(学会報告) 日本における社会性 昆虫による年間被害 と損害	—	平成 30 年 9 月 1 日	日本人間関係学会 第 59 回関西地区 大会 開催場所: 大阪体 育大学同窓会館 (アネックス)	社会性昆虫に襲われる危険性は、ある一定の割合で毎年必ず確認されており、最悪の場合は死亡に繋がるケースも珍しくない。その種類及び習性、活動時期、襲われる危険を伴う行動等、その対策と駆除、また損害賠償等を含めた内容についてのハチを例としての報告。発表者の体験例及び法律と判例の解説を加え、毎年ハチによる死に至るケースを含め被害があること、行政の対応は地域により異なること、ハチの駆除には経済的負担と危険が伴うこと、私有地にあるハチの巣による被害が発生した場合損害賠償責任の可能性のあることを結論とした。
(研究ノート) 女性の雇用問題と政 策に関する一考察 —女性を取り巻く社 会環境—	共	平成 30 年 11 月 21 日	芦屋大学論叢第 70 号	女性の社会進出増加により、雇用者全体に占める女性比率も上昇傾向にあり、現在では約 4 割を占めるに至っている。現代の働く女性の労働環境及び子育て等の問題点を考察し、法整備を含めた今後の展開を研究目的としている。
(学会報告) 地域環境と安全教育 —社会性昆虫とその 特性—	—	令和元年 8 月 25 日	日本教育情報学会 第 35 回年会 開催場所: 岡山理 科大学	社会性昆虫の中からテーマをハチに絞りその危険性、種類、習性、活動時期、襲われる危険性を伴う行動等、その対策と駆除についての報告。
(学術論文) スマート化に対する大 学生の意識調査と考 察	共	令和元年 8 月 25 日	日本教育情報学会 第 35 回年会誌	日本教育情報学会第 35 回年会報告をまとめた内容でスマート化社会を大学生がどの様に捉えているかの調査をまとめたものである。
(学術論文) 地域環境と安全教育 —社会性昆虫とその 特性—	共	令和元年 8 月 25 日	日本教育情報学会 第 35 回年会誌	日本教育情報学会第 35 回年会報告をまとめたものである。社会性昆虫の中からハチにテーマを絞り、その危険性、習性等対策と駆除についてまとめたものである。

(学術論文) 「中学校技術科の教材開発におけるSDGsとの関連(1) 一理論背景の整理と学習モデルの開発に向けて 一」	共	令和2年 3月1日	情報コミュニケーション学会 第17回全国大会 発表論文集	
--	---	--------------	------------------------------------	--

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 井上 徹						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	執筆ページ数 (総ページ数)	概 要 (共著の場合は全員の著者名を記 載) (共著及び執筆ページ数が抽出で きない場合は執筆箇所を詳述)
CG・ CAD 技術 概説	科目 CG・CAD 技 術概説の実習課題 の報告と考察 I	共 著	平成 21 年 10 月	芦屋大学論 叢第 52 号	(10 ページ)	「CG・CAD 技術概説」にて行っ ている 2DCG(イラストレータ・フ ォトショップ)の 2009 年度前期 の実習課題の報告と考察。 共同研究により抽出不可:実習 箇所について執筆) 著者:小宮容一、井上徹
CG・ CAD 技術 概説	科目 CG・CAD 技 術概説の 実習課題の報告と 考察 II	共 著	平成 22 年 10 月	芦屋大学論 叢第 54 号	(ページ)	「CG・CAD 技術概説」にて行っ ている 3DCAD(ベクターワーク スの) 2009 年度後期の実習課 題の報告と考察。 共同研究により抽出不可:実習 箇所について執筆) 著者:井上徹、小宮容一
デザ イン マネ ジメ ント 史	WEDGWOOD に おけるマネジメント とデザインの関係 について	単 著	2014 年 1 月	甲南大学大 学院 修士論文	執筆 52 ページ 資料 50 ページ (102 ページ)	本研究は、18 世紀～19 世紀の イギリスの窯業者ウエッジウッド のマネジメント手法とデザインと の関係性を明らかにし、デザイ ンを企業経営における経営資 源と捉えマネジメントにデザイ ンを活用した最初の事例であつた 事の詳細を明らかにした。
デザ イン 論	5.インテリアデザ インに於ける IoT(Internet of Things)に関する考 察	共 著	2017 年 10 月	日本インテリ ア学会 第 29 回大会 研究発表梗 概集	2 ページ (2 ページ)	インテリアデザインを取り巻くス マート化・IoT の現状調査及び 課題と考察。 著者:井上徹、中村孝之

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【学術論文】 1 WEDGWOOD におけるマ ネジメントとデザインの関係 について	単著	2014 年 1 月	甲南大学大学院 修士論文	本研究は、18 世紀～19 世紀のイ ギリスの窯業者ウエッジウッドのマ ネジメント手法とデザインとの関 係性を明らかにし、デザインを企 業経営における経営資源と捉え マネジメントにデザインを活用し た最初の事例であつた事の詳細 を明らかにした。

2. 日本インテリア学会 30周年記念号 「63人のインテリア論」	単著	2018年4月	日本インテリア学会	「インテリアとイノベーション」 インテリアデザインにおける今後の 課題とイノベーションの必要性 について執筆。
<b>【その他(講演や発表)】</b>				
1. 近世イギリスにおける陶磁器 とインテリアの関係に関する 考察その2	単著	2014年10月	日本インテリア学会 第26回大会 研究発表梗概集	18世紀後半～19世紀前半に描 かれたカリカチュアを中心に近世 イギリス社会における中流階級の インテリアと陶磁器の関係を検 証・考察
2. 近世イギリスにおける陶磁器 とインテリアの関係に関する 考察その3	単著	2015年10月	日本インテリア学会 第27回大会 研究発表梗概集	18世紀後半～19世紀前半に描 かれたカリカチュアを中心に近世 イギリス社会における中流階級の インテリアと陶磁器の関係を検 証・考察
3. 超高層・高層マンションの 居室と収納関係の調査・考 察と提案	共著	2016年10月	日本インテリア学会 第28回大会 研究発表梗概集	2012年の調査から4年、超高 層・高層マンションの収納がど のように変化したかを調査・考 察・提案。共同研究により抽出不可: 著者:小宮容一、井上徹
4. インテリアのカラーコーデ ィネイトに適応した色相環の提 案	共著	2017年10月	日本インテリア学会 第29回大会 研究発表梗概集	インテリアデザインにおける新た なカラーコーディネイトの提案。 共同研究により抽出不可: 著者:小宮容一、井上徹
5. インテリアデザインに於ける IoT(Internet of Things)に 関する考察	共著	2017年10月	日本インテリア学会 第29回大会 研究発表梗概集	インテリアデザインを取り巻くスマ ート化・IoTの現状調査及び課題 と考察。 共同研究により抽出不可: 著者:井上徹、中村孝之
6. 第1回スマートインテリア研 究部会—スマートインテリア 趣旨説明—	共同	2017年12月	スマートインテリア研究 部会	研究部会設立経緯及び、建築・ インテリアとICT・IoTのあらし 及び研究方法、研究計画・目的。
7. 第2回スマートインテリア 研究部会—IoT活用事例の 現状(住宅・オフィス等)—	単独	2018年1月	スマートインテリア研究 部会	1. 時代毎のスマートハウスの進展 及び、HEMSの概略 2. 現状報告ハウスメーカーの取 組・オフィスの現状等
8. 第3回スマートインテリア研 究部会—スマートインテリア 研究に関する検討項目—	単独	2018年8月	スマートインテリア研究 部会	スマートインテリア設計の為の要 件を抽出・提案。
9. インテリアのスマートに向け たデザイン要件の枠組み検 討—スマートインテリア研究そ の1—	共著	2018年10月	日本インテリア学会 第30回大会 研究発表梗概集	インテリアのスマート化に向けた デザイン要件を抽出する為の枠 組みを、ICF(国際生活機能分 類)を使用し検討。その上で環 境(空間)と活動(行為)のガイ ドラインになり得る項目を決定。

10. デジタルネイティブ世代の超スマート社会感の考察-スマートインテリア研究その2.-	共著	2018年10月	日本インテリア学会 第30回大会 研究発表梗概集	その1と連動し、デザイン要件抽出の事前調査として、デジタルネイティブ世代の超スマート社会に対する認知・受容性の調査と考察。
11. スマート化に対する大学生の意識調査と考察	共著	2019年8月	日本教育情報学会 第35回年会	スマートインテリア研究その2のアンケートを他大学で実施し母集団を増やし、傾向の再確認を行った。
12. デジタルネイティブ世代の超スマート社会感の考察-スマートインテリア研究その3.-	共著	2019年10月	日本インテリア学会 第31回大会 研究発表梗概集	デジタルネイティブ世代の超スマート社会に対する認知・受容性の調査と考察。その3
13 デジタルネイティブ世代の超スマート社会感の考察-スマートインテリア研究その4.- 【執筆中】	共著	2019年10月	日本インテリア学会 第32回大会 研究発表梗概集	デジタルネイティブ世代の超スマート社会に対する認知・受容性の調査と考察。その4

① 教育研究業績書				
教育研究業績書				
氏名 成瀬 優享				
研究業績等に関する事項 (5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又 は発表学会等の名称	概 要
<b>【著書】</b> アクティブラーニングに 導く教学改善のすすめ	共	令和 2 年 4 月	ぎょうせい	コラム「技能伝承 急がば回 れ」を執筆 pp118-119
<b>【学術論文】</b> 1. 潤滑剤性能・特性評価 試験機の開発提案	単	平成 28 年 7 月	芦屋大学論叢	競技用自転車チェーンを対象 とした潤滑剤において、実用 環境を再現した評価試験機が 無い事から、実用される環境 を調査し、これに基づいた潤 滑剤性能及び特性評価試験機 開発に関わる提案を実施し た。 芦屋大学論叢第 65 号 pp79-90 成瀬優享
2. 2 級自動車整備士養成 課程における深い課題解 決能力の獲得 (1)	共	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	2 級自動車整備士養成課程に おいて、整備士に求められる 深い課題解決能力の構成要素 である技術、知識、社会人基 礎力の向上を目的とし、車両 製作を主軸としてゼミ活動と 授業を連携させた PBL 授業 プログラムの開発と実践の 1 年目の経過報告を行った。 日本教育情報学会 第 33 回 年会 論文集 (芦屋大学)、 pp276-277、2017.8.26-27 成瀬優享、大西昌哲、藤本光 司、盛谷亨、齋藤治、若杉祥 太
3. 初年時教育におけるア クティブラーニングの研 究 (3)	共	平成 29 年 8 月	同上	本学のリメディアル教育につ いて整理し、初年次教育を円 滑に推進するためのクラス編 成やマネジメントについて述 べ、学生レポート評価に関す る質的評価・量的評価の課題 について報告した。 日本教育情報学会 第 33 回 年会 論文集 (芦屋大学)、 pp288-289、2017.8.26-27 藤本光司、森下博行、池田聡、 齋藤治、井村薫子、成瀬優享、 若杉祥太

4. 2級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力の獲得 (2)	共	平成 30 年 8 月	同上	2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力獲得を目的とした PBL 授業プログラムの開発及び実践研究に準じた各年度の比較及び実践報告を行った。 日本教育情報学会 第 34 回年会論文集日本教育情報学会 第 34 回年会論文集 (松蔭大学) pp294-295、2018.8.25-26 成瀬優享、盛谷亨、藤本光司、若杉祥太、大西昌哲、齋藤治
5. 2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力育成を目的とした包括的教材開発に関する研究	単	平成 31 年 1 月 15 日	芦屋大学修士論文	2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力の獲得 (2017) (2018) の実践を元に、整備士に求められる深い課題解決能力を育成するために必要な要素と、教材として求められる要素を併せ持つ教材開発に関する研究を行った。この研究により、計算された不完全さをもつ包括的な教材が提案された。 芦屋大学 大学院 平成 30 年度修士論文 2019.1.15 成瀬 優享
6. 2 級自動車整備士養成課程における PBL 授業プログラムの開発と導入効果 (3)	共	令和 1 年 8 月 24 日	日本教育情報学会	同研究の最終報として、一連して行われた PBL 授業プログラムの成果と課題に関する報告を行った。また、これらの研究に伴い明らかとなった課題を解決するための手段として、包括的教材の開発提案を行った。 日本教育情報学会第 35 回年会論文集 (岡山理科大学) pp214-215 2019.8.24/25 成瀬優享、若杉翔太、盛谷亨、大西昌哲、藤本光司、齋藤治
2 級自動車整備士養成課程における包括的教材の開発と実践 (1)	共	令和 2 年 8 月 22 日	日本教育情報学会	養成課程で用いる教材として、専門性と社会人基礎力を同時に高めていくための包括的教材に求められる要件と構成について、考察を行った。 日本教育情報学会第 36 回年会論文集 (札幌学院大学) pp312-313 2020.8.22/23 成瀬優享、若杉祥太

【その他（講演や発表）】 1.FD 研修 救急	単	令和元年 11 月	芦屋大学	大学での事故や災害時に伴う負傷者発生に対して、積極的介入が必要なケースと、その対処法に関する講習を実施 <u>成瀬 優享</u>
----------------------------	---	-----------	------	---

## ②教育研究業績書

氏名 林 泰子					
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行年月	出版社又は 発行雑誌等 の名称	概要
教育の方法と技術 (オムニバス)	(著書) 1.『相互理解を深めるコミュニケーション実践学 改訂版』	共	平成 22 年 3 月	ぎょうせい (186 頁)	人間活動の基本である「コミュニケーション能力」について振り返り、気づき、自己改善し、相互理解のための人間関係づくりに生かすことを目的とした書である。道徳的な判断と行為の関連を認識し、自分と相互関係にある他者の視点や社会的視点をもち判断する力を修得する内容を執筆した。 pp.172-182 担当執筆 沖裕貴、林徳治、 <u>林泰子</u> 、他 6 名
	2.『元気がでる学び力』	共	平成 23 年 4 月	ぎょうせい (202 頁)	知識基盤社会を生き抜くために、主体的に生きる喜びに繋がる学習意欲を芽生えさせ、課題解決に向けた適切な判断に基づく行動力を身につける事を目的とした書である。他者や社会を考慮した実践態度の重要性を説き、道徳的判断力を育成する内容を執筆した。 pp.152-162 担当執筆 奥野雅和、林徳治、 <u>林泰子</u> 、他 5 名
	3.『主体的に学び意欲を育てる 教学改善のすすめ』	共	平成 28 年 4 月	ぎょうせい (235 頁)	初等・中等・高等教育での教学改善において、学習者の学習活動や教員の教育・研究活動が効果的に遂行できるために、教育課程、教育方法・技術、教育評価などの方略、実践、評価、改善について記した書である。主体的な学びの授業実践について執筆した。 pp.87-95 担当執筆 林徳治、藤本光司、若杉翔太、 <u>林泰子</u> 、他 11 名
	4.『アクティブラーニングに導く 教学改善のすすめ』	共	令和 2 年 4 月	ぎょうせい (251 頁)	上記 4. の改訂版である。主体的な学びや論理的な考えで用いる手法と実践例について執筆した。pp. 91-99 執筆担当 林徳治、藤本光司、若杉翔太、 <u>林泰子</u> 、他 16 名

	<p>(学術論文等)</p> <p>1.「幼児教育課程におけるコミュニケーション能力の育成と検証 -保育活動別のコミュニケーションに着目して-」</p>	共	平成 31 年 3 月	芦屋学園短期大学研究紀要第 45 号 (149 頁)	<p>「教育の方法および技術」の授業のコミュニケーション能力の育成を目的とした演習で修得した技術を、学生が実習園での「生活活動」「遊び活動」「課題活動」の中でどの程度実践できたのか調査した。学生の実習の振り返りとして行った調査の結果から、コミュニケーション能力の育成に対する演習の効果について検証した。</p> <p>pp.43-64○林泰子、若杉祥太、中谷有里</p>
	<p>2.地域社会におけるコミュニケーション能力の向上の取り組み</p>	共	平成 22 年 8 月	日本教育情報学会第 26 回年会論文集	<p>相互理解を深める「コミュニケーション」をテーマとし、第 4 回宇治市教育研究会(平成 21 年)を開催した。コミュニケーションの基礎知識の学習と、自分の情報を伝えるためのアサーション用いた演習を通し、参加者とともに自分も相手も大切にしたい対応について考察した内容を報告した。</p> <p>pp.332-333○林泰子、川野智、林徳治</p>
	<p>3.PFF (Preparing Future Faculty) プログラム開発への取り組み-実践的 FD プログラムを応用した PFF の構築-</p>	共	平成 24 年 5 月	大学教育学会第 34 回大会 発表要旨収録	<p>立命館大学では 2009 年度より新任教員対象 FD 研修を実践している。この実践的 FD プログラムの開発手法やコンテンツを、大学教員を目指す大学院生を対象とした大学教員準備プログラム(以下 PFF プログラム)の開発に応用し、その取り組みについて提案した。</p> <p>pp.222-223○林泰子、沖裕貴、前田真志、松村初</p>
	<p>4.北米の大学における PFF の現状</p>	共	平成 24 年 6 月	日本高等教育学会第 15 回大会 発表要旨収録	<p>大学教員を目指している立命館大学の大学院生を対象とした大学教員養成(Preparing Future Faculty:PFF)プログラムの開発を目的として、最も先進的に PFF を開発・運営している北米の 3 大学を訪問し、その取り組みについて調査した。大学教員に必要とされる獲得すべき能力や、それに対応したプログラムに関する情報や大学院生へのインタビューなどの現状を調査した内容を報告した。</p> <p>pp.155-156○林泰子、沖裕貴、前田真志、松村初</p>

情報処理実習 I・II (単独)	(著書)				
	1.『相互理解を深めるコミュニケーション実践学 改訂版』	共	平成 22 年 3 月	ぎょうせい (186 頁)	(再掲のため、略)
	2.『元気がでる学び力』	共	平成 23 年 4 月	ぎょうせい (202 頁)	(再掲のため、略)
	3.『留学生のための日本語で学ぶパソコンリテラシー』	共	平成 27 年 1 月	共立出版 (187 頁)	大学、専門学校や高等学校、日本語学校等でパソコンリテラシーを学ぶ留学生を対象とした、情報教育のための教科書である。情報倫理の章において、情報社会や情報の特性、著作権、個人情報、道徳的判断等について執筆した。 pp.110-124 担当執筆 橋本恵子、金子大輔、 <u>林泰子</u> 、他 3 名
	(学術論文等)				
	1.「幼児教育課程における情報モラル教育と今後の展望-情報モラルセミナーの実施とアンケート評価をもとに-」	共	平成 30 年 3 月	芦屋学園短期大学研究紀要第 44 号 (264 頁)	実習先で知り得た情報の適切な取り扱いの重要性を、学生が再認識することを目的とする「情報モラルセミナー」を実施した。事前・事後に情報モラルに関するアンケート調査を行った。実習直前の 1 年生に着目し、その事前・事後アンケート調査の分析・検証の結果から、今後の保育者養成校での情報モラル教育について検討した。 pp.105-125 ○ 林泰子、若杉翔太、中谷有里
	2.大学生を対象とした情報モラル教育の実践	共	平成 22 年 8 月	日本教育情報学会第 26 回年会論文集	平成 22 年 3 月 30 日に策定された情報倫理教育のガイドラインには「自律的に加害を防止する心の教育が不可欠である」と明記された。大学での担当授業「情報モラル(情報倫理)教育」では、心の教育を重視している。学習者の情報モラルと道徳性との関係について、心の教育の効果をもとにガイドラインに照合し考察した。 pp.178-181 ○ 林泰子、林徳治
	3.地域社会における「ネット社会と人権」に関する情報モラル教育	単	平成 25 年 11 月	日本教育情報学会第 29 回年会論文集	滋賀県において筆者が担当した、人権教育機関や地域総合センターなどの関係者・職員、学校関係者、市議会議員などを対象とした講演をもとに、ネット上での誹謗中傷や人権侵害がおこる社

	4. 情報科教育関連科目を受講する理系学生を対象とした学修に関する実態調査	共	平成 25 年 11 月	日本教育情報学会第 29 回年会論文集	<p>会的背景、ネット利用する人の道徳的判断の育成などの研修内容と取組みについて報告した。 pp.294-295○林泰子</p> <p>教職課程の情報科教育関連科目を受講している理系学生を対象に、教授・学習に関するアンケート調査を実施した。調査概要は、教員の授業評価、学生の生活面での情報に関する実態、学生が今後の教育活動をするうえで有用と捉えている授業内容などである。その結果から受講生の学修の実態を把握し、情報科教育関連科目における授業内容の改善について検討した。本研究は平成 23-25 年度科研費補助金(大学のコミュニケーション能力の改善が主体性に及ぼす効果の実証研究, 課題番号 23531030, 2013, 代表 林徳治)の一環として実施した。 pp.350-353○林泰子、林徳治</p>
	5. 地域社会における「ネット社会と人権」に関する情報モラル教育(2)	単	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会第 30 回年会論文集	<p>前回より継続して、滋賀県内での「ネット社会と人権」をテーマに取り組んでいる、情報モラル教育の活動について報告した。なかでも今回で 2 回目となる高等学校では、事前に対象者にインターネット利用やスマートフォンなどに関するアンケートを実施し、その結果をもとに道徳的判断を用いた情報モラル教育について検討した。 pp.64-65○林泰子</p>
	6. 中学生を対象とした「ネット社会と人権」に関する情報モラル教育	単	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会第 31 回年会論文集	<p>中学 3 年生を対象に実施した情報モラル教育において、受講者へ実施したケータイ(スマートフォンなど)や SNS の利用に関するアンケートの調査結果と、道徳的判断を用いた情報モラル教育の結果を検討し報告した。 pp.308-309○林泰子</p>
	7. 中学生を対象とした道徳的判断を用いた情報モラル教材	単	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会第 32 回年会論文集	<p>前年度実施の中学校の依頼で、さらに早い段階の中学 2 年生に、道徳的判断を用いた情報モラル教育を実施することとなった。今回は、そこで用いた中学生を対象とした道徳的判断力を高めるための情報モラル教材を提示し、その工夫・改善点や効果について検討した。 pp.270-271○林泰子</p>

8. 幼児教育課程履修者を対象とした情報モラル教育に関する実践と評価(1)－短期大学生を対象としたアンケート調査と取り組み－	共	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会第 33 回年会論文集	<p>保育者を目指す学生が、実習先での個人情報や実習内容などの情報に対する責任を再認識するための情報モラルセミナーを開催した。セミナー前後のアンケート調査をもとに、今後の保育者養成校での情報モラル教育への取り組みについて検討した。</p> <p>pp.300-301 ○林泰子、若杉祥太、納庄聡、中谷有里</p>
9. 幼児教育課程における情報モラル教育に関する実践と評価(2)－役割取得能力の向上への試み－	共	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会第 34 回年会論文集	<p>学生が情報を取り扱ううえで、他者や社会への影響を考慮した広い視野を持ち、保育者としての道徳性や人間力を高めるため、その基盤となる役割取得能力の向上を目指した情報モラル教育の学習方法を試みた。その方法を報告し検討した。</p> <p>pp.336-337 ○林泰子、若杉祥太、中谷有里</p>
10. 留学生の情報リテラシーに関する調査と授業への取り組み	共	令和元年 8 月	日本教育情報学会第 35 回年会論文集	<p>留学生の国籍が多様化していることから、情報処理技術に関するスキルの差や、情報社会での考え方の違いなどを把握し、大学生としての情報教育を行うことが望まれる。基本的なパソコン操作のスキル調査とは別に、情報リテラシーに関する意識について 1 年生全員を対象にアンケート調査を行い、本稿では留学生(1 年生)の情報リテラシーへの意識調査の結果について検討した。</p> <p>pp.230-231 ○林泰子、若杉祥太、中谷有里</p>

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 若杉 祥太					
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	概 要
中等教科教育 法 I (情報)(単 独)	1. 元気になる学 び力	共著	平成 23 年 4 月	ぎょうせい	学習者の主体的な学びを中心として学習者を取り巻く教員、職員、学校経営者による教職協働による教学改善の在り方や実践について解説した。(全 202 頁)
	2. 共通教科情報 科における主 体的学習支援 に関する研究 —「望ましい情 報社会の構 築」を対象とし て—	単著	平成 25 年 3 月	滋賀大学	高等学校情報科における協調学習と主体的学習支援による言語活動の活発化やチームでの学習の活性化、理解や思考の深化のための授業モデルを開発した。
	3. 大学生のコミ ュニケーション 能力の改善が 主体性に及ぼ す効果の実証 研究	共著	平成 26 年 4 月	太洋堂	コミュニケーション能力を向上させる学習モジュールの開発を行い、それをを用いた協調学習や包括的学習支援による大学生の主体性に及ぼす効果を検証した。科研(基盤研究(c) 23531030)
	4. ICT 社会にお けるコミュニケ ーション実践 学	共著	平成 26 年 9 月	太洋堂	ICT 社会に特化したコミュニケーション技法の概説及び実践データとして立命館大学教養ゼミナールの内容を紹介した。(全 116 頁)
	5. 情報通信社会 におけるコミュ ニケーション 活動	共著	平成 27 年 11 月	太洋堂	アクティブラーニングによる学習成果と授業用 SNS、映像教材を利用した授業実践をまとめ、学習効果を解説した。(全 144 頁)
	6. 主体的に学び 意欲を育てる 教学改善のす すめ—相互理 解のための理 論と実践—	共著	平成 28 年 4 月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論、教育評価、教育技術などから情報教育、IR、国際教育まで幅広く解説した。(全 235 頁)
	7. 21 世紀型スキ ルの育成を目 的とした協調 学習に関する 実証研究—大 学生の情報処 理科目を通し て—	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報 学会	21 世紀型スキル(ATC21S)の育成を目的とした協調学習を学修状況及び情意面から分析し報告した。(第 30 回年会論文集 80-83 頁)

8.	思考力・表現力を高める指導法に関する一考察(1)―生徒のノート指導の観点から―	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	中学生におけるノート指導に関して指導方法及び思考を分類化し、児童生徒の思考・表現力を高める指導実践を行った。(第 31 回年会論文集 208-209 頁)
9.	「子どもが学び取る授業」の実践研究(1)―トリックアートを用いた授業を通して―	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校数学科・情報科においてトリックアートを用いた「子どもが学び取る授業」の実践を行い、授業方法と評価について述べた。(第 31 回年会論文集 201-202 頁)
10.	「子どもが学び取る授業」の実践研究(2)―トリックアートを用いた授業の課題と可能性―	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校数学科・情報科においてスマホを活用し、トリックアート作成を通じて「子どもが学び取る授業」の実践を行い、有用性を統計的に検証し報告した。(第 31 回年会論文集 203-204 頁)
11.	高校におけるモバイル端末を活用したプロジェクト型学習デザインの提案	共著	平成 27 年 9 月	教育システム情報学会	高等学校対象としたモバイル端末を主体的に活用するプロジェクト型学習のデザインを検討提案した。(第 40 回全国大会論文集 301-302 頁)
12.	タブレット端末を活用した学びのストーリー型ポートフォリオに関する研究	共著	平成 28 年 2 月	教育システム情報学会	タブレット端末を活用し学びの省察が可能なストーリー型ポートフォリオを提案し、実践報告とその手だてについて述べた。(研究論文集 105-106 頁)
13.	ICT 活用の「豊かな学び」を目的とした協調的課題解決学習の実践と支援	共著	平成 28 年 3 月	教育システム情報学会	高等学校対象としたタブレット的に活用して、協調的課題解決を進める学習プログラムを開発し実践を行い報告した。(研究報告論文集 113-116 頁)
14.	タブレット端末を活用して「話す」「見る・聴く」を中心とした省察活動の実践について	共著	平成 28 年 6 月	日本情報科教育学会	タブレット的に活用し質の高い省察活動を行うことを通じて学習内容の理解度や参画する意欲について報告した。(第 9 回全国大会要項集 135-136 頁)
15.	協調的課題解決による学習者の学習意欲向上への成果と課題	共著	平成 28 年 6 月	日本情報科教育学会	高等学校対象としたタブレットしたプロジェクト型学習の過程における協調的課題解決による学習者の学習意欲について述べた。(第 9 回全国大会要項集 27-28 頁)
16.	現職教員を対象としたコミュニケーション能力のスキルアップを目指したアクティブ	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	現職教員を対象に教育的なコミュニケーション能力の向上を目指した演習を実践し、主体的な学びを実現するための教員研修モデルを検討し提案した。(第 32 回年会論文集 176-179 頁)

	ラーニング研修の実践				
17.	教育実習中における教育実習支援モデルに関する検討—SNSを利用したコミュニケーション活動を通じて—	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	教育実習中における指導の在り方を検討し、実習生の悩みや疑問の解消のための教育実習支援モデルを開発と評価を行った。(第 32 回年会論文集 288-289 頁)
18.	マルチアクセス環境における LMS を活用した豊かな学びに関する実践と評価	共著	平成 29 年 1 月	芦屋大学	芦屋大学においてスマホを活用し開発した LMS により授業外での協調学習と教員に加え、学習支援者の協力による授業外での包括的学修支援を行った。教材として動画加工や情報処理、WEB プログラミングに関するものを開発し実践を行った。また、LMS 内での活動やアンケートの統計処理にから学習意欲の喚起や概念的理解の促進、基礎的・汎用的な能力の向上が認められた。(芦屋大学論叢 (66) 41-50 頁)
19.	教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(1)—ARCS モデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だて—	共著	平成 29 年 3 月	情報コミュニケーション学会	ARCS モデルを用いた学習意欲を引き出す授業の取り組みと成果についてまとめ、今後のアクティブラーニングの在り方を検討した。(第 14 回全国大会論文集)
20.	教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(2)—技術・情報教員養成コースの学生を対象とした認識調査—	共著	平成 29 年 3 月	情報コミュニケーション学会	大学教職科目受講生におけるアクティブラーニングに関する認識調査を行い、全国の学校現場教員との認識の違いについて統計的分析を行った。(第 14 回全国大会論文集)
21.	アクティブラーニングを取り入れたプログラミング教育の実践と評価(1)—LMS の活用による対話	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科において開発した LSM 環境と動画をを用いた動画をを用いたビジュアルプログラミングを用いた実践を行い、成果の統計的分析を行った。(第 33 回年会論文集 240-241 頁)

	的・主体的で深い学びを通してー				
22.	初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(3)ー運用マネジメントおよび学習活動の質的評価と量的評価に関する考察ー	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	芦屋大学のリメディアル教育について整理し、初年次教育を円滑に推進するためのクラス編成やマネジメント、学生レポート評価に関する質的評価・量的評価における考察を述べた。(第 33 回年会論文集 274-275 頁)
23.	教育実習中における教育実習支援モデルに関する考察ー芦屋大学 ASAS の活動を通じてー	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	教育実習生のための教育実習支援モデルを開発し、教育実習中の活用による成果・影響を分析し得られた結果をまとめた。(第 33 回年会論文集 242-243 頁)
24.	幼児教育課程履修者を対象とした情報モラル教育に関する実践と評価(1)ー短期大学生を対象としたアンケート調査と取り組みー	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	芦屋学園短期大学生を対象に情報モラル向上のための教材を開発し実践を行い、情報モラルに関する認識・行動調査分析を行った。(第 33 回年会論文集 300-301 頁)
25.	幼児教育課程における情報モラル教育と今後の展望ー情報モラルセミナーの実施とアンケート評価をもとにー	共著	平成 30 年 3 月	芦屋学園短期大学	幼児教育課程の学生を対象に情報モラルに関する認識調査と指導を行い、今後の情報モラル指導の在り方をまとめた。(芦屋学園短期大学研究紀要 (44) 105-125 頁)
26.	教職課程履修学生を対象としたプログラミング学習教材の活用と考察	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	教職課程履修学生を対象にプログラミング的思考向上のためのプログラミング教材の活用実践と評価から今後のプログラミング学習のための教材の在り方を提言した。(第 15 回全国大会論文集 144-145 頁)
27.	自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の実践と評価ーLMS の活用による対話的・主体的で深い学びを目指してー	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考の向上を目的に、自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の授業実践とアンケートから分析し、得られた結果を報告した。(第 15 回全国大会論文集 146-147 頁)

28. 教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(3)-中学校技術科教育における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業モデルの検討-	共著	平成30年3月	情報コミュニケーション学会	中学校技術科における主体的・対話的で深い学びをじつげんするためにインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングによる授業モデルを検討した。(第15回全国大会論文集148-149頁)
29. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(1)	共著	平成30年8月	日本教育情報学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考と学習状況に関する調査分析を行い、今後のプログラミング教育導入のための提言を行った。(第34回年会論文集254-255頁)
30. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(2)	共著	平成30年8月	日本教育情報学会	プログラミング的思考の調査結果を踏まえ、プログラミング的思考の向上を目的に自己調整学習を取り入れた学習モデルについての考察と今後の展望を述べた。(第34回年会論文集256-257頁)
31. 対話的で深い学びを取り入れた自己調整学習の研究-多人数授業におけるレポート分析調査と書き行動方略への影響-	共著	平成30年8月	日本教育情報学会	教職科目における自己調整学習によるレポート記述分析による書き行動方略についての影響と考察を述べた。(第34回年会論文集304-305頁)
32. 幼児教育課程における情報モラル教育に関する実践と評価(2)-役割取得能力の向上への試み-	共著	平成30年8月	日本教育情報学会	幼児教育課程において保育者として道徳性や人間力の基盤となす役割取得能力の向上を目指した情報モラル教育に関する実践と評価を行った。(第34回年会論文集336-337頁)
33. TAの活用による包括的学習支援を取り入れた授業改善の試み	共著	平成30年10月	芦屋大学	芦屋大学におけるTAの活用とその包括的学習支援による授業改善が及ぼした影響と成果について調査分析結果をまとめた。(芦屋大学論叢第70号掲載予定)
34. 教育実習中における教育実習支援モデルに関する実証研究-SNSを利用した支援活動を通じて-	共著	平成30年10月	芦屋大学	教育実習生に対する教育実習支援モデルの開発と実施による成果と課題をまとめ、今後の教育実習の在り方について提言した。(芦屋大学論叢第70号掲載予定)

35.	プログラミング的思考における各思考スキルの体系化の試みー小学校学習指導要領改訂においてー	共著	平成 31 年 2 月	情報コミュニケーション学会	各教科学習指導要領をテキスト分析し、プログラミング思考の在り方を体系化した。(第 16 回全国大会論文集 114-115 頁)
36.	プログラミング教育における自己調整学習モデルの開発と取り組み	共著	平成 31 年 2 月	情報コミュニケーション学会	プログラミング的思考向上を目的に自己調整学習モデルを開発し実践と評価を行った。(第 16 回全国大会論文集 116-117 頁)
37.	プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(3)ー自己調整学習モデルを取り入れた実践ー	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	プログラミング的思考の向上を目的とした学ぶ力を養う自己調整学習モデルの授業実践について報告した。(第 35 回年会論文集 190-191 頁)
38.	プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(4)ー自己調整学習モデルを取り入れた実践と成果ー	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	自ら学ぶ力を養う自己調整学習モデルを開発し、学習者のプログラミング的思考の向上を目的に授業実践に関する成果をまとめ評価した。(第 35 回年会論文集 192-193 頁)
39.	留学生の情報リテラシーに関する調査と授業への取り組み	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	留学生の国籍が多様化に伴い情報処理技術に関するスキルの差や、情報社会での考え方について調査し授業に取り組んだ。(第 35 回年会論文集 230-231 頁)
40.	教員の ICT 活用指導力の向上をめざした実践的研究(1)	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	教員の ICT 活用指導力の育成のために、ICT 機器や環境の活用と工夫改善、ICT の活用に関する教員の意識の向上、校内研修の充実、学校文化の醸成の 3 点を中心に実践的研究を行った。(第 35 回年会論文集 236-237 頁)
41.	アクティブラーニングに導く教学改善のすすめ	共著	令和 2 年 4 月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論、教育評価、教育技術などから情報教育、IR、国際教育までを幅広く解説した。(全 251 頁)
42.	プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習モデルの開発と評価	共著	掲載予定	情報コミュニケーション学会	プログラミング的思考向上を目的とした自己調整学習モデルを開発し 3 か年の授業実践を行った成果と評価をまとめた。(情報コミュニケーション学会)

中等教科教育 法Ⅱ(情報)(単 独	1. 元気になる学 び力	共著	平成 23 年 4 月	ぎょうせい	学習者の主体的な学びを中心として学習者を取り巻く教員、職員、学校経営者による教職協働による教学改善の在り方や実践について解説した。(全 202 頁)
	2. 共通教科情報 科における主 体的学習支援 に関する研究 —「望ましい情 報社会の構 築」を対象とし て—	単著	平成 25 年 3 月	滋賀大学	高等学校情報科における協調学習と主体的学習支援による言語活動の活発化やチームでの学習の活性化、理解や思考の深化のための授業モデルを開発した。
	3. 大学生のコミ ュニケーション 能力の改善が 主体性に及ぼ す効果の実証 研究	共著	平成 26 年 4 月	太洋堂	コミュニケーション能力を向上させる学習モジュールの開発を行い、それをを用いた協調学習や包括的学習支援による大学生の主体性に及ぼす効果を検証した。科研(基盤研究(c) 23531030)
	4. ICT 社会にお けるコミュニケ ーション実践 学	共著	平成 26 年 9 月	太洋堂	ICT 社会に特化したコミュニケーション技法の概説及び実践データとして立命館大学教養ゼミナールの内容を紹介した。(全 116 頁)
	5. 情報通信社会 におけるコミュ ニケーション 活動	共著	平成 27 年 11 月	太洋堂	アクティブラーニングによる学習成果と授業用 SNS、映像教材を利用した授業実践をまとめ、学習効果を解説した。(全 144 頁)
	6. 主体的に学び 意欲を育てる 教学改善のす すめ—相互理 解のための理 論と実践—	共著	平成 28 年 4 月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論、教育評価、教育技術などから情報教育、IR、国際教育までを幅広く解説した。(全 235 頁)
	7. 21 世紀型スキ ルの育成を目 的とした協調 学習に関する 実証研究—大 学生の情報処 理科目を通し て—	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報 学会	21 世紀型スキル(ATC21S)の育成を目的とした協調学習を学修状況及び情意面から分析し報告した。(第 30 回年会論文集 80-83 頁)
	8. 思考力・表現 力を高める指 導法に関する —考察(1)— 生徒のノート 指導の観点か ら—	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報 学会	中学生におけるノート指導に関して指導方法及び思考を分類化し、児童生徒の思考・表現力を高める指導実践を行った。(第 31 回年会論文集 208-209 頁)

9.	「子どもが学び取る授業」の実践研究(1)―トリックアートを用いた授業を通して―	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校数学科・情報科においてトリックアートを用いた「子どもが学び取る授業」の実践を行い、授業方法と評価について述べた。 (第 31 回年会論文集 201-202 頁)
10.	「子どもが学び取る授業」の実践研究(2)―トリックアートを用いた授業の課題と可能性―	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校数学科・情報科においてスマホを活用し、トリックアート作成を通じて「子どもが学び取る授業」の実践を行い、有用性を統計的に検証し報告した。(第 31 回年会論文集 203-204 頁)
11.	高校におけるモバイル端末を活用したプロジェクト型学習デザインの提案	共著	平成 27 年 9 月	教育システム情報学会	高等学校対象としたモバイル端末を主体的に活用するプロジェクト型学習のデザインを検討提案した。(第 40 回全国大会論文集 301-302 頁)
12.	タブレット端末を活用した学びのストーリー型ポートフォリオに関する研究	共著	平成 28 年 2 月	教育システム情報学会	タブレット端末を活用し学びの省察が可能なストーリー型ポートフォリオを提案し、実践報告とその手だてについて述べた。(研究論文集 105-106 頁)
13.	ICT 活用の「豊かな学び」を目的とした協調的課題解決学習の実践と支援	共著	平成 28 年 3 月	教育システム情報学会	高等学校対象としたタブレット的に活用して、協調的課題解決を進める学習プログラムを開発し実践を行い報告した。(研究報告論文集 113-116 頁)
14.	タブレット端末を活用して「話す」「見る・聴く」を中心とした省察活動の実践について	共著	平成 28 年 6 月	日本情報科教育学会	タブレット的に活用し質の高い省察活動を行うことを通じて学習内容の理解度や参画する意欲について報告した。 (第 9 回全国大会要項集 135-136 頁)
15.	協調的課題解決による学習者の学習意欲向上への成果と課題	共著	平成 28 年 6 月	日本情報科教育学会	高等学校対象としたタブレットしたプロジェクト型学習の過程における協調的課題解決による学習者の学習意欲について述べた。(第 9 回全国大会要項集 27-28 頁)
16.	現職教員を対象としたコミュニケーション能力のスキルアップを目指したアクティブラーニング研修の実践	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	現職教員を対象に教育的なコミュニケーション能力の向上を目指した演習を実践し、主体的な学びを実現するための教員研修モデルを検討し提案した。(第 32 回年会論文集 176-179 頁)
17.	教育実習中における教育実習支援モデルに関する検討―SNS を利用	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	教育実習中における指導の在り方を検討し、実習生の悩みや疑問の解消のための教育実習支援モデルを開発と評価を行った。(第 32 回年会論文集

	したコミュニケーション活動を通じて—				288-289 頁)
18.	マルチアクセス環境におけるLMSを活用した豊かな学びに関する実践と評価	共著	平成 29 年 1 月	芦屋大学	芦屋大学においてスマホを活用し開発した LMS により授業外での協調学習と教員に加え、学習支援者の協力による授業外での包括的学修支援を行った。教材として動画加工や情報処理、WEB プログラミングに関するものを開発し実践を行った。また、LMS 内での活動やアンケートの統計処理から学習意欲の喚起や概念的理解の促進、基礎的・汎用的な能力の向上が認められた。(芦屋大学論叢 (66) 41-50 頁)
19.	教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(1) —ARCS モデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だて—	共著	平成 29 年 3 月	情報コミュニケーション学会	ARCS モデルを用いた学習意欲を引き出す授業の取り組みと成果についてまとめ、今後のアクティブラーニングの在り方を検討した。(第 14 回全国大会論文集)
20.	教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(2) —技術・情報教員養成コースの学生を対象とした認識調査—	共著	平成 29 年 3 月	情報コミュニケーション学会	大学教職科目受講生におけるアクティブラーニングに関する認識調査を行い、全国の学校現場教員との認識の違いについて統計的分析を行った。(第 14 回全国大会論文集)
21.	アクティブラーニングを取り入れたプログラミング教育の実践と評価(1) —LMS の活用による対話的・主体的で深い学びを通して—	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科において開発した LSM 環境と動画を用いた動画を用いたビジュアルプログラミングを用いた実践を行い、成果の統計的分析を行った。(第 33 回年会論文集 240-241 頁)

22.	初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(3)－運用マネジメントおよび学習活動の質的評価と量的評価に関する考察－	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	芦屋大学のリメディアル教育について整理し、初年次教育を円滑に推進するためのクラス編成やマネジメント、学生レポート評価に関する質的評価・量的評価における考察を述べた。(第 33 回年会論文集 274-275 頁)
23.	教育実習中における教育実習支援モデルに関する考察－芦屋大学 ASAS の活動を通じて－	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	教育実習生のための教育実習支援モデルを開発し、教育実習中の活用による成果・影響を分析し得られた結果をまとめた。(第 33 回年会論文集 242-243 頁)
24.	幼児教育課程履修者を対象とした情報モラル教育に関する実践と評価(1)－短期大学生を対象としたアンケート調査と取り組み－	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	芦屋学園短期大学生を対象に情報モラル向上のための教材を開発し実践を行い、情報モラルに関する認識・行動調査分析を行った。(第 33 回年会論文集 300-301 頁)
25.	幼児教育課程における情報モラル教育と今後の展望－情報モラルセミナーの実施とアンケート評価をもとに－	共著	平成 30 年 3 月	芦屋学園短期大学	幼児教育課程の学生を対象に情報モラルに関する認識調査と指導を行い、今後の情報モラル指導の在り方をまとめた。(芦屋学園短期大学研究紀要 (44) 105-125 頁)
26.	教職課程履修学生を対象としたプログラミング学習教材の活用と考察	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	教職課程履修学生を対象にプログラミング的思考向上のためのプログラミング教材の活用実践と評価から今後のプログラミング学習のための教材の在り方を提言した。(第 15 回全国大会論文集 144-145 頁)
27.	自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の実践と評価－LMS の活用による対話的・主体的で深い学びを目指して－	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考の向上を目的に、自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の授業実践とアンケートから分析し、得られた結果を報告した。(第 15 回全国大会論文集 146-147 頁)
28.	教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開 (3)－中学校	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	中学校技術科における主体的・対話的で深い学びをじつげんするためにインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングによる授業モデルを検討した。(第 15 回全国大会論文集 148-149 頁)

	技術科教育における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業モデルの検討				
29.	プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(1)	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考と学習状況に関する調査分析を行い、今後のプログラミング教育導入のための提言を行った。(第 34 回年会論文集 254-255 頁)
30.	プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(2)	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	プログラミング的思考の調査結果を踏まえ、プログラミング的思考の向上を目的に自己調整学習を取り入れた学習モデルについての考察と今後の展望を述べた。(第 34 回年会論文集 256-257 頁)
31.	対話的で深い学びを取り入れた自己調整学習の研究ー多人数授業におけるレポート分析調査と書き行動方略への影響ー	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	教職科目における自己調整学習によるレポート記述分析による書き行動方略についての影響と考察を述べた。(第 34 回年会論文集 304-305 頁)
32.	幼児教育課程における情報モラル教育に関する実践と評価(2)ー役割取得能力の向上への試みー	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	幼児教育課程において保育者として道徳性や人間力の基盤となす役割取得能力の向上を目指した情報モラル教育に関する実践と評価を行った。(第 34 回年会論文集 336-337 頁)
33.	TAの活用による包括的学習支援を取り入れた授業改善の試み	共著	平成 30 年 10 月	芦屋大学	芦屋大学における TA の活用とその包括的学習支援による授業改善が及ぼした影響と成果について調査分析結果をまとめた。(芦屋大学論叢第 70 号掲載予定)
34.	教育実習中における教育実習支援モデルに関する実証研究ーSNSを利用した支援活動を通じてー	共著	平成 30 年 10 月	芦屋大学	教育実習生に対する教育実習支援モデルの開発と実施による成果と課題をまとめ、今後の教育実習の在り方について提言した。(芦屋大学論叢第 70 号掲載予定)
35.	プログラミング的思考における各思考スキルの体系化の試みー小学校学習指導要領改訂においてー	共著	平成 31 年 2 月	情報コミュニケーション学会	各教科学習指導要領をテキスト分析し、プログラミング思考の在り方を体系化した。(第 16 回全国大会論文集 114-115 頁)

	36. プログラミング教育における自己調整学習モデルの開発と取り組み	共著	平成 31 年 2 月	情報コミュニケーション学会	プログラミング的思考向上を目的に自己調整学習モデルを開発し実践と評価を行った。(第 16 回全国大会論文集 116-117 頁)
	37. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(3)ー自己調整学習モデルを取り入れた実践ー	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	プログラミング的思考の向上を目的とした学ぶ力を養う自己調整学習モデルの授業実践について報告した。(第 35 回年会論文集 190-191 頁)
	38. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(4)ー自己調整学習モデルを取り入れた実践と成果ー	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	自ら学ぶ力を養う自己調整学習モデルを開発し、学習者のプログラミング的思考の向上を目的に授業実践に関する成果をまとめ評価した。(第 35 回年会論文集 192-193 頁)
	39. 留学生の情報リテラシーに関する調査と授業への取り組み	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	留学生の国籍が多様化に伴い情報処理技術に関するスキルの差や、情報社会での考え方について調査し授業に取り組んだ。(第 35 回年会論文集 230-231 頁)
	40. 教員の ICT 活用指導力の向上をめざした実践的研究(1)	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	教員の ICT 活用指導力の育成のために、ICT 機器や環境の活用と工夫改善、ICT の活用に関する教員の意識の向上、校内研修の充実、学校文化の醸成の 3 点を中心に実践的研究を行った。(第 35 回年会論文集 236-237 頁)
	41. アクティブラーニングに導く教学改善のすすめ	共著	令和 2 年 4 月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論、教育評価、教育技術などから情報教育、IR、国際教育までを幅広く解説した。(全 251 頁)
	42. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習モデルの開発と評価	共著	掲載予定	情報コミュニケーション学会	プログラミング的思考向上を目的とした自己調整学習モデルを開発し 3 か年の授業実践を行った成果と評価をまとめた。(情報コミュニケーション学会)
情報数理学 I (単独)	1. 主体的に学び意欲を育てる教学改善のすすめー相互理解のための理論と実践ー	共著	平成 28 年 4 月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論、教育評価、教育技術などから情報教育、IR、国際教育までを幅広く解説した。(全 235 頁)

2.	協調学習及び包括的学修支援による学修の主体性に関する研究(1) —大学生のコミュニケーション能力改善の実践を通して—	共著	平成 24 年 8 月	学習科学研究会	コミュニケーション能力向上のための学習モジュールを活用した協調学習と包括的学習支援が主体性(情意面と環境面)にどのような影響を及ぼしたのか調査及び分析を行った。(全 12 頁)
3.	コミュニケーション能力の改善が主体性に及ぼす効果の実証研究(4) ～通年型カリキュラムの教職課程履修者を対象として～	共著	平成 25 年 11 月	日本教育情報学会	通年型カリキュラムの教職課程履修者を対象としたコミュニケーション能力の改善による学修に関する主体性への影響や効果について統計的分析検証を行った。(第 30 回年会論文集 133-134 頁)
4.	大学生のコミュニケーション能力の改善が主体性に及ぼす効果の実証研究	共著	平成 26 年 4 月	太洋堂	コミュニケーション能力を向上させる学習モジュールの開発を行い、それを用いた協調学習や包括的学習支援による大学生の主体性に及ぼす効果を検証した。科研(基盤研究(c) 23531030)
5.	21 世紀型スキルの育成を目的とした協調学習に関する実証研究—大学生の情報処理科目を通して—	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会	21 世紀型スキル(ATC21S)の育成を目的とした協調学習を学修状況及び情意面から分析し報告した。(第 30 回年会論文集 80-83 頁)
6.	「子どもが学びとる授業」の実践研究(2)—トリックアートを用いた授業の課題と可能性—	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校数学科・情報科においてスマホを活用し、トリックアート作成を通じて「子どもが学び取る授業」の実践を行い、有用性を統計的に検証し報告した。(第 31 回年年会論文集 203-204 頁)
7.	教育実習中における教育実習支援モデルに関する検討—SNSを利用したコミュニケーション活動を通じて—	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	教育実習中における指導の在り方を検討し、実習生の悩みや疑問の解消のための教育実習支援モデルを開発と評価を行った。(第 32 回年会論文集 288-289 頁)
8.	マルチアクセス環境における LMS を活用した豊かな学びに関する実践と評価	共著	平成 29 年 1 月	芦屋大学	芦屋大学においてスマホを活用し開発した LMS により授業外での協調学習と教員に加え、学習支援者の協力による授業外での包括的学修支援を行った。教材として動画加工や情報処理、WEB プログラミングに関するものを開発し実践を行った。また、LMS 内での活動やアンケートの

					統計処理にから学習意欲の喚起や概念的理解の促進、基礎的・汎用的な能力の向上が認められた。(芦屋大学論叢 (66) 41-50 頁)
9.	教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(2) —技術・情報教員養成コースの学生を対象とした認識調査—	共著	平成 29 年 3 月	情報コミュニケーション学会	大学教職科目受講生におけるアクティブラーニングに関する認識調査を行い、全国の学校現場教員との認識の違いについて統計的分析を行った。 (第 14 回全国大会論文集)
10.	アクティブラーニングを取り入れたプログラミング教育の実践と評価(1) —LMS の活用による対話的・主体的で深い学びを通して—	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科において開発した LSM 環境と動画像を用いた動画像を用いたビジュアルプログラミングを用いた実践を行い、成果の統計的分析を行った。 (第 33 回年会論文集 240-241 頁)
11.	教育実習中における教育実習支援モデルに関する考察 —芦屋大学 ASAS の活動を通じて—	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	教育実習生のための教育実習支援モデルを開発し、教育実習中の活用による成果・影響を分析し得られた結果をまとめた。 (第 33 回年会論文集 242-243 頁)
12.	幼児教育課程履修者を対象とした情報モラル教育に関する実践と評価(1) —短期大学生を対象としたアンケート調査と取り組み—	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	芦屋学園短期大学生を対象に情報モラル向上のための教材を開発し実践を行い、情報モラルに関する認識・行動調査分析を行った。(第 33 回年会論文集 300-301 頁)
13.	幼児教育課程における情報モラル教育と今後の展望 —情報モラルセミナーの実施とアンケート評価をもとに—	共著	平成 30 年 3 月	芦屋学園短期大学	幼児教育課程の学生を対象に情報モラルに関する認識調査と指導を行い、今後の情報モラル指導の在り方をまとめた。(芦屋学園短期大学研究紀要 (44) 105-125 頁)

14. 教職課程履修学生を対象としたプログラミング学習教材の活用と考察	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	教職課程履修学生を対象にプログラミング的思考向上のためのプログラミング教材の活用実践と評価から今後のプログラミング学習のための教材の在り方を提言した。(第 15 回全国大会論文集 144-145 頁)
15. 自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の実践と評価—LMSの活用による対話的・主体的で深い学びを目指して—	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考の向上を目的に、自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の授業実践とアンケートから分析し、得られた結果を報告した。(第 15 回全国大会論文集 146-147 頁)
16. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(1)	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考と学習状況に関する調査分析を行い、今後のプログラミング教育導入のための提言を行った。(第 34 回年会論文集 254-255 頁)
17. 対話的で深い学びを取入れた自己調整学習の研究—多人数授業におけるレポート分析調査と書き行動方略への影響—	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	教職科目における自己調整学習によるレポート記述分析による書き行動方略についての影響と考察を述べた。(第 34 回年会論文集 304-305 頁)
18. TAの活用による包括的学習支援を取り入れた授業改善の試み	共著	平成 30 年 10 月	芦屋大学	芦屋大学における TA の活用とその包括的学習支援による授業改善が及ぼした影響と成果について調査分析結果をまとめた。(芦屋大学論叢第 70 号掲載予定)
19. 教育実習中における教育実習支援モデルに関する実証研究—SNSを利用した支援活動を通じて—	共著	平成 30 年 10 月	芦屋大学	教育実習生に対する教育実習支援モデルの開発と実施による成果と課題をまとめ、今後の教育実習の在り方について提言した。(芦屋大学論叢第 70 号掲載予定)
20. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(3)—自己調整学習モデルを取り入れた実践—	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	プログラミング的思考の向上を目的とした学ぶ力を養う自己調整学習モデルの授業実践について報告した。(第 35 回年会論文集 190-191 頁)

	21. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(4)ー自己調整学習モデルを取り入れた実践と成果ー	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	自ら学ぶ力を養う自己調整学習モデルを開発し、学習者のプログラミング的思考の向上を目的に授業実践に関する成果をまとめ評価した。(第 35 回年会論文集 192-193 頁)
	22. 留学生の情報リテラシーに関する調査と授業への取り組み	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	留学生の国籍が多様化に伴い情報処理技術に関するスキルの差や、情報社会での考え方について調査し授業に取り組んだ。(第 35 回年会論文集 230-231 頁)
	23. 教員の ICT 活用指導力の向上をめざした実践的研究(1)	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	教員の ICT 活用指導力の育成のために、ICT 機器や環境の活用と工夫改善、ICT の活用に関する教員の意識の向上、校内研修の充実、学校文化の醸成の 3 点を中心に実践的研究を行った。(第 35 回年会論文集 236-237 頁)
	24. アクティブラーニングに導く教学改善のすすめ	共著	令和 2 年 4 月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論、教育評価、教育技術などから情報教育、IR、国際教育までを幅広く解説した。(全 251 頁)
	25. 女子大学生における 2 分割した BMI 標準体重群の身体的特徴と簡便法による隠れ肥満の見分けの試み	共著	令和 2 年 6 月	健康科学学会	女子大学生における 2 分割した BMI 標準体重群の身体的特徴を分析し、簡便法による隠れ肥満の見分けを行った。(健康科学学会誌 36(2))
	26. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習モデルの開発と評価	共著	掲載予定	情報コミュニケーション学会	プログラミング的思考向上を目的とした自己調整学習モデルを開発し 3 年間の授業実践を行った成果と評価をまとめた。(情報コミュニケーション学会)
情報数理学 II (単独)	1. 主体的に学び意欲を育てる教学改善のすすめー相互理解のための理論と実践ー	共著	平成 28 年 4 月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論、教育評価、教育技術などから情報教育、IR、国際教育までを幅広く解説した。(全 235 頁)
	2. 協調学習及び包括的学修支援による学修の主体性に関する研究(1)ー大学生のコミュニケーション	共著	平成 24 年 8 月	学習科学研究会	コミュニケーション能力向上のための学習モジュールを活用した協調学習と包括的学習支援が主体性(情意面と環境面)にどのような影響を及ぼしたのか調査及び分析を行った。(全 12 頁)

	ン能力改善の 実践を通して —				
3.	コミュニケーション能力の改善が主体性に及ぼす効果の実証研究(4)～通年型カリキュラムの教職課程履修者を対象として～	共著	平成 25 年 11 月	日本教育情報学会	通年型カリキュラムの教職課程履修者を対象としたコミュニケーション能力の改善による学修に関する主体性への影響や効果について統計的分析検証を行った。(第 30 回年会論文集 133-134 頁)
4.	大学生のコミュニケーション能力の改善が主体性に及ぼす効果の実証研究	共著	平成 26 年 4 月	太洋堂	コミュニケーション能力を向上させる学習モジュールの開発を行い、それを用いた協調学習や包括的学習支援による大学生の主体性に及ぼす効果を検証した。科研(基盤研究(c) 23531030)
5.	21 世紀型スキルの育成を目的とした協調学習に関する実証研究—大学生の情報処理科目を通して—	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会	21 世紀型スキル(ATC21S)の育成を目的とした協調学習を学修状況及び情意面から分析し報告した。(第 30 回年会論文集 80-83 頁)
6.	「子どもが学び取る授業」の実践研究(2)—トリックアートを用いた授業の課題と可能性—	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校数学科・情報科においてスマホを活用し、トリックアート作成を通じて「子どもが学び取る授業」の実践を行い、有用性を統計的に検証し報告した。(第 31 回年年会論文集 203-204 頁)
7.	教育実習中における教育実習支援モデルに関する検討—SNS を利用したコミュニケーション活動を通じて—	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	教育実習中における指導の在り方を検討し、実習生の悩みや疑問の解消のための教育実習支援モデルを開発と評価を行った。(第 32 回年会論文集 288-289 頁)
8.	マルチアクセス環境における LMS を活用した豊かな学びに関する実践と評価	共著	平成 29 年 1 月	芦屋大学	芦屋大学においてスマホを活用し開発した LMS により授業外での協調学習と教員に加え、学習支援者の協力による授業外での包括的学修支援を行った。教材として動画加工や情報処理、WEB プログラミングに関するものを開発し実践を行った。また、LMS 内での活動やアンケートの統計処理にから学習意欲の喚起や概念的理解の促進、基礎的・汎用的な能力の向上が認められた。(芦屋大学論叢 (66))

					41-50 頁)
9.	教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(2) —技術・情報教員養成コースの学生を対象とした認識調査—	共著	平成 29 年 3 月	情報コミュニケーション学会	大学教職科目受講生におけるアクティブラーニングに関する認識調査を行い、全国の学校現場教員との認識の違いについて統計的分析を行った。 (第 14 回全国大会論文集)
10.	アクティブラーニングを取り入れたプログラミング教育の実践と評価(1) —LMS の活用による対話的・主体的で深い学びを通して—	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科において開発した LSM 環境と動画像を用いた動画像を用いたビジュアルプログラミングを用いた実践を行い、成果の統計的分析を行った。 (第 33 回年会論文集 240-241 頁)
11.	教育実習中における教育実習支援モデルに関する考察 —芦屋大学 ASAS の活動を通じて—	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	教育実習生のための教育実習支援モデルを開発し、教育実習中の活用による成果・影響を分析し得られた結果をまとめた。 (第 33 回年会論文集 242-243 頁)
12.	幼児教育課程履修者を対象とした情報モラル教育に関する実践と評価 (1)—短期大学生を対象としたアンケート調査と取り組み—	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	芦屋学園短期大学生を対象に情報モラル向上のための教材を開発し実践を行い、情報モラルに関する認識・行動調査分析を行った。(第 33 回年会論文集 300-301 頁)
13.	幼児教育課程における情報モラル教育と今後の展望 —情報モラルセミナーの実施とアンケート評価をもとに—	共著	平成 30 年 3 月	芦屋学園短期大学	幼児教育課程の学生を対象に情報モラルに関する認識調査と指導を行い、今後の情報モラル指導の在り方をまとめた。(芦屋学園短期大学研究紀要 (44) 105-125 頁)

14. 教職課程履修学生を対象としたプログラミング学習教材の活用と考察	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	教職課程履修学生を対象にプログラミング的思考向上のためのプログラミング教材の活用実践と評価から今後のプログラミング学習のための教材の在り方を提言した。(第 15 回全国大会論文集 144-145 頁)
15. 自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の実践と評価—LMSの活用による対話的・主体的で深い学びを目指して—	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考の向上を目的に、自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の授業実践とアンケートから分析し、得られた結果を報告した。(第 15 回全国大会論文集 146-147 頁)
16. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(1)	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考と学習状況に関する調査分析を行い、今後のプログラミング教育導入のための提言を行った。(第 34 回年会論文集 254-255 頁)
17. 対話的で深い学びを取入れた自己調整学習の研究—多人数授業におけるレポート分析調査と書き行動方略への影響—	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	教職科目における自己調整学習によるレポート記述分析による書き行動方略についての影響と考察を述べた。(第 34 回年会論文集 304-305 頁)
18. TAの活用による包括的学習支援を取り入れた授業改善の試み	共著	平成 30 年 10 月	芦屋大学	芦屋大学における TA の活用とその包括的学習支援による授業改善が及ぼした影響と成果について調査分析結果をまとめた。(芦屋大学論叢第 70 号掲載予定)
19. 教育実習中における教育実習支援モデルに関する実証研究—SNSを利用した支援活動を通じて—	共著	平成 30 年 10 月	芦屋大学	教育実習生に対する教育実習支援モデルの開発と実施による成果と課題をまとめ、今後の教育実習の在り方について提言した。(芦屋大学論叢第 70 号掲載予定)
20. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(3)—自己調整学習モデルを取り入れた実践—	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	プログラミング的思考の向上を目的とした学ぶ力を養う自己調整学習モデルの授業実践について報告した。(第 35 回年会論文集 190-191 頁)

	21. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(4)ー自己調整学習モデルを取り入れた実践と成果ー	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	自ら学ぶ力を養う自己調整学習モデルを開発し、学習者のプログラミング的思考の向上を目的に授業実践に関する成果をまとめ評価した。(第 35 回年会論文集 192-193 頁)
	22. 留学生の情報リテラシーに関する調査と授業への取り組み	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	留学生の国籍が多様化に伴い情報処理技術に関するスキルの差や、情報社会での考え方について調査し授業に取り組んだ。(第 35 回年会論文集 230-231 頁)
	23. 教員の ICT 活用指導力の向上をめざした実践的研究(1)	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	教員の ICT 活用指導力の育成のために、ICT 機器や環境の活用と工夫改善、ICT の活用に関する教員の意識の向上、校内研修の充実、学校文化の醸成の 3 点を中心に実践的研究を行った。(第 35 回年会論文集 236-237 頁)
	24. アクティブラーニングに導く教学改善のすすめ	共著	令和 2 年 4 月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論、教育評価、教育技術などから情報教育、IR、国際教育までを幅広く解説した。(全 251 頁)
	25. 女子大学生における 2 分割した BMI 標準体重群の身体的特徴と簡便法による隠れ肥満の見分けの試み	共著	令和 2 年 6 月	健康科学学会	女子大学生における 2 分割した BMI 標準体重群の身体的特徴を分析し、簡便法による隠れ肥満の見分けを行った。(健康科学学会誌 36(2))
	26. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習モデルの開発と評価	共著	掲載予定	情報コミュニケーション学会	プログラミング的思考向上を目的とした自己調整学習モデルを開発し 3 か年の授業実践を行った成果と評価をまとめた。(情報コミュニケーション学会)
情報処理基礎 I (単独)	1. 主体的に学び意欲を育てる教学改善のすすめー相互理解のための理論と実践ー	共著	平成 28 年 4 月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論、教育評価、教育技術などから情報教育、IR、国際教育までを幅広く解説した。(全 235 頁)
	2. 情報通信社会におけるコミュニケーション活動	共著	平成 27 年 11 月	太洋堂	アクティブラーニングによる学習成果と授業用 SNS、映像教材を利用した授業実践をまとめ、学習効果を解説した。(全 144 頁)
	3. 21 世紀型スキルの育成を目的とした協調学習に関する	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会	21 世紀型スキル(ATC21S)の育成を目的とした協調学習を学修状況及び情意面から分析し報告した。(第 30 回年会論文集

	実証研究－大学生の情報処理科目を通して－				80-83 頁)
4.	高校におけるモバイル端末を活用したプロジェクト型学習デザインの提案	共著	平成 27 年 9 月	教育システム情報学会	高等学校対象としたモバイル端末を主体的に活用するプロジェクト型学習のデザインを検討提案した。(第 40 回全国大会論文集 301-302 頁)
5.	「子どもが学びとる授業」の実践研究(2)－トリックアートを用いた授業の課題と可能性－	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校数学科・情報科においてスマホを活用し、トリックアート作成を通じて「子どもが学び取る授業」の実践を行い、有用性を統計的に検証し報告した。(第 31 回年年会論文集 203-204 頁)
6.	タブレット端末を活用した学びのストーリー型ポートフォリオに関する研究	共著	平成 28 年 2 月	教育システム情報学会	タブレット端末を活用し学びの省察が可能なストーリー型ポートフォリオを提案し、実践報告とその手だてについて述べた。(研究論文集 105-106 頁)
7.	ICT 活用の「豊かな学び」を目的とした協調的課題解決学習の実践と支援	共著	平成 28 年 3 月	教育システム情報学会	高等学校対象としたタブレット的に活用して、協調的課題解決を進める学習プログラムを開発し実践を行い報告した。(研究報告論文集 113-116 頁)
8.	タブレット端末を活用して「話す」「見る・聴く」を中心とした省察活動の実践について	共著	平成 28 年 6 月	日本情報科教育学会	タブレット的に活用し質の高い省察活動を行うことを通じて学習内容の理解度や参画する意欲について報告した。(第 9 回全国大会要項集 135-136 頁)
9.	協調的課題解決による学習者の学習意欲向上への成果と課題	共著	平成 28 年 6 月	日本情報科教育学会	高等学校対象としたタブレットしたプロジェクト型学習の過程における協調的課題解決による学習者の学習意欲について述べた。(第 9 回全国大会要項集 27-28 頁)
10.	ソーラーカーを活用したアクティブラーニングの研究(3)	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	学生が主体となった教育・社会貢献活動としてソーラーカーを活用したアクティブラーニングの取り組み成果と課題について述べた。(第 32 回年年会論文集 286-287 頁)
11.	マルチアクセス環境における LMS を活用した豊かな学びに関する実践と評価	共著	平成 29 年 1 月	芦屋大学	芦屋大学においてスマホを活用し開発した LMS により授業外での協調学習と教員に加え、学習支援者の協力による授業外での包括的学修支援を行った。教材として動画加工や情報処理、WEB プログラミングに関するものを開発し実践を行った。また、LMS 内での活動やアンケートの統計処理から学習意欲の喚

					起や概念的理解の促進、基礎的・汎用的な能力の向上が認められた。(芦屋大学論叢 (66) 41-50 頁)
12.	アクティブラーニングを取り入れたプログラミング教育の実践と評価(1)－LMS の活用による対話的・主体的で深い学びを通して－	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科において開発した LSM 環境と動画像を用いた動画像を用いたビジュアルプログラミングを用いた実践を行い、成果の統計的分析を行った。(第 33 回年会論文集 240-241 頁)
13.	教職課程履修学生を対象としたプログラミング学習教材の活用と考察	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	教職課程履修学生を対象にプログラミング的思考向上のためのプログラミング教材の活用実践と評価から今後のプログラミング学習のための教材の在り方を提言した。(第 15 回全国大会論文集 144-145 頁)
14.	自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の実践と評価－LMS の活用による対話的・主体的で深い学びを目指して－	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考の向上を目的に、自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の授業実践とアンケートから分析し、得られた結果を報告した。(第 15 回全国大会論文集 146-147 頁)
15.	プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(1)	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考と学習状況に関する調査分析を行い、今後のプログラミング教育導入のための提言を行った。(第 34 回年会論文集 254-255 頁)
16.	プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(2)	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	プログラミング的思考の調査結果を踏まえ、プログラミング的思考の向上を目的に自己調整学習を取り入れた学習モデルについての考察と今後の展望を述べた。(第 34 回年会論文集 256-257 頁)
17.	プログラミング的思考における各思考スキルの体系化の試み－小学校学習指導要領改訂において－	共著	平成 31 年 2 月	情報コミュニケーション学会	各教科学習指導要領をテキスト分析し、プログラミング思考の在り方を体系化した。(第 16 回全国大会論文集 114-115 頁)

	18. プログラミング教育における自己調整学習モデルの開発と取り組み	共著	平成 31 年 2 月	情報コミュニケーション学会	プログラミング的思考向上を目的に自己調整学習モデルを開発し実践と評価を行った。(第 16 回全国大会論文集 116-117 頁)
	19. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(3)ー自己調整学習モデルを取り入れた実践ー	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	プログラミング的思考の向上を目的とした学ぶ力を養う自己調整学習モデルの授業実践について報告した。(第 35 回年会論文集 190-191 頁)
	20. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(4)ー自己調整学習モデルを取り入れた実践と成果ー	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	自ら学ぶ力を養う自己調整学習モデルを開発し、学習者のプログラミング的思考の向上を目的に授業実践に関する成果をまとめ評価した。(第 35 回年会論文集 192-193 頁)
	21. 留学生の情報リテラシーに関する調査と授業への取り組み	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	留学生の国籍が多様化に伴い情報処理技術に関するスキルの差や、情報社会での考え方について調査し授業に取り組んだ。(第 35 回年会論文集 230-231 頁)
	22. 教員の ICT 活用指導力の向上をめざした実践的研究(1)	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	教員の ICT 活用指導力の育成のために、ICT 機器や環境の活用と工夫改善、ICT の活用に関する教員の意識の向上、校内研修の充実、学校文化の醸成の 3 点を中心に実践的研究を行った。(第 35 回年会論文集 236-237 頁)
	23. アクティブラーニングに導く教学改善のすすめ	共著	令和 2 年 4 月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論、教育評価、教育技術などから情報教育、IR、国際教育までを幅広く解説した。(全 251 頁)
	24. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習モデルの開発と評価	共著	掲載予定	情報コミュニケーション学会	プログラミング的思考向上を目的とした自己調整学習モデルを開発し 3 か年の授業実践を行った成果と評価をまとめた。(情報コミュニケーション学会)
マルチメディア技術 I (単独)	1. ICT 社会におけるコミュニケーション実践学	共著	平成 26 年 9 月	太洋堂	ICT 社会に特化したコミュニケーション技法の概説及び実践データとして立命館大学教養ゼミナールの内容を紹介した。(全 116 頁)
	2. 情報通信社会におけるコミュ	共著	平成 27 年 11 月	太洋堂	アクティブラーニングによる学習成果と授業用 SNS、映像教材を

	ニケーション 活動				利用した授業実践をまとめ、学習効果を解説した。(全144頁)
3.	主体的に学び意欲を育てる 教学改善のす すめ—相互理 解のための理 論と実践—	共著	平成28年4月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論、教育評価、教育技術などから情報教育、IR、国際教育まで幅広く解説した。(全235頁)
4.	21世紀型スキルの育成を目的とした協調学習に関する実証研究—大学生の情報処理科目を通して—	共著	平成26年8月	日本教育情報学会	21世紀型スキル(ATC21S)の育成を目的とした協調学習を学修状況及び情意面から分析し報告した。(第30回年会論文集80-83頁)
5.	「子どもが学びとる授業」の実践研究(1)—トリックアートを用いた授業を通して—	共著	平成27年8月	日本教育情報学会	高等学校数学科・情報科においてトリックアートを用いた「子どもが学び取る授業」の実践を行い、授業方法と評価について述べた。 (第31回年会論文集201-202頁)
6.	「子どもが学びとる授業」の実践研究(2)—トリックアートを用いた授業の課題と可能性—	共著	平成27年8月	日本教育情報学会	高等学校数学科・情報科においてスマホを活用し、トリックアート作成を通じて「子どもが学び取る授業」の実践を行い、有用性を統計的に検証し報告した。(第31回年会論文集203-204頁)
7.	高校におけるモバイル端末を活用したプロジェクト型学習デザインの提案	共著	平成27年9月	教育システム情報学会	高等学校対象としたモバイル端末を主体的に活用するプロジェクト型学習のデザインを検討提案した。(第40回全国大会論文集301-302頁)
8.	タブレット端末を活用した学びのストーリー型ポートフォリオに関する研究	共著	平成28年2月	教育システム情報学会	タブレット端末を活用し学びの省察が可能なストーリー型ポートフォリオを提案し、実践報告とその手だてについて述べた。(研究論文集105-106頁)
9.	ICT活用の「豊かな学び」を目的とした協調的課題解決学習の実践と支援	共著	平成28年3月	教育システム情報学会	高等学校対象としたタブレット的に活用して、協調的課題解決を進める学習プログラムを開発し実践を行い報告した。(研究報告論文集113-116頁)
10.	タブレット端末を活用して「話す」「見る・聴く」を中心とした省察活動の実践について	共著	平成28年6月	日本情報科教育学会	タブレット的に活用し質の高い省察活動を行うことを通じて学習内容の理解度や参画する意欲について報告した。 (第9回全国大会要項集135-136頁)

11. 協調的課題解決による学習者の学習意欲向上への成果と課題	共著	平成 28 年 6 月	日本情報科教育学会	高等学校対象としたタブレットしたプロジェクト型学習の過程における協調的課題解決による学習者の学習意欲について述べた。(第 9 回全国大会要項集 27-28 頁)
12. ソーラーカーを活用したアクティブラーニングの研究(3)	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	学生が主体となった教育・社会貢献活動としてソーラーカーを活用したアクティブラーニングの取り組み成果と課題について述べた。(第 32 回年会論文集 286-287 頁)
13. 教育実習中における教育実習支援モデルに関する検討—SNS を利用したコミュニケーション活動を通じて—	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	教育実習中における指導の在り方を検討し、実習生の悩みや疑問の解消のための教育実習支援モデルを開発と評価を行った。(第 32 回年会論文集 288-289 頁)
14. マルチアクセス環境における LMS を活用した豊かな学びに関する実践と評価	共著	平成 29 年 1 月	芦屋大学	芦屋大学においてスマホを活用し開発した LMS により授業外での協調学習と教員に加え、学習支援者の協力による授業外での包括的学修支援を行った。教材として動画加工や情報処理、WEB プログラミングに関するものを開発し実践を行った。また、LMS 内での活動やアンケートの統計処理から学習意欲の喚起や概念的理解の促進、基礎的・汎用的な能力の向上が認められた。(芦屋大学論叢 (66) 41-50 頁)
15. アクティブラーニングを取り入れたプログラミング教育の実践と評価(1)—LMS の活用による対話的・主体的で深い学びを通して—	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科において開発した LSM 環境と動画像を用いた動画像を用いたビジュアルプログラミングを用いた実践を行い、成果の統計的分析を行った。(第 33 回年会論文集 240-241 頁)
16. 幼児教育課程における情報モラル教育と今後の展望—情報モラルセミナーの実施とアンケート評価をもとに—	共著	平成 30 年 3 月	芦屋学園短期大学	幼児教育課程の学生を対象に情報モラルに関する認識調査と指導を行い、今後の情報モラル指導の在り方をまとめた。(芦屋学園短期大学研究紀要 (44) 105-125 頁)

17. 教職課程履修学生を対象としたプログラミング学習教材の活用と考察	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	教職課程履修学生を対象にプログラミング的思考向上のためのプログラミング教材の活用実践と評価から今後のプログラミング学習のための教材の在り方を提言した。(第 15 回全国大会論文集 144-145 頁)
18. 自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の実践と評価—LMSの活用による対話的・主体的で深い学びを目指して—	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考の向上を目的に、自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の授業実践とアンケートから分析し、得られた結果を報告した。(第 15 回全国大会論文集 146-147 頁)
19. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(1)	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考と学習状況に関する調査分析を行い、今後のプログラミング教育導入のための提言を行った。(第 34 回年会論文集 254-255 頁)
20. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(2)	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	プログラミング的思考の調査結果を踏まえ、プログラミング的思考の向上を目的に自己調整学習を取り入れた学習モデルについての考察と今後の展望を述べた。(第 34 回年会論文集 256-257 頁)
21. TAの活用による包括的学習支援を取り入れた授業改善の試み	共著	平成 30 年 10 月	芦屋大学	芦屋大学における TA の活用とその包括的学習支援による授業改善が及ぼした影響と成果について調査分析結果をまとめた。(芦屋大学論叢第 70 号掲載予定)
22. 教育実習中における教育実習支援モデルに関する実証研究—SNSを利用した支援活動を通じて—	共著	平成 30 年 10 月	芦屋大学	教育実習生に対する教育実習支援モデルの開発と実施による成果と課題をまとめ、今後の教育実習の在り方について提言した。(芦屋大学論叢第 70 号掲載予定)
23. プログラミング的思考における各思考スキルの体系化の試み—小学校学習指導要領改訂において—	共著	平成 31 年 2 月	情報コミュニケーション学会	各教科学習指導要領をテキスト分析し、プログラミング思考の在り方を体系化した。(第 16 回全国大会論文集 114-115 頁)
24. プログラミング教育における自己調整学習モデルの開発と取り組み	共著	平成 31 年 2 月	情報コミュニケーション学会	プログラミング的思考向上を目的に自己調整学習モデルを開発し実践と評価を行った。(第 16 回全国大会論文集 116-117 頁)

	25. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(3)ー自己調整学習モデルを取り入れた実践ー	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	プログラミング的思考の向上を目的とした学ぶ力を養う自己調整学習モデルの授業実践について報告した。(第 35 回年会論文集 190-191 頁)
	26. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(4)ー自己調整学習モデルを取り入れた実践と成果ー	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	自ら学ぶ力を養う自己調整学習モデルを開発し、学習者のプログラミング的思考の向上を目的に授業実践に関する成果をまとめ評価した。(第 35 回年会論文集 192-193 頁)
	27. 留学生の情報リテラシーに関する調査と授業への取り組み	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	留学生の国籍が多様化に伴い情報処理技術に関するスキルの差や、情報社会での考え方について調査し授業に取り組んだ。(第 35 回年会論文集 230-231 頁)
	28. 教員の ICT 活用指導力の向上をめざした実践的研究(1)	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	教員の ICT 活用指導力の育成のために、ICT 機器や環境の活用と工夫改善、ICT の活用に関する教員の意識の向上、校内研修の充実、学校文化の醸成の 3 点を中心に実践的研究を行った。(第 35 回年会論文集 236-237 頁)
	29. アクティブラーニングに導く教学改善のすすめ	共著	令和 2 年 4 月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論、教育評価、教育技術などから情報教育、IR、国際教育までを幅広く解説した。(全 251 頁)
	30. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習モデルの開発と評価	共著	掲載予定	情報コミュニケーション学会	プログラミング的思考向上を目的とした自己調整学習モデルを開発し 3 か年の授業実践を行った成果と評価をまとめた。(情報コミュニケーション学会)
マルチメディア技術Ⅱ(単独)	1. ICT 社会におけるコミュニケーション実践学	共著	平成 26 年 9 月	太洋堂	ICT 社会に特化したコミュニケーション技法の概説及び実践データとして立命館大学教養ゼミナールの内容を紹介した。(全 116 頁)
	2. 情報通信社会におけるコミュニケーション活動	共著	平成 27 年 11 月	太洋堂	アクティブラーニングによる学習成果と授業用 SNS、映像教材を利用した授業実践をまとめ、学習効果を解説した。(全 144 頁)

3.	主体的に学び意欲を育てる 教学改善のす すめ—相互理 解のための理 論と実践—	共著	平成 28 年 4 月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論、教育評価、教育技術などから情報教育、IR、国際教育までを幅広く解説した。(全 235 頁)
4.	21 世紀型スキルの育成を目的とした協調学習に関する実証研究—大学生の情報処理科目を通して—	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会	21 世紀型スキル(ATC21S)の育成を目的とした協調学習を学修状況及び情意面から分析し報告した。(第 30 回年会論文集 80-83 頁)
5.	「子どもが学びとる授業」の実践研究(1)—トリックアートを用いた授業を通して—	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校数学科・情報科においてトリックアートを用いた「子どもが学び取る授業」の実践を行い、授業方法と評価について述べた。 (第 31 回年会論文集 201-202 頁)
6.	「子どもが学びとる授業」の実践研究(2)—トリックアートを用いた授業の課題と可能性—	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校数学科・情報科においてスマホを活用し、トリックアート作成を通じて「子どもが学び取る授業」の実践を行い、有用性を統計的に検証し報告した。(第 31 回年会論文集 203-204 頁)
7.	高校におけるモバイル端末を活用したプロジェクト型学習デザインの提案	共著	平成 27 年 9 月	教育システム情報学会	高等学校対象としたモバイル端末を主体的に活用するプロジェクト型学習のデザインを検討提案した。(第 40 回全国大会論文集 301-302 頁)
8.	タブレット端末を活用した学びのストーリー型ポートフォリオに関する研究	共著	平成 28 年 2 月	教育システム情報学会	タブレット端末を活用し学びの省察が可能なストーリー型ポートフォリオを提案し、実践報告とその手だてについて述べた。(研究論文集 105-106 頁)
9.	ICT 活用の「豊かな学び」を目的とした協調的課題解決学習の実践と支援	共著	平成 28 年 3 月	教育システム情報学会	高等学校対象としたタブレット的に活用して、協調的課題解決を進める学習プログラムを開発し実践を行い報告した。(研究報告論文集 113-116 頁)
10.	タブレット端末を活用して「話す」「見る・聴く」を中心とした省察活動の実践について	共著	平成 28 年 6 月	日本情報科教育学会	タブレット的に活用し質の高い省察活動を行うことを通じて学習内容の理解度や参画する意欲について報告した。 (第 9 回全国大会要項集 135-136 頁)
11.	協調的課題解決による学習者の学習意欲向上への成果と課題	共著	平成 28 年 6 月	日本情報科教育学会	高等学校対象としたタブレットしたプロジェクト型学習の過程における協調的課題解決による学習者の学習意欲について述べた。(第 9 回全国大会要項集

					27-28 頁)
12.	ソーラーカーを活用したアクティブラーニングの研究(3)	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	学生が主体となった教育・社会貢献活動としてソーラーカーを活用したアクティブラーニングの取り組み成果と課題について述べた。(第 32 回年会論文集 286-287 頁)
13.	教育実習中における教育実習支援モデルに関する検討—SNS を利用したコミュニケーション活動を通じて—	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	教育実習中における指導の在り方を検討し、実習生の悩みや疑問の解消のための教育実習支援モデルを開発と評価を行った。(第 32 回年会論文集 288-289 頁)
14.	マルチアクセス環境における LMS を活用した豊かな学びに関する実践と評価	共著	平成 29 年 1 月	芦屋大学	芦屋大学においてスマホを活用し開発した LMS により授業外での協調学習と教員に加え、学習支援者の協力による授業外での包括的学修支援を行った。教材として動画加工や情報処理、WEB プログラミングに関するものを開発し実践を行った。また、LMS 内での活動やアンケートの統計処理から学習意欲の喚起や概念的理解の促進、基礎的・汎用的な能力の向上が認められた。(芦屋大学論叢 (66) 41-50 頁)
15.	アクティブラーニングを取り入れたプログラミング教育の実践と評価(1)—LMS の活用による対話的・主体的で深い学びを通して—	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科において開発した LSM 環境と動画をを用いた動画をを用いたビジュアルプログラミングを用いた実践を行い、成果の統計的分析を行った。(第 33 回年会論文集 240-241 頁)
16.	幼児教育課程における情報モラル教育と今後の展望—情報モラルセミナーの実施とアンケート評価をもとに—	共著	平成 30 年 3 月	芦屋学園短期大学	幼児教育課程の学生を対象に情報モラルに関する認識調査と指導を行い、今後の情報モラル指導の在り方をまとめた。(芦屋学園短期大学研究紀要 (44) 105-125 頁)

17. 教職課程履修学生を対象としたプログラミング学習教材の活用と考察	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	教職課程履修学生を対象にプログラミング的思考向上のためのプログラミング教材の活用実践と評価から今後のプログラミング学習のための教材の在り方を提言した。(第 15 回全国大会論文集 144-145 頁)
18. 自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の実践と評価—LMSの活用による対話的・主体的で深い学びを目指して—	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考の向上を目的に、自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の授業実践とアンケートから分析し、得られた結果を報告した。(第 15 回全国大会論文集 146-147 頁)
19. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(1)	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考と学習状況に関する調査分析を行い、今後のプログラミング教育導入のための提言を行った。(第 34 回年会論文集 254-255 頁)
20. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(2)	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	プログラミング的思考の調査結果を踏まえ、プログラミング的思考の向上を目的に自己調整学習を取り入れた学習モデルについての考察と今後の展望を述べた。(第 34 回年会論文集 256-257 頁)
21. TAの活用による包括的学習支援を取り入れた授業改善の試み	共著	平成 30 年 10 月	芦屋大学	芦屋大学における TA の活用とその包括的学習支援による授業改善が及ぼした影響と成果について調査分析結果をまとめた。(芦屋大学論叢第 70 号掲載予定)
22. 教育実習中における教育実習支援モデルに関する実証研究—SNSを利用した支援活動を通じて—	共著	平成 30 年 10 月	芦屋大学	教育実習生に対する教育実習支援モデルの開発と実施による成果と課題をまとめ、今後の教育実習の在り方について提言した。(芦屋大学論叢第 70 号掲載予定)
23. プログラミング的思考における各思考スキルの体系化の試み—小学校学習指導要領改訂において—	共著	平成 31 年 2 月	情報コミュニケーション学会	各教科学習指導要領をテキスト分析し、プログラミング思考の在り方を体系化した。(第 16 回全国大会論文集 114-115 頁)
24. プログラミング教育における自己調整学習モデルの開発と取り組み	共著	平成 31 年 2 月	情報コミュニケーション学会	プログラミング的思考向上を目的に自己調整学習モデルを開発し実践と評価を行った。(第 16 回全国大会論文集 116-117 頁)

	25. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(3)ー自己調整学習モデルを取り入れた実践ー	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	プログラミング的思考の向上を目的とした学ぶ力を養う自己調整学習モデルの授業実践について報告した。(第 35 回年会論文集 190-191 頁)
	26. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(4)ー自己調整学習モデルを取り入れた実践と成果ー	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	自ら学ぶ力を養う自己調整学習モデルを開発し、学習者のプログラミング的思考の向上を目的に授業実践に関する成果をまとめ評価した。(第 35 回年会論文集 192-193 頁)
	27. 留学生の情報リテラシーに関する調査と授業への取り組み	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	留学生の国籍が多様化に伴い情報処理技術に関するスキルの差や、情報社会での考え方について調査し授業に取り組んだ。(第 35 回年会論文集 230-231 頁)
	28. 教員の ICT 活用指導力の向上をめざした実践的研究(1)	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	教員の ICT 活用指導力の育成のために、ICT 機器や環境の活用と工夫改善、ICT の活用に関する教員の意識の向上、校内研修の充実、学校文化の醸成の 3 点を中心に実践的研究を行った。(第 35 回年会論文集 236-237 頁)
	29. アクティブラーニングに導く教学改善のすすめ	共著	令和 2 年 4 月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論、教育評価、教育技術などから情報教育、IR、国際教育までを幅広く解説した。(全 251 頁)
	30. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習モデルの開発と評価	共著	掲載予定	情報コミュニケーション学会	プログラミング的思考向上を目的とした自己調整学習モデルを開発し 3 か年の授業実践を行った成果と評価をまとめた。(情報コミュニケーション学会)
教育実習事前指導(情報)(単独)	1. 元気になる学習力	共著	平成 23 年 4 月	ぎょうせい	学習者の主体的な学びを中心として学習者を取り巻く教員、職員、学校経営者による教職協働による教学改善の在り方や実践について解説した。(全 202 頁)
	2. 共通教科情報科における主体的学習支援に関する研究ー「望ましい情報社会の構築」を対象としてー	単著	平成 25 年 3 月	滋賀大学	高等学校情報科における協調学習と主体的学習支援による言語活動の活発化やチームでの学習の活性化、理解や思考の深化のための授業モデルを開発した。

3.	大学生のコミュニケーション能力の改善が主体性に及ぼす効果の実証研究	共著	平成 26 年 4 月	太洋堂	コミュニケーション能力を向上させる学習モジュールの開発を行い、それを用いた協調学習や包括的学習支援による大学生の主体性に及ぼす効果を検証した。科研(基盤研究(c) 23531030)
4.	ICT 社会におけるコミュニケーション実践学	共著	平成 26 年 9 月	太洋堂	ICT 社会に特化したコミュニケーション技法の概説及び実践データとして立命館大学教養ゼミナールの内容を紹介した。(全 116 頁)
5.	情報通信社会におけるコミュニケーション活動	共著	平成 27 年 11 月	太洋堂	アクティブラーニングによる学習成果と授業用 SNS、映像教材を利用した授業実践をまとめ、学習効果を解説した。(全 144 頁)
6.	主体的に学び意欲を育てる 教学改善のすすめ—相互理解のための理論と実践—	共著	平成 28 年 4 月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論、教育評価、教育技術などから情報教育、IR、国際教育まで幅広く解説した。(全 235 頁)
7.	21 世紀型スキルの育成を目的とした協調学習に関する実証研究—大学生の情報処理科目を通して—	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会	21 世紀型スキル(ATC21S)の育成を目的とした協調学習を学修状況及び情意面から分析し報告した。(第 30 回年会論文集 80-83 頁)
8.	思考力・表現力を高める指導法に関する—考察(1)—生徒のノート指導の観点から—	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	中学生におけるノート指導に関して指導方法及び思考を分類化し、児童生徒の思考・表現力を高める指導実践を行った。(第 31 回年会論文集 208-209 頁)
9.	「子どもが学び取る授業」の実践研究(1)—トリックアートを用いた授業を通して—	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校数学科・情報科においてトリックアートを用いた「子どもが学び取る授業」の実践を行い、授業方法と評価について述べた。(第 31 回年会論文集 201-202 頁)
10.	「子どもが学び取る授業」の実践研究(2)—トリックアートを用いた授業の課題と可能性—	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校数学科・情報科においてスマホを活用し、トリックアート作成を通じて「子どもが学び取る授業」の実践を行い、有用性を統計的に検証し報告した。(第 31 回年会論文集 203-204 頁)
11.	高校におけるモバイル端末を活用したプロジェクト型学習デザインの提案	共著	平成 27 年 9 月	教育システム情報学会	高等学校対象としたモバイル端末を主体的に活用するプロジェクト型学習のデザインを検討提案した。(第 40 回全国大会論文集 301-302 頁)

12. タブレット端末を活用した学びのストーリー型ポートフォリオに関する研究	共著	平成 28 年 2 月	教育システム情報学会	タブレット端末を活用し学びの省察が可能なストーリー型ポートフォリオを提案し、実践報告とその手だてについて述べた。(研究論文集 105-106 頁)
13. ICT 活用の「豊かな学び」を目的とした協調的課題解決学習の実践と支援	共著	平成 28 年 3 月	教育システム情報学会	高等学校対象としたタブレット的に活用して、協調的課題解決を進める学習プログラムを開発し実践を行い報告した。(研究報告論文集 113-116 頁)
14. タブレット端末を活用して「話す」「見る・聴く」を中心とした省察活動の実践について	共著	平成 28 年 6 月	日本情報科教育学会	タブレット的に活用し質の高い省察活動を行うことを通じて学習内容の理解度や参画する意欲について報告した。 (第 9 回全国大会要項集 135-136 頁)
15. 協調的課題解決による学習者の学習意欲向上への成果と課題	共著	平成 28 年 6 月	日本情報科教育学会	高等学校対象としたタブレットしたプロジェクト型学習の過程における協調的課題解決による学習者の学習意欲について述べた。(第 9 回全国大会要項集 27-28 頁)
16. 現職教員を対象としたコミュニケーション能力のスキルアップを目指したアクティブラーニング研修の実践	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	現職教員を対象に教育的なコミュニケーション能力の向上を目指した演習を実践し、主体的な学びを実現するための教員研修モデルを検討し提案した。(第 32 回年会論文集 176-179 頁)
17. 教育実習中における教育実習支援モデルに関する検討—SNS を利用したコミュニケーション活動を通じて—	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	教育実習中における指導の在り方を検討し、実習生の悩みや疑問の解消のための教育実習支援モデルを開発と評価を行った。(第 32 回年会論文集 288-289 頁)
18. マルチアクセス環境における LMS を活用した豊かな学びに関する実践と評価	共著	平成 29 年 1 月	芦屋大学	芦屋大学においてスマホを活用し開発した LMS により授業外での協調学習と教員に加え、学習支援者の協力による授業外での包括的学修支援を行った。教材として動画加工や情報処理、WEB プログラミングに関するものを開発し実践を行った。また、LMS 内での活動やアンケートの統計処理から学習意欲の喚起や概念的理解の促進、基礎的・汎用的な能力の向上が認められた。(芦屋大学論叢 (66) 41-50 頁)

19.	教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(1)―ARCSモデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だて―	共著	平成 29 年 3 月	情報コミュニケーション学会	ARCS モデルを用いた学習意欲を引き出す授業の取り組みと成果についてまとめ、今後のアクティブラーニングの在り方を検討した。(第 14 回全国大会論文集)
20.	教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(2)―技術・情報教員養成コースの学生を対象とした認識調査―	共著	平成 29 年 3 月	情報コミュニケーション学会	大学教職科目受講生におけるアクティブラーニングに関する認識調査を行い、全国の学校現場教員との認識の違いについて統計的分析を行った。(第 14 回全国大会論文集)
21.	アクティブラーニングを取り入れたプログラミング教育の実践と評価(1)―LMS の活用による対話的・主体的で深い学びを通して―	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科において開発した LSM 環境と動画像を用いた動画像を用いたビジュアルプログラミングを用いた実践を行い、成果の統計的分析を行った。(第 33 回年会論文集 240-241 頁)
22.	初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(3)―運用マネジメントおよび学習活動の質的評価と量的評価に関する考察―	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	芦屋大学のリメディアル教育について整理し、初年次教育を円滑に推進するためのクラス編成やマネジメント、学生レポート評価に関する質的評価・量的評価における考察を述べた。(第 33 回年会論文集 274-275 頁)
23.	教育実習中における教育実習支援モデルに関する考察―芦屋大学 ASAS の活動を通じて―	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	教育実習生のための教育実習支援モデルを開発し、教育実習中の活用による成果・影響を分析し得られた結果をまとめた。(第 33 回年会論文集 242-243 頁)
24.	幼児教育課程履修者を対象とした情報モラル教育に関する実践と評価(1)―短期大学生を対象としたアンケート調査と取り組	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	芦屋学園短期大学生を対象に情報モラル向上のための教材を開発し実践を行い、情報モラルに関する認識・行動調査分析を行った。(第 33 回年会論文集 300-301 頁)

	みー				
25.	幼児教育課程における情報モラル教育と今後の展望—情報モラルセミナーの実施とアンケート評価をもとに—	共著	平成 30 年 3 月	芦屋学園短期大学	幼児教育課程の学生を対象に情報モラルに関する認識調査と指導を行い、今後の情報モラル指導の在り方をまとめた。(芦屋学園短期大学研究紀要 (44) 105-125 頁)
26.	教職課程履修学生を対象としたプログラミング学習教材の活用と考察	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	教職課程履修学生を対象にプログラミング的思考向上のためのプログラミング教材の活用実践と評価から今後のプログラミング学習のための教材の在り方を提言した。(第 15 回全国大会論文集 144-145 頁)
27.	自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の実践と評価—LMS の活用による対話的・主体的で深い学びを目指して—	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考の向上を目的に、自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の授業実践とアンケートから分析し、得られた結果を報告した。(第 15 回全国大会論文集 146-147 頁)
28.	教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開 (3) - 中学校技術科教育における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業モデルの検討 -	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	中学校技術科における主体的・対話的で深い学びをじつげんするためにインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングによる授業モデルを検討した。(第 15 回全国大会論文集 148-149 頁)
29.	プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究 (1)	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考と学習状況に関する調査分析を行い、今後のプログラミング教育導入のための提言を行った。(第 34 回年会論文集 254-255 頁)

30.	プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(2)	共著	平成30年8月	日本教育情報学会	プログラミング的思考の調査結果を踏まえ、プログラミング的思考の向上を目的に自己調整学習を取り入れた学習モデルについての考察と今後の展望を述べた。(第34回年会論文集256-257頁)
31.	対話的で深い学びを取り入れた自己調整学習の研究—多人数授業におけるレポート分析調査と書き行動方略への影響—	共著	平成30年8月	日本教育情報学会	教職科目における自己調整学習によるレポート記述分析による書き行動方略についての影響と考察を述べた。(第34回年会論文集304-305頁)
32.	幼児教育課程における情報モラル教育に関する実践と評価(2)—役割取得能力の向上への試み—	共著	平成30年8月	日本教育情報学会	幼児教育課程において保育者として道徳性や人間力の基盤となす役割取得能力の向上を目指した情報モラル教育に関する実践と評価を行った。(第34回年会論文集336-337頁)
33.	TAの活用による包括的学習支援を取り入れた授業改善の試み	共著	平成30年10月	芦屋大学	芦屋大学におけるTAの活用とその包括的学習支援による授業改善が及ぼした影響と成果について調査分析結果をまとめた。(芦屋大学論叢第70号掲載予定)
34.	教育実習中における教育実習支援モデルに関する実証研究—SNSを利用した支援活動を通じて—	共著	平成30年10月	芦屋大学	教育実習生に対する教育実習支援モデルの開発と実施による成果と課題をまとめ、今後の教育実習の在り方について提言した。(芦屋大学論叢第70号掲載予定)
35.	プログラミング的思考における各思考スキルの体系化の試み—小学校学習指導要領改訂において—	共著	平成31年2月	情報コミュニケーション学会	各教科学習指導要領をテキスト分析し、プログラミング思考の在り方を体系化した。(第16回全国大会論文集114-115頁)
36.	プログラミング教育における自己調整学習モデルの開発と取り組み	共著	平成31年2月	情報コミュニケーション学会	プログラミング的思考向上を目的に自己調整学習モデルを開発し実践と評価を行った。(第16回全国大会論文集116-117頁)

	37. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(3)ー自己調整学習モデルを取り入れた実践ー	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	プログラミング的思考の向上を目的とした学ぶ力を養う自己調整学習モデルの授業実践について報告した。(第 35 回年会論文集 190-191 頁)
	38. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(4)ー自己調整学習モデルを取り入れた実践と成果ー	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	自ら学ぶ力を養う自己調整学習モデルを開発し, 学習者のプログラミング的思考の向上を目的に授業実践に関する成果をまとめ評価した。(第 35 回年会論文集 192-193 頁)
	39. 留学生の情報リテラシーに関する調査と授業への取り組み	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	留学生の国籍が多様化に伴い情報処理技術に関するスキルの差や, 情報社会での考え方について調査し授業に取り組んだ。(第 35 回年会論文集 230-231 頁)
	40. 教員の ICT 活用指導力の向上をめざした実践的研究(1)	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	教員の ICT 活用指導力の育成のために, ICT 機器や環境の活用と工夫改善, ICT の活用に関する教員の意識の向上, 校内研修の充実, 学校文化の醸成の 3 点を中心に実践的研究を行った。(第 35 回年会論文集 236-237 頁)
	41. アクティブラーニングに導く教学改善のすすめ	共著	令和 2 年 4 月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論, 教育評価, 教育技術などから情報教育, IR, 国際教育までを幅広く解説した。(全 251 頁)
	42. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習モデルの開発と評価	共著	掲載予定	情報コミュニケーション学会	プログラミング的思考向上を目的とした自己調整学習モデルを開発し 3 年間の授業実践を行った成果と評価をまとめた。(情報コミュニケーション学会)
教育実習事後指導(情報)(単独)	1. 元気になる学び力	共著	平成 23 年 4 月	ぎょうせい	学習者の主体的な学びを中心として学習者を取り巻く教員, 職員, 学校経営者による教職協働による教学改善の在り方や実践について解説した。(全 202 頁)
	2. 共通教科情報科における主体的学習支援に関する研究ー「望ましい情	単著	平成 25 年 3 月	滋賀大学	高等学校情報科における協調学習と主体的学習支援による言語活動の活性化やチームでの学習の活性化, 理解や思考の深化のための授業モデルを開

	報社会の構築」を対象として—				発した。
3.	大学生のコミュニケーション能力の改善が主体性に及ぼす効果の実証研究	共著	平成 26 年 4 月	太洋堂	コミュニケーション能力を向上させる学習モジュールの開発を行い、それを用いた協調学習や包括的学習支援による大学生の主体性に及ぼす効果を検証した。 科研(基盤研究(c) 23531030)
4.	ICT 社会におけるコミュニケーション実践学	共著	平成 26 年 9 月	太洋堂	ICT 社会に特化したコミュニケーション技法の概説及び実践データとして立命館大学教養ゼミナールの内容を紹介した。(全 116 頁)
5.	情報通信社会におけるコミュニケーション活動	共著	平成 27 年 11 月	太洋堂	アクティブラーニングによる学習成果と授業用 SNS、映像教材を利用した授業実践をまとめ、学習効果を解説した。(全 144 頁)
6.	主体的に学び意欲を育てる教学改善のすすめ—相互理解のための理論と実践—	共著	平成 28 年 4 月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論、教育評価、教育技術などから情報教育、IR、国際教育までを幅広く解説した。(全 235 頁)
7.	21 世紀型スキルの育成を目的とした協調学習に関する実証研究—大学生の情報処理科目を通して—	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会	21 世紀型スキル(ATC21S)の育成を目的とした協調学習を学修状況及び情意面から分析し報告した。(第 30 回年会論文集 80-83 頁)
8.	思考力・表現力を高める指導法に関する—考察(1)—生徒のノート指導の観点から—	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	中学生におけるノート指導に関して指導方法及び思考を分類化し、児童生徒の思考・表現力を高める指導実践を行った。(第 31 回年会論文集 208-209 頁)
9.	「子どもが学び取る授業」の実践研究(1)—トリックアートを用いた授業を通して—	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校数学科・情報科においてトリックアートを用いた「子どもが学び取る授業」の実践を行い、授業方法と評価について述べた。 (第 31 回年会論文集 201-202 頁)

10. 「子どもが学びとる授業」の実践研究(2)ートリックアートを用いた授業の課題と可能性ー	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校数学科・情報科においてスマホを活用し、トリックアート作成を通じて「子どもが学び取る授業」の実践を行い、有用性を統計的に検証し報告した。(第 31 回年年会論文集 203-204 頁)
11. 高校におけるモバイル端末を活用したプロジェクト型学習デザインへの提案	共著	平成 27 年 9 月	教育システム情報学会	高等学校対象としたモバイル端末を主体的に活用するプロジェクト型学習のデザインを検討提案した。(第 40 回全国大会論文集 301-302 頁)
12. タブレット端末を活用した学びのストーリー型ポートフォリオに関する研究	共著	平成 28 年 2 月	教育システム情報学会	タブレット端末を活用し学びの省察が可能なストーリー型ポートフォリオを提案し、実践報告とその手だてについて述べた。(研究論文集 105-106 頁)
13. ICT 活用の「豊かな学び」を目的とした協調的課題解決学習の実践と支援	共著	平成 28 年 3 月	教育システム情報学会	高等学校対象としたタブレット的に活用して、協調的課題解決を進める学習プログラムを開発し実践を行い報告した。(研究報告論文集 113-116 頁)
14. タブレット端末を活用して「話す」「見る・聴く」を中心とした省察活動の実践について	共著	平成 28 年 6 月	日本情報科教育学会	タブレット的に活用し質の高い省察活動を行うことを通じて学習内容の理解度や参画する意欲について報告した。(第 9 回全国大会要項集 135-136 頁)
15. 協調的課題解決による学習者の学習意欲向上への成果と課題	共著	平成 28 年 6 月	日本情報科教育学会	高等学校対象としたタブレットしたプロジェクト型学習の過程における協調的課題解決による学習者の学習意欲について述べた。(第 9 回全国大会要項集 27-28 頁)
16. 現職教員を対象としたコミュニケーション能力のスキルアップを目指したアクティブラーニング研修の実践	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	現職教員を対象に教育的なコミュニケーション能力の向上を目指した演習を実践し、主体的な学びを実現するための教員研修モデルを検討し提案した。(第 32 回年会論文集 176-179 頁)
17. 教育実習中における教育実習支援モデルに関する検討ーSNS を利用したコミュニケーション活動を通じてー	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	教育実習中における指導の在り方を検討し、実習生の悩みや疑問の解消のための教育実習支援モデルを開発と評価を行った。(第 32 回年会論文集 288-289 頁)

18. マルチアクセス環境におけるLMSを活用した豊かな学びに関する実践と評価	共著	平成 29 年 1 月	芦屋大学	芦屋大学においてスマホを活用し開発した LMS により授業外での協調学習と教員に加え、学習支援者の協力による授業外での包括的学修支援を行った。教材として動画加工や情報処理、WEB プログラミングに関するものを開発し実践を行った。また、LMS 内での活動やアンケートの統計処理にから学習意欲の喚起や概念的理解の促進、基礎的・汎用的な能力の向上が認められた。(芦屋大学論叢 (66) 41-50 頁)
19. 教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(1) —ARCS モデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だて—	共著	平成 29 年 3 月	情報コミュニケーション学会	ARCS モデルを用いた学習意欲を引き出す授業の取り組みと成果についてまとめ、今後のアクティブラーニングの在り方を検討した。(第 14 回全国大会論文集)
20. 教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(2) —技術・情報教員養成コースの学生を対象とした認識調査—	共著	平成 29 年 3 月	情報コミュニケーション学会	大学教職科目受講生におけるアクティブラーニングに関する認識調査を行い、全国の学校現場教員との認識の違いについて統計的分析を行った。(第 14 回全国大会論文集)
21. アクティブラーニングを取り入れたプログラミング教育の実践と評価(1) — LMS の活用による対話的・主体的で深い学びを通して—	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科において開発した LSM 環境と動画像を用いた動画像を用いたビジュアルプログラミングを用いた実践を行い、成果の統計的分析を行った。(第 33 回年会論文集 240-241 頁)
22. 初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(3) —運用マネジメントおよび学習活動の質的評価と量的評価に関する考察—	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	芦屋大学のリメディアル教育について整理し、初年次教育を円滑に推進するためのクラス編成やマネジメント、学生レポート評価に関する質的評価・量的評価における考察を述べた。(第 33 回年会論文集 274-275 頁)

23.	教育実習中における教育実習支援モデルに関する考察－芦屋大学ASASの活動を通じて－	共著	平成29年8月	日本教育情報学会	教育実習生のための教育実習支援モデルを開発し、教育実習中の活用による成果・影響を分析し得られた結果をまとめた。(第33回年会論文集 242-243頁)
24.	幼児教育課程履修者を対象とした情報モラル教育に関する実践と評価(1)－短期大学生を対象としたアンケート調査と取り組み－	共著	平成29年8月	日本教育情報学会	芦屋学園短期大学生を対象に情報モラル向上のための教材を開発し実践を行い、情報モラルに関する認識・行動調査分析を行った。(第33回年会論文集 300-301頁)
25.	幼児教育課程における情報モラル教育と今後の展望－情報モラルセミナーの実施とアンケート評価をもとに－	共著	平成30年3月	芦屋学園短期大学	幼児教育課程の学生を対象に情報モラルに関する認識調査と指導を行い、今後の情報モラル指導の在り方をまとめた。(芦屋学園短期大学研究紀要(44) 105-125頁)
26.	教職課程履修学生を対象としたプログラミング学習教材の活用と考察	共著	平成30年3月	情報コミュニケーション学会	教職課程履修学生を対象にプログラミング的思考向上のためのプログラミング教材の活用実践と評価から今後のプログラミング学習のための教材の在り方を提言した。(第15回全国大会論文集 144-145頁)
27.	自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の実践と評価－LMSの活用による対話的・主体的で深い学びを目指して－	共著	平成30年3月	情報コミュニケーション学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考の向上を目的に、自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の授業実践とアンケートから分析し、得られた結果を報告した。(第15回全国大会論文集 146-147頁)
28.	教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(3)－中学校技術科教育における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業モデルの検討－	共著	平成30年3月	情報コミュニケーション学会	中学校技術科における主体的・対話的で深い学びをじつげんするためにインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングによる授業モデルを検討した。(第15回全国大会論文集 148-149頁)

29. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(1)	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考と学習状況に関する調査分析を行い、今後のプログラミング教育導入のための提言を行った。(第 34 回年会論文集 254-255 頁)
30. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(2)	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	プログラミング的思考の調査結果を踏まえ、プログラミング的思考の向上を目的に自己調整学習を取り入れた学習モデルについての考察と今後の展望を述べた。(第 34 回年会論文集 256-257 頁)
31. 対話的で深い学びを取入れた自己調整学習の研究ー多人数授業におけるレポート分析調査と書き行動方略への影響ー	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	教職科目における自己調整学習によるレポート記述分析による書き行動方略についての影響と考察を述べた。(第 34 回年会論文集 304-305 頁)
32. 幼児教育課程における情報モラル教育に関する実践と評価(2)ー役割取得能力の向上への試みー	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	幼児教育課程において保育者として道徳性や人間力の基盤となす役割取得能力の向上を目指した情報モラル教育に関する実践と評価を行った。(第 34 回年会論文集 336-337 頁)
33. 教育実習中における教育実習支援モデルに関する実証研究ーSNS を利用した支援活動を通じてー	共著	平成 30 年 10 月	芦屋大学	教育実習生に対する教育実習支援モデルの開発と実施による成果と課題をまとめ、今後の教育実習の在り方について提言した。(芦屋大学論叢第 70 号)
34. プログラミング的思考における各思考スキルの体系化の試みー小学校学習指導要領改訂においてー	共著	平成 31 年 2 月	情報コミュニケーション学会	各教科学習指導要領をテキスト分析し、プログラミング思考の在り方を体系化した。(第 16 回全国大会論文集 114-115 頁)
35. プログラミング教育における自己調整学習モデルの開発と取り組み	共著	平成 31 年 2 月	情報コミュニケーション学会	プログラミング的思考向上を目的に自己調整学習モデルを開発し実践と評価を行った。(第 16 回全国大会論文集 116-117 頁)

36. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(3)ー自己調整学習モデルを取り入れた実践ー	共著	令和元年8月	日本教育情報学会	プログラミング的思考の向上を目的とした学ぶ力を養う自己調整学習モデルの授業実践について報告した。(第35回年会論文集190-191頁)
37. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(4)ー自己調整学習モデルを取り入れた実践と成果ー	共著	令和元年8月	日本教育情報学会	自ら学ぶ力を養う自己調整学習モデルを開発し、学習者のプログラミング的思考の向上を目的に授業実践に関する成果をまとめ評価した。(第35回年会論文集192-193頁)
38. 留学生の情報リテラシーに関する調査と授業への取り組み	共著	令和元年8月	日本教育情報学会	留学生の国籍が多様化に伴い情報処理技術に関するスキルの差や、情報社会での考え方について調査し授業に取り組んだ。(第35回年会論文集230-231頁)
39. 教員のICT活用指導力の向上をめざした実践的研究(1)	共著	令和元年8月	日本教育情報学会	教員のICT活用指導力の育成のために、ICT機器や環境の活用と工夫改善、ICTの活用に関する教員の意識の向上、校内研修の充実、学校文化の醸成の3点を中心に実践的研究を行った。(第35回年会論文集236-237頁)
40. アクティブラーニングに導く教学改善のすすめ	共著	令和2年4月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論、教育評価、教育技術などから情報教育、IR、国際教育までを幅広く解説した。(全251頁)
41. プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習モデルの開発と評価	共著	掲載予定	情報コミュニケーション学会	プログラミング的思考向上を目的とした自己調整学習モデルを開発し3か年の授業実践を行った成果と評価をまとめた。(情報コミュニケーション学会)

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
<b>【著書】</b> 大学生のコミュニケーション能力の改善が主体性に及ぼす効果の実証研究	共著	平成 26 年 4 月	太洋堂	コミュニケーション能力を向上させる学習モジュールの開発を行い、それを用いた協調学習や包括的学習支援による大学生の主体性に及ぼす効果を検証した。科研(基盤研究(c) 23531030)
ICT 社会におけるコミュニケーション実践学	共著	平成 26 年 9 月	太洋堂	ICT 社会に特化したコミュニケーション技法の概説及び実践データとして立命館大学教養ゼミナールの内容を紹介した。(全116頁)
情報通信社会におけるコミュニケーション活動	共著	平成 27 年 11 月	太洋堂	アクティブラーニングによる学習成果と授業用 SNS、映像教材を利用した授業実践をまとめ、学習効果を解説した。(全 144 頁)
主体的に学び意欲を育てる 教学改善のすすめ—相互理解のための理論と実践—	共著	平成 28 年 4 月	ぎょうせい	教育的なコミュニケーションや教授学習理論、教育評価、教育技術などから情報教育、IR、国際教育まで幅広く解説した。(全 235 頁)
<b>【学術論文】</b> 大学生のコミュニケーション能力の改善が主体性に及ぼす効果の実証研究	共著	平成 26 年 3 月	立命館大学	大学生のコミュニケーション能力の改善を目的にした学習モジュールの開発と実証研究を行った。それにより学習の主体性や包括的学修支援の有効性が示唆された。
中学校数学科における表現力向上を目指す実践(1)— ふきだし法の活用を通して—	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会	中学校の数学授業において表現力向上のために「ふきだし法」を実施し教育効果を検証した。(第 30 回年会論文集 134-135 頁)
中学校数学科における表現力向上を目指す実践(2)— ふきだし法の活用による効果の検証—	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会	中学校の数学授業で実施した表現力向上のための「ふきだし法」の課題を明らかにし今後の方策を提言した。(第 30 回年会論文集 136-137 頁)
空間把握能力及び学習者の主体性向上を目的とした授業実践 ～教具「立体 4 目並べ」を使って～	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会	「立体 4 目並べ」を用いて学習者の空間把握能力の向上と学習に対する主体性の向上を目的とした授業実践を行い有用性を検証した。(第 30 回年会論文集 132-133 頁)
21 世紀型スキルの育成を目的とした協調学習に関する実証研究—大学生の情報処理科目を通して—	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会	21 世紀型スキル(ATC21S)の育成を目的とした協調学習を学修状況及び情意面から分析し報告した。(第 30 回年会論文集 80-83 頁)
思考力・表現力を高める指導法に関する—考察(1)— 生徒のノート指導の観点から—	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	中学生におけるノート指導に関して指導方法及び思考を分類化し、児童生徒の思考・表現力を高める指導実践を行った。(第 31 回年会論文集 208-209 頁)

「子どもが学びとる授業」の実践研究(1)—トリックアートを用いた授業を通して—	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校数学科・情報科においてトリックアートを用いた「子どもが学び取る授業」の実践を行い、授業方法と評価について述べた。(第 31 回年会論文集 201-202 頁)
「子どもが学びとる授業」の実践研究(2)—トリックアートを用いた授業の課題と可能性—	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校数学科・情報科においてスマホを活用し、トリックアート作成を通じて「子どもが学び取る授業」の実践を行い、有用性を統計的に検証し報告した。(第31回年会論文集 203-204 頁)
高校におけるモバイル端末を活用したプロジェクト型学習デザインの提案	共著	平成 27 年 9 月	教育システム情報学会	高等学校対象としたモバイル端末を主体的に活用するプロジェクト型学習のデザインを検討提案した。(第 40 回全国大会論文集 301-302 頁)
タブレット端末を活用した学びのストーリー型ポートフォリオに関する研究	共著	平成 28 年 2 月	教育システム情報学会	タブレット端末を活用し学びの省察が可能なストーリー型ポートフォリオを提案し、実践報告とその手だてについて述べた。(研究論文集 105-106 頁)
ICT 活用の「豊かな学び」を目的とした協調的課題解決学習の実践と支援	共著	平成 28 年 3 月	教育システム情報学会	高等学校対象としたタブレット的に活用して、協調的課題解決を進める学習プログラムを開発し実践を行い報告した。(研究報告論文集 113-116 頁)
タブレット端末を活用して「話す」「見る・聴く」を中心とした省察活動の実践について	共著	平成 28 年 6 月	日本情報科教育学会	タブレット的に活用し質の高い省察活動を行うことを通じて学習内容の理解度や参画する意欲について報告した。(第9回全国大会要項集 135-136 頁)
協調的課題解決による学習者の学習意欲向上への成果と課題	共著	平成 28 年 6 月	日本情報科教育学会	高等学校対象としたタブレットしたプロジェクト型学習の過程における協調的課題解決による学習者の学習意欲について述べた。(第 9 回全国大会要項集 27-28 頁)
初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(2)—5年間の「大学生生活入門」を通じた省察—	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	芦屋大学の初年次教育におけるワークショップ型授業の構築や教員研修、シラバスの体系化などの取組についての省察と得られた成果について述べた。(第 32 回年会論文集 58-61 頁)
現職教員を対象としたコミュニケーション能力のスキルアップを目指したアクティブラーニング研修の実践	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	現職教員を対象に教育的なコミュニケーション能力の向上を目指した演習を実践し、主体的な学びを実現するための教員研修モデルを検討し提案した。(第 32 回年会論文集 176-179 頁)
数学的コミュニケーション活動による協調的課題解決能力の向上に関する実証研究(1)	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	数学的コミュニケーション活動の在り方を検討し、協調的課題解決能力の向上を目指した学習モデルを開発した。(第 32 回年会論文集 220-221 頁)

数学的コミュニケーション活動による協調的課題解決能力の向上に関する実証研究(2)	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	数学的コミュニケーション活動による協調的課題解決能力の向上を目的とした学習モデルを取り入れた授業実践を行い評価した。(第 32 回年会論文集 222-223 頁)
ソーラーカーを活用したアクティブラーニングの研究(3)	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	学生が主体となった教育・社会貢献活動としてソーラーカーを活用したアクティブラーニングの取り組み成果と課題について述べた。(第 32 回年会論文集 286-287 頁)
教育実習中における教育実習支援モデルに関する検討—SNS を利用したコミュニケーション活動を通じて—	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	教育実習中における指導の在り方を検討し、実習生の悩みや疑問の解消のための教育実習支援モデルを開発と評価を行った。(第 32 回年会論文集 288-289 頁)
大学コンソーシアム京都 単位互換科目「現代人に求められるコミュニケーションスキル」の実践	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会	現代人に求められるコミュニケーションスキルについてまとめ、大学生を対象にコミュニケーションに関する認識と今後の課題について述べた。(第 32 回年会論文集 294-295 頁)
マルチアクセス環境における LMS を活用した豊かな学びに関する実践と評価	共著	平成 29 年 1 月	芦屋大学	芦屋大学においてスマホを活用し開発した LMS により授業外での協調学習と教員に加え、学習支援者の協力による授業外での包括的学修支援を行った。教材として動画像加工や情報処理、WEB プログラミングに関するものを開発し実践を行った。また、LMS 内での活動やアンケートの統計処理から学習意欲の喚起や概念的理解の促進、基礎的・汎用的な能力の向上が認められた。(芦屋大学論叢 (66) 41-50 頁)
教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(1) —ARCS モデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だて—	共著	平成 29 年 3 月	情報コミュニケーション学会	ARCS モデルを用いた学習意欲を引き出す授業の取り組みと成果についてまとめ、今後のアクティブラーニングの在り方を検討した。(第 14 回全国大会論文集)
教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(2) —技術・情報教員養成コースの学生を対象とした認識調査—	共著	平成 29 年 3 月	情報コミュニケーション学会	大学教職科目受講生におけるアクティブラーニングに関する認識調査を行い、全国の学校現場教員との認識の違いについて統計的分析を行った。(第 14 回全国大会論文集)
アクティブラーニングを取り入れたプログラミング教育の実践と評価(1) —LMS の活用による対話的・主体的で深い学びを通して—	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科において開発した LSM 環境と動画像を用いた動画像を用いたビジュアルプログラミングを用いた実践を行い、成果の統計的分析を行った。(第 33 回年会論文集 240-241 頁)

初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(3)ー運用マネジメントおよび学習活動の質的評価と量的評価に関する考察ー	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	芦屋大学のリメディアル教育について整理し、初年次教育を円滑に推進するためのクラス編成やマネジメント、学生レポート評価に関する質的評価・量的評価における考察を述べた。(第33回年会論文集 274-275 頁)
教育実習中における教育実習支援モデルに関する考察ー芦屋大学 ASAS の活動を通じてー	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	教育実習生のための教育実習支援モデルを開発し、教育実習中の活用による成果・影響を分析し得られた結果をまとめた。(第 33 回年会論文集 242-243 頁)
数学的コミュニケーション活動による協調的問題解決能力の向上に関する実証研究(3)	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	他者と教え合うという数学的コミュニケーション活動に着目し、数学的コミュニケーション活動を取り入れた協調的課題解決能力の向上を目指した学習モデルを開発と1年間の実践成果を報告した。(第33回年会論文集 248-249 頁)
2 級自動車整備士養成課程における PBL 授業プログラムの開発と導入効果(1)ー車両製作を通じた深い課題解決能力の獲得ー	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	2級自動車整備士養成課程において、整備士に求められる深い課題解決能力の向上を目的とし、車両製作を主軸としてゼミ活動と授業を連携させたPBL授業プログラムの開発と実践の1年目の経過報告を行った。(第 33 回年会論文集 276-277 頁)
幼児教育課程履修者を対象とした情報モラル教育に関する実践と評価(1)ー短期大学生を対象としたアンケート調査と取り組みー	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	芦屋学園短期大学生を対象に情報モラル向上のための教材を開発し実践を行い、情報モラルに関する認識・行動調査分析を行った。(第 33 回年会論文集 300-301 頁)
幼児教育課程における情報モラル教育と今後の展望ー情報モラルセミナーの実施とアンケート評価をもとにー	共著	平成 30 年 3 月	芦屋学園短期大学	幼児教育課程の学生を対象に情報モラルに関する認識調査と指導を行い、今後の情報モラル指導の在り方をまとめた。(芦屋学園短期大学研究紀要 (44) 105-125 頁)
教職課程履修学生を対象としたプログラミング学習教材の活用と考察	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	教職課程履修学生を対象にプログラミング的思考向上のためのプログラミング教材の活用実践と評価から今後のプログラミング学習のための教材の在り方を提言した。(第 15 回全国大会論文集 144-145 頁)
自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の実践と評価ーLMS の活用による対話的・主体的で深い学びを目指してー	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考の向上を目的に、自己調整学習を取り入れたプログラミング教育の授業実践とアンケートから分析し、得られた結果を報告した。(第 15 回全国大会論文集 146-147 頁)
教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(3)ー中学校技術科教育にお	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会	中学校技術科における主体的・対話的で深い学びをじつげんするためにインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニン

ける「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業モデルの検討-				グによる授業モデルを検討した。(第 15 回全国大会論文集 148-149 頁)
数学的コミュニケーション活動による協調的課題解決能力の向上に関する実証研究(4)-カラオケ店の割引イベントを題材にしたプロジェクト学習を通じて-	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	省察-共有一発展-準備の学習段階モデルをプロジェクト学習として通年実施した成果と課題について報告した。(第 34 回年会論文集 204-205 頁)
栄養教諭の養成課程における持続可能な学びにつながる学習デザインの開発と評価	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	栄養教諭の養成課程において主体的・対話的で深い学びを取り入れたアクティブラーニングの継続実施を行い持続的な学びへとつながる自己調整学習についての学習デザインを提案した。(第 34 回年会論文集 214-215 頁)
プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(1)	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	高等学校情報科においてプログラミング的思考と学習状況に関する調査分析を行い、今後のプログラミング教育導入のための提言を行った。(第 34 回年会論文集 254-255 頁)
プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(2)	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	プログラミング的思考の調査結果を踏まえ、プログラミング的思考の向上を目的に自己調整学習を取り入れた学習モデルについての考察と今後の展望を述べた。(第 34 回年会論文集 256-257 頁)
2 級自動車整備士養成課程における PBL 授業プログラムの開発と導入効果(2)	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	2級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力獲得を目的としたPBL授業プログラムの開発及び実践研究に準じた各年度の比較及び実践報告を行った。(第 34 回年会論文集 294-295 頁)
対話的で深い学びを取り入れた自己調整学習の研究-多人数授業におけるレポート分析調査と書き行動方略への影響-	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	教職科目における自己調整学習によるレポート記述分析による書き行動方略についての影響と考察を述べた。(第 34 回年会論文集 304-305 頁)
幼児教育課程における情報モラル教育に関する実践と評価(2)-役割取得能力の向上への試み-	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会	幼児教育課程において保育者として道徳性や人間力の基盤となす役割取得能力の向上を目指した情報モラル教育に関する実践と評価を行った。(第 34 回年会論文集 336-337 頁)
教育実習中における教育実習支援モデルに関する実証研究-SNS を利用した支援活動を通じて-	共著	平成 30 年 10 月	芦屋大学	教育実習生に対する教育実習支援モデルの開発と実施による成果と課題をまとめ、今後の教育実習の在り方について提言した。(芦屋大学論叢第 70 号)
プログラミング的思考における各思考スキルの体系化の試み-小学校学習指導要領改訂において-	共著	平成 31 年 2 月	情報コミュニケーション学会	各教科学習指導要領をテキスト分析し、プログラミング思考の在り方を体系化した。(第 16 回全国大会論文集 114-115 頁)

プログラミング教育における自己調整学習モデルの開発と取り組み	共著	平成 31 年 2 月	情報コミュニケーション学会	プログラミング的思考向上を目的に自己調整学習モデルを開発し実践と評価を行った。(第 16 回全国大会論文集 116-117 頁)
幼児教育課程におけるコミュニケーション能力の育成と検証 —保育活動別のコミュニケーションに着目して—	共著	平成 31 年 3 月	芦屋学園短期大学	幼児教育課程の学生における実習中のコミュニケーション能力の育成について実習中のコミュニケーション分析を行い評価した。(芦屋学園短期大学研究紀要)
大学の特徴を生かした教員への就職支援に関する一考察 —芦屋大学での教員採用試験対策をもとに—	共著	令和元年 7 月	芦屋大学	芦屋大学の教員採用試験対策をもとに教員志望の学生に対する就職支援に関して考察した。(芦屋大学論叢)
プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(3)ー自己調整学習モデルを取り入れた実践ー	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	プログラミング的思考の向上を目的とした学ぶ力を養う自己調整学習モデルの授業実践について報告した。(第 35 回年会論文集 190-191 頁)
プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習に関する研究(4)ー自己調整学習モデルを取り入れた実践と成果ー	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	自ら学ぶ力を養う自己調整学習モデルを開発し、学習者のプログラミング的思考の向上を目的に授業実践に関する成果をまとめ評価した。(第 35 回年会論文集 192-193 頁)
留学生の情報リテラシーに関する調査と授業への取り組み	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	留学生の国籍が多様化に伴い情報処理技術に関するスキルの差や、情報社会での考え方について調査し授業に取り組んだ。(第 35 回年会論文集 230-231 頁)
教員の ICT 活用指導力の向上をめざした実践的研究(1)	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	教員の ICT 活用指導力の育成のために、ICT 機器や環境の活用と工夫改善、ICT の活用に関する教員の意識の向上、校内研修の充実、学校文化の醸成の 3 点を中心に実践的研究を行った。(第 35 回年会論文集 236-237 頁)
プログラミング的思考の向上を目的とした自己調整学習モデルの開発と評価	共著	掲載予定	情報コミュニケーション学会	プログラミング的思考向上を目的とした自己調整学習モデルを開発し 3 年間の授業実践を行った成果と評価をまとめた。(情報コミュニケーション学会)
2 級自動車整備士養成課程における PBL 授業プログラムの開発と導入効果(3)ー取り組み報告と包括的教材の提案ー	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会	2 級自動車整備士養成課程における PBL 授業プログラムの開発し評価した。(第 35 回年会論文集 214-215 頁)
女子大学生における 2 分割した BMI 標準体重群の身体的特徴と簡便法による隠れ肥満の見分けの試み	共著	令和2年 6 月	健康科学学会	女子大学生における 2 分割した BMI 標準体重群の身体的特徴を分析し、簡便法による隠れ肥満の見分けを行った。(健康科学学会誌 36(2))

① 教育研究業績書
教育研究業績書
氏名 井村(岡山) 薫子

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【学術論文】 1「“妖精”が“賢女”に書き換えられた理由—グリム兄弟はなぜフランス語からの借用語に満足せず、ドイツ語派生の言葉にこだわったのか—」	単	平成 25 年 3 月	学位論文	これまで、私自身バレエやディズニー映画を通じて「眠れる森の美女」の存在を知っていたのだが、これには類話があることを知った。その中でも影の主人公といえる“妖精”に焦点を当て、グリム兄弟の行った書き換えを元に、なぜグリム兄弟はドイツ語起源の単語にこだわったのかということを明らかにする。
2「日本におけるバレエ教育に関する研究」	単	平成 29 年 2 月 平成 29 年 5 月	・学位論文 ・日本アーツビジネス学会口頭発表	今日までの日本バレエ界の発展は先人たちの努力によって作り上げられてきたが、日本バレエが更なる発展を遂げるにはバレエ教育を根本から見直す必要があると考える。現在日本国内で活躍しているバレエダンサーたちはどのようなバレエ教育を受けてきたのか、ということの研究し、現在の日本国内のバレエ教育における問題を明らかにし、今後のバレエ教育について提言を行った。
3「初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(3) — 運用マネジメントおよび学習活動の質的評価と量的評価に関する考察 — 」	共	平成 29 年 7 月	日本教育情報学会第 33 回年会論文集, (pp274-275)	入学時の学生は、不安や期待を感じつつ徐々に大学生活に馴染んでいく。本稿では学生同士のつながりを深めさせる手立てについて、入学前のリメディアル教育および初年次教育の取組を報告する。また成績評価の量的/質的評価の側面を概観する。
4「日本におけるバレエ教育に関する研究—芦屋大学バレエコースのカリキュラムをもとに考察—」	共	平成 29 年 7 月	日本教育情報学会第 33 回年会論文集, (pp 288-289) ・日本教育情報学会第 33 回年会 口頭発表	芦屋大学経営教育学部経営教育学科では平成 24 年度よりバレエコースが開講した。日本において、私立大学にクラシックバレエに特化したコースの開設というのは初の試みといえる。本研究では、コース設立の意義を述べ、バレエ界の更なる発展のために過

5「日本におけるバレエ教師教育の必要性について(1)―芦屋大学バレエ教師課程ディプロマコースの試み―」	共	平成 29 年 12 月	芦屋大学論叢第 68 号	<p>去 6 年間のカリキュラムをもとに実績と現状を踏まえ、今後の課題について報告する。</p> <p>大正時代に西洋及びロシアからバレエという芸術が日本に伝来し約一世紀が経過した。バレエ鑑賞が大人の社交や楽しみとなる文化を持つ西洋の国とは異なり、日本ではバレエ公演を観る観客層も薄く、バレエを見に来る観客の大半は出演者の関係者が客席を占めるという状況である。本稿では、一種の歪な形態のまま発展を遂げた日本のバレエの問題点、特に教師養成の側面に焦点を当て 2013 年度より開講した芦屋大学バレエ教師課程ディプロマコースの意義と、コース内容等について報告する。</p>
<p>【その他(講演や発表)】</p> <p>1.カンパニーでこぼこ 第 10 回公演「眠れる森の美女」出演</p> <p>2.生誕 200 年記念オペラセレクション 歌劇王ヴェルディの肖像 出演</p> <p>3.トモコアートダンスカンパニー「MASK」出演</p> <p>4.衣裳デザイナー 時広真吾プロデュース 第 5 回美の種「華心～打・舞・歌・調・装」出演</p> <p>5.0 歳からのプロムナードコンサート「ピアノとうたの贈り物 Vol.2」出演</p> <p>6.0 歳からのプロムナードコンサート「ピアノとうたの贈り物 Vol.3」 演出・出演</p> <p>7.0 歳からのプロムナードコンサート「ピアノとうたの贈り物 Vol.4」演出・出演</p> <p>8.芦屋大学バレエコース卒業公演 指導・演出助手</p>		<p>平成 24 年 4 月</p> <p>平成 25 年 9 月</p> <p>平成 26 年 6 月</p> <p>平成 27 年 10 月</p> <p>平成 27 年 4 月</p> <p>平成 28 年 9 月</p> <p>平成 30 年 3 月</p> <p>平成 27 年 12 月 平成 28 年 12 月 平成 29 年 12 月 平成 30 年 12 月 令和元年 12 月</p>	<p>兵庫県立芸術文化センター 大ホール</p> <p>フェスティバルホール</p> <p>びわこホール 中ホール</p> <p>京都府民ホール アルティ</p> <p>西宮市プレラホール</p> <p>西宮市プレラホール</p> <p>西宮市プレラホール</p> <p>芦屋市民センター ルナホール</p>	

<p>9.CTB Studio クリスマスパフォーマンス 指導・演出助手</p>		<p>平成 25 年 12 月 平成 26 年 12 月 平成 27 年 12 月 平成 28 年 12 月 平成 29 年 12 月 平成 30 年 12 月 令和元年 11 月</p>	<p>京都府立文化芸術会館</p>	
--	--	--	-------------------	--